

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第176集

いた びら
板 平 遺 跡

Itabira Site

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

2008

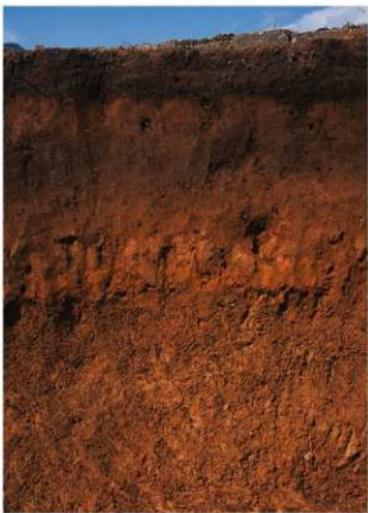
宮崎県埋蔵文化財センター



板平遺跡遠景（西より）



板平遺跡遠景（北西より）



基本土層（平坦部）



基本土層（谷部）



9号竪穴住居跡出土土器



包含層出土車輪石



9號竪穴住居跡出土高環

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（門川～日向間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成17年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した板平遺跡は、平成17・18年度に発掘調査を行い、後期旧石器時代の遺物をはじめ、縄文時代早期の炉穴や土坑などの遺構や遺物、古墳時代の竪穴住居跡や古代以降の掘立柱建物跡などさまざまな遺構や遺物を確認することができました。特に、古墳時代前期の車輪石が県内で初めて出土したことは、遺物包含層での出土ではありましたが、畿内等との交流の手がかりとなる重要な遺物でもあり注目されます。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 清野 勉

例　　言

- 1 本書は、東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴い、平成17～19年度に実施した日向市所在の板平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公团九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

なお、日本道路公团は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社（NEXCO西日本）となったため、本報告書中ではNEXCO西日本として記載する。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、主に向江修一、石津晴菜が行ったほか、田中敏雄、土屋雄毅、三品典生、潤ノ上隆介、安藤利光、白地浩、島木良浩が行った。また、地形形成や堆積状況については赤崎広志の助言を得た。
- 4 整理作業は、遺物洗浄、注記、接合、フローテーションを整理作業員が行い、実測、トレースは整理作業員の補助を得て向江が行った。一部の石器実測及びトレースを（株）九州文化財研究所に委託した。

また、石器類の分類や石材同定については藤木聰の助言を得た。
- 5 次の業務はそれぞれ業者に委託した。

基準点測量・グリッド杭設定	:(有) 日向測量
空中写真撮影 平成17年度	:(有) フジタ
平成18年度	:(株) 南九州コンサルタント
自然科学分析	:(株) 古環境研究所
- 6 本書で使用した周辺遺跡位置図は国土地理院発行の5万分の1図をもとに、周辺地形図等は、NEXCO西日本延岡工事事務所（現延岡高速道路事務所）から提供の1,000分の1図をもとに作成した。
- 7 国土座標は平面直角座標系II（世界測地系）に基づく。また、標高は海拔絶対高である。なお、本書で使用した方位は座標北（G.N.）である。
- 8 土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S A…堅穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S C…土坑	S I…集石遺構	S P…炉穴
S H…ピット	S X…石組遺構			
- 10 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて次のように統一している。

集石遺構…1／30 炉穴…1／40 堅穴住居跡…1／50 掘立柱建物跡…1／60
陥し穴状土坑・石組遺構・その他の土坑…1／30
縄文土器…1／3 土師器…1／4 須恵器…1／4 陶磁器…1／3 錢貨…2／3
旧石器…1／2 石礫…1／2 石斧・スクレイバー・磨石・敲石・砥石・石皿…1／3 台石…1／4
車輪石・勾玉…1／1
- 11 本書の執筆・編集は、向江が担当した。
- 12 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第Ⅱ章 調査の概要	7
第1節 基本層序	7
第2節 調査の方法	10
第3節 調査の経過	10
第4節 整理作業及び報告書作成	11
第Ⅲ章 調査の記録	13
第1節 1次調査の概要	13
第2節 旧石器時代の遺物	14
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物	17
1 散礫	17
2 集石遺構	19
3 炉穴	25
4 土坑	31
5 遺物	31
6 小結	35
第4節 縄文時代後期の遺構と遺物	37
1 土坑	37
2 石組遺構	37
3 遺物	42
第5節 縄文時代晚期の遺物	44
第6節 古墳時代の遺構と遺物	49
1 墓穴住居跡	50
2 土坑	66
3 遺物	69
第7節 古代～近世の遺構と遺物	75
1 挖立柱建物跡	75
2 遺物	86
第8節 その他の遺構と遺物	89
1 陥し穴状土坑	89
2 その他の土坑	94
3 包含層出土石器	96
第Ⅳ章 自然科学分析の結果	109
第Ⅴ章 まとめ	120

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第39図 7号・8号堅穴住居跡および出土遺物実測図	55
第2図 周辺地形図	4	第40図 9号堅穴住居跡および住居内土坑、遺物集中区実測図	57
第3図 全体遺構配置図	5～6	第41図 9号堅穴住居跡出土遺物実測図（1）	58
第4図 土層断面図（1）	8	第42図 9号堅穴住居跡出土遺物実測図（2）	59
第5図 土層断面図（2）	9	第43図 10号堅穴住居跡実測図	60
第6図 グリッド配置図	12	第44図 10号堅穴住居跡出土遺物実測図（1）	61
第7図 1次調査トレーン配置図	13	第45図 10号堅穴住居跡出土遺物実測図（2）	62
第8図 旧石器時代遺物分布図	14	第46図 10号堅穴住居跡出土遺物実測図（3）	63
第9図 旧石器時代石器実測図	15	第47図 5号堅穴住居跡および出土遺物実測図	63
第10図 旧石器時代調査トレーン配置図	16	第48図 11号堅穴住居跡および出土遺物実測図	64
第11図 散疊分布図	17	第49図 12号堅穴住居跡および出土遺物実測図	65
第12図 繩文時代遺構配置図	18	第50図 古墳時代土坑および出土遺物実測図	66
第13図 集石遺構実測図（1）	20	第51図 古墳時代土器実測図（1）	67
第14図 集石遺構実測図（2）	21	第52図 古墳時代土器実測図（2）	68
第15図 集石遺構実測図（3）	23	第53図 石製装飾品実測図	69
第16図 集石遺構実測図（4）	24	第54図 古代・中世・近世遺構配置図（1）	76
第17図 炉穴実測図（1）	26	第55図 古代・中世・近世遺構配置図（2）	77
第18図 炉穴実測図（2）	27	第56図 1号・2号掘立柱建物跡実測図	78
第19図 炉穴実測図（3）	29	第57図 3号・5号掘立柱建物跡実測図	79
第20図 炉穴実測図（4）	30	第58図 4号・6号掘立柱建物跡実測図	80
第21図 繩文時代早期土坑実測図	31	第59図 7号・8号掘立柱建物跡実測図	81
第22図 繩文時代早期遺構内出土遺物実測図	32	第60図 9号・11号掘立柱建物跡実測図	83
第23図 繩文時代早期土器実測図（1）	33	第61図 10号掘立柱建物跡実測図	84
第24図 繩文時代早期土器実測図（2）	34	第62図 古代および中世出土土器実測図	84
第25図 繩文時代早期遺構配置詳細図	35	第63図 中世および近世出土陶磁器および石製品実測図	85
第26図 繩文時代後期土坑および石組遺構実測図	37	第64図 中世および近世銭貨拓影	85
第27図 繩文時代後期遺構内出土遺物実測図	38	第65図 陥し穴状土坑配置図	90
第28図 繩文時代後期土器実測図（1）	39	第66図 陥し穴状土坑および出土遺物実測図（1）	91
第29図 繩文時代後期土器実測図（2）	40	第67図 陥し穴状土坑実測図（2）	92
第30図 繩文時代後期土器実測図（3）	41	第68図 陥し穴状土坑実測図（3）	93
第31図 繩文時代後期土器実測図（4）	43	第69図 その他の土坑および出土遺物実測図	95
第32図 繩文時代後期土器実測図	44	第70図 包含層出土石器実測図（1）	98
第33図 古墳時代遺構配置図	48	第71図 包含層出土石器実測図（2）	99
第34図 1号堅穴住居跡および出土遺物実測図	49	第72図 包含層出土石器実測図（3）	100
第35図 2号堅穴住居跡および出土遺物実測図	51	第73図 包含層出土石器実測図（4）	101
第36図 3号堅穴住居跡および出土遺物実測図	52	第74図 包含層出土石器実測図（5）	102
第37図 4号堅穴住居跡および出土遺物実測図	53	第75図 包含層出土石器実測図（6）	103
第38図 6号堅穴住居跡および出土遺物実測図	54	第76図 九州の車輪石の分布	108

表 目 次

第1表 基本層序（平坦部）……………	7
第2表 基本層序（谷部）……………	7
第3表 旧石器時代石器観察表 ……	14
第4表 繩文時代早期集石遺構観察表 ……	19
第5表 繩文時代早期炉穴観察表 ……	25
第6表 繩文時代早期遺構内出土土器観察表 ……	36
第7表 繩文時代早期土器観察表 ……	36
第8表 繩文時代後期遺構内出土土器観察表 ……	45
第9表 繩文時代後期土器観察表（1）……	45
第10表 繩文時代後期土器観察表（2）……	46
第11表 繩文時代後期土器観察表（3）……	47
第12表 繩文時代後期土器観察表 ……	47
第13表 古墳時代堅穴住居跡観察表 ……	51
第14表 古墳時代遺構内出土土器観察表（1）…	70
第15表 古墳時代遺構内出土土器観察表（2）…	71
第16表 古墳時代遺構内出土土器観察表（3）…	72
第17表 古墳時代遺構内出土土器観察表（4）…	73
第18表 古墳時代包含層出土土器観察表（1）…	73
第19表 古墳時代包含層出土土器観察表（2）…	74
第20表 古墳時代遺構内出土石器観察表 ……	74
第21表 古墳時代包含層出土石製装飾品観察表…	74
第22表 掘立柱建物跡観察表 ……	75
第23表 古代～中世出土土器観察表 ……	87
第24表 中世～近世出土陶磁器および石製品観察表	88
第25表 中世～近世錢貨観察表 ……	88
第26表 陥し穴状土坑観察表 ……	89
第27表 遺構内出土土器観察表 ……	95
第28表 遺構内出土石器観察表 ……	95
第29表 包含層出土土器観察表（1）……	104
第30表 包含層出土土器観察表（2）……	105
第31表 包含層出土土器観察表（3）……	106
第32表 包含層出土土器観察表（4）……	107
第33表 谷部遺物包含層別主な石器出土量 …	108
第34表 谷部遺物包含層別土器出土量 ……	108
第35表 古墳時代前期遺構別「在地系」および「外 來系」土器分類表 ……	108
報告書抄録	141

図 版

卷頭図版 1 板平遺跡遠景（西より）	
卷頭図版 2 板平遺跡遠景（北西より）	
基本土層（平坦部）	
基本土層（谷部）	
卷頭図版 3 9号堅穴住居跡出土土器	
卷頭図版 4 包含層出土車輪石	
9号堅穴住居跡出土高坏	
図版 1 表土除去後（A区、北から）……	123
平坦部土層断面	
谷部土層縦断面	
谷部土層横断面	
谷部掘削作業風景（北から）	
谷部風景（北から）	
旧石器時代遺物出土状況（A区）	
土石流による疊溢り（B区）	
図版 2 散疊検出状況（C区）……	124
散疊検出作業風景	
S I 10検出状況	
S I 16・20・21検出状況	
S I 19検出状況	
図版 3 S I 4・5・6半截状況	125
S I 11半截状況	
S I 6半截状況	
S I 3配石	
S I 16・20配石	
S I 10配石	
S I 18配石	
S I 19配石	
図版 4 S P 12検出状況	126
S P 27～29検出状況	
S P 23～26検出状況	
S P 27～29埋土中疊出土状況	
S P 1完掘状況	
S P 2・3・4完掘状況	
S P 20・21完掘状況	
S P 12・S P 13・S P 14～17完掘状況	
図版 5 S P 27～29完掘状況	127
S P 5～10・18完掘状況	

S P 23 ~ 26完掘状況		図版10	旧石器時代石器 132
集石遺構と炉穴の位置関係			縄文時代早期土器（1）～（3）
S C 20土器出土状況			縄文時代後期土器（1）（2）
S C 20完掘状況		図版11	縄文時代後期土器（3）～（7）... 133
S X 1検出作業風景			縄文時代晚期土器
S X 1検出状況		図版12	S A 1・S A 2出土遺物 134
図版6 S A 1検出状況（南から） 128			S A 3出土土器
S A 3遺物出土状況			S A 4出土遺物（1）（2）
S A 9遺物出土状況			S A 6出土遺物
S A 10遺物出土状況			S A 8出土石器
S A 9完掘状況		図版13	S A 9出土土器（1）～（11）.... 135
図版7 S A 3完掘状況 129			S A 9出土石器
S A 12完掘状況		図版14	S A 10出土土器（1）～（6）.... 136
S A 4完掘状況			S A 10出土石器
S A 1完掘状況		図版15	S A 5出土遺物 137
S A 6完掘状況			S A 11出土土器
S A 10完掘状況			S A 12出土土器
車輪石出土状況			S C 21出土土器
S C 21土器出土状況			S C 15出土土器
図版8 C区掘立柱建物跡検出状況 130			包含層出土土器（1）（2）
B区ピット検出状況		図版16	包含層出土土器（3）～（5）.... 138
S B 2検出状況			包含層出土石製装飾品
柱穴土層断面			包含層出土車輪石
柱穴中根石		図版17	中世陶磁器 139
図版9 S C 1検出状況 131			古代～中世土器および錢貨
S C 4・6半截後状況			近世陶磁器
S C 1土層断面		図版18	打製石錐・石錐・異形石器・石匙 ... 140
S C 10土層断面			石錐
S C 4完掘状況			打製石斧
S C 18半截状況			スクレイバー・砾器
散礫取上げ作業風景			砾石
現地説明会風景			弥生時代以降石器

第Ⅰ章 はじめに

主事 潤ノ上隆介
調査員 石津 晴菜

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（延岡～清武間）は、平成元年2月に基本計画区间に決定された。本遺跡が所在する門川～日向間約14kmについては、県文化課が平成15年8月に旧日本道路公団から遺跡の分布調査の依頼を受け、翌16年3月、7遺跡174,000m²の埋蔵文化財包含地の所在を回答している。そして、門川～日向間を担当する同公団延岡工事事務所が開設された同年11月には、工事計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

また、平成17年2～3月には「埋蔵文化財発掘調査におけるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積について」の協議が同公団と県文化財課との間でなされ、これらにより発掘調査の対象面積が当初の174,000m²から91,000m²に縮減された。

限定協議等の結果、板平遺跡では当初面積36,000m²のうち、21,960m²が調査対象となった。

第2節 調査の組織

板平遺跡の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

平成17年度

所長	宮園 淳一
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊
同課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第一課長	高山 富雄
同課調査第二係長	菅付 和樹
同調査第二係	主査 向江 修一
	主事 三品 典生

平成18年度

所長	清野 勉
副所長	加藤 悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊
同課主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	高山 富雄
同課主幹兼調査第二担当リーダー	
	菅付 和樹
同調査第二担当	主査 向江 修一
	主査 土屋 雄毅
	主査 田中 敏雄
	主事 三品 典生
調査員	石津 晴菜

平成19年度

所長	清野 勉
副所長	加藤 悟郎
総務課長	宮越 尊
同課主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	長津 宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー	
	菅付 和樹
同調査第二担当	主査 向江 修一

【調査協力】

日向市教育委員会

宮崎県東九州自動車道用地事務所

第3節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

板平遺跡は、宮崎県日向市大字富高字板平・程ヶ迫・前原・鐵治屋・小板平に位置する(第1図)。

日向市は、宮崎県の北部に位置し、尾鈴山系の北端にあり、東に日向灘を臨む。市内のはば中央を流れる塩見川を挟んで南北で基盤層が変わり、北が四万十層群、南が尾鈴山酸性岩類である。本遺跡は、塩見川の支流富高川左岸河岸段丘上に位置し、標高は約20～40mを測る。基盤層は四万十層群で、富高川の埋積谷低地にあたる。富高川は本遺跡付近の上流地域では、雨季と乾季で水量が大きく変化する。

本遺跡は周知の遺跡であり、弥生時代の散布地として、平成12年には日向市より文化財指定を受けている。

2 歴史的環境

今回の調査においては、旧石器時代～近現代までの遺構や遺物が確認された。本遺跡の周辺には以前から多くの遺跡が周知されており、一部は発掘調査も行われている。そこで、発掘調査が行われた遺跡を中心に、時代ごとに述べる。

旧石器時代の主な遺跡は、寺ノ上遺跡(図1-32)や奥野B遺跡(同-34)、東草場遺跡(同-14)がある。寺ノ上遺跡では、AT(始良Tn火山灰層)直上から集石遺構4基や、石器ブロック5箇所よりナイフ形石器など1,200点の石器が確認されており、奥野B遺跡ではAT下位から石器ブロックが検出されている。

縄文時代では、早期の後陣遺跡(同-31)、越シ遺跡(同-30)、後期の東草場遺跡、分蔵遺跡(同-2)などがあげられる。後陣遺跡、越シ遺跡の両遺跡とも早期の集石遺構を検出している。特に後陣遺跡では60余基を数える集石遺構が早水台式の押型文土器や吉田・前平式の円筒貝殻文土器、無文の円筒土器等に伴って検出された。また、後期の東草場遺跡では円形堅穴住居跡が、分蔵遺跡では御領式の黒色磨研土

器などを確認している。

弥生時代では、越シ遺跡で弥生時代終末期の間仕切りのある方形基調の堅穴住居跡も検出されており、東草場遺跡で中期の溝状遺構、終末期の方形堅穴住居跡等が確認されている。

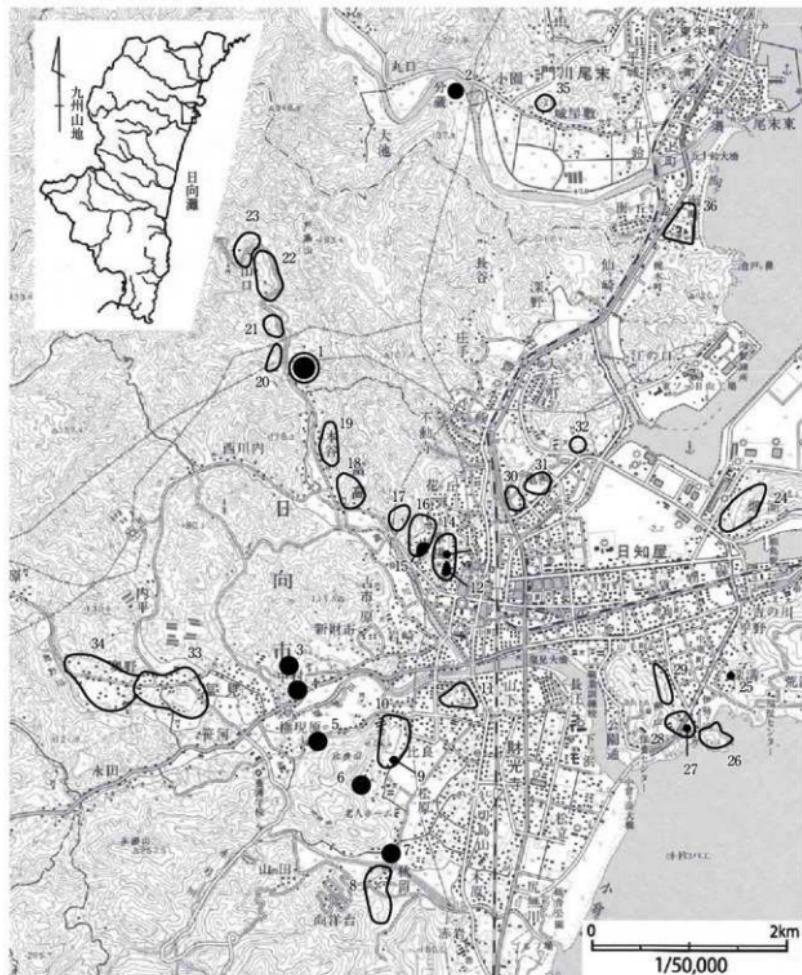
古墳時代では、本遺跡の南東2kmには県指定富高1号墳・2号墳(同-12)があり、盟主と目される2号墳(全長86mの前方後円墳)では盗掘坑から仿製の四獸鏡が発見され、市指定の鈴鏡塚古墳(同-13)では獸文八鈴鏡が出土している。

古代では、越シ遺跡から土師器壺を伴う集石遺構や布真皮器を確認している。

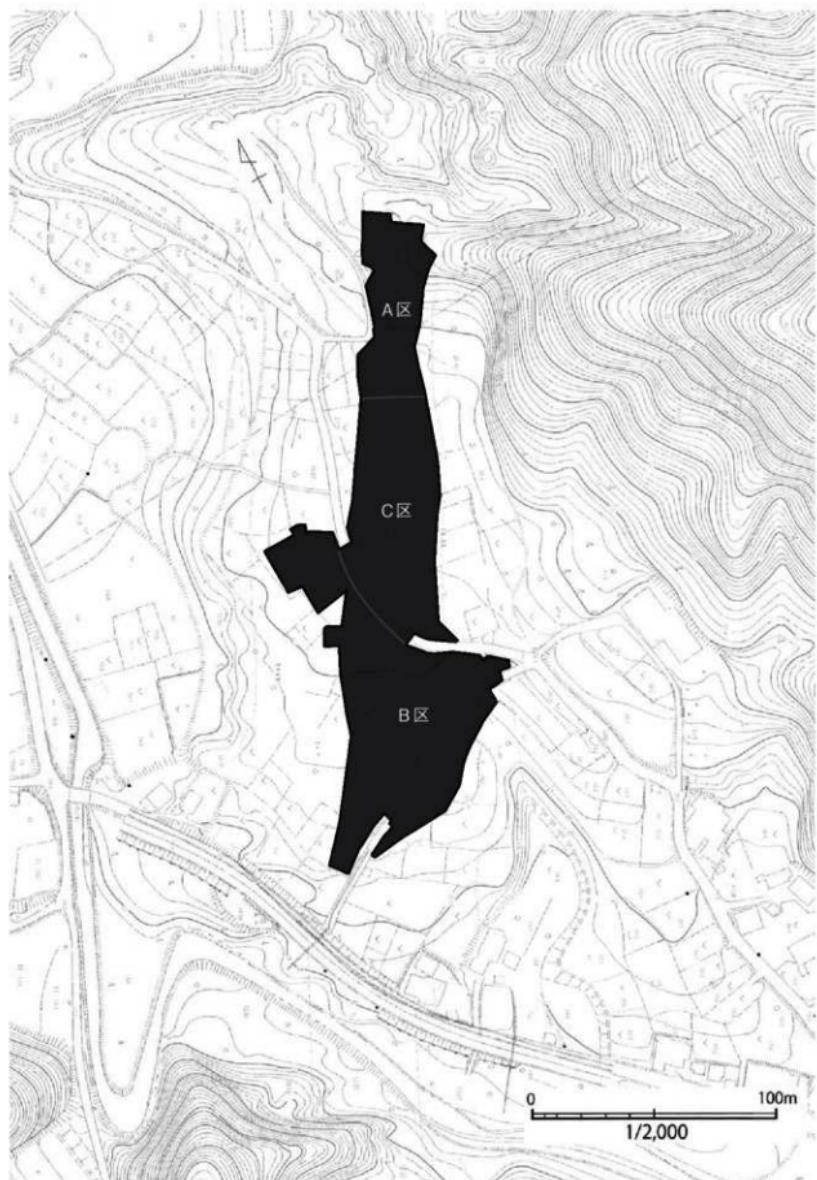
さらに中世では、南方3kmに戦国時代には日知屋城、門川城とともに「日向三城」と呼ばれた塩見城跡(同-3)や中山遺跡(同-4)があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

【引用参考文献】

- 日向市教育委員会1983 「寺ノ上遺跡」
- 日向市教育委員会1986 「後陣遺跡・越シ遺跡」
- 日向市教育委員会1991 「富高古墳2号墳」
- 宮崎県1989 「宮崎県史 資料編・考古I」
- 日向市教育委員会1985 「日向市遺跡詳細分布調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター2004 「中山遺跡」 「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」 第93集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2006 「分蔵遺跡」 「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」 第139集
- 宮崎県埋蔵文化財センター2007 「平成18年度 埋蔵文化財発掘調査一覧」



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺地形図



第3図 全体遺構配置図

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 基本層序

調査区の表土を剥ぐと、A区では第Ⅳ層～Ⅹ層が、B、C区では第Ⅱ層～Ⅳ層及び谷地形の埋没土第2層が現れた。これは、調査区全体が傾斜し、かつ、うねった状態であったものを、

人为的要因で削平されて平らになったためと考えられる。

また、調査区の東側に埋没した谷地形（以下、谷部）の存在を確認しており、谷部第3層と第Ⅱ層が、第4層と第Ⅲ層、第5～7層と第Ⅶ～Ⅸ層がそれぞれ対応すると考えている。

そこで、本遺跡の基本層序は平坦部と谷部の2つに大別できる。以下で各層ごとに概説する。

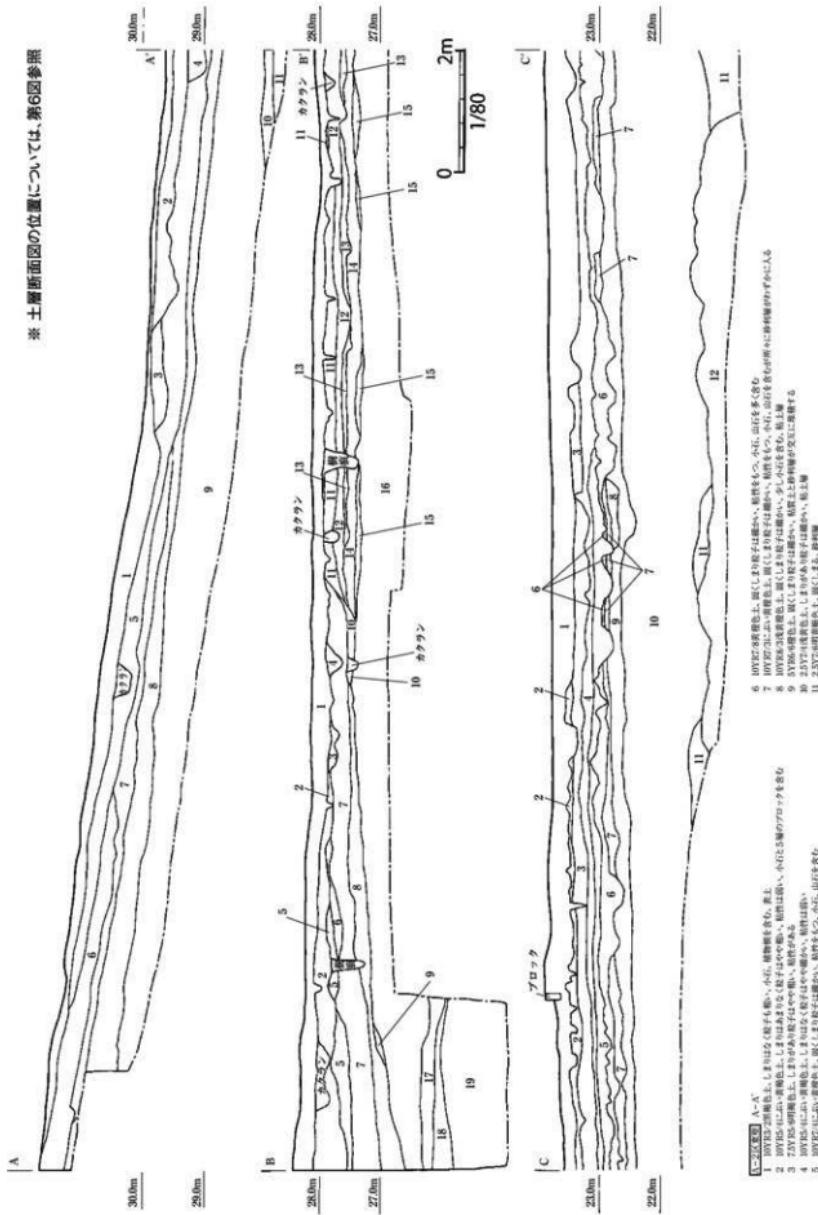
第1表 基本層序（平坦部）

層No	層名	特徴
第I a層	表土	10YR3/4 暗褐色土。粘性はない。固くしまる。φ 5mm程度の角礫を多く含む。現在の耕作土。
I b	黒褐色土層	10YR3/2 黒褐色土。粘性は弱い。固くしまる。第I a層に比べて角礫の含まれる量が少ない。平坦部にはほとんど残っていない。
II	二次堆積鬼界アカホヤ火山灰層	7.5YR7/8 黄褐色土。粘性はない。しまりはややある。10YR3/3 暗褐色土が混ざる。鬼界アカホヤ火山灰の二次の堆積物。
III	暗褐色土層	10YR3/4 暗褐色土。粘性ややある。しまりがある。
IV	褐色土層	10YR4/6 褐色土。粘性は第III層に比べて強い。しまりがある。谷部にはない。
V	白斑ローム層	10YR3/2 黒褐色土。粘性なし。非常に硬くしまり、10cm程度のブロック状の態をなす。φ 2mm以下の白色のガラス質粒子を含む。谷部にはない。
VI	A T火山灰層 (姶良Tn火山灰層)	10YR5/8 黄褐色土。粘性なし。しまりなし。谷部にはない。
VII	小疊混じり褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性ややあり比較的やわらかい。A T粒子が混ざるためサクサクしている。第VI層と第V層の漸移層にあたる。
VIII	褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性が非常に強い。固くしまる。最大4～5cmの小角礫を多く含む。
IX	疊層	10YR4/4 褐色土。粘性非常に強い。固くしまる。φ 0.5cm～10cmの大の礫を多く含む。

第2表 基本層序（谷部）

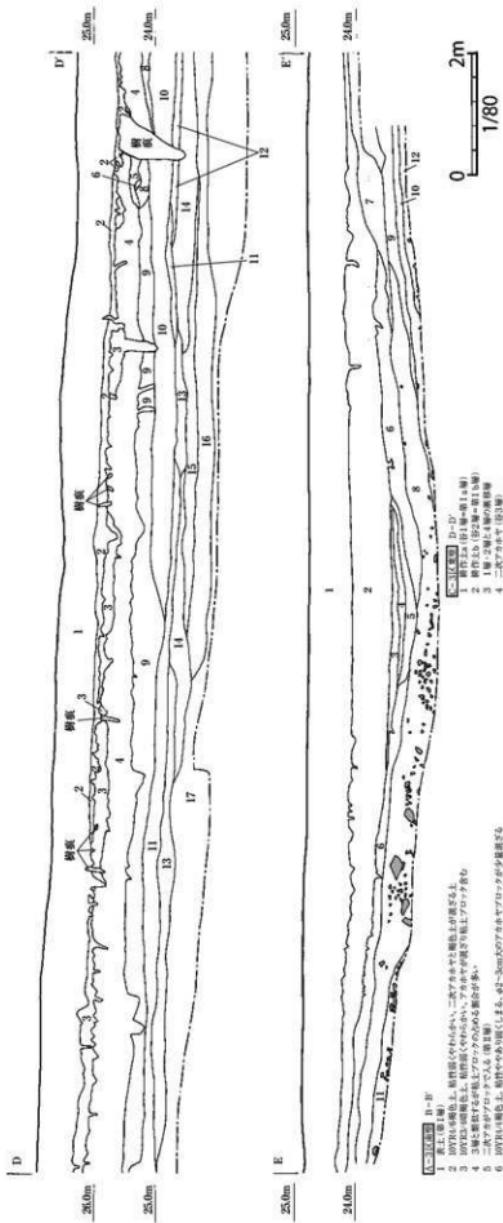
層No	層名	平坦部との対応関係	特徴
第1層	表土	第I a層	平坦部と共に。現在の耕作土。
2	黒褐色土層	I b	平坦部と共に。平坦部にはほとんど残っていない。
3	二次堆積鬼界アカホヤ火山灰層	II	10YR6/8 明黄褐色土。粘性ややあり。しまりが弱く、サクサクしている。
4	暗褐色土層	4 a層	7.5YR4/6 褐色土。φ 1mmの角礫を多量に含む。礫の間の土は粘性ある。
		4 b	7.5YR4/6 褐色土。粘性ややある。しっかりしている。φ 1mmの角礫の量は第4 a層より少ない。
		4 c	7.5YR4/6 褐色土。粘性が弱い。角礫はほとんど入らない。
5	小疊混じり褐色粘質土層	VII	10YR7/6 褐色土。黄褐色の粘土中にφ 5～10mmの小角礫を多く含む。小角礫が層状に堆積する部分がある。
6	褐色粘質土層	VIII	10YR5/6 黄褐色土。粘土質。乾くとガチガチに固まるが、水分を含むとベタベタになる。
7	疊層	IX	10YR4/4 褐色土。第5層の土に大きな円礫が多量に入る。

* 土層断面図の位置については、第6図参照



6. UVFが砂岩面上に漂して砂岩を形成する。颗粒を多く含む。由来を多く含む。
7. UVFが砂岩面上に漂して砂岩を形成する。颗粒を多く含む。
8. UVFが砂岩面上に漂して砂岩を形成する。颗粒を多く含む。
9. UVFが砂岩面上に漂して砂岩を形成する。颗粒を多く含む。
10. UVFが砂岩面上に漂して砂岩を形成する。颗粒を多く含む。
11. 230m付近黄色。他の場所では白い。由来を多く含む。

第4図 土層断面図 (1)



第5圖 土層斷面圖 (2)

第2節 調査の方法

調査は1次と2次の2回に分けて行った。調査の便宜上、調査区をA～C区に区分した。また、A区をA-1区～3区、B区をB-1区～8区とB-P区、C区をC-1区～4区に細区分した。

グリッド杭は、国土座標を基準とし10m間隔で設定した(第6図)。表土を重機で除去後、二次アカホヤ(第II層)～褐色土層(第IV層)で遺構検出を行い、その後第II～III層を、谷地形部分においては第2層～3層を掘り下げ、縄文時代以降の調査を行った。調査区は以前畑地で栽培されていた柑橘類(ヘベス)や根菜類(ごぼう)等の影響が多く見られ、至る所で擾乱を受けている。A区とC区の境界付近では、旧石器時代の遺物出土地点を中心にした範囲を、その他の場所においてはトレーナーを設定し、第Ⅲ層を掘り下げて旧石器時代の調査を行った。

遺物包含層中の遺物はトータルステーションにより位置を記録して取り上げたほか、グリッド一括等により取り上げた。

遺構実測図は1/10を基本とし、一部1/20で記録した。写真記録は35mmモノクローム・リバーサル・カラー写真及びデジタルカメラ併用し適宜行った。

第3節 調査の経過

平成17年8月22日付けで調査に着手する。調査対象面積は21,960m²である。

まず、1次調査においてトレーナーを設定した後、重機で表土を剥ぎ、遺構検出を行った。調査の結果から旧石器時代、縄文時代早期、弥生～古墳時代を主体とする遺構と遺物が偏在していることが分かった。

2次調査においては、重機により全面的に表土を剥ぐことから始めた。その結果、表土直下に古墳時代の竪穴住居跡、縄文時代早期の散疊、集石遺構、炉穴、縄文時代後期の土坑、古代以

降の掘立柱建物跡や多数の柱穴等様々な時期の遺構を検出した。しかし、一部の陥し穴状土坑や柱穴では時期が不確定なものも見られた。

調査を進める過程で、各時代の遺構の埋土と周辺の土質や土色の区別がつくようになり、特に縄文時代早期の炉穴群や古墳時代の竪穴住居跡を多数検出することができた。

散疊については、トータルステーションで全て位置を押さえ、特に耕作の影響を受けていないクリッドの散疊については縮尺1/20で実測している。

調査区の東側にはほぼ南北に埋没谷地形が存在し、その堆積土からは旧石器時代以降の遺物が多数出土した。その遺物の中には、1次調査では確認できなかった縄文時代後・晩期の土器や古代の土器が出土した。また、石器のうち石鎌や石斧、石錐等の大部分はこの谷地形部分から出土しており帰属時期が明確でないものも多い。

特に、平成18年4月27日には県内初の車輪石も出土し、遺跡の再評価が必要となった。車輪石のほとんどが古墳の副葬品として出土しているため、本遺跡に隣接した古墳からの流入を考えてみたが、近隣に古墳の存在は確認できなかった。

旧石器時代の調査は、遺構精査が終了したグリッドから順次進めた。1次調査で二次加工剥片が出土したA区とC区の境界付近はAT下位を慎重に掘り下げ、剥片を検出した。その他のグリッドについてはトレーナーを設定しAT下位を掘り下げていったが、下層の礫層上面で石核が一点出土したに止まった。なお谷地形部分については重機で慎重に掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。

平成18年9月28日に器材等を撤収し、その後土層断面図等残りの実測を進め、10月4日遺跡全体の調査を終了した。

調査日誌抄

H17.08.22 1次調査開始。重機搬入。器材庫、駐車場の整地及びクラッシャーラン敷設。

08.23 トレーナー設定。作業員による掘削開始。プラント部、第Ⅳ層で切穴検出。遺構第1号。

08.30 C区、第Ⅱ層で集石遺構を検出。

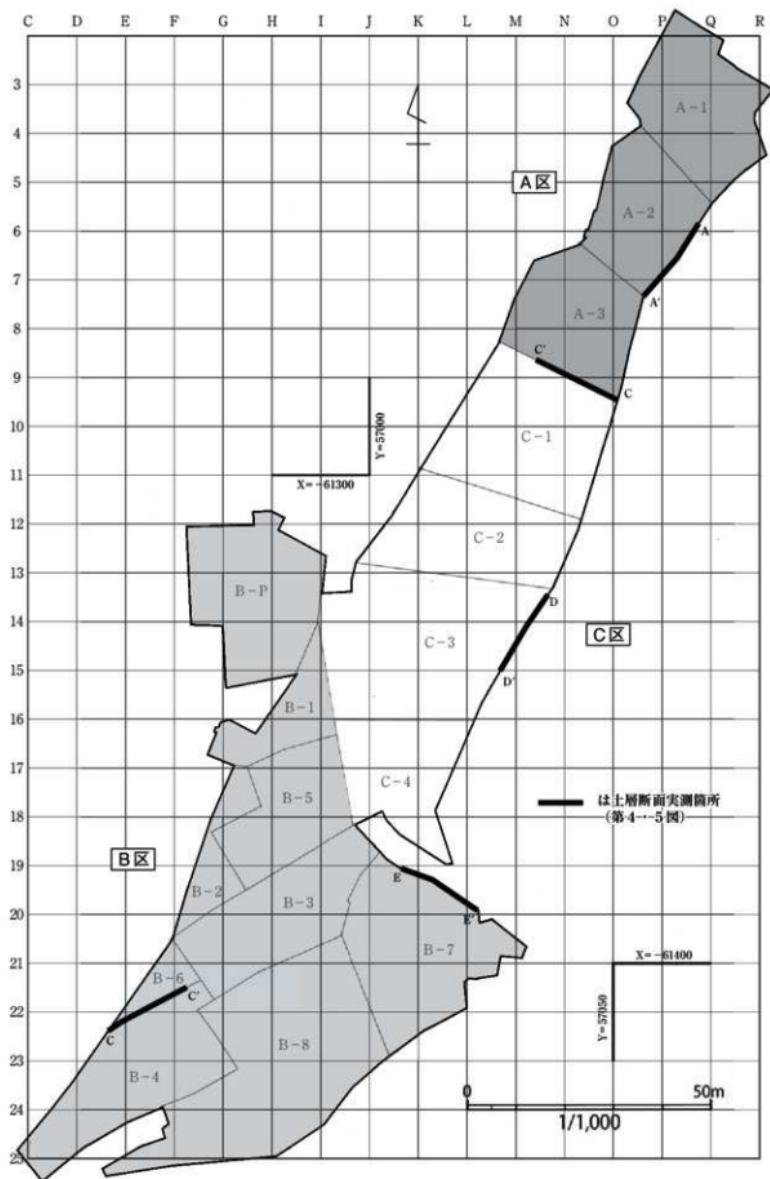
- 09.01 B区、埋没谷地形の存在を確認。
- 09.06 台風14号襲来。
- 09.08 遺構の確認できない日々が続く。
- 09.13 B区、谷地形部分より剥片や土器片が多数出土。
- 09.16 A区、A T下位遺層より旧石器時代の二次加工剥片出土。
- 09.20 A区、古墳時代の高坏の脚部出土。
- 09.22 C区、古墳時代の堅穴住居跡検出。
- 09.29 重機による埋め戻し。D区を踏査するも遺物を確認できず。
- 10.03 1次調査終了。
- H17.10.20 2次調査開始・重機搬入。重機によるA区の表土剥ぎ、炉穴検出。
- 10.21 事務所等の設置。B区の表土剥ぎ。
- 10.24 作業員投入開始。A区、人力で表土攪乱除去。
- 10.25 A区集石遺構検出。
- 10.27 重機による表土剥ぎ終了。
- 10.28 A区、堅穴住居跡2軒検出。
- 11.01 測量杭設置。
- 11.10 A区、陥し穴状土坑検出。
- 11.28 B区プラント建設予定地、人力で表土除去。
- 11.29 A区里道撤去。
- 12.01 A区、谷地形部分黒褐色土掘下げ。
- 12.02 B区、堅穴住居跡検出。
- 12.09 A区、陥し穴状土坑合計11基検出。
- 12.14 A区、古墳時代の土器の裡の下から土器部出土。
- 12.15 A区、空中写真撮影。
- 12.16 A区、遺構配置図作成。
- 12.22 積雪を観測。調査区成化粧。
- 12.27 A区、等高線図作成。平成17年調査納め。
- H18.01.05 A区、A T下位旧石器調査開始。第Ⅲ層で剥片出土。B区プラント建設予定地、炉穴検出。
- 01.10 B区、重機による二次アカホヤ除去。
- 01.23 B区、遺構配置図作成。
- 02.02 B区、旧石器調査。A T下位で石核出土。
- 02.06 B区、柱穴実測。
- 02.08 B区、空中写真撮影。
- 02.15 B区、等高線図作成。
- 02.08 A区、旧石器調査終了。
- 02.20 B区プラント建設予定地、堅穴住居跡検出。
- 02.22 A区、土層実測。
- 02.27 B区、旧石器調査終了。作業員最終日。
- 03.01 重機による深掘り、土層確認。埋め戻し。
- 03.13 次年度の調査部分、先行して表土剥ぎ。
- 03.14 埋め戻し終了。
- 03.15 平成17年度調査終了。
- 03.23 延岡工事事務所との次年度の調査の打合せ。
- H18.04.10 平成18年度調査開始・重機によるC区及びB区殲滅、表土剥ぎ、排土仮置き。
- 04.12 作業員開始。C区、堅穴住居跡検出。
- 04.17 谷地形部分、土層確認。遺物多量出土。
- 04.21 C区、束縛で車輪石出土。
- 04.24 掘土を斜面地へ移動。
- 04.25 C区、集石遺構、炉穴検出。
- 04.26 谷地形部分、縄文時代後期の土器片出土。
- 04.27 C区、表土剥ぎ終了。
- 05.01 悪し暑さが増し、熱中症防止対策。
- 05.02 C区、石庵丁出土。
- 05.12 C区、側立柱建物跡検出。
- 05.16 南天が焼き、さらには台風接近のため調査進まず。排土流出防止対策。
- 06.05 都農町役場職員東九州自動車道間連視察。(6/16まで5回)
- 06.13 SA91に一風変わった高坏等出土。B区で勾玉出土。
- 07.06 C区、等高線図作成。
- 07.07 またしても台風接近、調査進まず。
- 07.11 東臼杵町村会議員視察。
- 07.12 赤崎主査が土層等の調査。
- 07.14 C区、空中写真撮影。C区、縄文時代早期面へ掘下げ。
- 07.19 C区、縄文時代後期石組遺構検出。
- 07.24 C区、重機により二次アカホヤを掘削。湧水量が大きく水中ポンプ設置。
- 07.28 C区に散発が広がる。
- 07.29 遺跡調査報告会で調査の成果を発表。
- 08.03 集石遺構の実測に調査員を増員。調査終了までの作業が続く。
- 08.03 C区、旧石器調査開始。
- 08.04 C区、旧石器トレレンチより剥片と石核出土。
- 08.06 現地説明会。猛暑の中でも56名参加。NEXCOのトンネル工事も見学。
- 08.09 SC20より完形に近い縄文時代後期の深鉢出土。
- 08.23 C区、炉穴検出。重機による旧石器調査。
- 08.25 B区、農道撤去。
- 09.04 C区、農道の付け替え道路完成。B区で12軒目の堅穴住居跡検出。
- 09.05 B区とC区の間の農道撤去。農道下から炉穴と掘立柱建物跡検出。
- 09.06 SA12から瓶が出土。
- 09.14 B区、空中写真撮影。
- 09.15 B区、等高線図作成。礫重量計測。
- 09.21 C区、遺構配置図作成。
- 09.25 B・C区、重機による旧石器調査。
- 09.26 B区、遺構配置図作成。
- 09.28 作業員終了。発掘器材中山道路へ搬出。
- 10.03 遺構実測終了。
- 10.04 残りの土層断面図作成。板平遺跡の調査終了。

第4節 整理作業及び報告書作成

整理作業は、礫と遺物に分けて行った。

礫洗浄・注記・計測・接合等については中山遺跡発掘調査事務所にて平成18年12月～2月に実施した。

遺物の洗浄・注記・接合・実測・拓本・トレース等及び報告書作成は平成18年10月～平成19年11月の期間において埋蔵文化財センター本館で実施した。平成18年10月～11月に遺物の洗浄・注記を行い、12月～平成19年3月の間に接合を行った。その後4月から実測・拓本・遺物計測を行い、8月からはトレースを開始した。またそれと併行して図面レイアウト、文章作成を行ない、11月には遺物の写真撮影を行った。



第6図 グリッド配置図

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 1次調査の概要

調査範囲は、高速道路本線部分と側道及びプラント建設予定地の21,960m²である。調査区を便宜的にA～C区とした。現況はA区が果樹畠、B・C区が耕作地である（第7図）。

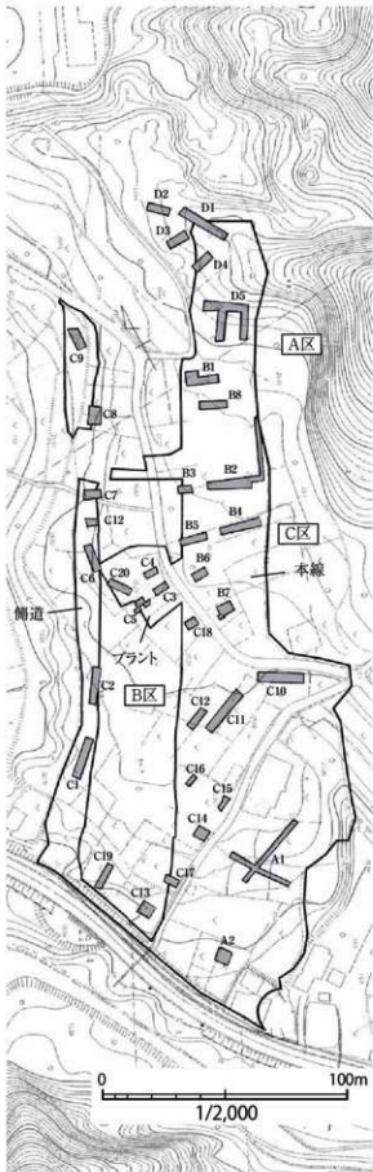
第7図のようにトレーニングを設定した後、重機で表土を除去後、作業員による精査・掘削を行なった。

A区では、尾根上のD1トレーニング（以下D1Tと記す）で表土下に第Ⅷ層が見られた。D4Tから高環脚部が出土したが、遺構は検出できなかった。下層の掘削の結果、B8Tの第Ⅸ層下位からは旧石器時代と考えられる流紋岩製の二次加工剥片3（第9図）が1点出土した。

B区では、第Ⅱ層が残っている部分もあるが、大部分では表土下に第Ⅳ層が堆積しており、南端ではその下ですぐに礫層（第Ⅸ層）に達した。A2Tの第Ⅰ層よりチャートの剥片が1点出土したが、その他の遺構・遺物は確認できなかった。西側のC1・2・6・7・9・12Tの側道部分については、ほとんどの土に小礫が混じり、遺構・遺物は確認できなかった。他の場所においては、C10TはC区とつながる谷状地形の落ち込みで、第2層の礫を多く含む層よりチャートの剥片や土師器の小片が出土した。C11Tの第Ⅱ層から弥生～古墳時代の高環等土器片が多数出土したが、遺構は検出できなかった。

C区では、現況は平場であるが、旧地形はB2T・B4Tの土層より調査区東側の山裾に沿って谷が南北に走り、西に向かって緩やかな上り斜面であったと思われる。遺構検出を第Ⅲ層上面で行なったところ、B5Tから縄文時代早期と考えられる集石遺構S13、B7Tから古墳時代の堅穴住居跡SA10を検出した。

これらのことより、第6図のように10,600m²について全面表土を剥ぎ、2次調査を実施した。次節以下は1・2次調査記録の詳細である。



第7図 1次調査トレーニング配置図

第2節 旧石器時代の遺物

1 概要

トレンチを設定(第10図)し、AT下位の第Ⅷ層を掘り下げたが、礫群などの遺構は全く確認できなかった。

遺物は41点と少数だが、A区とC区の境界付近の、谷部への落ち込み際の第Ⅷ層でまとまって出土した。土層(第4図)から判断して、流れ込みの可能性が高い。

2 遺物

第Ⅷ層より出土した剥片や石核の石材はホルンフェルスと流紋岩の2種類である。流紋岩製18点、ホルンフェルス製23点出土したが、製品は出土しなかった。

流紋岩は淡黄白色を呈し、表面の風化が進んでいたため流理構造は明確ではない。新鮮な面は黒

色緻密。五ヶ瀬川流域の旧石器時代に多用される石材と同種であると考える。他の時代にはほとんど見られない。また、ホルンフェルスはやや光沢のある黒色を呈し、風化はさほど進まず緻密である。時期は確定できないが、この石材の剥片が谷部分の埋没土から多量に出土している。

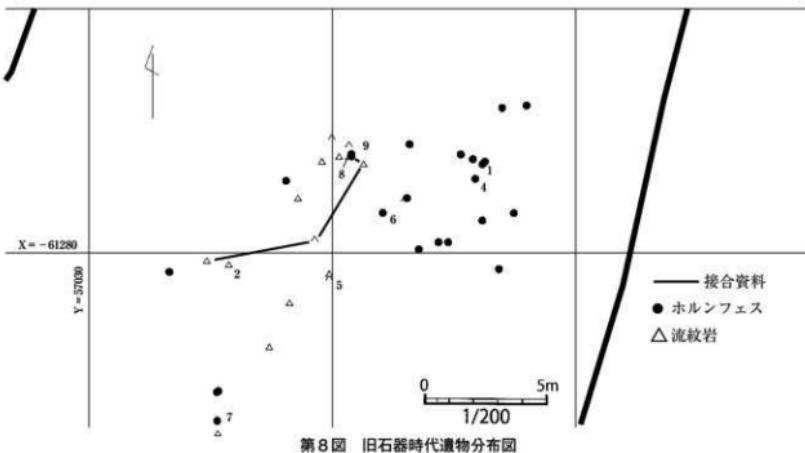
それらの遺物で接合を試みたが、剥片同士が数点接合したのみで、石核との接合は確認できなかった(第8図)。

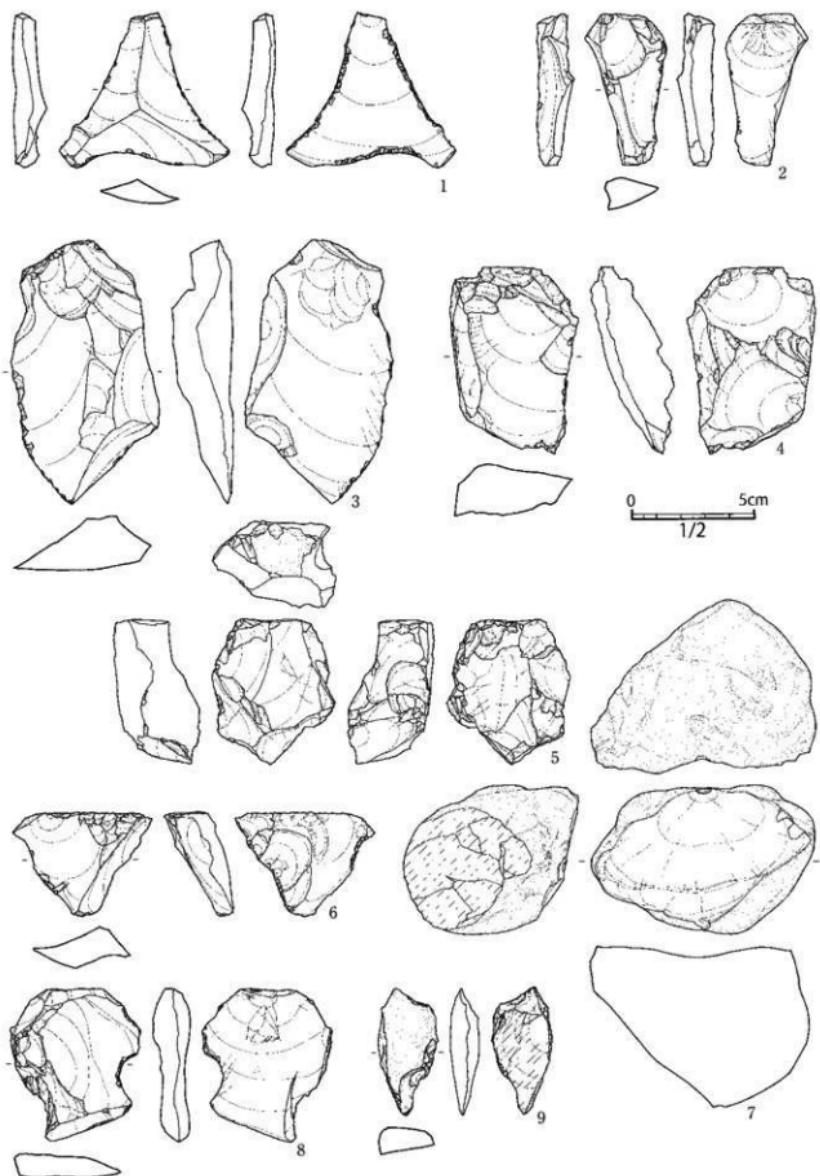
以下、器種ごとに遺物の説明をする。

第9図、1~3は二次加工剥片。1はホルンフェルス製ではほぼ正三角形の形状を呈し、その三辺に微細剥離が見られるが、用途は不明である。2と3は流紋岩製で継長剥片素材の二次加工剥片である。4~7は石核である。5は流紋岩製、4・6・7はホルンフェルス製。4~6は頭部調整後、ランダムに剥片を剥離している。8は流紋岩製、9はホルンフェルス製の剥片である。

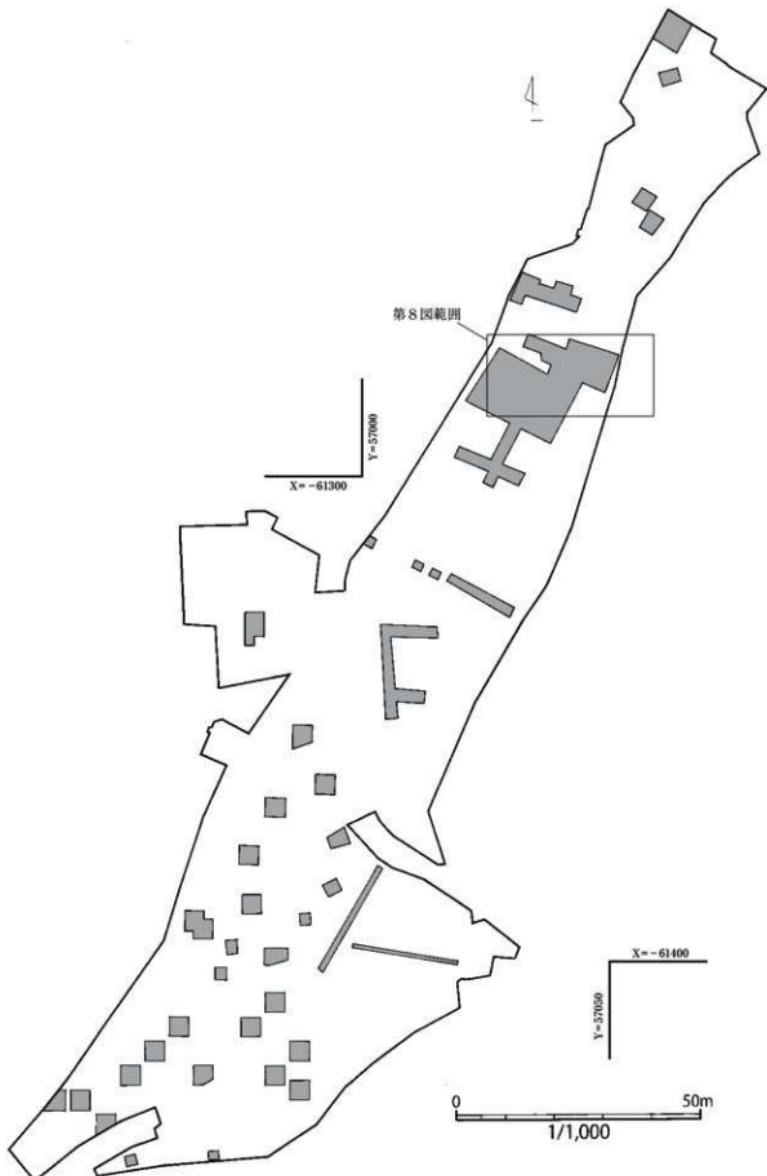
第3表 旧石器時代石器観察表

No	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
1	二次加工剥片	ホルンフェルス	A-3	6.3	6.9	1.3	25.7	
2	二次加工剥片	流紋岩	C-1	6.2	3.3	1.5	22.3	
3	二次加工剥片	流紋岩	B8tr	10.8	5.8	2.4	131.8	1次調査時に出土
4	石核	ホルンフェルス	A-3	7.7	5.3	3.4	98.0	
5	石核	ホルンフェルス	C-1	5.9	5.1	3.5	92.0	
6	石核	ホルンフェルス	A-3	4.3	5.7	2.9	34.2	
7	石核	ホルンフェルス	C-1	6.1	9.2	6.6	449.0	
8	剥片	流紋岩	A-3	6.3	5.3	1.0	38.8	
9	剥片	ホルンフェルス	A-3	5.2	2.4	1.1	14.5	





第9図 旧石器時代石器実測図



第10図 旧石器時代調査トレーンチ配置図

第3節 繩文時代早期の遺構と遺物

出土層位や遺構・遺物等より、縄文時代は大きく3つの時期を確認できた。縄文時代早期、後期、晩期の3時期である。第3節～第5節にそれぞれの各時期の詳細を記述する。

縄文時代早期の調査の概要

表土を重機で剥ぎ、遺構検出を行っていくと、C区において第Ⅲ層（暗褐色土）から礫が多量に検出された。第Ⅲ層は縄文時代早期の遺物を含んでいた。今回の調査では礫が1～1.5m以内ぐらいの範囲に、周辺より密に集まっている状態を「集石遺構」と認定し、広範囲に広がる「散礫」と区別した。この結果、集石遺構を20基、散礫を2群確認できた。

また、第Ⅲ層～Ⅵ層で切り合った炉穴を5群（20基）、単独11基、の計31基検出した。

1 散礫（第11図）

散礫構成礫のほとんどは砂岩で、遺跡の近くを流れる富高川の河原で今日でも見かける河原石で

ある。散礫構成礫の総重量は、992.6kgで、集石構成礫の総重量1,206.1kgを加えると、2,198.7kg（約2t）の礫が遺跡外の河原、または付近の段丘疊層から持ち込まれていると考えられる。

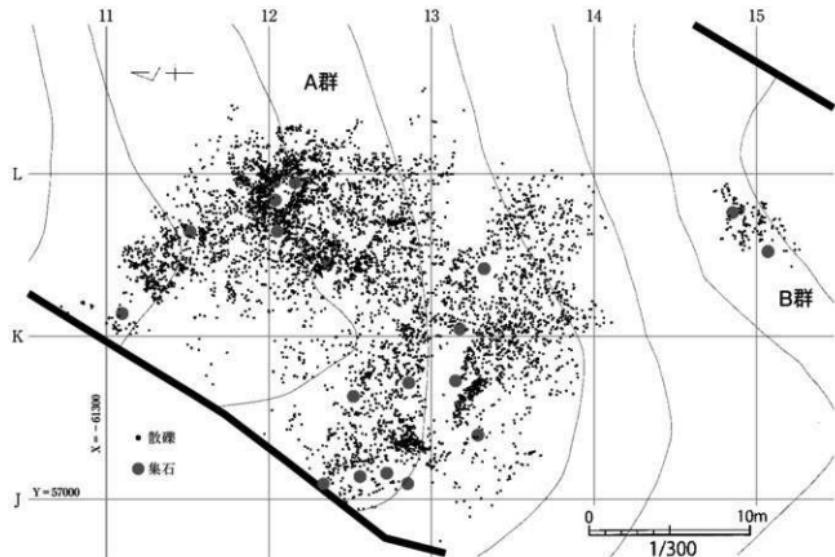
散礫A群

C-1区～C-3区の第Ⅲ層で、半径約16mの広範囲にわたり検出された。散礫を構成する礫はほとんどが破碎しており、石材は砂岩で、ごくわずかにホルンフェルスが見られた。礫の分布は疎密があり、非常に密集している部分と疎な部分が確認できた。散礫の下より、集石遺構、炉穴、土坑を検出している。

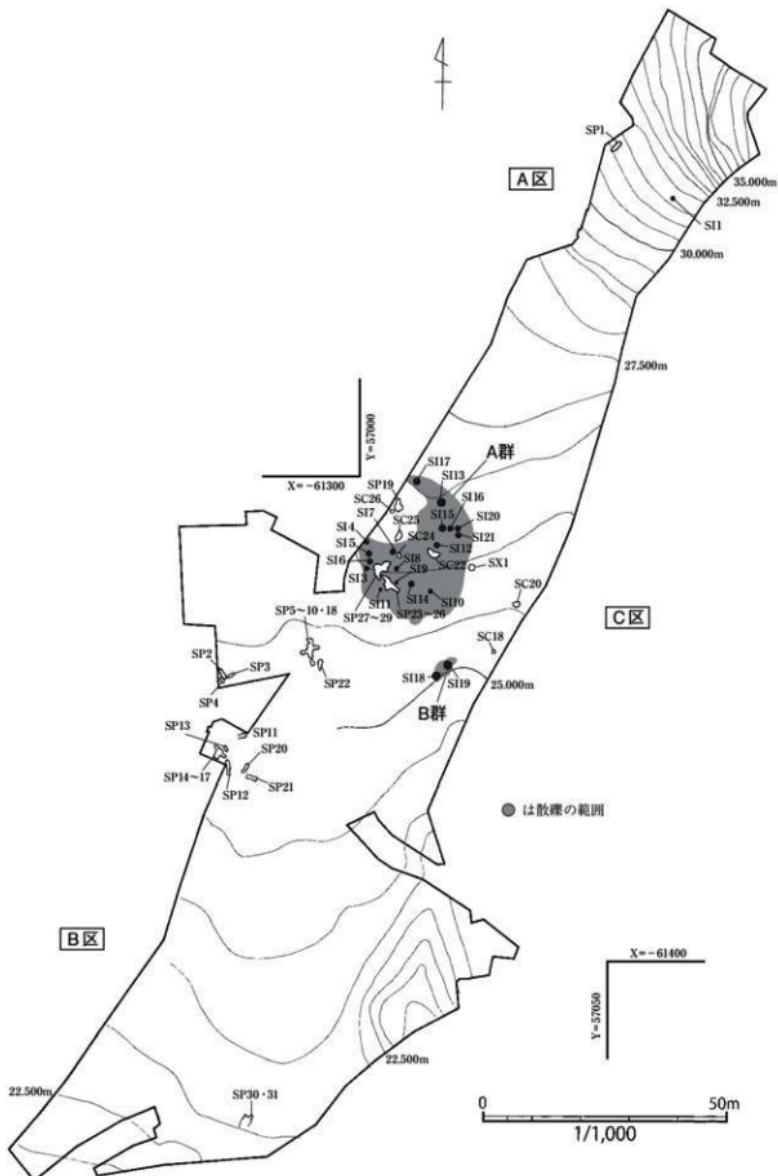
散礫の範囲については、B-P区付近において、集石遺構に使用したと思われる赤化した礫が表土中より多数出土しており、幾分西側に広がる可能性がある。

散礫B群

C-3区の東側、第Ⅱ層で検出した。半径約4m狭い範囲ではあるが、熱を受け破碎・赤化した礫が広がる。SI19・SI20に伴うものと考えられる。



第11図 散礫分布図



第12図 約文時代遺構配置図

2 集石遺構 (SI 第4表)

主にC区の第III層を中心に、集石遺構を20基検出している。礫はほとんどが砂岩で破碎している。配石を持つものが全体の半数以上を占める。配石は約30cm大の扁平な礫数個を主体として配置している。

次のA~C・A'類に分類し、整理した。

A類…掘り込みがあり、配石の有るもの（11基）

B類…掘り込みがあるが、配石の無いもの（4基）

C類…掘り込みが無いもの（3基）

A類…掘り込みが深く、配石の有るもの（2基）

この分類に従い、集石遺構の詳細を記述する。

なお、実測の過程で上部礫と配石の中心がずれている場合、断面線を配石の中心に合わせて移動している。その結果、SI 5・8・10・12・13・18・19・20は上部礫と配石の断面線が一致していないため、図化していない部分がある。

<A類> (第13・14図)

SI 3

1次調査時にB 3Tで検出。検出時から配石が露出しており、上部を削平されている。礫はほとんど熱を受けて破碎、赤化が見られる。配石は中

央に40cm大の礫を置き、その周りに掘り込みに沿って斜めに大きめの礫を配置している。

SI 5

SI 4、6と隣接している。南西部を後世のピットに切られている。配石は20cm大の扁平な礫を掘り込みの底に敷き詰める配置をしている。

SI 6

SI 3、5と隣接している。配石は40cm大の扁平な礫を中心に配置している。中心の礫は赤化しており、その下に15cm程度の礫を2枚並べている。

SI 7

配石は10~30cm大の礫を掘り込み面に配置している。礫は熱を受けて破碎している。

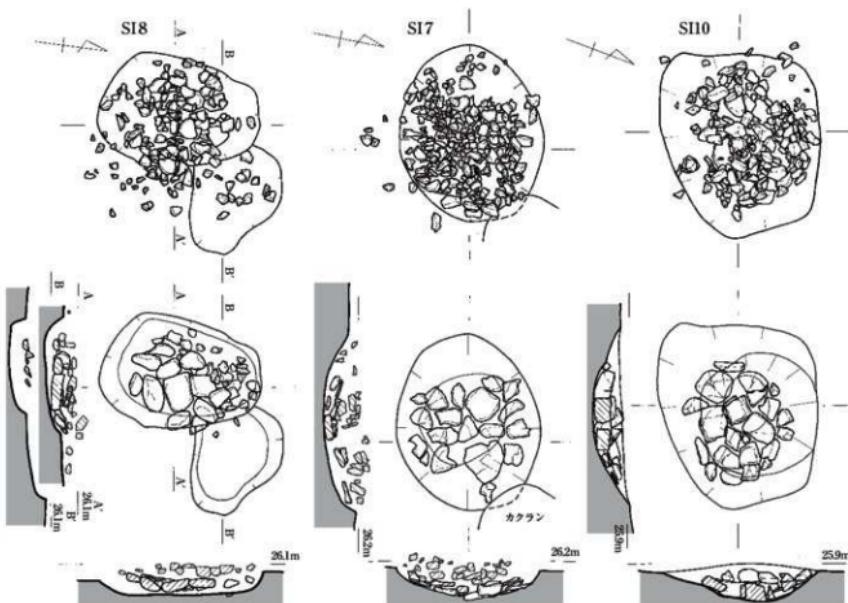
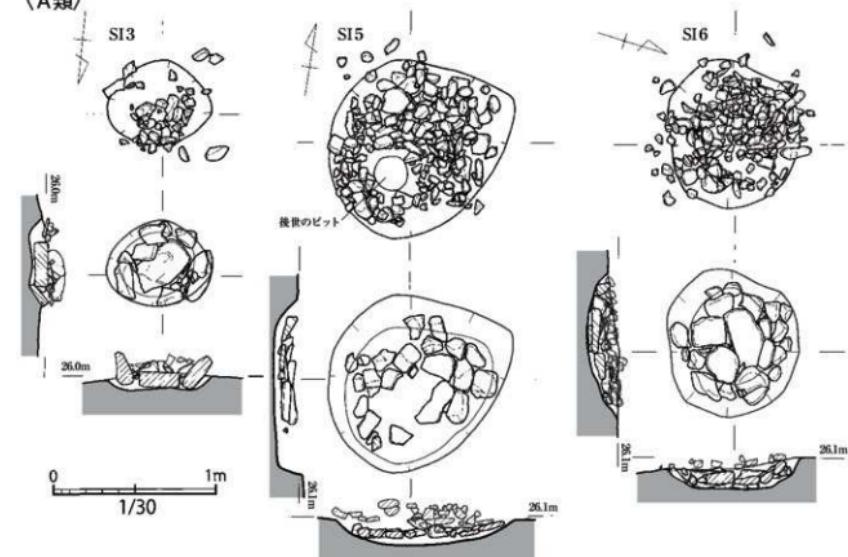
SI 8

掘り込みが、浅い円形の落ち込みを切っている。礫はほとんどが赤化している。配石は30cm大を中心にして扁平な礫を配置しており、配石の下から小礫の集まりを検出した。

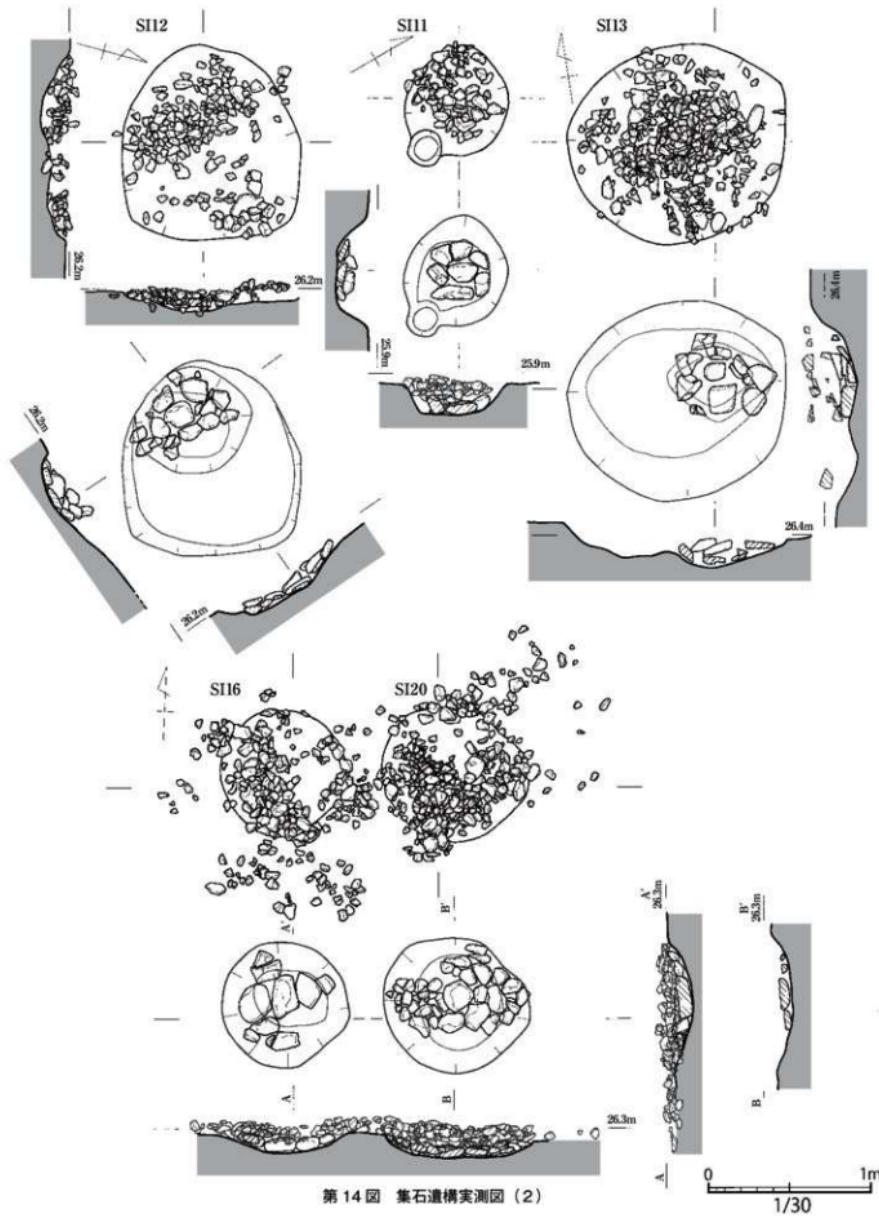
第4表 繩文時代早期集石遺構観察表

遺構	出土位置 [グリッド]	検出面 [層]	集石範囲 [cm]			掘り込み [cm]			上部礫 密度	配石 有無	分類	礫重量 (kg) 上部礫 配石	
			長径	×短径	長径	×短径	×深さ						
SI 1	A-2	VII	57	× 54	90	× 63	× 3	疊	×	B	—	0	
SI 3	C-2	III	66	× 60	66	× 60	× 9	疊	○	A	0	36.0	
SI 4	C-2	III	93	× 75	81	× 78	× 12	普	×	B	26.15	0	
SI 5	C-2	III	114	× 105	123	× 99	× 18	密	○	A	23.8	48.5	
SI 6	C-2	III	105	× 90	93	× 78	× 18	普	○	A	32.5	31.22	
SI 7	C-2	III	99	× 81	108	× 87	× 15	普	○	A	51.65	27.8	
SI 8	C-2	III	102	× 78	99	× 69	× 15	疊	○	A	31.25	—	
SI 9	C-2	III	66	× 45	—	—	—	疊	×	C	25.5	0	
SI 10	C-3	III	90	× 81	126	× 96	× 15	普	○	A	45.3	31.36	
SI 11	C-3	III	63	× 48	69	× 63	× 20	普	○	A	27.9	0	
SI 12	C-2	III	120	× 120	129	× 105	× 12	密	○	A	31.35	15.6	
SI 13	C-2	III	123	× 117	126	× 114	× 24	密	○	A	50.75	19.58	
SI 14	C-2	III	165	× 105	117	× 117	× 5	疊	×	B	29.4	0	
SI 15	C-2	III	135	× 90	—	—	—	疊	×	C	29.25	0	
SI 16	C-2	III	150	× 138	78	× 78	× 9	密	○	A	33.1	15.7	
SI 17	C-2	III	138	× 120	123	× 108	× 5	疊	×	B	54.4	0	
SI 18	C-3	II	150	× 126	150	× 120	× 42	密	○	A'	157.2	15.6	
SI 19	C-3	II	129	× 123	144	× 123	× 45	密	○	A'	156.5	65.3	
SI 20	C-2	III	165	× 90	90	× 78	× 12	密	○	A	37.85	35.5	
SI 21	C-2	III	123	× 105	—	—	—	普	×	C	20.1	0	
											計	863.95	198.64

(A類)



第13図 集石遺構実測図(1)



第14図 集石遺構実測図(2)

S I10

配石は20cm大の比較的厚めの礫を掘り込みに配置している。

S I11

上部礫は下方で密集している。埋土中に少量の炭化物が見られる。配石は約20cm大の砂岩の円礫を配置している。表面は熱を受けて変色し、破碎・剥離したりしている。

S I12

礫は熱を受け、破碎・赤化が著しい。北側に擾乱を受けており、配石も一部失われている。中央に20cm大の円礫を据え、その周りに小さな礫を配置している。熱を受けておりヒビや剥離が見られる。配石直上の埋土中の炭化物の¹⁴C年代測定では9,280±40年BP、樹種同定では広葉樹との結果が出ている。

S I13

破碎した礫が密に集まっている。配石の位置が、礫の集中部より東にずれており、上部礫は西の窪みに流れたものか、上部礫を別の集石構造に二次利用した可能性がある。配石は20cm程度の扁平な礫が配置され、ヒビや剥離が見られる。

S I16

礫は熱を受け、破碎・赤化しているものが多い。東側は礫が少ない。配石は砂岩で、扁平な円礫と角礫を使用し、熱を受けておりヒビや剥離がみられる。中央に核になる礫を置き、周りを開み壁に沿わすように配置している。

S I20

S I16と隣接している。礫は熱を受けて破碎・赤化がみられる。北東側は礫が少ない。配石は中央に40cm大の礫を据え、周りに東側に大きめの円礫を、西側に小さな礫を配置している。貝殻条痕文土器の頭部片13(第22図)が一点出土している。

<B類> (第15図)

S I1

A-2区斜面地、第Ⅹ層で検出。掘り込みはあるが削平を受け非常に浅い。埋土に炭化物をごく少量含む。

S I4

掘り込みは浅く、礫は10cm弱のものが多く、ほとんど赤化している。北西と南東側では掘り込みの下部から礫が出土している。

S I14

掘り込みは非常に浅く、30cm大の礫の周間に砂岩の小破碎礫が集まっている。早期の土器片の頭部10と底部付近12(第22図)が出土している。

S I17

散礫A群の北端で検出し、砂岩の破碎礫が集まる。掘り込みは浅く、埋土に炭化物を含まない。

<C類> (第15図)

S I9

掘り込みを持たず、礫が集中している。炭化物がまばらに広がる。

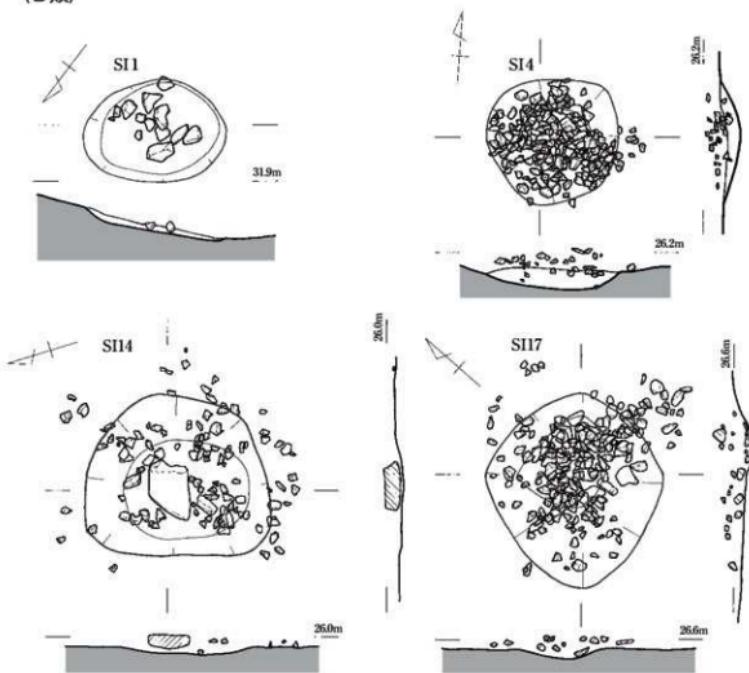
S I15

S I16、20、21に隣接している。掘り込みはなく、礫はほとんど破碎している。炭化物が微量に広がる。早期の土器片の頭部11(第22図)が出土している。

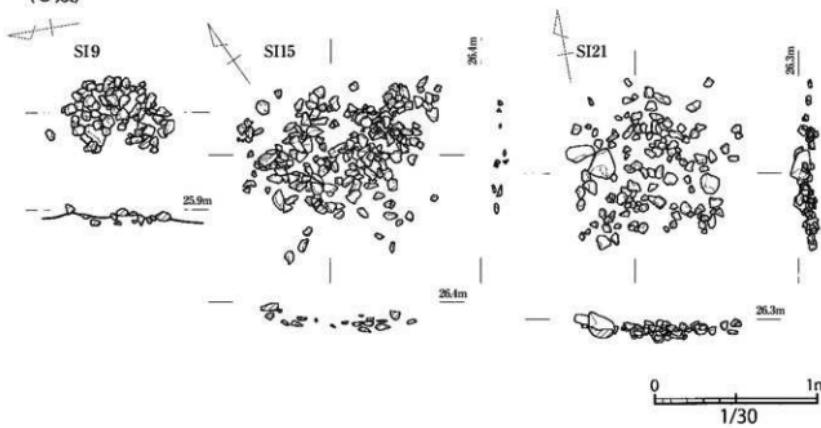
S I21

S I20の南に位置する。礫は疎らで掘り込みは持たない。破碎・赤化しているものは少ない。

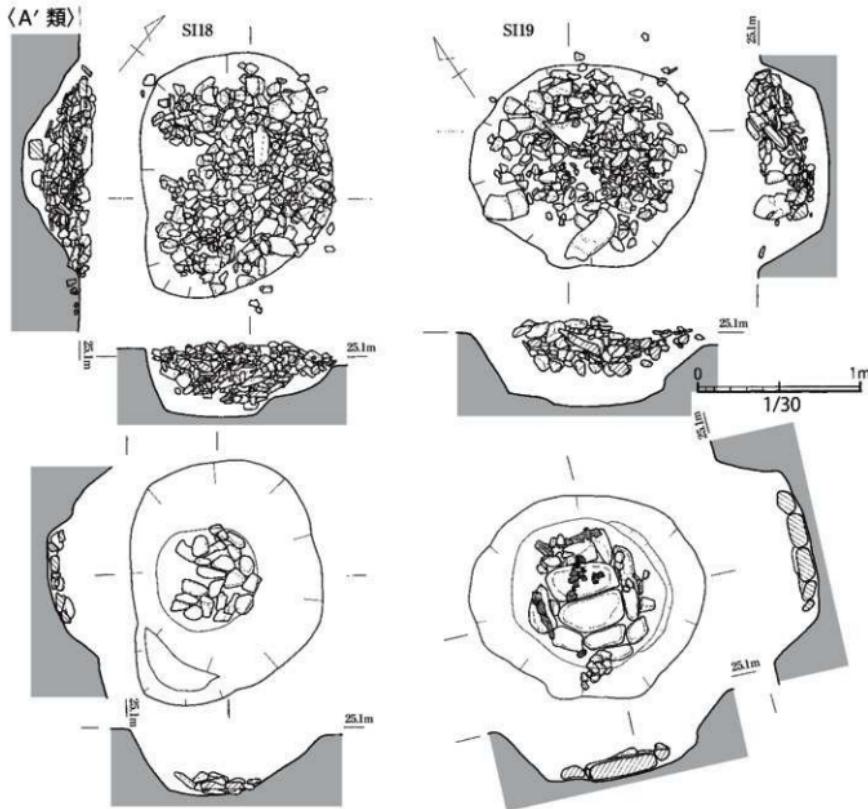
〈B類〉



〈C類〉



第15図 集石遺構実測図（3）



第16図 集石遺構実測図(4)

<A'類>(第16図)

SI18

散疊B群、第II層で検出。A～C類の集石遺構とやや離れた場所に位置し、規格が異なる。掘り込みが40cmと深く、疊構成は砂岩を中心とするが、A～C類より大きさが一回り以上大きい疊を使用しており、角疊も多いが破碎疊は少ない。配石は20m大の疊を底面に並べている。埋土中から炭化物を多量に確認した。埋土中の炭化物の¹⁴C年代測定では $8,215 \pm 25$ 年BP、樹種同定ではコナラ属コナラ節との結果が出ている。

SI19

SI18と同様掘り込みが深く、規格が異なる。配石は長径約50cmの細長い巨大な疊を二列並べ、その周りを固むように30cm大の疊を配置している。熱を受けて変色している様子は見られない。埋土中から炭化物が多量に確認でき、大きな炭化材については配石との間に埋土を1cm弱はさみ検出している。また炭化材の周りには褐色の粘質土が必ず見られ、配石の下にも若干炭化物が見られた。埋土中の炭化材の¹⁴C年代測定では $8,180 \pm 40$ 年BP、樹種同定ではコナラ属コナラ節との結果が出ている。

3 炉穴 (SP 第5表)

B・C区を中心に第Ⅲ層～VI層で、切り合った炉穴を5群(20基)、単独11基、の計31基を検出した。その多くが第VI層(AT)を床面とし、第VI層に焼土が広がっていた。また、2基の土坑をつなぐブリッジ部が残ったと思われる壁面の張り出しが見られた。

炉穴同士が切り合っているものをA類、単独のものをB類として整理する。

<A類> (第17～19図)

SP5～10・18

第IV層で検出し、すべての床面は第VI層で焼土面が広がる。SP5～7・18が長軸を南北にして連なり、その中心付近をSP8・10が東西に直交する形である。SP8→5→6→7の順で作られている。SP9は削平が著しくかろうじて床面の焼土面が存在しているのみであるが、上記の炉穴と距離も近く床面と同じ第VI層であることからSP8と連結した

炉穴であると考えている。SP10はSP5・18を切っているが、SP6～8との先後関係は不明である。SP18埋土中に貝殻条痕文の土器片14(第22図)が出土している。SP7・10・18の焼土面の先がくばんでいる。

SP23～26

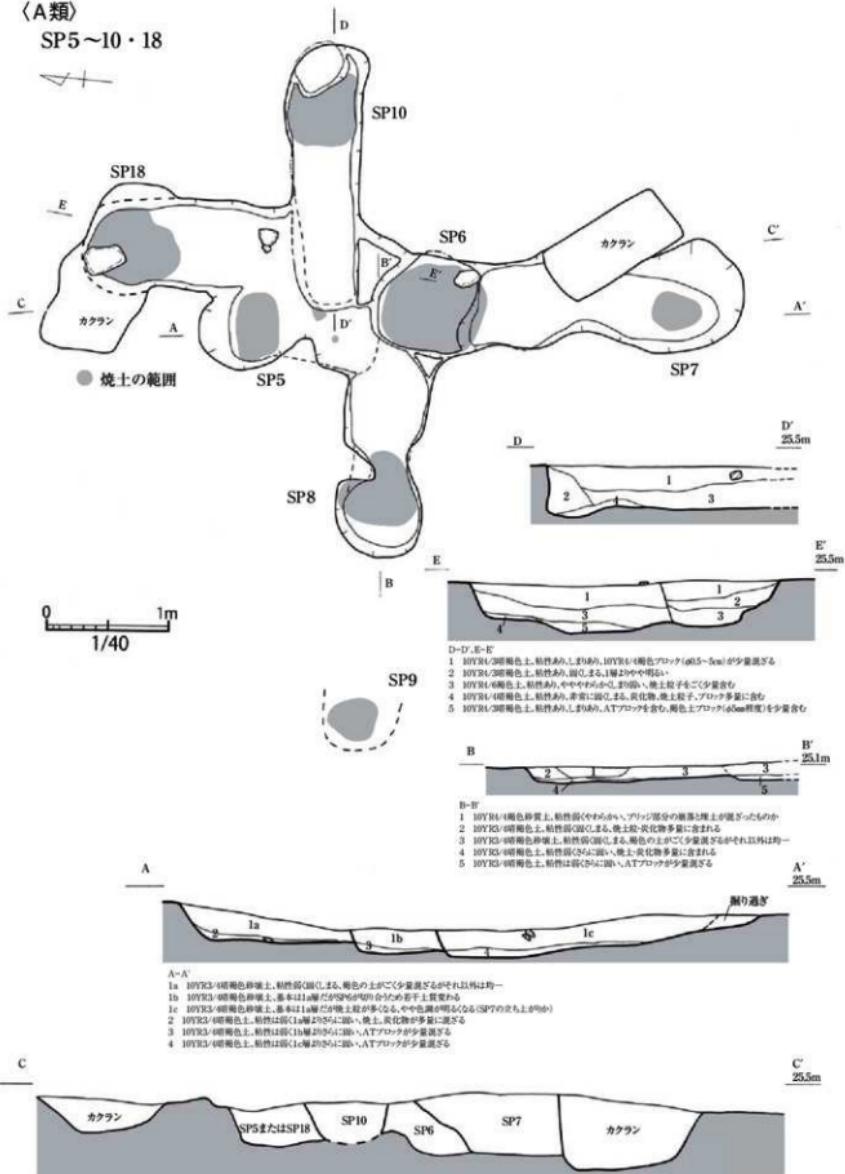
C-2区、散礫A下で検出し、床面は第VI層(AT)である。一部、1次調査のトレンチにかかっていたが1次調査では検出できなかった。埋土には焼土や炭化物、礫等を含んでいる。SP25とSP26は長軸が南北で並列し、SP23と24が東西に直交する形である。SP26→24→23の順で作られていることがわかるが、SP25に関してはSP23の以前であることが確認できただけで、その他との先後関係は不明。SP24の埋土中より深鉢の底部15(第22図)が出土した。埋土1層の中の炭化種子を自然科学分析により種実同定したところイネの果実であることが分かった。ただし埋土1層は表土直下であること、1次調

第5表 繩文時代早期炉穴観察表

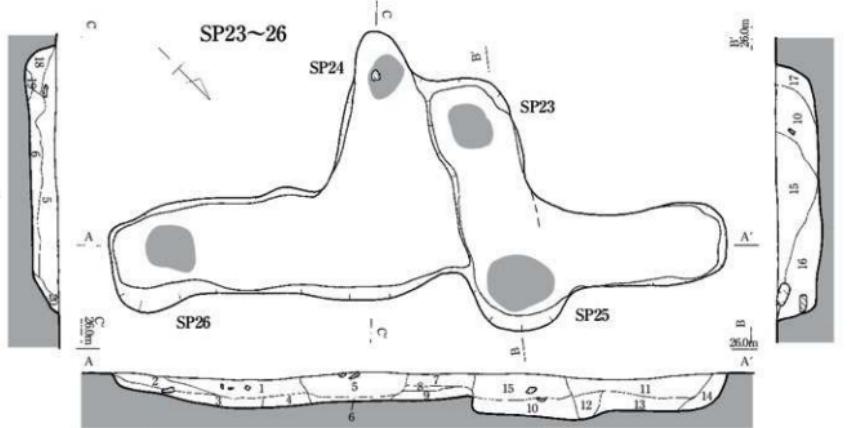
No.	出土位置 〔区〕	検出面 〔層〕	遺構規模 [m]			床面 〔層〕	焼土面 有無	分類 A・B
			長軸	×短軸	×深さ			
SP5	B-P	IV	1.8	×0.6	×0.2	VI	×	A
SP6	B-P	IV	1.8	×0.6	×0.2	VI	○	A
SP7	B-P	IV	2.2	×0.6	×0.2	VI	○	A
SP8	B-P	IV	2.2	×0.7	—	VI	○	A
SP9	B-P	IV	2.2	×0.6	—	VI	○	A
SP10	B-P	IV	2.2	×0.6	×0.3	VI	○	A
SP18	B-P	IV	2.2	×0.8	—	VI	×	A
SP14	B-1	SA3下	1.6	×0.8	×0.1	VI	○	A
SP15	B-1	SA3下	1.4	×0.6	×0.1	VI	○	A
SP16	B-1	SA3下	1.6	×0.7	×0.1	VI	○	A
SP17	B-1	SA3下	1.3	×0.7	×0.1	VI	○	A
SP23	C-2	散礫A下	2.2	×0.6	×0.4	VI	○	A
SP24	C-2	散礫A下	2.2	×0.7	×0.2	VI	○	A
SP25	C-2	散礫A下	2.1	×0.6	×0.2	VI	○	A
SP26	C-2	散礫A下	2.8	×0.8	×0.2	VI	○	A
SP27	C-2	散礫A下	1.8	×0.6	×0.2	VI	○	A
SP28	C-2	散礫A下	2.9	×0.6	×0.4	VI	○	A
SP29	C-2	散礫A下	2.1	×0.8	×0.3	VI	○	A
SP30	B-8	SA11下	—	—	—	VII	○	A
SP31	B-8	SA11下	—	—	—	VII	○	A
SP1	A-2	IV	2.6	×0.9	×0.3	VI	○	B
SP2	B-1	VI	2.4	×0.8	×0.0	VI	○	B
SP3	B-1	VI	1.7	×0.5	×0.0	VI	○	B
SP4	B-1	VI	1.4	×0.6	×0.1	VI	×	B
SP11	B-1	IV	1.2+α	×0.8	×0.1	VI	○	B
SP12	B-1	IV	2.8+α	×0.8	×0.3	VI	○	B
SP13	B-1	SA3下	1.2	×0.9	—	VI	○	B
SP19	C-2	III	2.6	×1.0	×0.3	VI	○	B
SP20	B-5	IV	2.2	×0.8	×0.2	VI	○	B
SP21	B-5	IV	2.4	×0.5	×0.3	VI	○	B
SP22	C-3	IV	2.2	×0.8	×0.3	VI	○	B

〈A類〉

SP5~10・18



第 17 図 炉穴実測図 (1)



第18図 炉穴実測図(2)

査で一度表土を剥ぎ埋土1層が表出していたことを考えると、サンプリングエラーである可能性が高い。

SP14～17

S A 3下で検出し、床面は第VI層。S P15・17・16が長軸を南北方向にして連なり、SP14が直交する形である。S A 3によって削平されており上部は大部分が残っていない。S P15→17→16の順番で作られていることはわかるが、SP14に関しては土層ではこれらとの先後関係が確認できていない。

SP27～29

S P23～26に隣接する。C-2区、散疊A下で検出し、床面はVI層である。長軸がN-45°-EのS P27を基にしてS P27→28→29の順に作られており、ヤツデ状に広がる。埋土には焼土粒を含むが、焼土面はS P29に残存するのみである。SP28は床面の一部がくぼんでいる。

SP30・SP31

S A12が上に作られていて上部は不明。2基が切り合っているが先後関係も不明。床面はVII層。

<B類> (第19・20図)

SP1

A-2区北東部斜面地、IV層(褐色土)検出。上部はほとんど削平を受けている。長軸は尾根の先端に向かって直交する。検出時は木の根が多く、少し濃い褐色のシミがほんやりと認識できる程度であった。埋土中に炭化物、焼土が含まれているおり、床面(第VII層)の北端には焼土面が広がっている。中央より南の床面直上で、長径約45cmと約20cmの扁平の石が重なるように出土した。埋土中の炭化物の¹⁴C年代測定では9,220±40年BP、樹種同定ではブナ科との結果が出ている。

SP2・SP3・SP4

B-P区南東部の第VI層で検出。暗褐色の攪乱土から同色の埋土への変化に気付くのが遅れ検出面が下がった。切り合いは見られないが、ほぼヤツ

デ状に広がる。SP2とSP4は長軸が南北で、焼土面が北端に広がる。SP3はそれらと垂直で焼土面は東端に広がる。早期の土器片の胴部16(第22図)が出土している。

SP11

攪乱が激しく、一部埋土と焼土面が残るのみである。

SP12

B-2区、第IV層で検出。長軸方向は南北で、北端がS A 3に切られている。床面は第VI層。検出時、張り出し(ブリッジの残存部)部分の埋土の色が周りと違っていた。また、焚口付近(南側土坑)の埋土は非常に固くしまっている。

SP13

S A 3下で検出。住居により削平を受けており、上部はほとんど残っていない。床面は第VI層。

SP19

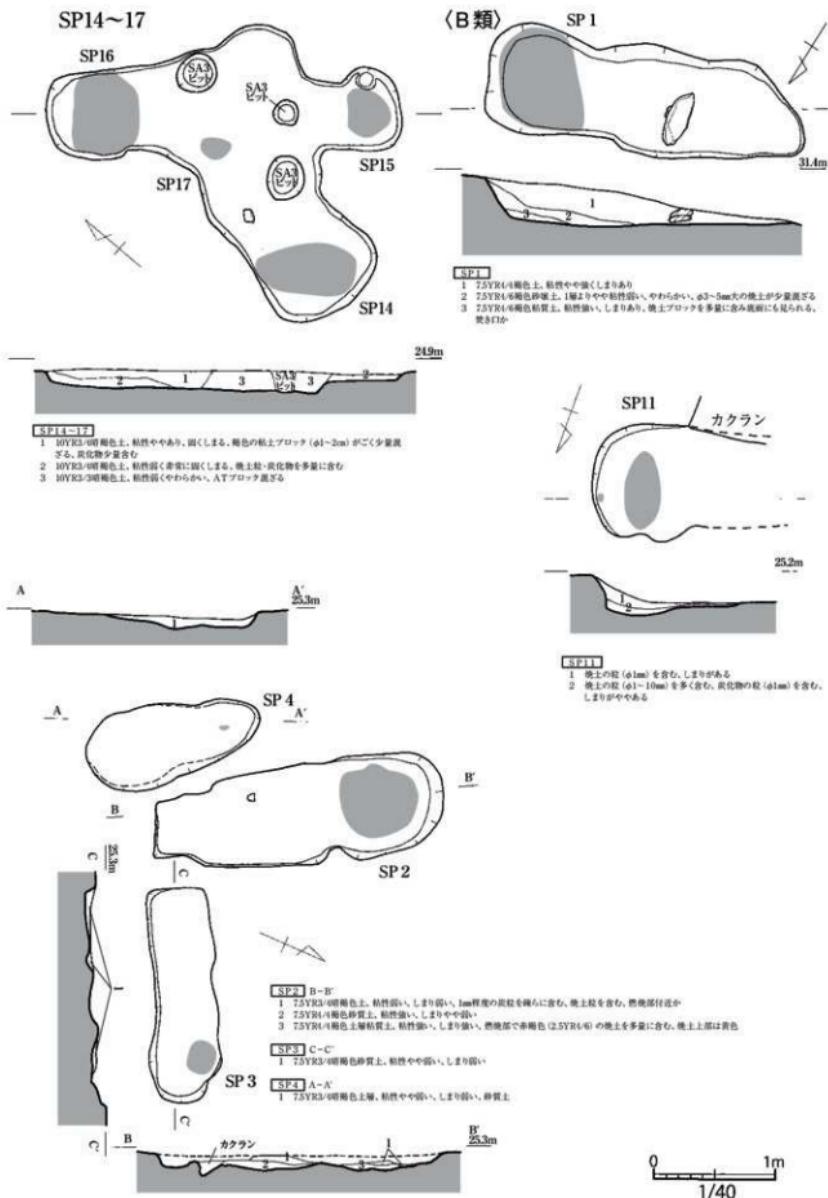
第III層で検出。長軸は南北で、北端に焼土面が広がる。床面は第VI層。また、この炉穴も若干の張り出し(ブリッジの残存部)が見られ、土層でも第IV層の変色した土が堆積する層が張り出した部分と一致する。同時にSP19の南東部に円形の土坑(SC26)も検出したが、切り合いは見られない。

SP20・SP21

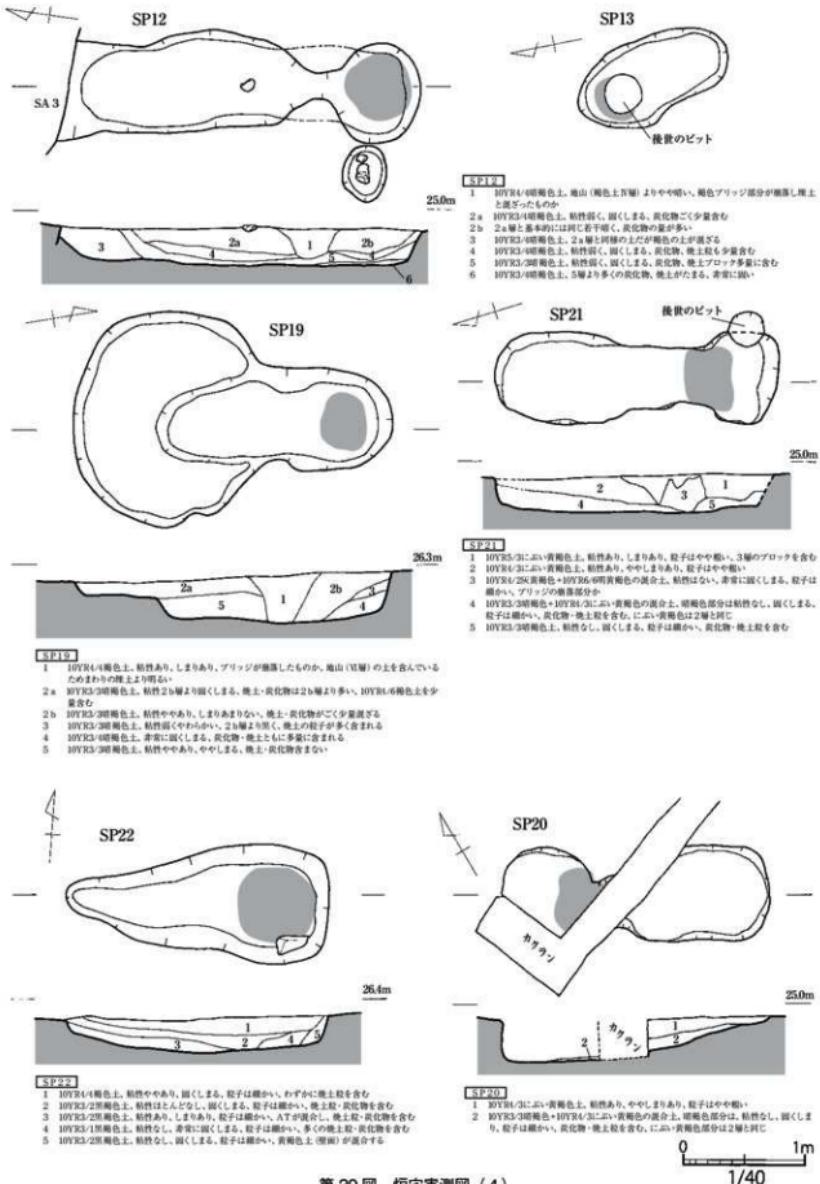
第IV層で検出。SP12と隣接する。SP20は長軸が南北で、SP21はそれと垂直方向に配置されるが、切り合いは見られない。ブリッジの残存部と考えられる張り出し部が見られ、SP21の土層にも張り出し部の崩落が見られる。

SP22

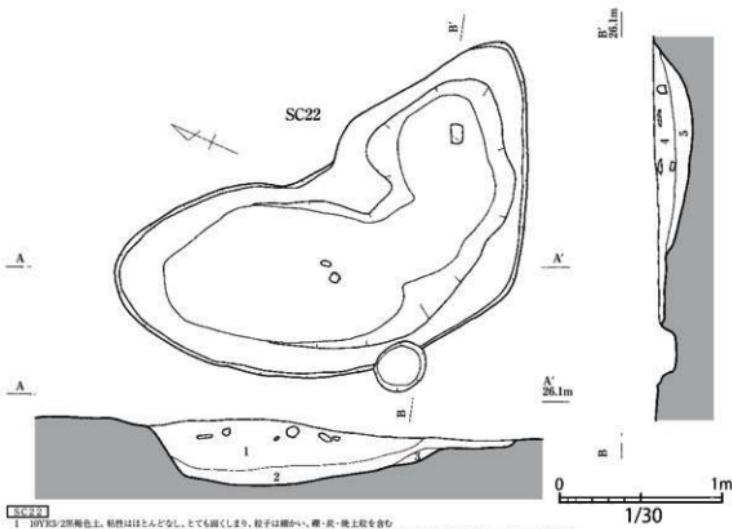
第III層で検出。S P 5～10・18に隣接する。長軸は南北で、北端に焼土面が広がる。床面は第VI層。また、この炉穴も若干の張り出し(ブリッジの残存部)が見られる。



第19図 炉穴実測図(3)



第20図 炉穴実測図(4)



第21図 縄文時代早期土坑実測図

4 土坑 (SC 第21図)

散疊Aの下から集石遺構や炉穴とともに、土坑を4基検出している。

SC22

散疊Aの下、第Ⅲ層で検出。埋土に散疊や集石遺構の破碎疊や炭化物、焼土を含んでいる。埋土中から縄文時代早期の土器片の口縁部17(第22図)が出土している。

5 遺物

縄文時代早期の土器は、集石遺構・炉穴・土坑から少量出土したほかは、殆どが包含層出土である。

遺構に伴う遺物 (第22図)

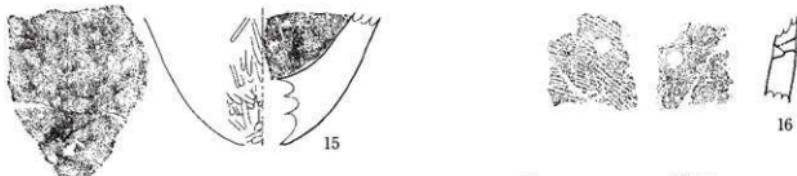
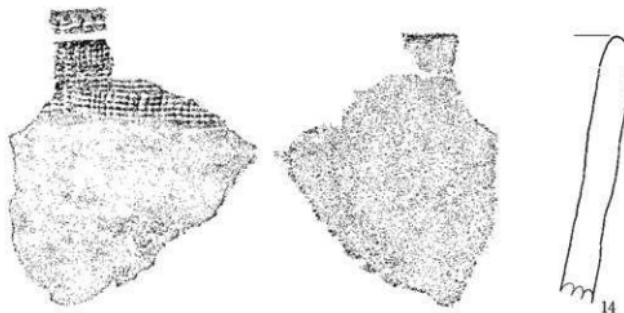
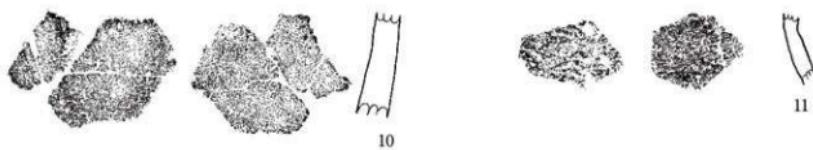
10~13は集石遺構出土遺物である。10・12はS I14から出土。10は外面にミガキと思われる光沢のある胴下半部で、下面に粘土の接合面と考えられる浅い凹面が見られる。12も胴部の底部付

近で外面にミガキ調整とススの付着が見られる。10・12は胎土・焼成・調整等から同一個体の可能性が強い。11はS I15から出土。器形は不明であるが、薄手の内傾する頸部付近で斜方向のごく浅い条痕が見られる。13はS I20から出土。胴部で横方向の貝殻条痕を施す。胎土に発泡性の落下軽石と思われる物質が多量に含まれ、器表面はその溶出痕と思われる穴が無数に見られる。

14~16は炉穴出土遺物である。14はSP18から出土。口縁部付近の外面と口唇部に貝殻押引き文を施す。15はSP24から出土。底部は尖底になると考えられ、外面に縱方向のていねいなミガキを施す。16はSP2から出土。胴部の外面に斜方向の貝殻条痕を施し、補修孔と思われる斜め方向の穿孔が見られる。

17はSC22から出土。器表面の摩滅が著しいが、外面の口縁端部付近に辛うじて斜位の貝殻腹縁刺突文が1列認められる。

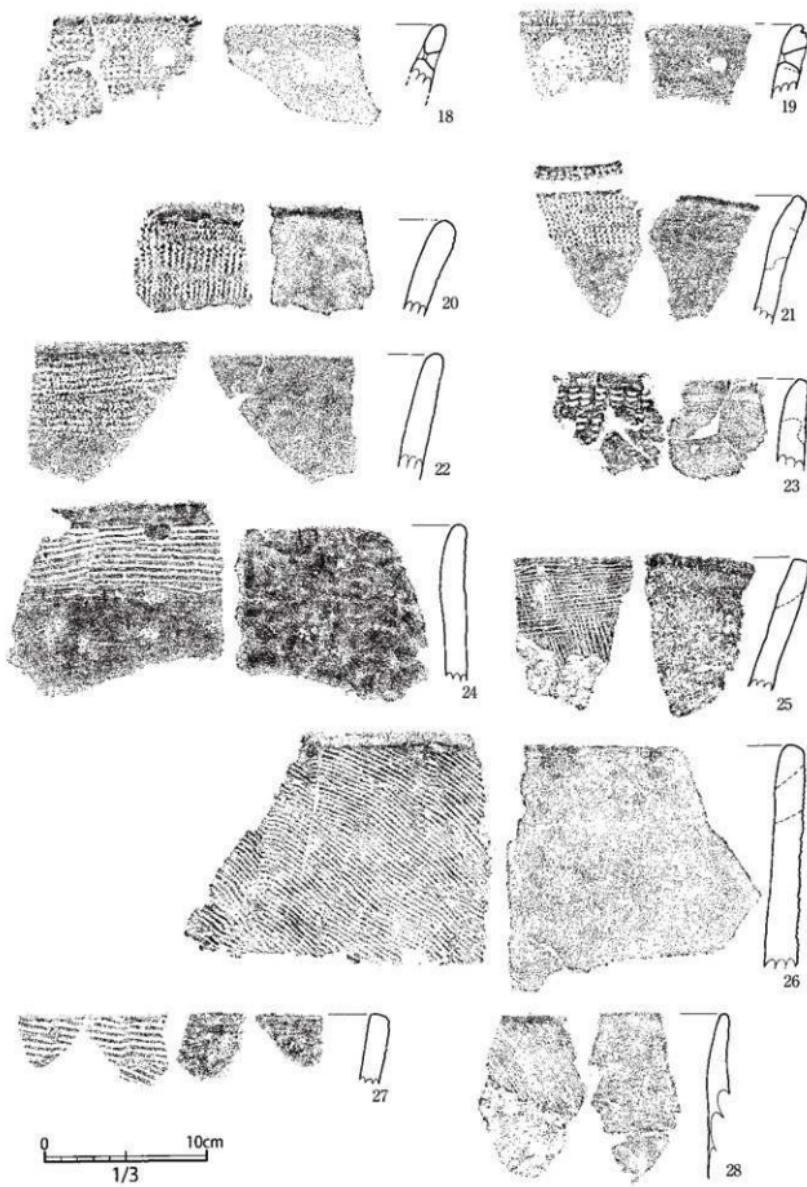
包含層中の遺物 (第23・24図)



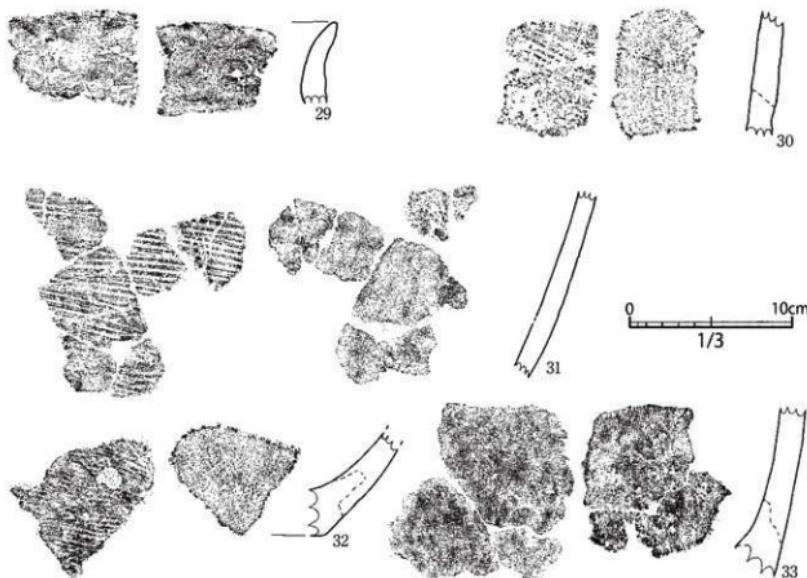
0
10cm
1/3



第22図 繩文時代早期遺構内出土遺物実測図



第23図 繩文時代早期土器実測図(1)



第24図 繪文時代早期土器実測図(2)

比較的量的にまとまっている包含層出土の土器について、その特徴から次の4類に分類した。

A類 口縁部付近に貝殻刺突文を施すもの

口縁部及び口縁端部のみ施文法が異なるものと、特別に施文法を変えないものの2類に分類できる。

B類 口縁部付近に貝殻押引き文を施すもの

C類 口縁部付近に貝殻条痕文(条痕文)を施すもの

以上A～C類の胴部は無文になると考えられる。

D類 全面に貝殻条痕文を施すもの

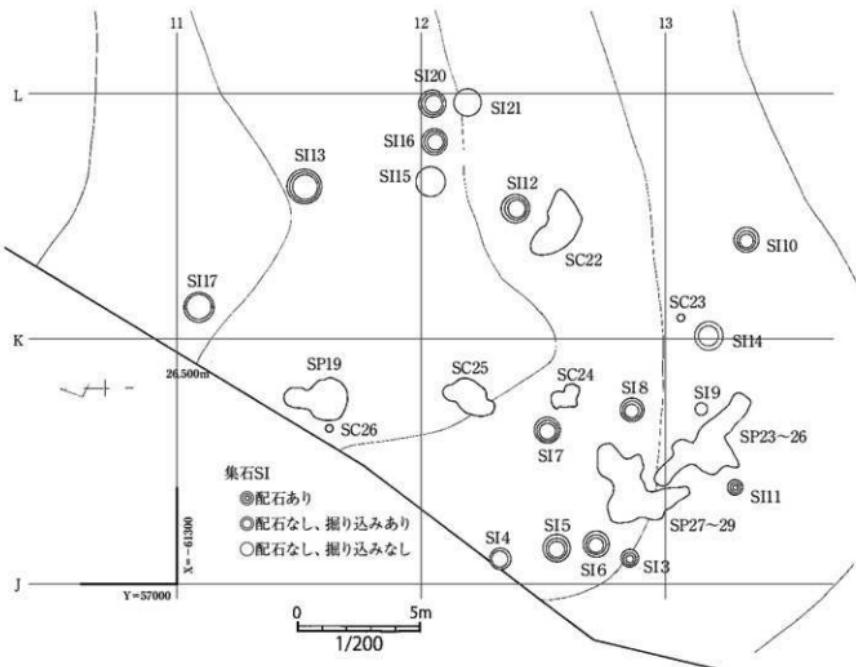
18～23はA類に相当し、外面の口縁部付近に貝殻腹縁刺突文を2～3段施す深鉢である。18・19は補修孔と考えられる焼成後穿孔をもつ。18はナデの後、3段の貝殻腹縁刺突文を施す。19は口唇部に貝殻腹縁刺突による刻目をもち、口縁部に2段の刺突文を施す。21は口唇部に貝殻腹縁刺突による刻み目をもち、その下に3段の刺突文を施す。20は間隔の狭い刺突文1段の下に、間隔の広

い刺突文を2段施す。胴部の外面及び内面はミガキである。22は上下2段に間隔をあけた貝殻腹縁刺突文、23は上下2段に刺突文を施す。

24はC類に相当する。横方向の貝殻条痕文を上下2段に一部重なりながら施文される。

25～28はD類に相当する。26は円筒形の厚手の深鉢の口縁～胴部付近で全体に斜方向の貝殻条痕文を施す。27は斜方向の後や横方向の貝殻条痕文を施す。25は綫方向の後横方向、28は斜方向に鋭利な工具で条痕を施す。

上記A～D類以外に無文土器、胴・底部片を一括して述べる。29は指揮さえの痕が顕著に見られる無文土器で口縁部がやや外反する。30は風化が著しいが、斜方向の貝殻条痕文がわずかに見られる。胎土・焼成等からSI20出土の13と同一個体であると思われる。31はやや斜方向の貝殻条痕文であるが、焼成・胎土・調整等から27と同一個体であると考えている。32は平底の底部で底面付近まで貝殻条痕を施す。底面はミガキ調整である。33は底部付近で外面に綫方向の丁寧なミガキを施している。胎土



第25図 繩文時代早期遺構配置詳細図

や調整など15によく似ているが焼成が若干異なる。

6 小結

集石遺構の¹⁴C年代測定の結果や形態等から、繩文時代早期は大きく2つの時期に生活的営みが確認できる。約9,200年BPと約8,200年BPを中心とした時期である。

耕作の影響の少ないL12グリッド近辺で、散礫と集石遺構の疊の接合を試み、この時期の集石遺構と散礫の関係を調べた。結果を次の①～③に記す。

- ① 集石遺構間の疊接合は確認できなかった。
- ② 集石遺構と散礫間の疊は12点接合した。最長接合距離は2.72mである。
- ③ 散礫間については10点接合した。最長接合距離は8.01mである。

近接するS I16・20・21の上部疊が一点も接合

しなかったことは、集石遺構の疊は他の集石遺構に二次的利用はないか、または同時に存在していた可能性がある。

炉穴は、ほとんどがお互いを切り合っているか、または近接している。SP1は現況で完全に単独であるが、調査区の端であること、植林のために削平されている状況から他の炉穴も存在していた可能性がある。

散礫の下で検出されている炉穴があるが、集石遺構と炉穴はお互いを切り合っていない。特にSP23～26とSP27～29はSI9やSII1を避けるように掘り込まれていることや、炉穴の埋土下部にも集石遺構で使用されたと思われる破碎疊が多数出土することより、炉穴と集石遺構は併設して使用していた可能性がある(第25図)。

第6表 縄文時代早期遺構内出土土器觀察表

No.	基種	部位	出土地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
10	深鉢	側部	SH4		丁寧なナデ。ミガキと思われる丸く凹凸	ナデ	相 (7.5YR7/6)	黒褐色 (10YR3/2)	約6mm以下の底白、黒色光沢、黒褐色、明赤褐色、褐灰色を含む	12と同一ヶ
11	深鉢	頭部	SI15		斜方向のくびくい文様。頭部にさる文様あり	ナデ	にぶい相 (7.5YR7/4)	黒褐色 (10YR6/4)	約2mm以下の底黄褐色、黒色光沢を含む	風化気味
12	深鉢	側部	SI14		丁寧なナデ。一蓋ミガキ	ナデ	相 (7.5YR7/6)	黒褐色 (7.5YR4/1)	約6mm以下の底白色、黒色光沢、黒褐色、明赤褐色、褐灰色を含む	10と同一ヶ
13	深鉢	側部	SI20		ナデの後、横方向の貝殻条文	ナデ	にぶい相 (10YR7/4)	黒褐色 (10YR6/2)	約2mm以下の底黄褐色、黑色光沢を含む	器表面に無数の穴
14	深鉢	口縁部-側部	SP18		口縁部に横方向の貝殻条文記載。頭部は丁寧なナデ	底黄褐色 (10YR5/2)	にぶい黒相 (10YR7/4)	6mm以下の白・黒色粒、3mm以下の黒色光沢粒を多く含む	頭部にスス付着	
15	深鉢	底面-付近	SP24		ナデ後、横方向の丁寧なミガキ	丁寧なナデ	相 (7.5YR6/6)	相 (7.5YR7/6)	1~5mmの底白色粒、1~2mmの黒色光沢粒を含む	内面: 黒色 33セミ
16	深鉢	口縁部-付近	SP2		斜方向の貝殻条文	ナデ	にぶい相 (7.5YR6/4)	にぶい黒相 (10YR6/4)	7mm以下の底白色、1.5mm以下の黒色光沢粒を含む	底卷孔と思われる黒孔
17	深鉢	口縁部-側部	SC22		口縁底部に貝殻条文記載	ナデ、横ナデ	にぶい相 (10YR7/4)	底黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の底白・乳白色、微細な光沢粒を含む	苦黄色の跡が残る

第7表 縄文時代早期土器觀察表

No.	基種	部位	出土地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
18	深鉢	口縁部	C-2		ナデの後、口縁部に貝殻条文記載	ナデ	にぶい黒相 (10YR6/3)	にぶい黒相 (10YR7/3)	4mm以下の白色粒、3mm以下の黒色光沢粒を多く含む	複数孔と思われる黒孔
19	深鉢	口縁部	C-3		口縁部は貝殻条文記載によると封目、口縁部に複数の貝殻条文記載位置	ナデ	にぶい黒相 (10YR7/4)	にぶい黒相 (10YR7/4)	4mm以下の底白・黒・乳白色粒、3mm以下の黒色光沢粒を多く含む	複数孔と思われる黒孔
20	深鉢	口縁部	C-3		ナデ後、口縁部に貝殻条文記載。口縁部に横方向の貝殻条文記載。下に横の底白・乳白色粒と貝殻条文記載	ナデ	にぶい黒相 (10YR7/4)	にぶい黒相 (10YR7/4)	5mm以下の底白・黒・乳白色粒、2mm以下の底黑色光沢粒・透明光沢粒を多く含む	
21	深鉢	口縁部	B-P		口縁部は貝殻条文記載によると封目、口縁部に横方向の貝殻条文記載。頭部はミガキ、西頭部	横・斜方向のナデ、斜頭部	相 (SYR6/6)	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	4mm以下の底黄褐色・明赤褐色・黒褐色、黒色光沢、透明光沢を含む	口縁部にスス付着、灰化物付着
22	深鉢	口縁部	C-3		ナデの後、口縁部に貝殻条文記載	口縁部は横ナデ、頭部はミガキ、西頭部	にぶい黒相 (10YR6/3)	にぶい黒相 (10YR7/4)	4mm以下の底白・黒色粒、2mm以下の黒色光沢粒を多く含む	
23	深鉢	口縁部	C-3		ナデの後、口縁部に剥離文を2枚	横ナデ	にぶい黒相 (10YR6/4)	にぶい黒相 (7.5YR6/4)	4mm以下の底白・黒・乳白色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	スス付着
24	深鉢	口縁部	B4tr		ナデの後、口縁部は横方向の貝殻条文を一部重りさせた2枚。頭部はナデ後に指押され	ナデ、指押され	浅黃 (2.5Y7/4)	にぶい黒相 (10YR7/3)	1~5mmの底白・赤褐色・黒褐色・黑色光沢を含む	
25	深鉢	口縁部	C-3		口縁部から頭部に斜方向の溝、横方向の貝殻条文	ナデ、下半部は削り落とし	にぶい黒相 (10YR6/4)	にぶい黒相 (10YR6/4)	4mm以下の底黄褐色、2mm以下の黒色光沢粒を多く含む、3mm以下の黒・底白・底赤色を含む	
26	深鉢	口縁部	B-P		口縁部はナデ、全体に斜方向の貝殻条文	丁寧なナデ	明黄褐色 (10YR7/6)	にぶい黒相 (10YR6/4)	1~4mmの底白色粒、1~2mmの黒色光沢粒を含む	スス付着
27	深鉢	口縁部	C-3		口縁部はナデ、口縁部は横方向の溝、やや横方向の貝殻条文	ナデ	にぶい黒相 (2.5Y7/3)	にぶい黒相 (10YR7/4)	1~2mmの底白・底白色粒を含む	外蓋: 一頭房 31と同一個体か
28	深鉢	口縁部	C-3		口縁部は多層後にナデ、口縁部は斜削り工具で斜方向に削離	ナデ後に指押され	にぶい相 (7.5YR7/4)	にぶい相 (7.5YR6/4)	1~5mmの底白色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	
29	深鉢	口縁部	C-3		ナデ後に指押され	大腹	相 (SYR7/6)	2~6mmの赤褐色・底白・黒色光沢粒を含む		
30	深鉢	頭部	C-2		斜方向の貝殻条文	ナデ	にぶい黒相 (10YR7/4)	にぶい黒相 (10YR6/4)	3mm以下の底黄褐色・底白色粒を含む	風化が著しい
31	深鉢	頭部	C-3		ナデの後、やや斜方向の貝殻条文	工具ナデ後にミガキ	相 (10YR6/3)	にぶい黒相 (10YR7/4)	1~2mmの透明白・底白色を含む	27と同一個体か
32	深鉢	頭部-底 頭部付近	B-P		底面が底まで斜方向の貝殻条文。底面はミガキ	横・斜方向のナデ	相 (7.5YR7/6)	にぶい黒相 (10YR6/4)	10mm以下の底褐色・底白・黑褐色・明褐色・にぶい褐色を含む	
33	深鉢	頭部-底 頭部付近	C-3		縦方向の丁寧なミガキ	斜方向のナデ	明褐色 (7.5YR5/6)	にぶい黒相 (10YR6/3)	9mm以下の底褐色・底白・黑褐色・黑色光沢粒を含む	15と似ている

第4節 縄文時代後期の遺構と遺物

縄文時代後期の調査の概要

表土（第I a層）を重機で剥ぎ、遺構検出を行っていくと、C-2区の第4 a層で土坑を1基、第II層で石組遺構1基検出した。

また、谷部の埋没土からは多くの縄文時代後期の土器が出土している。石器についても当時期と思われる石鏃や石斧、石錐等が多数出土しているが、出土状況から時期が不明確であることから第8節に掲載している。

1 土坑（SC 第26図）

SC20

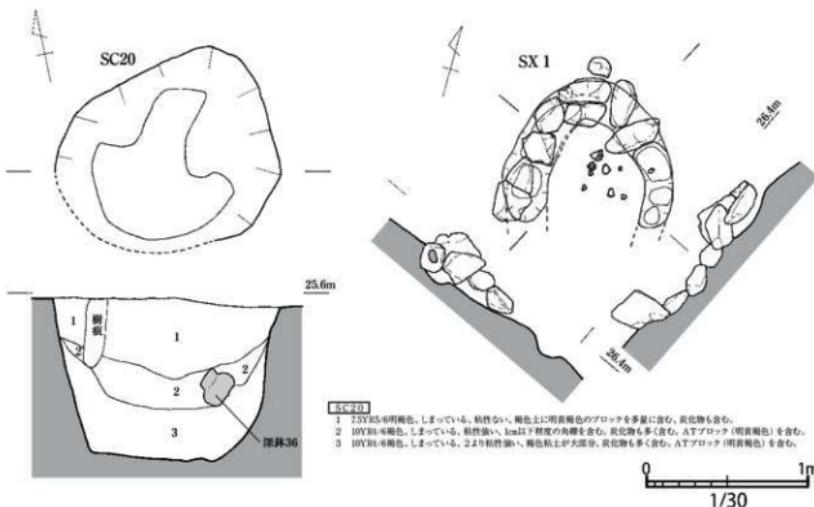
C-2区の1次調査のトレンチの壁面で断面の一部を確認し、谷部第4 a層で検出。この土坑は一度雨が続くと、壁からも水が湧き出し、水がなかなか退かない。堆積状況から底面から中

位までは土石流等で一気に埋まり、その後この時期の土器が流れ込んだと考えられる。大部分の土器が破片で出土している中で、深鉢36（第27図）は底部を欠くもののほぼ完形の状態で出土した。土器が出土している部分の炭化物の¹⁴C年代測定では $3,325 \pm 20$ BP年の結果が出ている。谷部の辺りに位置し、一度水が溜まるとなかなか退かない状況から、水の利用を考慮した土坑であった可能性がある。

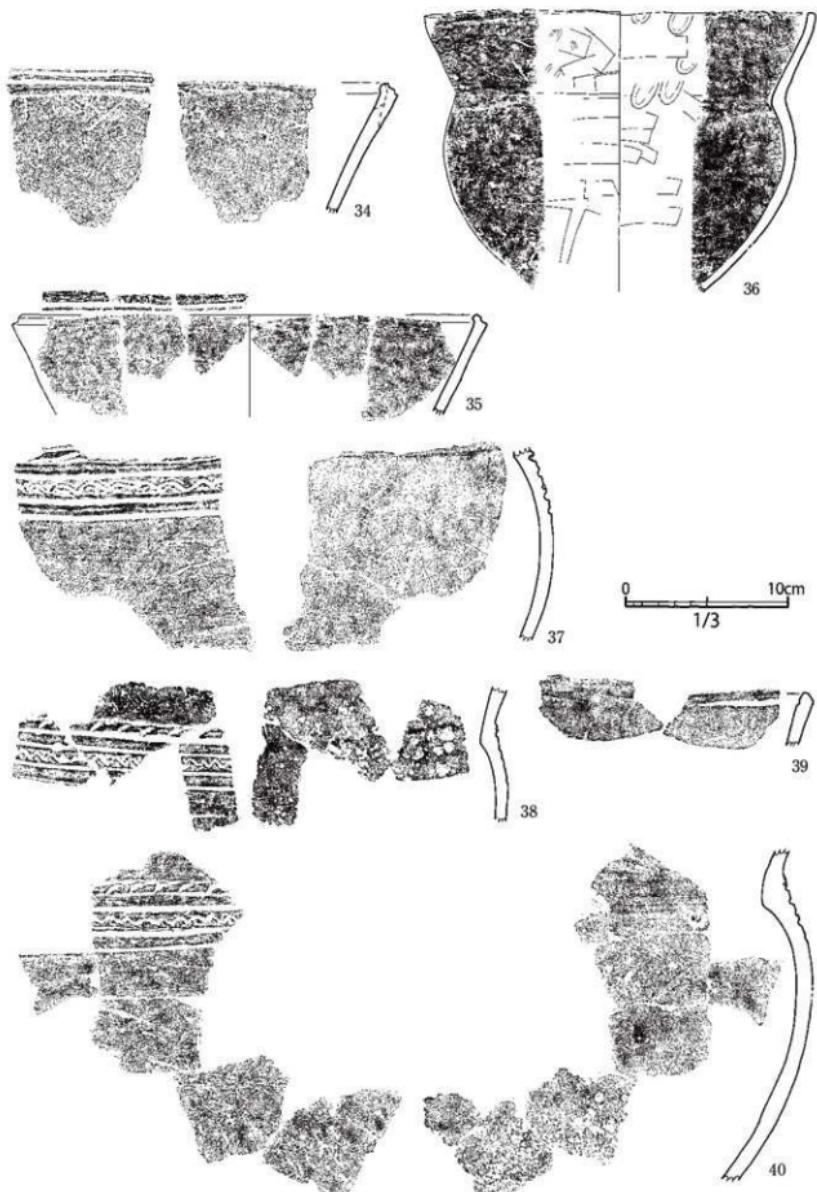
2 石組遺構（SX 第26図）

SX1

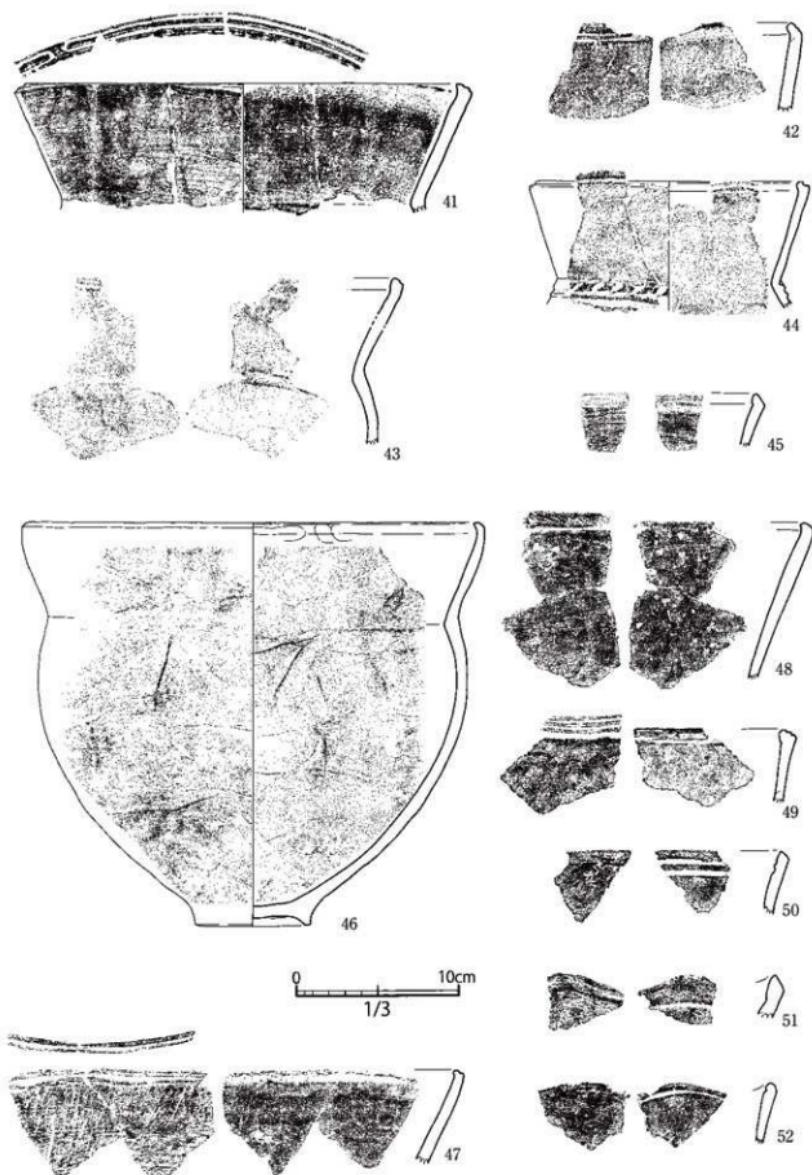
C区のII層で検出された。現況では馬蹄形に深さ約5cmの掘り込みを持ち、掘り込みに沿って30cm大の砂岩の礫を配置している。中央の埋土から炭化物を確認していることから、石組炉として使用していた可能性がある。遺物は埋土中から縄文時代後期の土器38～40（第27図）が出土している。



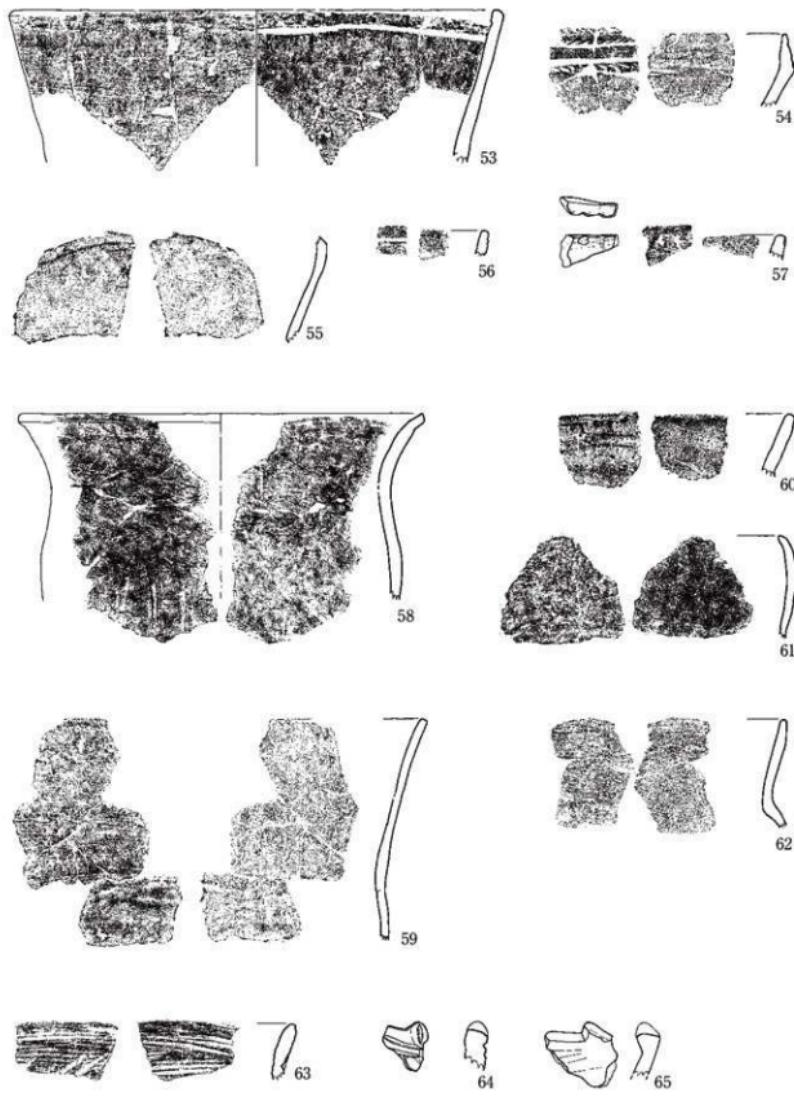
第26図 縄文時代後期土坑および石組遺構実測図



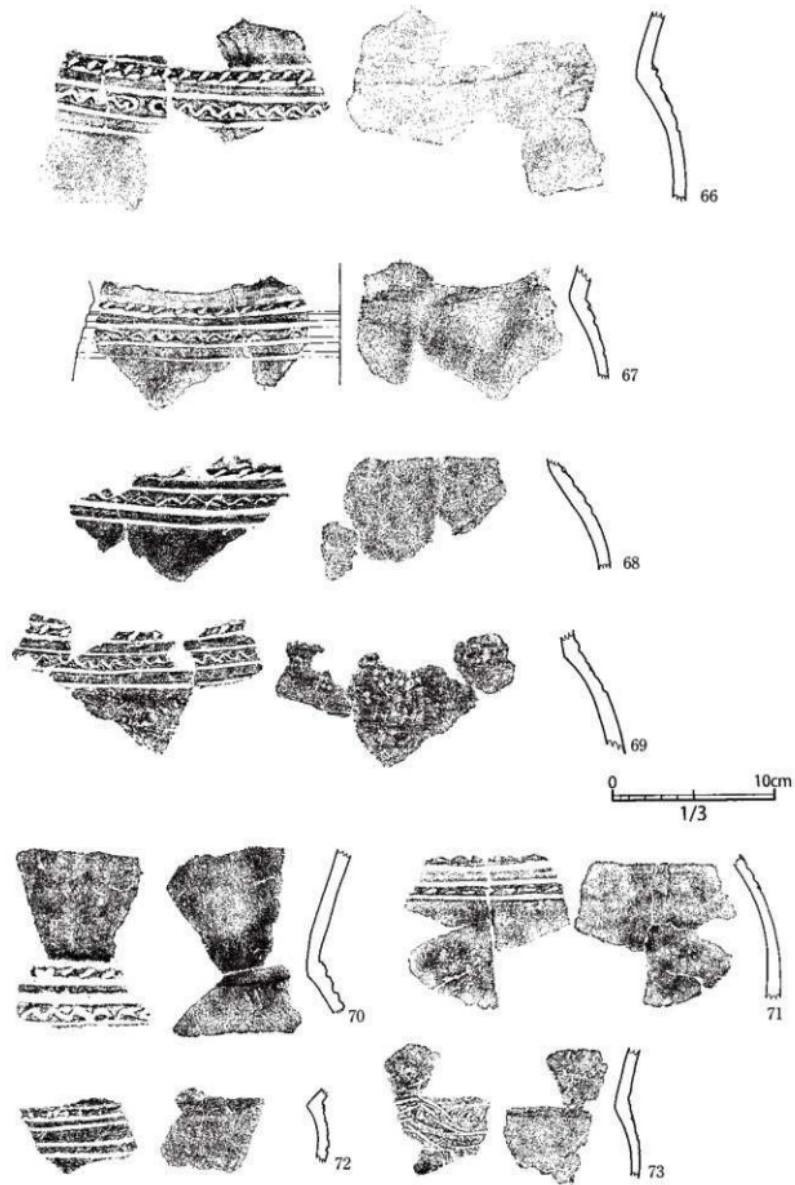
第27図 繩文時代後期遺構内出土遺物実測図



第28図 繩文時代後期土器実測図(1)



第29図 繩文時代後期土器実測図（2）



第30図 繩文時代後期土器実測図（3）

3 遺物

土器のほとんどは赤褐色を呈する。器形的には磨消繩文系の土器ではあるが、ほとんど磨消繩文は見られなかつた。土器については、大きく口縁部、頸部付近～胴部、底部に分け、その詳細を次に述べる。口縁部～胴部のように部位が2つにまたがるものについては、上の部位を優先してグルーピングすることとする。

遺構に伴う遺物（第27図）

34～37はSC20から出土。34は波状口縁で口唇部に2本の沈線をもち、内外面ともにナデを施す。35は平口縁で口唇部に1本の沈線をもち、内外面ともに丁寧なミガキを施す。37は頸部から胴部にかけて文様帯をもつ。3本の横走沈線を主とし、間に波状沈線を施す。頸部は上下2本の沈線の間に刺突列点文を施す。36は口縁部から頸部にかけてミガキが見られる半精製の深鉢で底部を欠いている。頸部は明瞭に屈曲し、内面にも段が見られる。口縁端部は指押さえ痕が多く見られ、やや内湾している。

また、38～40はSX1から出土し、38・40は37とほぼ同一の文様帯の特徴をもつ。39は平口縁で内面の口縁端部付近に1本の沈線を施す。

これらの土器は、いずれも赤褐色の色調で、かなミガキはあるが繩文は全く施されていない。

包含層出土遺物（第28～31図）

41～65は口縁部である。

41～46・48は内面の口唇部付近に凹線を施し、くの字状に屈曲している。45以外は口唇部に文様帯をもち、文様帯部分を肥厚させ断面三角形にしている。41は平口縁、42は波状口縁で口唇部に2本の平行沈線をもち、41は内外面に丁寧なミガキを施し、口唇部の2本の沈線がX字状に反転する。43～44は口唇部に1本の沈線をもち、43は頸部～胴部にかけては丁寧なミガキで無文、44は表面の風化が進んでいるが、頸部から胴部に40と同様の文様を施す。

45は内面の口唇部付近に凹線を施し、くの字に屈曲しているが、口唇部の文様帯をもたない。他

と異なり暗褐色を呈している。48は口唇部に繩文をもつ。46はほぼ完形の深鉢、全体が無文で底部は上げ底である。

47・49～53は内面の口唇部付近に沈線を施す。47は粗製で口縁端部に1本の沈線をもつ。外面に縱方向の条痕文の後、横方向のミガキを施す。49は波状口縁で、色調が黒褐色でガラス質の粒子を多く含み、口唇部に2本の平行沈線と繩文を施し、内面に1本の沈線を施す。繩文を確認できたのは48とこの土器片だけである。50は内面に2本。51・52は波状口縁の波頂部で、波頂部に同調して1本の沈線を施す。53は口唇部に平坦面を有しない。内面には粘土の貼り付け部分があり、波頂部の名残であると考えられる。

54は口縁部文様帯の2本の沈線の上下に羽状文を施す。56は口縁部外面の1本の短沈線文、その上に沈線が見られる。57は口縁端部に刺突文による刻目を施す。

55・58～62は無文の口縁部である。55は無文の波状口縁の波頂部である。58・59・62は頸部の屈曲が弱く、58は内外面の口唇部付近にていねいなナデを1巡施す。59は粗いミガキ、62は風化しているがミガキか。60・61は無文土器の口縁部である。

63は色調が赤褐色で内外面を貝殻条痕文調整後、外反する頸部付近に貝殻腹縁刺突文を施す。いわゆる丸尾式土器である。64は弧状の沈線と刺突のある突起が見られる。65は断面三角形のくの字状に屈曲する口縁部に粘土の貼付突起が見られる。

66～77は頸部付近～胴部である。

66～73は頸部付近～胴部に文様帯をもつ。66～72は頸部が屈曲し、内面に明瞭な稜をもつ。66は胴部の3本の横走沈線を主とし、上2本の沈線間に波状沈線を施す。波状沈線はX字状の反転文をもつ。沈線の上部には横走沈線間に刺突列点文を施す。67～70は66と同一の文様形態であるが、67は施文が浅く、X字状の反転部をもたない。68は波状沈線をへの字の連続で施文し、69はU字の連続で施文する。71は波状沈線の部分が刺突列点に置き換わり、施文の位置や沈線の数も異なる。72は沈線の数は同じであるが波状沈線をもた



第31図 縄文時代後期土器実測図(4)

0 10cm
1/3

ない。73は色調が灰褐色で胎土に3mm大の褐色の粒を含み、刺突列点文・横走沈線の上からヘラ状の工具で、大きく数本のへの字状の沈線を施す。波状沈線を意識したものか。74は脛部外面に縄文を施す。内面は貝殻条痕文である。75は頸部が屈曲するが無文である。76・77は注口土器あるいは浅鉢の肩部と思われる。凹線と凸線の間の突堤の

上に刺突文を上下2段施している。

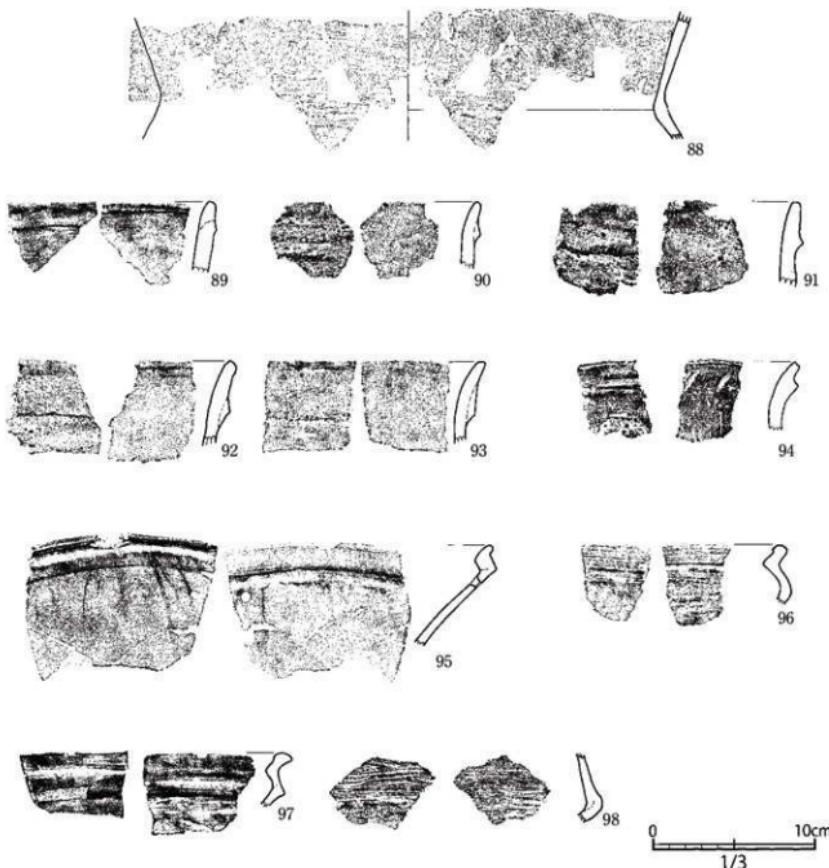
78～87は底部である。78～84は上げ底で、ミガキが底外面にもあるものが多い。接地面積が小さく、底面から外反しながら斜め上方に伸びる。85は浅い上げ底で、底面からなだらかに斜め上方に伸びる。86・87は平底で、86は底面付近の外面に指頭痕が強く残る。

第5節 縄文時代晩期の遺物

遺構はなく、深鉢や浅鉢など遺物のほとんどが谷部埋没土から出土した。

第32図88～94は深鉢である。88は頭部から折れ曲がって直に外傾する。89～94は口縁端部やや下部の外面に断面三角形の無刻目の突帯を貼り

付けるか、または無文の口縁帯を作る。95～97は精製浅鉢である。95は長く伸びる頸部に頭部で屈曲し、短く外反する口縁部がつく。96・97は頭部と口縁部が一体化し短くなっている、口縁部の裏に段を施す。98は粗製鉢で内外面の調整は条痕である。



第32図 縄文時代晩期土器実測図

第8表 縄文時代後期遺構内出土器觀察表

No.	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		埴土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
34	深鉢	口縁部	SC20		ナテ後、口部に文様2本 横方向の矢印と方矢	口部付近に凹線 横方向の矢	暗 (7.5YR7/6)	暗 (0.5YR6/6)	2mm以下の灰・灰白色粒を多く含む	波状口縁 外縁黒皮
35	深鉢	口縁部	SC20 口径 (28.0)		口部は文様1本、口縁部は 横方向の矢印と方矢	口部付近に凹線 横方向の矢	暗 (SYR6/6)	暗 (SYR6/6)	3mm以下の灰・乳白色粒を含む	外面一部黒皮
36	深鉢	口縁部 茎葉付 近	SC20 口径24.3		口部は工具による横方向の 矢印後に丁寧なミガキ、縁部は 丸形模様、縁部は工具削け 字形に丁寧なミガキ	口部は横ナテ後に指押 と縁部から剥離は工 具削け字形	明赤褐 (SYR5/6)	に赤い黄 (2.5YR6/4)	3mm以下の灰・白色粒を多く含む 灰化が著しい 変化物付箇	
37	深鉢	縁部・肩 部	SC20		ミナキ後、横文様3本間に 波状沈線、縁部は沈線間に利 便刻点文	口部は横ナテ後に指押 と縁部から剥離は工 具削け字形	暗 (SYR6/6)	暗 (SYR7/6)	2mm以下の灰・灰・灰白色粒、微細 な光沢粒を少し含む	一部スズ付箇
38	深鉢	縁部	SX1		ミナキ後、横文様3本間に 波状沈線、縁部は沈線間に利 便刻点文	口部は横ナテ後に指押 と縁部から剥離は工 具削け字形	に赤い黄 (7.5YR6/4)	に赤い黄 (1.0YR7/4)	1~2mmの白色粒を含む	一部スズ付箇
39	深鉢	口縁部	SX1		ナテ後にミガキ	ナテ後にミガキ、文様1本 ナテ後にミガキ	暗 (SYR6/6)	暗 (SYR6/6)	1~3mmの灰白・褐色粒を含む	
40	深鉢	縁部・肩 部	SX1		ミナキ後、横文様3本間に 波状沈線、縁部は沈線間に利 便刻点文	縁部から剥離は丁寧 なナテ、縁部下部は風化 のため調整不明	に赤い黄 (7.5YR7/4)	暗 (7.5YR7/6)	4mm以下の灰・赤褐・灰白色粒を含む 縁部から剥離上部に 一部スズ付箇	

第9表 縄文時代後期土器觀察表(1)

No.	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		埴土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
41	深鉢	口縁部	B-7	口径 (28.7)	ナテ後に丁寧なミガキ、口部 の沈線がX字状に風化 ナテ後にミガキ	口部付近に凹線 横ナテ後に斜向の工具削け 字形	に赤い黄 (SYR6/6)	に赤い黄 (2.5YR6/4)	1~3mmの灰白・灰色粒を含む	波状口縁
42	深鉢	口縁部	C-4		口部面に横文様2本、ナテ	口部付近に凹線 横ナテ ナテ後に斜向の工具削け 字形	暗 (2.5YR6/8)	明赤褐 (2.5YR5/6)	5mm以下の灰白・灰白色粒を含む	波状口縁
43	深鉢	口縁部・ 縁部	B-7 C-4		口部は文様1本、横ナテ後 にミガキ	口部付近に凹線、風化 ナテ後がミガキ	に赤い黄 (SYR5/4)	明赤褐 (2.5YR5/6)	1~3mmの灰白・赤褐色粒を含む	スズ付箇
44	深鉢	口縁部・ 縁部	B-7	口径 (17.2)	口部は文様1本、縁部 は波状間に波状削け 字形の沈線に波状沈線	口部付近に凹線、口部 は波状間に波状削け 字形の沈線に波状沈線 ナテ	明赤褐 (SYR5/6)	灰 (5YR5/1)	1~3mmの灰白色粒を多く含む 内面: 口縁一部黒 斑	
45	深鉢	口縁部	C-2		口部はナテ、工具による横 方向のナテ	口部付近に凹線、工具 による横ナテ	青灰 (2.5Y4/1)	暗青灰 (2.5Y5/2)	微細な灰白・黑色粒を含む	
46	深鉢	口縁部・ 茎葉	C-3	口径 (27.6) 底径 (7.1) 基部 (24.85)	丁寧なナテ	口部付近に凹線、丁寧 なナテ	に赤い黄 (1.0YR6/3)	に赤い黄 (7.5YR6/4)	1mm以下の乳白色粒を含む	口縫から剥離にスズ付 箇、縁部から基部に 変化物付箇
47	深鉢	口縁部	C-3		口部は丁寧なナテ、口部は 工具による余量削除、横ミガ キ	口部付近に沈線、横 ミガキ	に赤い黄 (7.5YR5/4)	暗 (SYR6/6)	2mm以下の乳白色粒を含む	一部スズ付箇
48	深鉢	口縁部	C-4		口部は義文、口縁部は楕方 向のミガキ	口部付近に凹線、口縫 横ミガキ	に赤い黄 (7.5YR5/4)	暗 (SYR6/6)	2mm以下の乳白・灰色粒を含む	スズ付箇
49	深鉢	口縁部	C-3		口部は平行弦線と義文、横 方向の内凹、横義文	横ナテ、口部付近に凹線、 横義文	暗 (7.5YR4/4)	暗 (7.5YR4/3)	3mm以下の義文・横縫、に赤い黄・ 黑色粒混在を含む	波状口縁、スズ付箇、 変化物付箇
50	深鉢	口縁部	C10Y		口部はナテ、口縁部は丁寧 なナテ後にミガキ	口部は横ナテ、沈縫2本、 ナテ後にミガキ	明赤褐 (SYR4/6)	赤褐 (SYR4/6)	1~2mmの灰白色粒を含む	
51	深鉢	口縁部	C-1		ナテ後にミガキ	口部付近に沈縫1本、 横ミガキ	暗 (SYR5/6)	暗 (SYR6/6)	2mm以下の灰白・乳白・赤褐色粒を 含む	波状口縁、スズ付箇
52	深鉢	口縁部	C-1		口部はナテ、口部付近は 横義文、口縫横ミガキ	口部付近に沈縫1本、 横義文	明赤褐 (SYR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	2mm以下の灰白・乳白色粒を含む	波状口縁
53	深鉢	口縁部	C-1	口径 (29.7)	口部はナテ、工具による横 ナテ後にミガキ	口部付近に沈縫1本、 横義文部に粘土の粘付、 ナテ後にミガキ	に赤い黄 (7.5YR6/4)	に赤い黄 (7.5YR6/4)	3mm以下の灰・灰白色粒を多く含む	スズ付箇
54	深鉢	口縁部	C-1		口部は削け口、口縫文様等 の2本の沈縫の上下に羽状文 ナテ	丁寧なナテ、工具痕 ナテ	明赤褐 (SYR5/6)	暗 (SYR6/6)	3mm以下の灰白・灰褐色粒を含む	スズ付箇、変化物付 箇
55	深鉢	口縁部	B-7		ナテ後にミガキ	ナテ後にミガキ	明赤褐 (SYR5/6)	暗 (SYR6/6)	2mm以下の灰白色粒を含む	波状口縁
56	深鉢	口縁部	C10Y		既設縫文の上に沈縫1本、横 ナテ	ナテ後にミガキ	暗 (SYR6/6)	暗 (SYR6/6)	2mm以下の灰・褐色粒を少し含む	

第10表 繩文時代後期土器観察表(2)

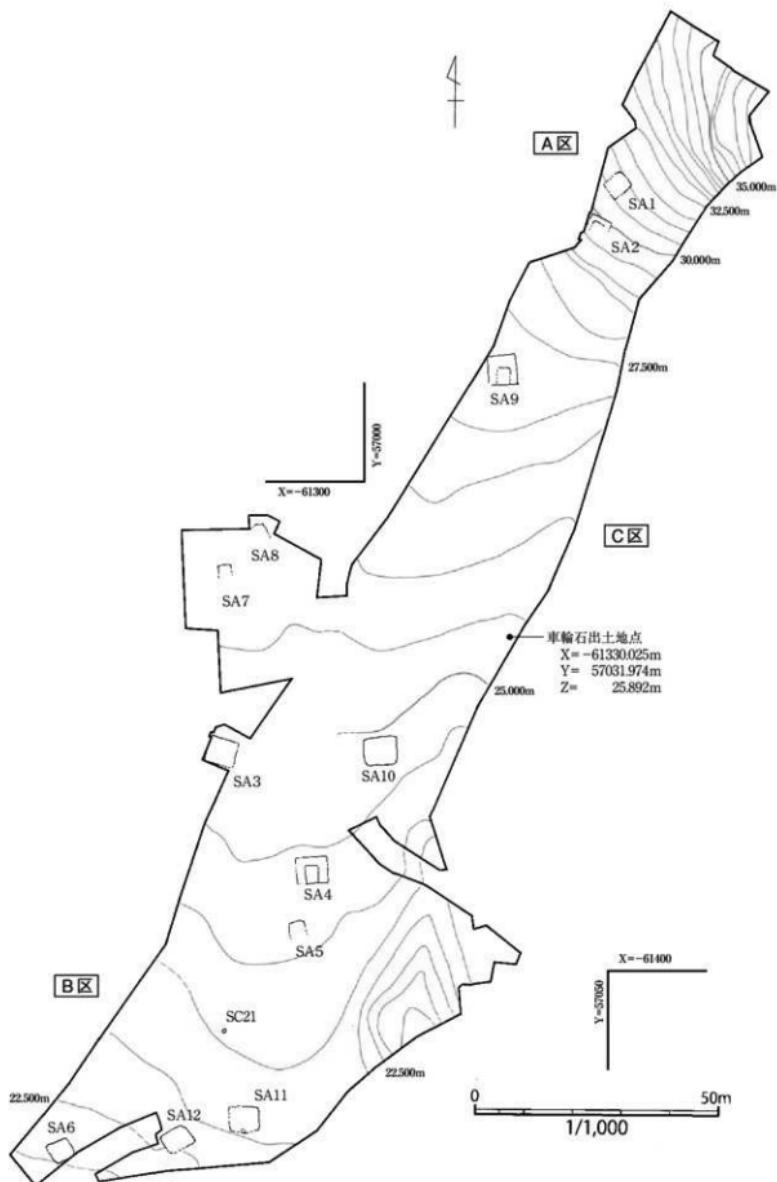
No.	基種	部位	出土地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
57	深鉢	口縁部	B-2		口唇部に削刃式による切目。 横目子	ナデ	に小い槽 (7.5YR6/4)	に小い槽 (7.5YR6/4)	2mm以下の白・白色光沢を少し含む	
58	深鉢	口縁部・ 腹部	A-3 C-4	口径(24.7) 直径(19.9)	口唇部付近に丁寧なナデを1 基。口縁部は横目子。腹部は 1.5キリ。工具痕、削痕は竪方 向の粗いナデ	口唇部付近に丁寧なナデを1 基。口縁部は横目子。腹部は 1.5キリ。工具痕、削痕は竪方 向の粗いナデ	粗 (2.5YR7/6)	浅黄 (7.5YR6/6)	4mm以下の赤褐色・透明光沢と、2mm 以下の乳白色粒。微細な光沢粒を 含む	スス付裏
59	深鉢	口縁部~ 腹部	C-1 C-2		横1.5キリ	口縁部はミガキ。腹部は 横1.5キリ	粗 (SYR6-5)	粗 (SYR6-6)	3mm以下の乳白・茶色粒を含む	スス付裏
60	深鉢	口縁部	SA1		ナデ	横ナデ	明赤褐 (10YR7/6)	に小い黄褐 (10YR7/4)	3mm以下の褐色・に小い黄色粒を含む	外面: 黄褐
61	深鉢	口縁部	SA10		口唇部はナデ。口縁部は実化 気味だがナデ後にミガキ。指 痕後	ナデ後にミガキ	暗赤褐 (SYR5-6)	暗赤褐 (SYR6-6)	3mm以下のに小い褐・灰白色粒を含む	
62	深鉢	口縁部	C-3		全体的に化粧質地だがミガキ が、指痕に沿って走る	横ナデ	暗赤褐 (SYR5-6)	明赤褐 (SYR5-6)	1~2mmの灰白色粒を多く含む	外面:一部実化、内面: 口縁部に茶斑
63	深鉢	口縁部	C-3		口唇部はナデ。横方向の貞裂 条目文の後、腹部に舟型飾線 剥離	横ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	暗赤褐 (2.5YR5/6)	1~3mmの赤褐・黑白・茶色粒を含む	
64	深鉢	口縁部	SA10		弧形の北端、利刃からの巻起。 口唇部はナデ。口縁部はミガキ とガキ	に小い槽 (SYR6-4)	に小い槽 (2.5YR6-6)	2mm以下の赤褐色を少し含む		
65	深鉢	口縁部	SA10		軸の貼付突起。口唇部はナ デ。口縁部はミガキ	横1.5キリ	に小い槽 (7.5YR6/4)	に小い槽 (SYR6-4)	2mm以下の褐色粒を少し含む	
66	深鉢	腹部・ 肩部	C-2		ミガキの後、横1.5キリ3本。 間に1波状突起。X字型の凹凸。 横1.5キリ後に利刃剥離文	肩部はミガキ。腹部は黒。 化粧質地で一部ミガキ。 指痕	に小い槽 (7.5YR6/4)	暗赤褐 (7.5YR6/6)	2mm以下の白・褐色粒を多く含む	70と同一個体か
67	深鉢	腹部・ 肩部	C-2 C-3	66と基本的には同じだが、X 字型の剥離文を持たない	横1.5キリ3本。 間に1波状突起。X字型の凹凸。 横1.5キリ後に利刃剥離文	横方向のナデ	に小い槽 (2.5YR6/4)	に小い槽 (SYR6-4)	1~3mmの灰白・赤褐色を含む	
68	深鉢	腹部・ 肩部	C-2	66と基本的には同じだが、ハ ーフ状の波状剥離文	横方向のナデ	に小い槽 (7.5YR6/4)	に小い槽 (SYR6-4)	2mm以下の乳白色粒を多く含む		
69	深鉢	腹部・ 肩部	C-2	66と基本的には同じだが、H 字型の波状剥離文	横方向のナデ。一部剥離	に小い槽 (7.5YR6/4)	に小い槽 (7.5YR6/4)	3mm以下の乳白色粒を多く含む		
70	深鉢	肩部	B-7	66と基本的には同じ	ミガキ	粗 (SYR6-6)	明赤褐 (SYR5-6)	1~2mmの灰白色粒を含む	66と同一個体か	
71	深鉢	肩部	B-7	66と基本的には同じだが、波 状剥離をもたない	ミガキ	に小い槽 (7.5YR6/4)	明赤褐 (SYR5-6)	1mm以下の乳白色粒を含む	スス付裏	
72	深鉢	肩部	C	66と基本的には同じだが、波 状剥離をもたない	ナデ	に小い槽 (SYR5-4)	暗赤褐 (SYR6-6)	2mm以下の乳白色粒を含む	スス付裏	
73	深鉢	肩部	C-3	剥離剥離文。横1.5キリの上か ら2.5キリの工具で、大きさ数本 のへの状況の剥離	横ナデ	仄褐 (SYR5-2)	灰褐 (2.5YR6-2)	3mm以下の茶色粒を含む	化粧物付裏	
74	深鉢	肩部	SA10	剥離文	剥離剥離文	粗 (2.5YR6/6)	粗 (SYR6-6)	2mm以下の灰白・赤褐色。1mmの 黑色光沢粒を含む		
75	深鉢	腹部・ 肩部	C-4	化粧質地が工具による横ナ デとミガキ	化粧質地が工具による横ナ デとミガキ。工芸ナデ	粗 (SYR6-6)	暗赤褐 (7.5YR6/6)	2mm以下の白・茶色粒を多く含む		
76	江戸土 器から 得	腹部・ 肩部	C-4	肩部は横ナデ。剥離1.5キリに 横1.5キリ。実害の上に利刃文を 上7.5キリ	横ナデ	に小い槽 (10YR7/4)	浅黄 (2.5YR7/3)	2mm以下の黒色光沢粒を多く含む。 2mm以下の灰褐色・茶褐色粒を含む		
77	江戸土 器から 得	腹部・ 肩部	SA10	肩部は横ナデ。剥離1.5キリに 横1.5キリ。実害の上に利刃文を 上7.5キリ	横ナデ	に小い槽 (10YR7/4)	浅黄 (2.5YR7/4)	2mm以下の黒色光沢粒を少し。2mm 以下の灰褐色・茶褐色粒を多く含む		
78	深鉢	底部	C-1	直径4.3	化粧質地が一部ミガキ	化粧質地が一部工具ナ デ、ミガキ	に小い槽 (SYR6-4)	に小い槽 (SYR6-4)	3mm以下の白・褐色粒を多く含む	スス付裏
79	深鉢	底部	C-3	直径5.9	ナデ	粗いナデ。指跡痕	に小い槽 (10YR6/4)	に小い黄褐 (10YR5-3)	1mm以下の浅黃褐色・灰・褐色粒を 含む	
80	深鉢	底部	C-4	直径5.0	ナデ	ナデ	粗 (SYR6-6)	粗 (2.5YR6/6)	3mm以下の灰・褐・乳白色粒を含む	
81	深鉢	底部	C18R	直径(8.0)	ナデ、指痕さえ	化粧が著しいナデ	に小い槽 (7.5YR7/6)	に小い槽 (7.5YR7/4)	1~3mmの灰白・褐色光沢粒を含む	

第11表 縄文時代後期土器観察表(3)

No.	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
82	深鉢	底部	C-4		ナデ、風化気味だが工具痕あり	斜方向のナデ	灰赤褐色 (5YR5/6)	にじい黄褐色 (10YR6/4)	2mm以下の黒・褐色粒を多く含む	
83	深鉢	底部	B-5	底径5.9	ナデ	ナデ、工具痕	にじい褐 (7.5YR5/4)	褐 (5YR6/6)	3mm以下の乳白色粒、2mm以下の褐 色粒を含む	
84	深鉢	底部	B-7	底径(7.0)	工具による底ナデ?, その後に 種ナデ?	ナデ	にじい褐 (7.5YR6/4)	褐灰 (10YR5/1)	3mm以下の褐色粒を含む	
85	深鉢	底部	B-7	底径(6.9)	ナデ	風化気味だがナデ	褐 (7.5YR4/6)	褐 (7.5YR3/4)	2mm以下の黒色光沢・灰白・灰褐色 粒を含む	
86	深鉢	底部	C-2	底径(3.6)	工具による斜方向のナデ、薄 い指押され	調整不明	褐 (2.5YR6/8)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	6mm以下の褐・赤灰・黑色光沢・半 透明光沢粒を含む	
87	深鉢	底部	C-1	底径(4.35)	工具ナデ	ナデ	にじい褐 (7.5YR6/4)	褐 (7.5YR6/6)	5mm以下の乳白色粒、2mm以下の灰 褐色粒を含み、2mm以下の黒色光 澤粒を多く含む	

第12表 縄文時代晩期土器観察表

No.	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
88	深鉢	口縁部~ 器底	SAI		工具による種ナデの後、一部 風化気味な種ナデ	斜方向のナデ後、底 一部ミガキ	にじい褐 (10YR5/2)	にじい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下の白色・褐色粒を多く含む 一部スス付着	
89	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付安器	斜方向のナデ、浅めの擦 押え痕	褐灰 (ND/4)	褐灰 (ND/4)	1mm以下の淡赤褐色・赤灰・黑色光沢 粒を含む	
90	深鉢	口縁部	B		ナデ、無文の貼付安器	種ナデ	にじい褐 (7.5YR6/4)	にじい褐 (7.5YR6/4)	3mm以下の褐・黑色光沢粒、2mm以 下の乳白色粒を含む	
91	深鉢	口縁部	C-2		ナデ、無文の貼付安器、安器 下に施し残ナデ	種・斜方向のナデ	褐 (5YR6/6)	褐 (5YR6/6)	8mm以下の褐・赤褐色・にじい褐・ 褐赤褐色・黑色光沢粒を含む	
92	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付安器	種ナデ	にじい褐 (10YR7/4)	にじい褐 (10YR7/4)	3mm以下の灰・白色粒を多く含む	
93	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付安器、指押 え痕	種・斜方向のナデ	褐灰 (2.5YR4/1)	褐灰 (2.5YR6/1)	2mm以下の黄灰色粒を含む	
94	深鉢	口縁部	C-1		ナデ、無文の貼付安器	種ナデ、口唇部に工具痕	にじい褐 (7.5YR5/4)	にじい褐 (7.5YR5/4)	1-3mmの褐灰・乳白色粒を含む	
95	浅鉢	口縁部	B2fr		ミガキ、修理孔あり	ミガキ	灰黃褐色 (10YR5/2)	灰黃褐色 (10YR5/2)	2mm以下の乳白色粒、微細な黑色光 澤粒を含む	スス付着
96	浅鉢	口縁部	C-1		ミガキ	ミガキ	にじい黄褐色 (10YR7/4)	褐灰 (2.5YR6/1)	2mm程度の黑色粒を多く含む	スス付着
97	浅鉢	口縁部	C-3		ミガキ	ミガキ	明黃褐色 (10YR6/6)	にじい黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の黑色粒を含む	
98	鉢	器底	C-3		無底文	無底文	にじい黄褐色 (10YR6/4)	にじい黄褐色 (10YR6/3)	3mm以下の乳白・赤褐・黑色光沢粒 を含む	スス付着



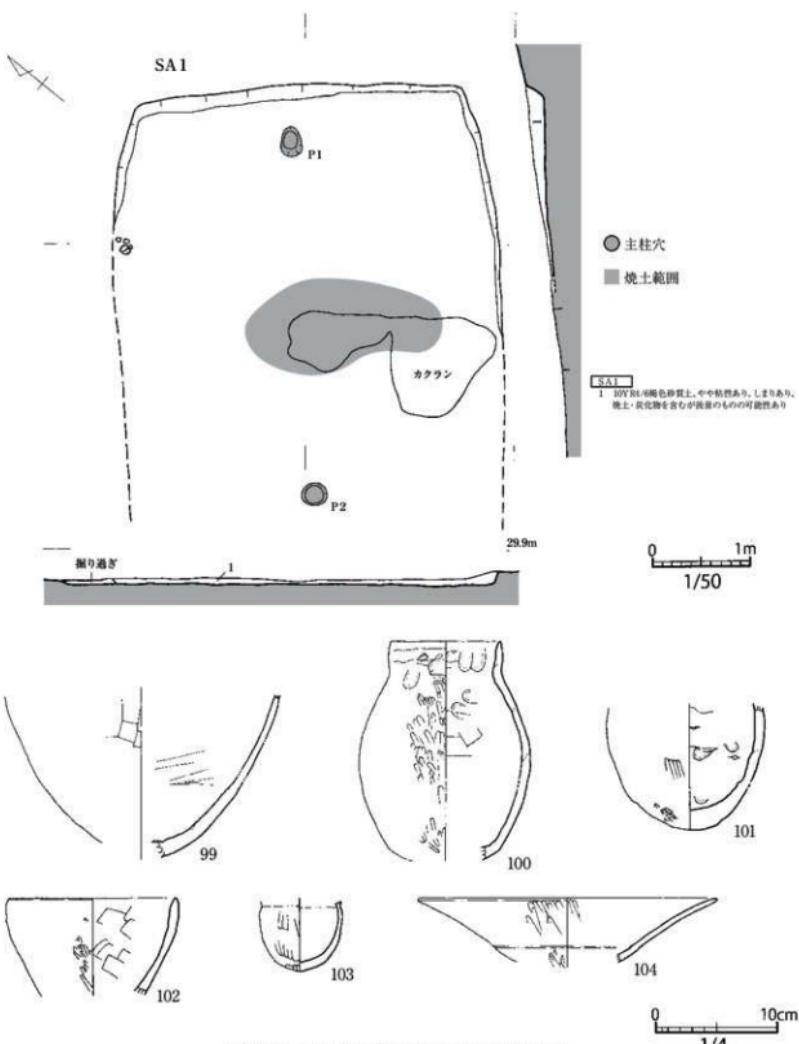
第33図 古墳時代遺構配置図

第6節 古墳時代の遺構と遺物

表土除去後、第Ⅱ層～Ⅳ層で堅穴住居跡12軒、土坑2基を検出している。遺構内や包含層から出土している遺物の大半は土師器である。その中に

は在地系に混ざり、外来系のものも出土している。また、谷部の埋没土谷2層（第Ⅰb層）最下部から古墳時代前期の車輪石が出土している。

以下に、遺構とそれに伴う遺物の詳細を述べる。



第34図 1号堅穴住居跡および出土遺物実測図

1 壁穴住居跡（SA 第13表）

壁穴住居跡は古墳時代前期の住居がSA1～4・6～10の9軒、後期がSA5・11・12の3軒である。切り合いは無く、比較的間隔を空けて立地している（第33図）。どの住居も明確な貼床を持つたず、ベッド状の段を持つものが多い。柱穴が後世の柱穴と混在し、壁穴住居に伴う柱穴であると認定できないものもある。

SA1（第34図）

A-2区斜面地の北東部、第IV層で検出されたが、斜面を下るに従い削平の影響で残存率が低く、南端は確認できなかった。平面形は推定4.5m×4mの長方形である。土層断面では貼床は確認できなかった。埋土中の遺物は土師器の小片が多く、床面からも土師器の破片が見られるが、破片は大きくなかった。主柱穴は2本であった可能性が高い。

・ SA1出土遺物

99は丸底の壺の胴部片である。100はほぼ完形の直口壺で、内面の口縁部は指押さえ痕が明瞭に残る。外面は口縁部に粘土のつなぎ目が残るもの。丁寧な縱方向のミガキが施されている。101は壺の底部で器厚が厚い。102は鉢で口縁部はやや内湾しながら直立する。103は小型丸底壺で頭部がやや縮まり、口径が胴部最大径より大きくなると考えられる。104は高坏で口縁部は長く外反しながら大きく開き、受部との境には内面には明瞭な段を、外面上には沈線を施す。

SA2（第35図）

A-2区斜面地の中腹、北東部、第IV層で検出。西側は大きな擾乱（ミカン穴）によって壊されて残存しておらず、北東隅の一角しか確認できていない。SA1同様に明確な貼床は無い。遺物は土師器の小片を埋土中に確認でき、床面で敲石105が出土している。埋土掘削後、中央部に焼土面を確認したが掘り込みではなく、地床炉と考えられる。壁際が一段高く、中央が少し低くなっているベッド状造構をもつ住居である可能性がある。柱穴は1本しか確認できていない。

・ SA2出土遺物

105は敲石で、石材は砂岩である。磨石から転用したものか。

SA3（第36図）

B-1区、第III層下層～IV層で検出。北東部及び南東部が擾乱で欠損している。平面形は約6.0m×5.5mの方形である。この住居も明瞭な貼床をもたない。西部と南東部の壁際が一段低く、北部から東部の壁際が一段高い構造をしている。主柱穴は4本確認している。北東の壁際で大型壺113の胴部が出土している。

・ SA3出土遺物

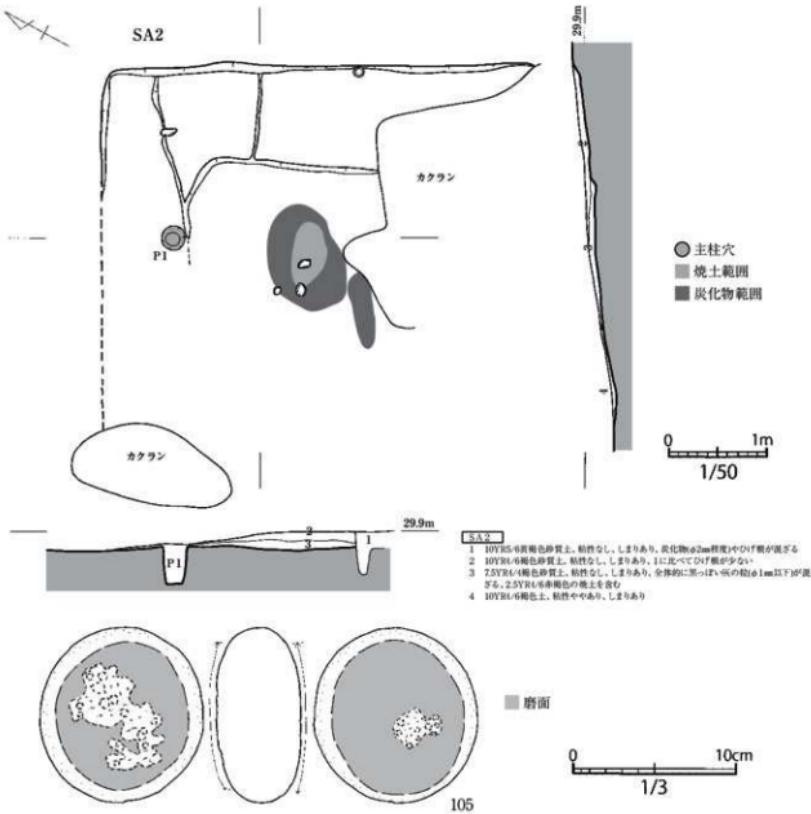
106～108・111・113は壺で、113は球胴壺の胴部である。109・110は小型丸底壺で頭部が縮まり、口縁部はやや内湾しながら外傾している。109は胴部最大径が口径よりやや大きい。外面を丁寧なミガキで調整している。114・115は壺の底部で、平底で側面がやや外傾しながら立ち上がる。112は鉢で底部はやや平坦面を残し、口縁部を指で摘まみ出し尖らしている。116は高坏の壺部で、受部の内面に平坦面をもつ。

SA4（第37図）

B-3区北東部、第III層で検出。平面形は東西6.5m×南北5.5mの長方形である。床面は第VI層で貼床はない。中央部から南方の1区画が一段低くなり、周囲はベッド状になっている。埋土1層除去後、中央～南側は2層が堆積し、2層上面の中央部分で焼土と炭化物が集中している部分（炉1）を検出し、その面を床面1とした。さらに中央部の2層を掘り下げると、中央部に2つ目の炉（炉2）を検出し、その床面を床面2とした。中央部は二段階に床が存在したと考えている。炉1の埋土中より採取した炭化種実がソプラジイの子葉であると同定された。また、1層を掘り下げて床面1にそろえた段階で柱穴を多数検出し、主柱穴はP2・3・4・7の4本と考えている。柱が4本より多い住居の可能性もあるが、中央部の床が2面あることを考慮すると建替えによるものである可能性が高い。中央部は南に緩やかに低くなってしまおり南端には窪みがある。その窪みの中に多数の石器や礫とともに1個体の土師器の壺117が潰れた状態で出土している。

・ SA4出土遺物

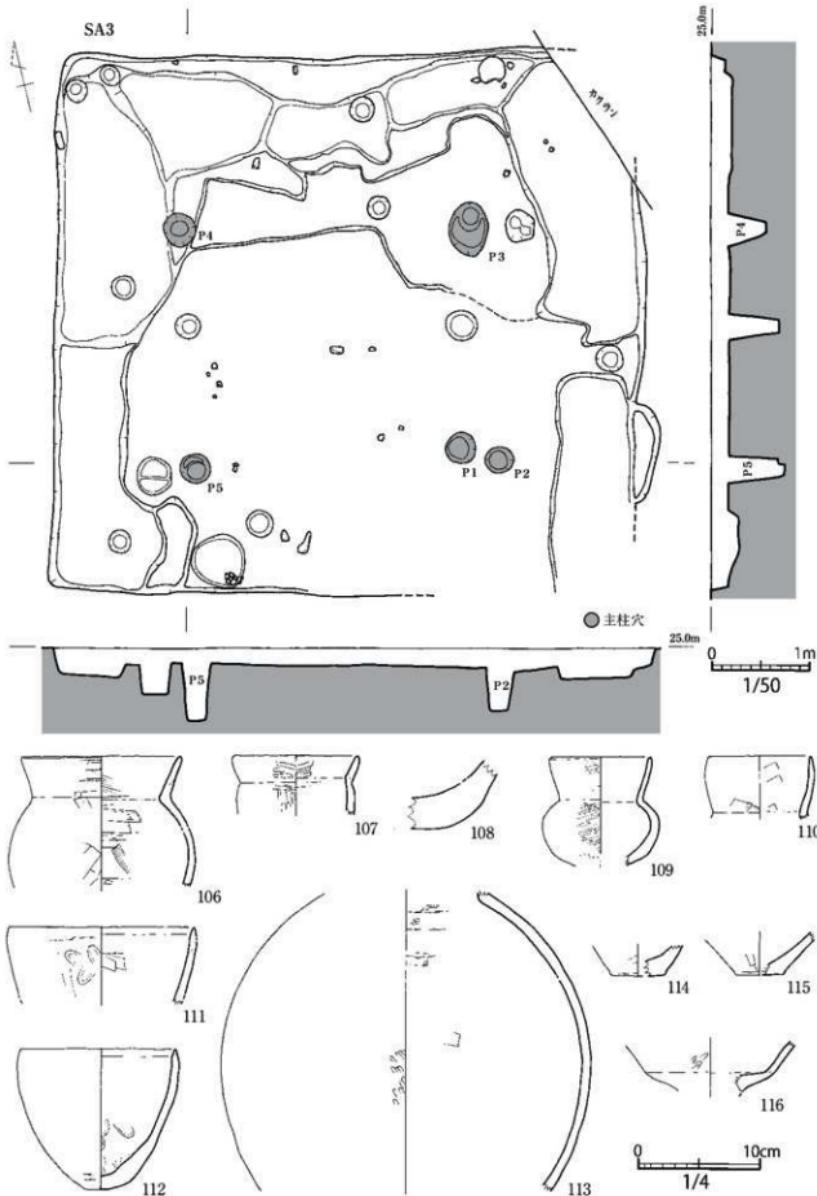
117はほぼ完形の壺で、底部は上げ底である。頭部は緩やかに屈曲し、長い口縁が外反する。118・120は敲石、119は石皿である。



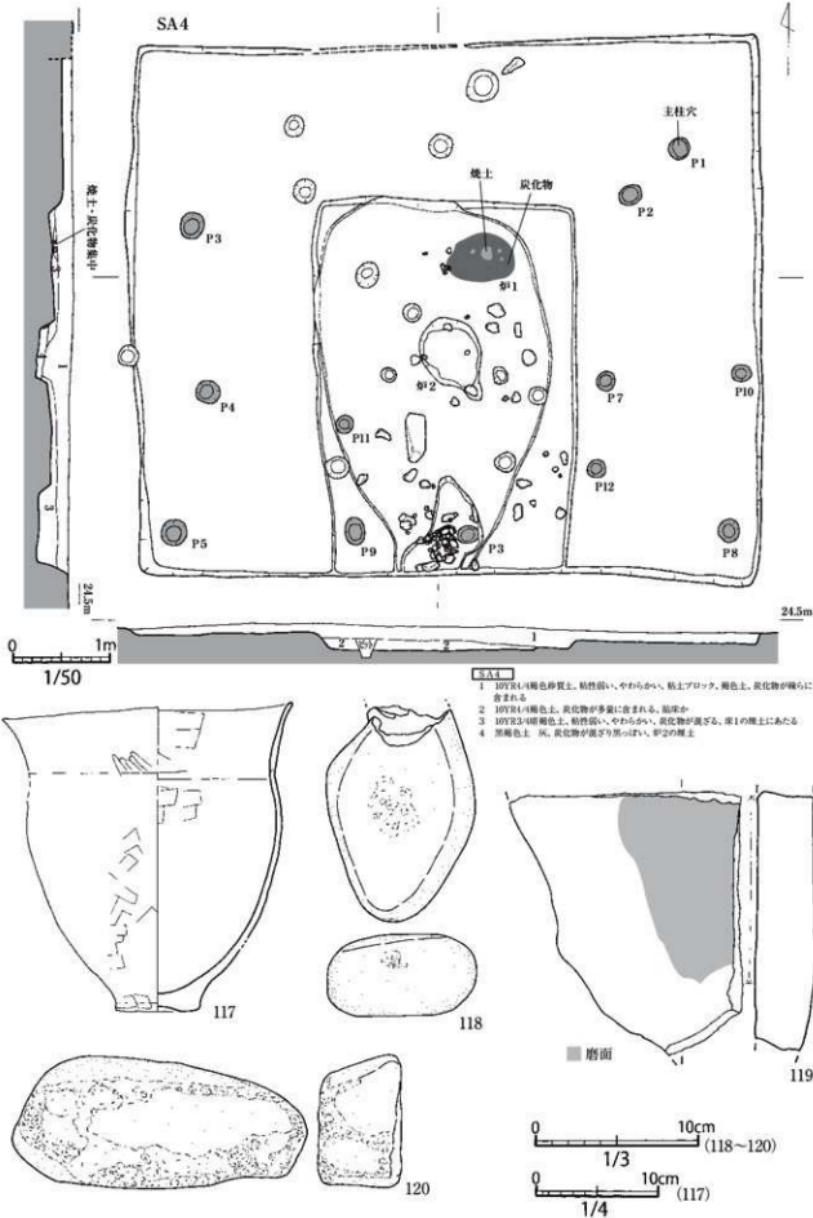
第35図 2号竪穴住居跡および出土遺物実測図

第13表 古墳時代竪穴住居跡観察表

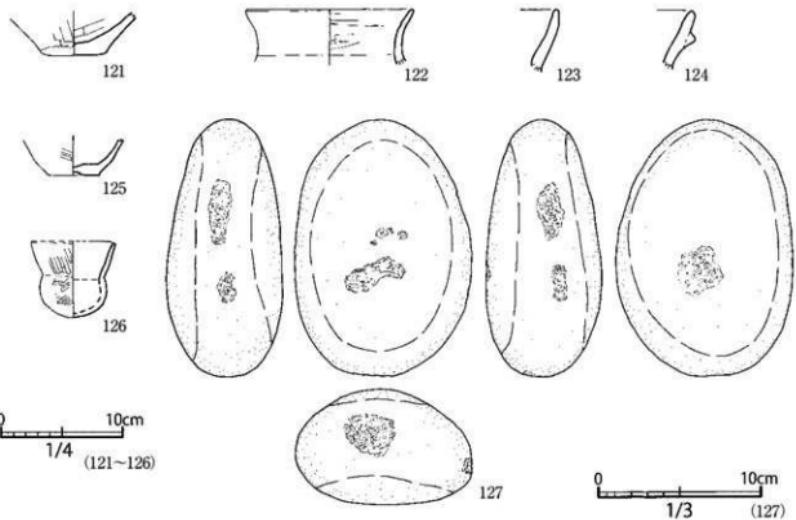
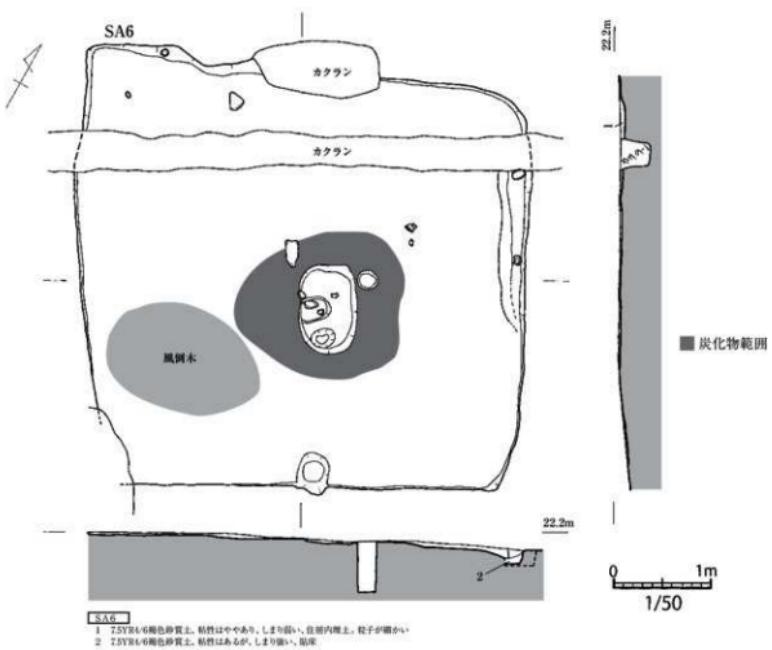
No.	位置(区)	層位(層)	主軸方位	形状	規模		構造(本柱)	備考
					横(m)	縦(m)		
SA1	A-2	IV	N-53°-W	(長方形)	4.0	(4.5)	2	
SA2	A-2	IV	N-28°-E	(方形)	4.5	(4.5)	—	ベッド状遺構 地床炉
SA3	B-1	III	N-14°-E	長方形	6.0	5.5	4	
SA4	B-3	III	N- 1°-E	方形	6.5	5.5	4	ベッド状遺構 炉
SA5	B-3	III	N-17°-W	(方形)	3.5	(3.5)	—	須恵器
SA6	B-4	IV	N-30°-W	方形	4.5	4.3	—	壁帯溝 炉
SA7	B-P	IV	N- 6°-W	(方形)	3.0	(3.0)	—	壁帯溝
SA8	B-P	IV	N-28°-W	(方形)	(3.75)	(3.75)	—	地床炉
SA9	C-1	III	N- 3°-W	長方形	6.0	6.2	4	ベッド状遺構
SA10	C-4	III	N- 2°-W	長方形	6.8	5.7	—	炭化材
SA11	B-8	IV	N-28°-W	長方形	6.0	5.5	4	須恵器
SA12	B-8	IV	N- 1°-E	長方形	5.7	4.2	4	罐



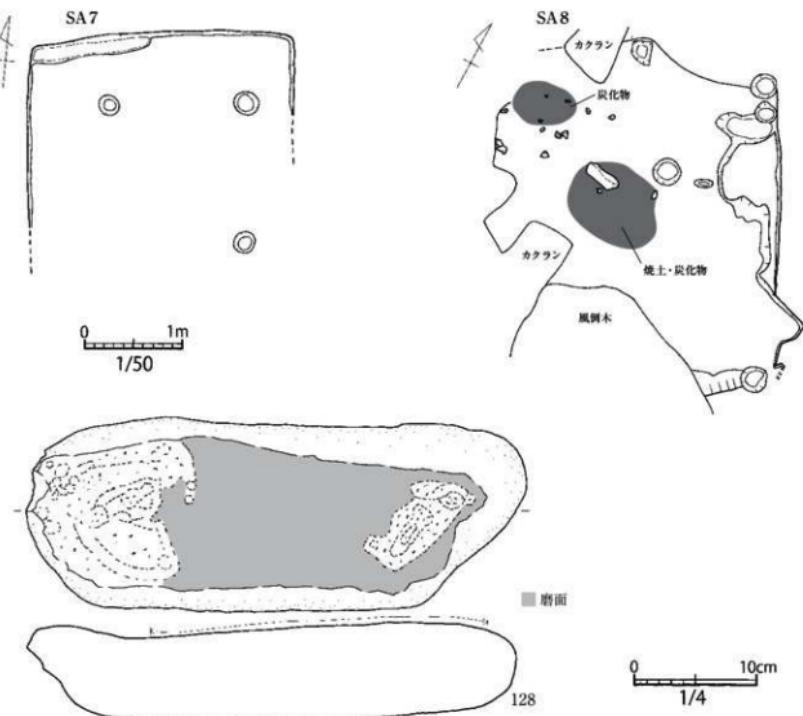
第36図 3号竪穴住居跡および出土遺物実測図



第37図 4号竪穴住居跡および出土遺物実測図



第38図 6号竪穴住跡および出土遺物実測図



第39図 7号・8号竪穴住居跡および出土遺物実測図

S A 6 (第38図)

B-4区南端、第IV層で検出。風倒木で南北角を欠損しており、北側は東西にトレンチャー痕が横断する形で搅乱を受けている。東側の壁際に壁帶溝と考えられる窪みが見られる。中央部に掘り込みを持つ炉跡を検出している。住居に伴う柱穴は確認できていない。

・ S A 6出土遺物

121は壺の底部で平底、125は鉢の底部である。122～124は壺の口縁で124は断面三角形の突帯が貼り付く。126は小型丸底壺で頭部がやや縮まり、口径が胴部最大径より大きい。127は敲石で石材は砂岩である。

S A 7 (第39図)

B-P区、第VI層検出。北端の一辺は2.5mで、他の住居と比較して規模が小さい。表土除去後、すぐに露出した第IV層上面で検出した。削平が著しく、北辺と北側両隅が残っている。埋土は他の竪穴住居跡と同様に暗褐色の砂質土である。北東側に壁帶溝と思われる窪みが一部見られる。検出段階から柱穴も検出できていたが、住居に伴うものかどうかは確認できていない。遺物は土師器の小片が数点出土したのみである。

S A 8 (第39図)

B-P区北端、第IV層で検出。風倒木や重機での削平による搅乱が著しく部分的に残存している。

中央部に地床炉と思われる焼土と炭化物の集中区が見られる。ピットも検出しているが、SA8に伴う柱穴の特定はできていない。

・ SA8出土遺物

台石128が1点出土している。石材は砂岩で両端に敲打痕が見られ、中央部付近は擦痕が見られる。

SA9(第40図)

C-1区、第III層検出。平面形は東西6.2m×南北6.0mの長方形で大きめの堅穴住居跡である。北西部の隅がA区にかかっているが、17年度調査時には検出できなかったため欠損している。

埋土は他の住居跡と同様に暗褐色の砂質土で、分層ができず、貼床は確認できていない。

中央部は埋土の残りが悪いものの、北西部が一段高くなる段差が確認できることから、この住居跡も中央が低く三方にベッド状造構を持つタイプのものと推測される。中央部には掘り込みを持つ炉が確認されている。西側にも焼土面とその周りが黒く変色している部分が見られるが、この住居跡に伴うものは不明である。主柱穴は4本確認している。

また、北西隅の床直上に土師器の壺、高杯、鉢や台石等がまとまって出土しており、出土状況から埋没時の位置を留めていると考える(第40図右下)。住居内の南東部に縄と繩文時代後期の土器と土師器が混在している土坑を検出している(同左下)。土坑の埋土にアカホヤ火山灰が混ざること、かつ繩文時代後期以前及び古墳時代前期以降の遺物が入らないことから、繩文時代後期から古墳時代前期の間に掘られた土坑であると考えている。

・ SA9出土遺物(第41・42図)

133・138～140・142・143・145・149は住居内土坑から出土したものである。

129～137は壺である。129は丸底で緩やかに立ち上がる。頭部がくの字に屈曲し、口縁部は内湾しながら外傾する。130は129と同一形式で、丁寧なナデにより頭部の内面に段を施す。内外面にケズリを施す。131は丸底で緩やかに立ち上がり、口縁部は頭部から外反しながら立ち上がる。132は平底に近い丸底で、胴部最大径が上位にあるた

め肩部が張り、口縁部は頭部から外反しながら立ち上がる。133は口縁が外反しながらやや外傾し、口径が胴部最大径より大きい。135は口縁部に面取りが見られる。136は平底気味の丸底、137は器厚が厚い丸底である。

138～140・143・144は壺である。138は複合口縁壺の2次口縁部が直に立ち上がり、櫛描波状文を施す。140は壺の頭部に貼付刻目突帯を施す。141・142は鉢である。141は口縁部は短く、やや外反し、口径が器高より大きい。142は口縁が長く、やや外反し、口径と器高がほぼ等量である。

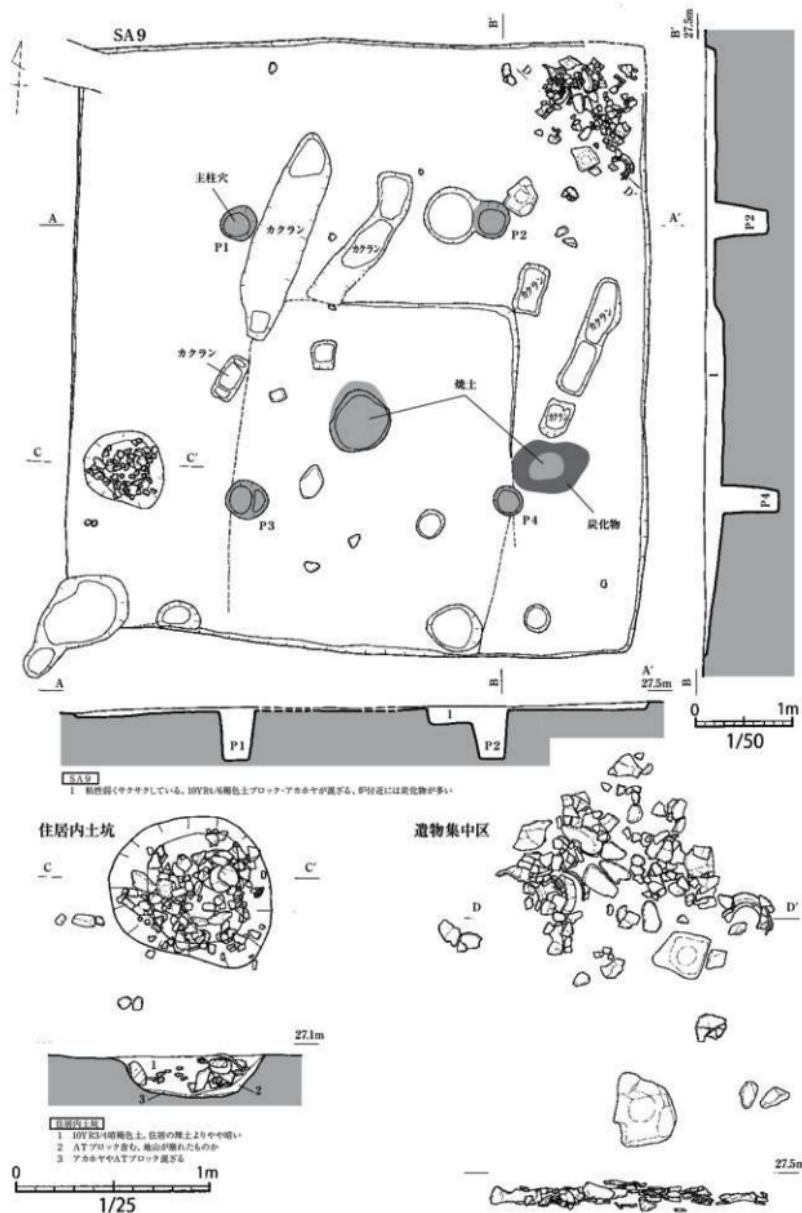
145は手捏ね土器で口縁端部を摘まみ上げ尖らしている。

146～149は高杯である。146はいわゆる有段高杯で杯部は口縁部が真っ直ぐ外傾し、内外面に縱方向のミガキを施す。有段部は外に大きく張り出し、脚部は中ほどで強く屈曲し内湾する。杯部と脚部の接合部には半球形の粘土塊が充填される。147は受部と口縁部境に段をもたず、口縁部はなだらかに外反し開く。内面に暗文を施す。148は受部内面が平坦で、口縁部との境に明瞭な段をもち、内外面ミガキを施す。149は脚部で横方向のミガキを施す。

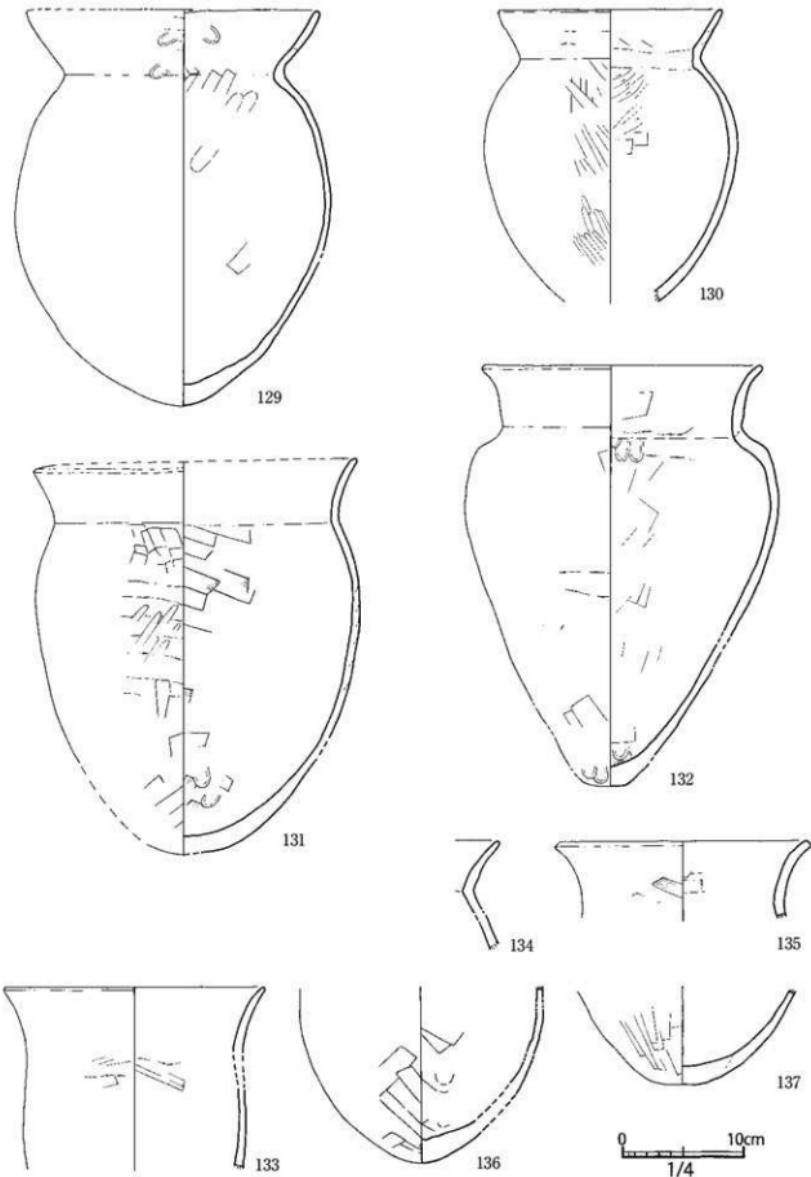
150は敲石、151・153は台石で、153は縁辺部に縦長の敲打痕が多数見られる。152は打欠石錘である。

SA10(第43図)

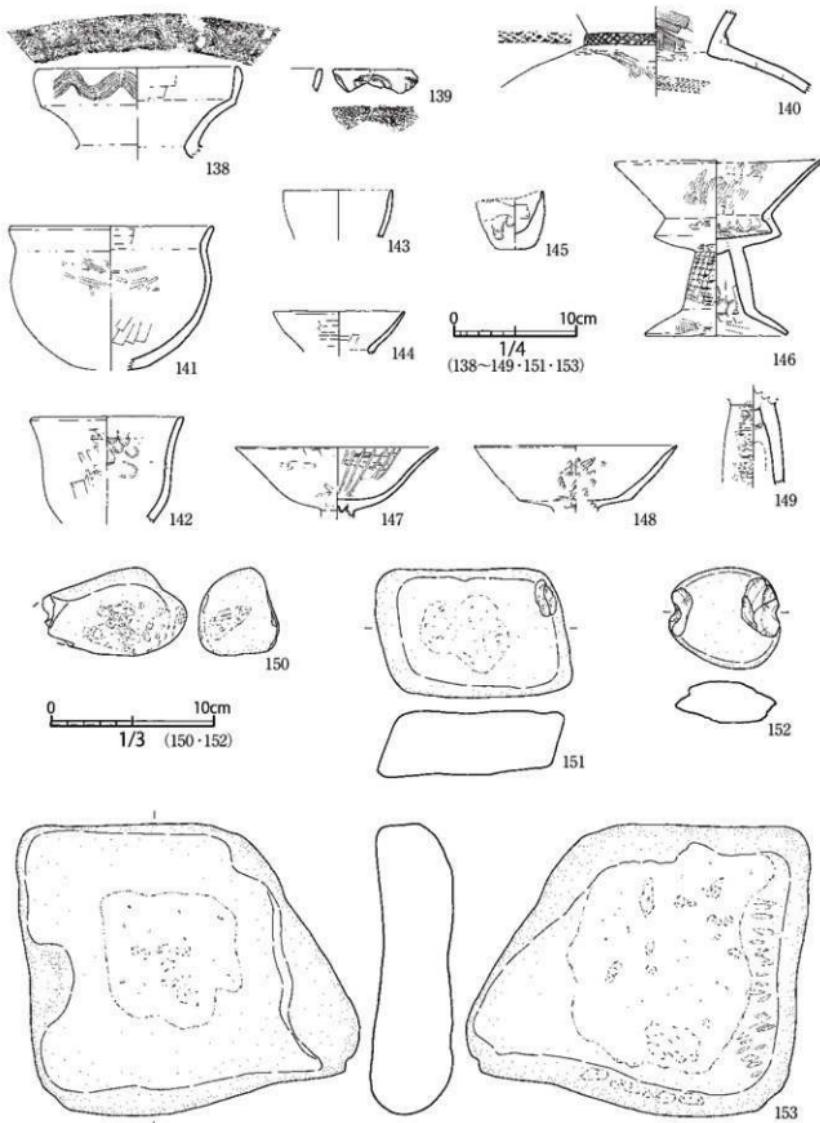
C-4区西側、第III層で検出。南西部は風倒木の影響を受けている。中央部付近に炭化物や焼土を伴う浅い掘りこみを2基確認し、炉跡であると考えられる。炉1の底面から敲石193が出土した。フローテーション法により炉2の埋土から採取した炭化種実を同定するとイネが認められた。南東部から中央部にかけて3～4cm大の炭化材を検出し、周辺には炭化物や焼土が広がっている。この炭化材を樹種同定した結果、ミズキ属の可能性が高い。住居内の土坑を4基検出しており、北東部の土坑からほぼ完形の壺170が出土している。柱穴は10基検出しているが、住居跡に伴うものであるかは確認できない。遺物は北西部を中心として出土しており、そこからは複合口縁壺64も出土している。



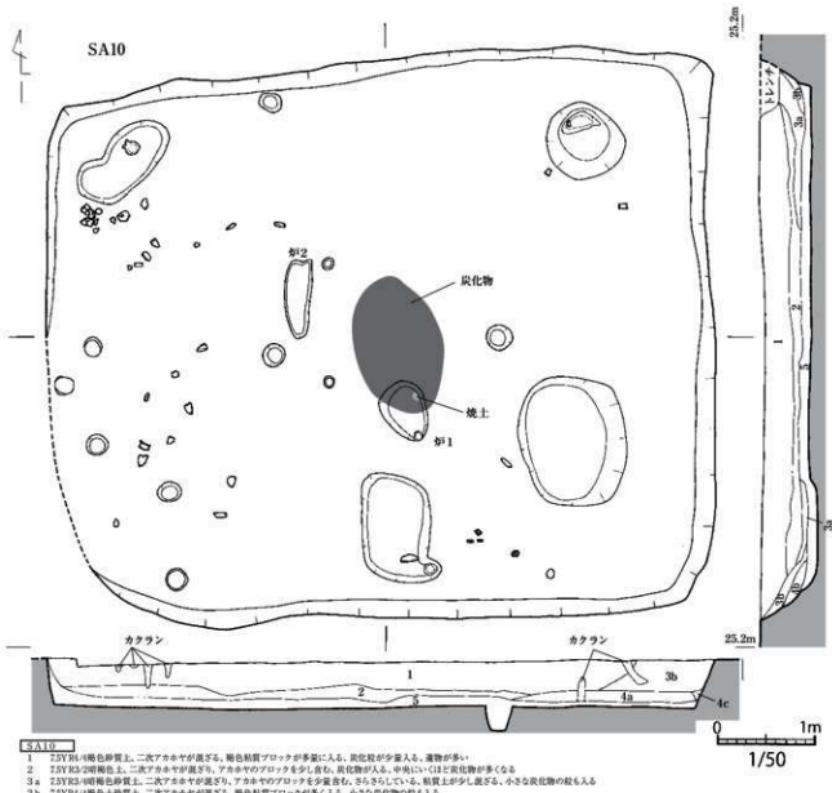
第40図 9号竪穴住跡および住居内土坑、遺物集中区実測図



第41図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）



第42図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第43図 10号竪穴住居跡実測図

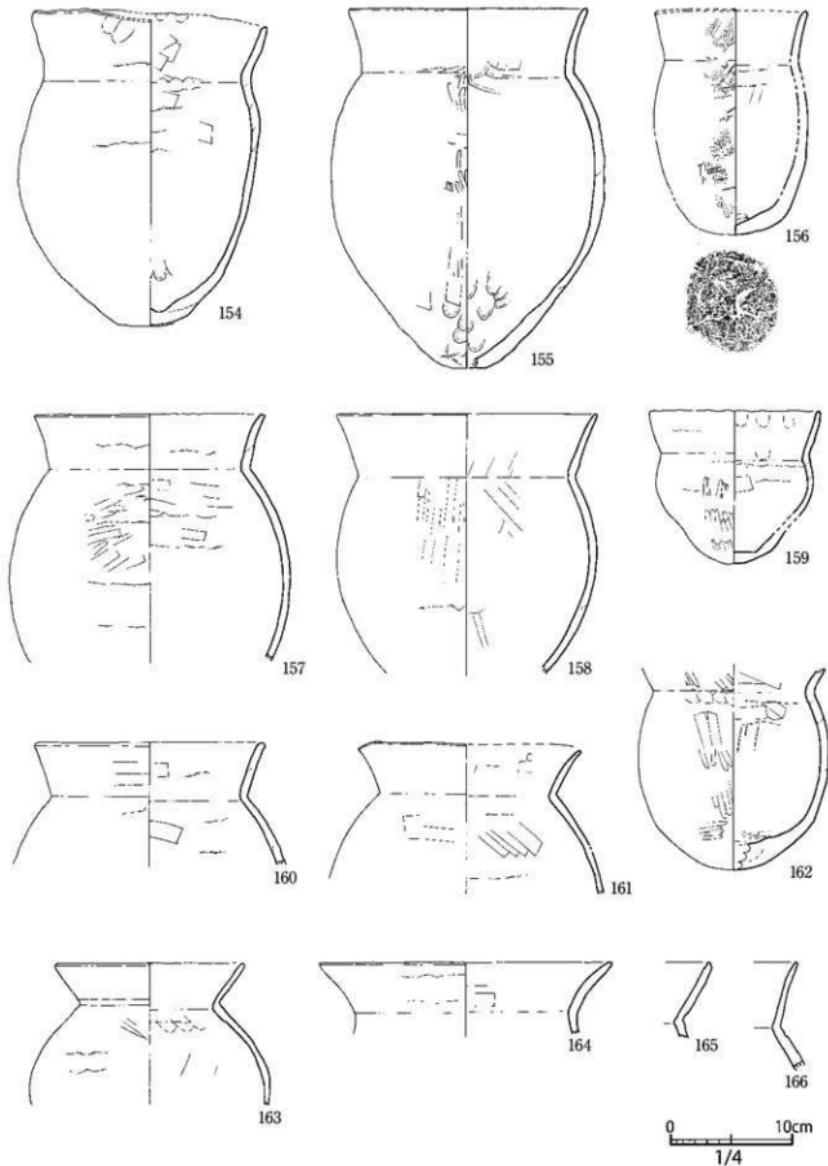
・SA10出土遺物 (第44～46図)

154～168は甕である。154はやや平底で緩やかに立ち上がる。口縁部は内溝しながら外傾する。155～161は頸部がくの字に屈曲し、やや外反しながら緩やかに立ち上がる。155は頸部から胴部にかけて外面にミガキを施す。163は胴部が張り、頸部外面を強いナデにより明瞭な稜を作れる。口縁部はやや内溝しながら外傾する。156～162は小型の甕である。156は主にタタキの後に縦方向のミガキを施す。159は口径が胴部最大径より大きく、口縁端部に指押さえが見

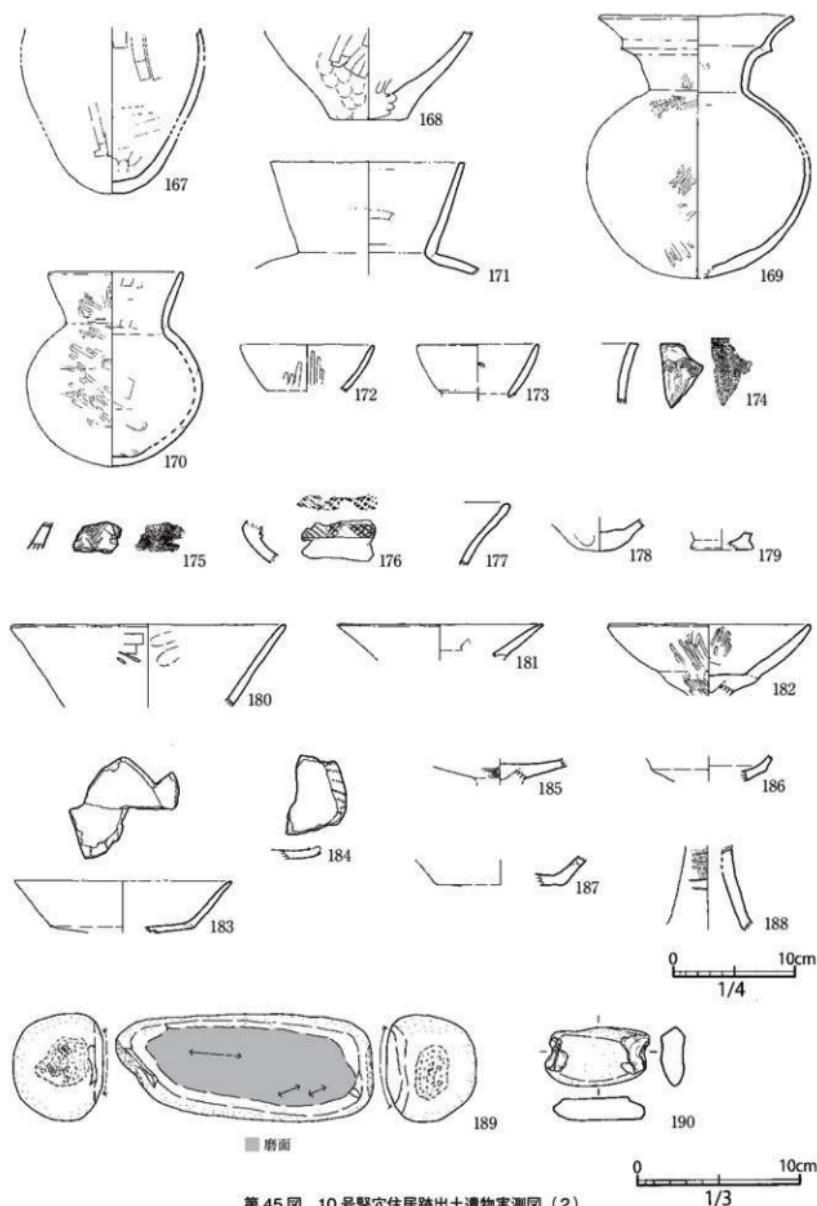
られる。162は丸底で器厚が厚い。167は丸底、168は平底で外面の底部付近に指押え痕が多数残る。

169～177は壺である。169は複合口縁壺で、球脛を呈し、頸部から外反しながら立ち上がり、2次口縁も外反する。170は器壁が全体的に薄く、外面にミガキを施す。171は頸部がL字状に屈曲する。172・173は壺の口縁部でやや内溝しながら外傾する。174・175は口縁部に櫛描波状文を施し、176は頸部に貼付刻目突帯を施す。

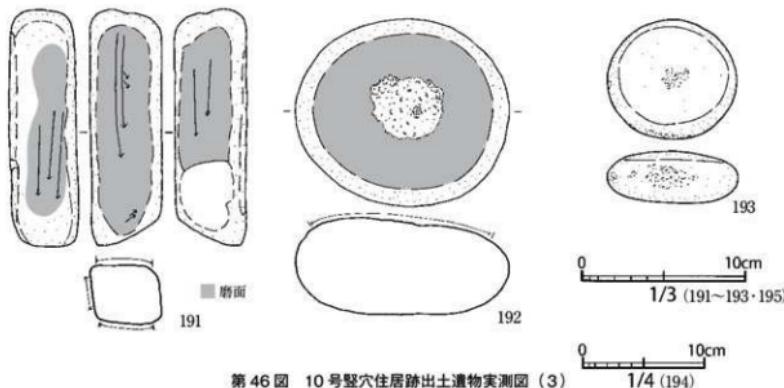
178はやや丸底、179は平底の鉢である。



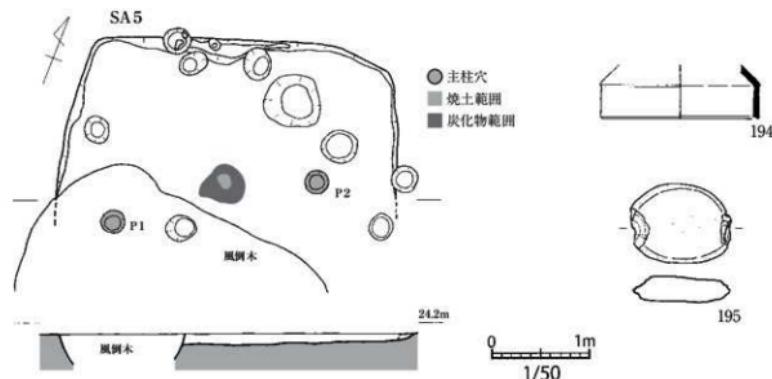
第44図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第45図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第46図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)



第47図 5号竪穴住居跡および出土遺物実測図

180～188は高坏である。183・184は受部の接合部に刻みを等間隔で施し、坏部との接合技法が見られる。

188はハケ目の後に暗に類似した横方向のミガキが見られる。

192は敲石で、表面には敲打痕の前に磨面が見られる。磨石からの転用か。



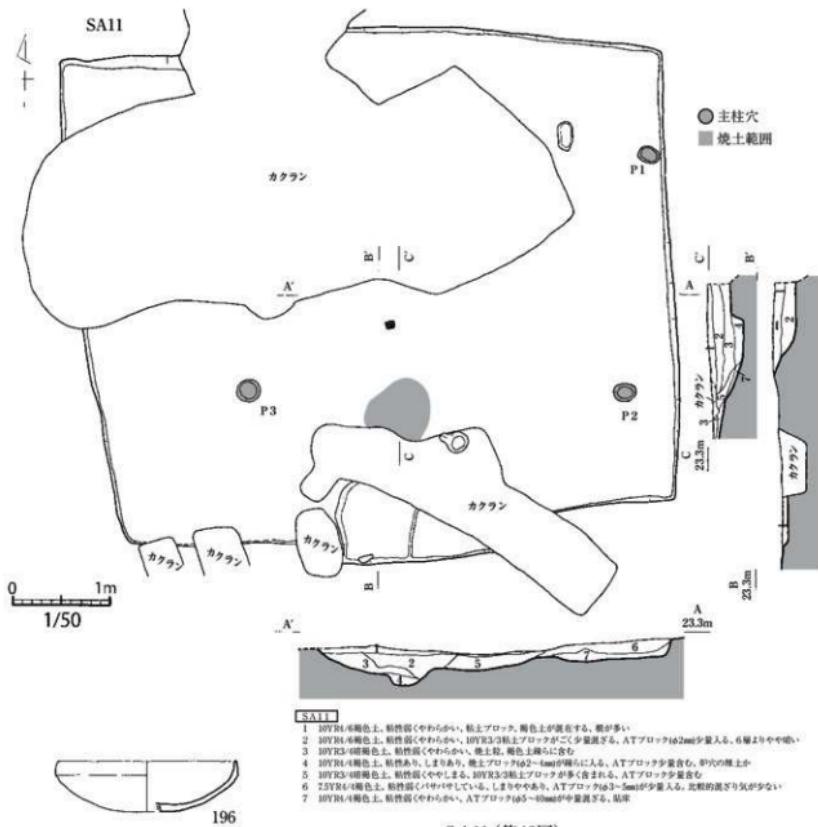
高坏(184) 接合部写真

S A 5 (第47図)

B-3区、第IV層検出。規模は東西3.5mであるが、南下するとともに削平が激しく南端が確定できない。埋土はほとんど残っておらず、柱穴と思われるピットが多数検出できたが、後世のものと混在している。主柱穴は2本確認している。主柱穴P1から須恵器の坏蓋194が出土している。

・S A 5出土遺物

194は古墳時代後期の須恵器の坏蓋で肩に段があり、195は尾鈴山酸性岩類製の打欠石錘である。



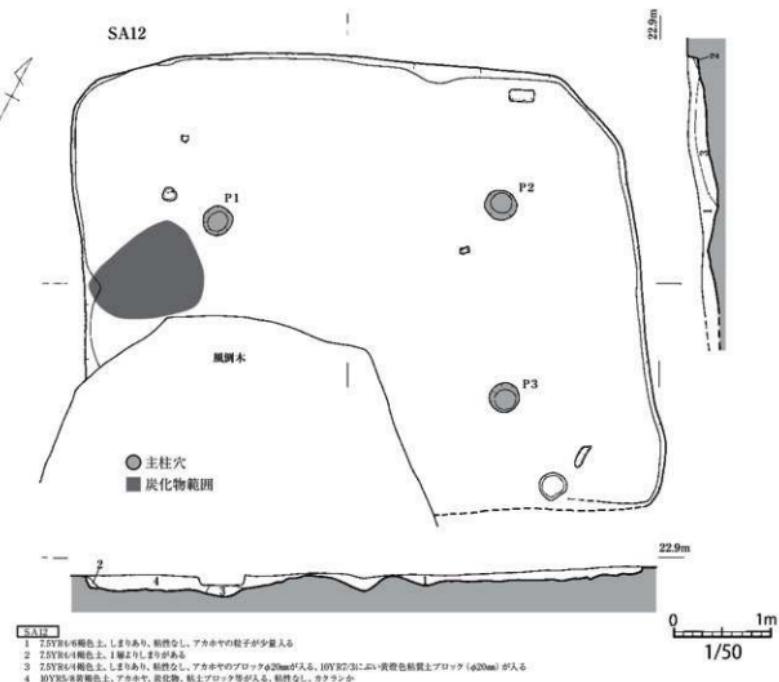
SAI1 (第48図)

B-8区南端、第IV層検出。現況で建築物があつたため、複合浄化槽や耕作による搅乱が著しい。平面形は長方形5.5m×6.0mを基調とするが、やや歪である。埋土は住居埋土と貼床に分層できる。貼床は住居の掘り方でできた底面の凹凸を掘削時の土で平らにしたと考えられる。主柱穴は搅乱や削平により3本しか検出できなかったが、配置から4本柱の堅穴住居であると推測できる。須恵器の壺の破片が1層から出土している。

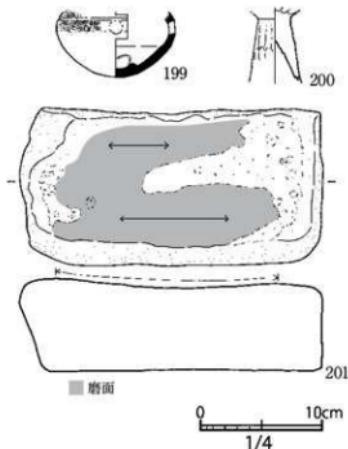
・ SAI1出土遺物

196は土師器の壺で口縁部がほぼ直立し、口唇部が尖る。197・198は古墳時代中期後葉の須恵器の壺の颈部でタタキ目が明瞭に残る。

第48図 11号堅穴住居跡および出土遺物実測図



- SA12
1. 2.5YR6/6褐色土上、しまりあり、粘性なし。アカホヤの粒子が少量入る。
 2. 2.5YR6/4褐色土上、1層よりしまりがある。
 3. 2.5YR6/4褐色土上、しまりあり、粘性なし。アカホヤのプロックφ20mmが入る。10YR2/3に近い黄褐色粘質土ブロック(φ20mm)が入る。
 4. 10YR5-8黄褐色土上、アカホヤ、炭化物、粘土プロック等が入る、粘性なし。カクランか



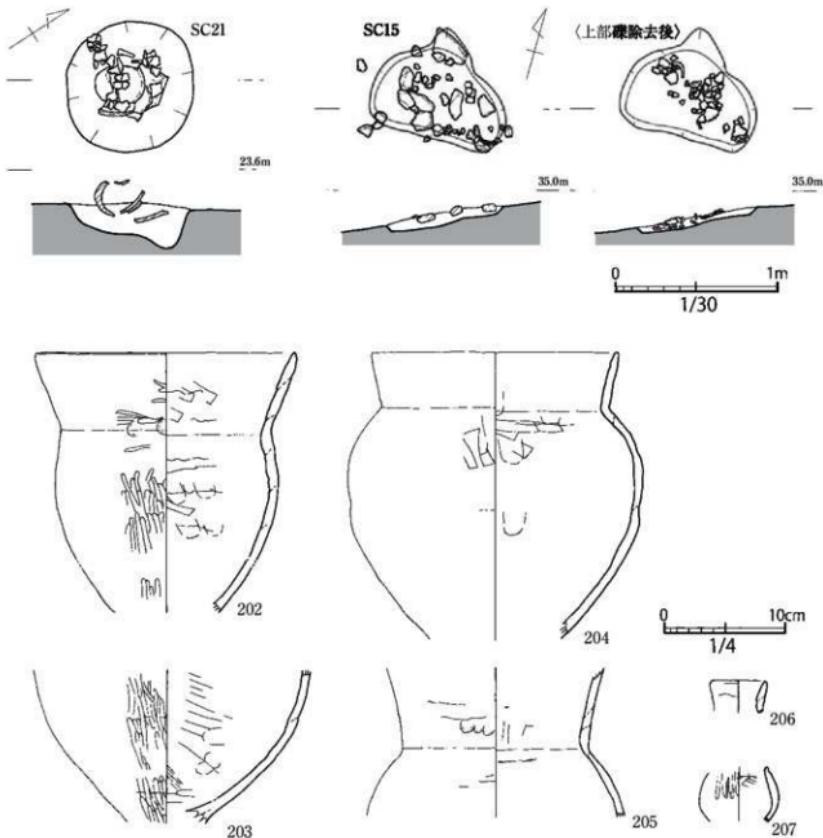
SA12 (第49図)

B-8区南端、第IV層検出。風倒木により南西部1/4が欠損しており、南端は削平によりほとんど確認できなかった。平面形は長方形5.7m×4.3mを基調とするが、やや歪である。表土直下で床面を検出し、遺物や柱穴を確認した。主柱穴は3本検出しているが、配置から4本柱の堅穴住居であると推測できる。検出面からの主柱穴の深さは約50cmを測る。

・SA12出土遺物

199は處で口縁部が欠損しているものの肩部に円孔と波状文が見られる。肩部最大径は9.8cmである。200は高杯の脚部で、坏部と脚部の接合部の内面を先が鋭利な工具で刺突している。201は台石である。正面には敲打痕と磨面が見られる。石皿としても使用していたと考えられる。

第49図 12号堅穴住跡および出土遺物実測図



第50図 古墳時代土坑および出土遺物実測図

2 土坑 (SC 第50図)

SC21

B-8区東側、第IV層で検出。深さ25cmの掘り込みに土師器片が集中して出土した。

・SC21出土遺物

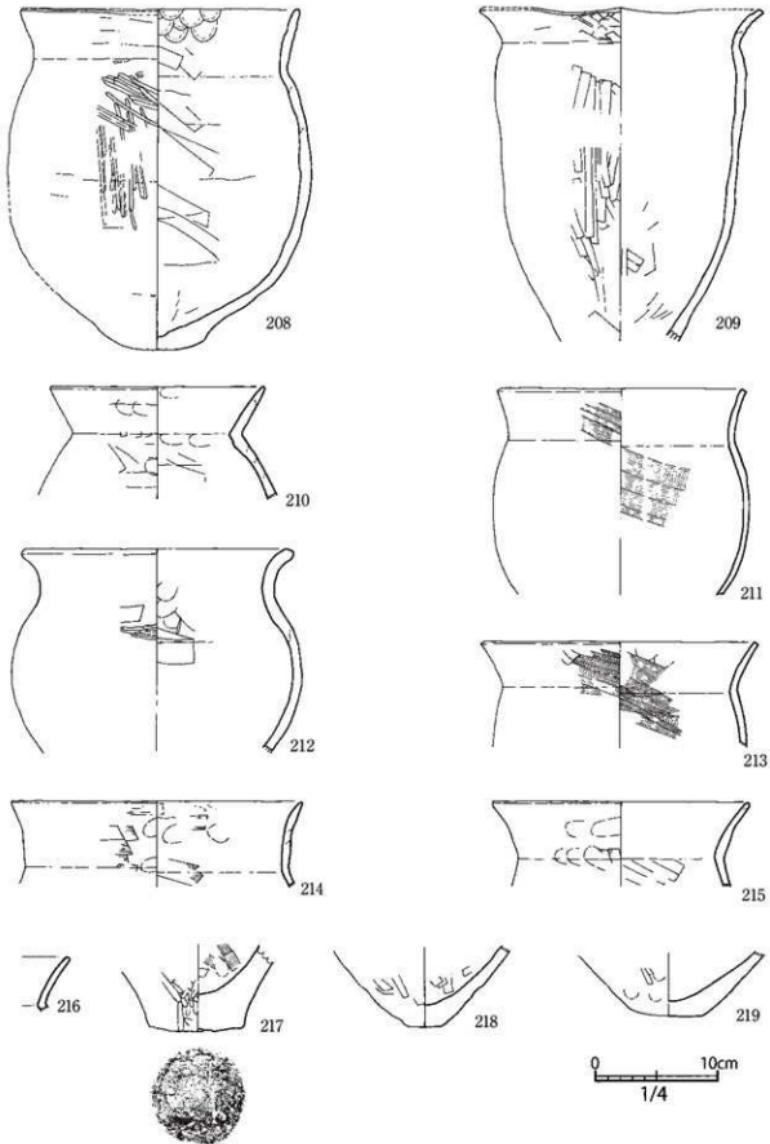
202・203は壺で、外面にミガキ調整を施す。202は口縁部が長く直線的に外傾し、口径も胴部最大径より大きい。内面は粘土のつなぎ目が明瞭に残る。203は平底で側面が外反しながら立ち上がる。

SC15

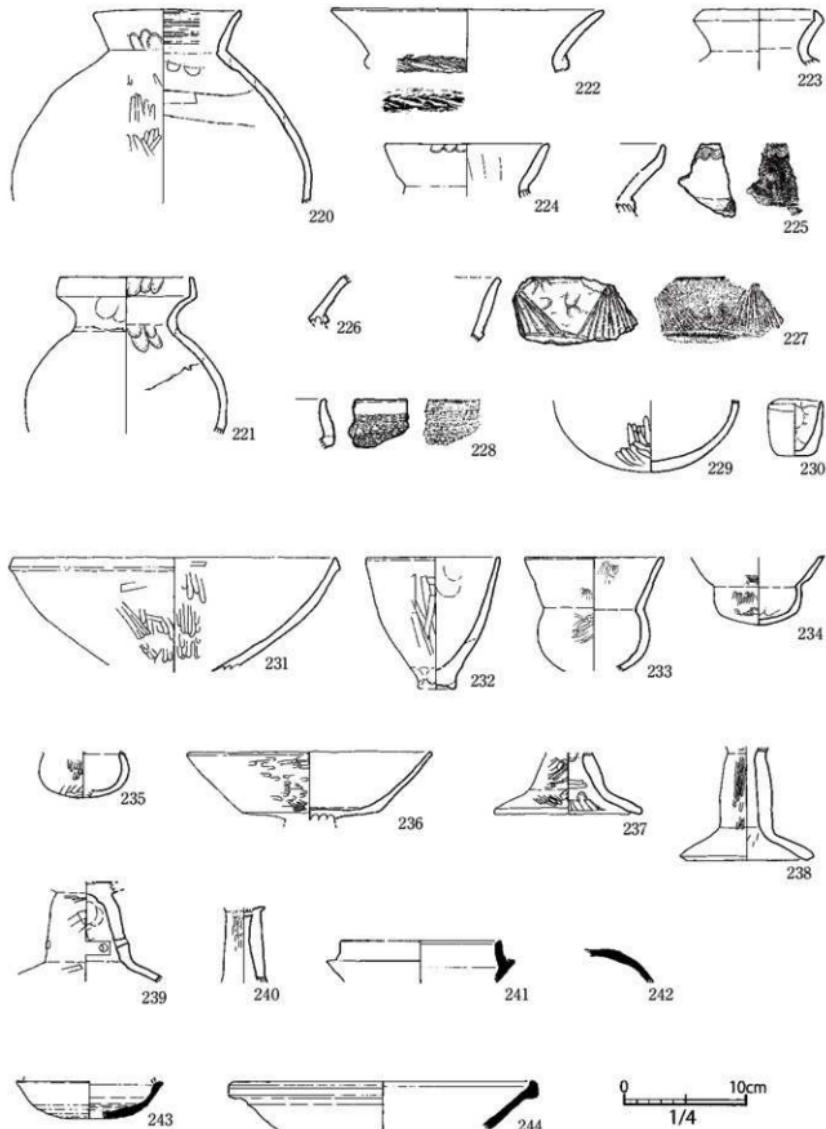
A-1区斜面地、第IV層で検出。検出時は砾の間に土器がはまっている状態であると考えていたが、上部の砾を取り除くと、浅い掘り込みを持ち、砾に押し潰される形で土師器片が出土した。

・SC15出土遺物

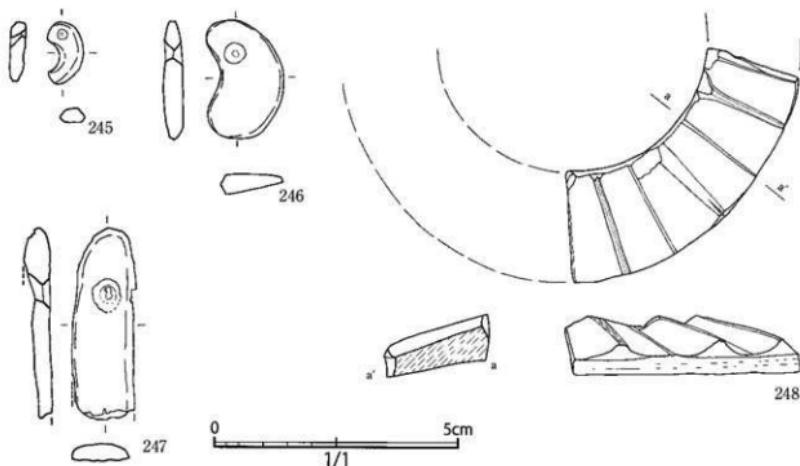
204・205は壺である。204は口縁部は頸部がくの字状に屈曲し、直線的に開く。205は口縁部が長く直線的に開く。206は小型壺の口縁部、207は小型丸底壺で頸部がやや縮まっている。



第 51 図 古墳時代土器実測図（1）



第52図 古墳時代土器実測図(2)



第53図 石製装飾品実測図

3 遺物

包含層出土遺物（第51・52図）

208～219は壺である。208は底部がやや凸レンズ状で、底面との境が不明瞭である。胴部には縱方向のミガキを、頸部付近には横方向のミガキを施す。209は長胴で、口縁部がやや波打ち平坦でない。210は頸部がくの字に屈曲し、内面の稜も明瞭である。211・213は内外面にハケ目の痕が顕著に見られる。212は口縁部が大きく外反し、口縁端部を丸く收める。214は口縁部が長く、直立気味に緩やかに外反する。217は器厚の厚い平底で最下部にミガキを施す。

220～229は壺である。220は口縁が短く外傾する。222は広口で頸部に貼付刻目突帯を施す。221・223・225・226・228は複合口縁壺で内傾する口縁部をもつ。227は外傾する口縁部に山形の鋸歯文をもつ複合口縁壺で、228は2段の櫛描波状文を施す。

231は鉢で内外面にミガキを施す。232も鉢で上げ底の底部で器厚が厚く、外に開きながらや上方に立ち上がる。233～235は小型丸底壺である。233・234は口径が胴部最大径より大きい。236～240は高坏である。脚部は中ほどから屈曲し、脚

裾は内湾している。236は受部に平坦面をもつ。237は脚部が短く、239は脚部に円形の透かし穴をもつ。241・243が古墳時代中期、242・244は古墳時代後期の須恵器である。

石製装飾品（第53図）

245～248は石製装飾品である。245は蛇紋岩製の勾玉、246はホルンフェルス製の勾玉、247は赤色頁岩製で用途は不明である。

248は緑色凝灰岩製の車輪石で淡緑色を呈する。C-3区東壁付近の谷第2層（第Ib層）最下部から出土。C-4区谷第2層（第Ib層）最下部の炭化物の¹⁴C年代測定では、960±40年BPとの結果が出ている。残存率が1/5であるが、平面形及び内孔形はともに卵形、放射状匙面は15～16面であると推定する。外端の輪郭線はほぼ滑らかな曲線を呈する。底面は外側面下部で接地し、内孔に向かい約10°の角度で立ち上がる。匙面の頂部と凹部とともに沈線をもち、外側面はやや窪み、内側面はほぼ直立する。表裏面の一部に放射状に擦痕が見られるが、全体を丁寧に研磨している。

第14表 古墳時代遺構内出土土器観察表(1)

No.	器種	部位	出土 地點	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調	胎土の特徴	備考	
					外面	内面				
99	壺	肩部-西 腰部付近	SA1		工具ナデ、ミガキに近い	工具による不定方向のナデ ナド、腰部付近に工具ナデ	明赤褐色 (7.5YR6/6) (2.5YR5/6)	3mm以下の灰白・明赤褐・黒褐色粉 を含む	一層 スス付箋、外面・内面・口唇 部に茶斑	
100	口縁 壺 -直腹付 近	SA1	口径 (9.0)		全体に強い工具ナデ、ミガキ	口縁部はナド、口縁から 直腹部はナド、斜方方向の工具 ナド、軸方向の工具ナド	明赤褐色 (7.5YR3/2) (10YR7/4)	1~5mmの灰白粉、微細な黑色光沢粉 を含む	スス付箋、内面・口唇 部に茶斑	
101	壺	肩部-西 部	SA1		腰部はミガキ、底部付近 はツラギ、直腹は一部ミガキ	腰部は棒ナド、底部より上 部はツラギ、底部付近はミガキ	にぶい黄褐色 (10YR5/3) (10YR7/6)	5mm以下の茶褐・白色粉、2mm以下 の黑色光沢粉を多く含む	スス付箋	
102	鉢	口縁部- 腰部	SA1	口径 (13.6)	口縁部はナド、全体にミガキ ナド、一部強化工具ナド	腰部は棒ナド、底部より上 部はミガキ	褐色 (10YR4/1) (10YR5/1)	6mm以下の茶褐・白色粉を多く含む		
103	小型丸 壺-底 部思	SA1			全体的にミガキ、一部棒モ カナ、直腹に真赤	腰部は棒ナド、直腹は 工具ナド	にぶい黄褐色 (7.5YR7/1) (10YR5/4)	2mm以下の黒・茶・褐色粉を含む		
104	高評 坪部	SA1	口径 (24.4)		口縁部はナド、全体的にナデ ナド、直腹はツラギ	全体的にナデ付近にミガキ ナド	明黄褐色 (10YR7/6) (7.5YR7/6)	1mm以下の茶褐・にぶい褐・褐色粉を 多く含む	一層 裏剥	
105	壺	口縁部- 腰部	SA3	口径 (13.0)	口縁部はナド、一部ツラギ、 直腹部はナド・斜方方向のナケ 目	口縁部は斜方方向のナケ 目、腰部は棒ナド・斜方 方向のナケ目	褐色 (SYR7/6) (SYR6/6)	1~3mmの灰白色粉を含む	一層スス付箋・腰部に 変化物付箋	
106	壺	口縁部- 腰部	SA3	口径 (10.0)	口縁部-頭部は棒ナド付近に棒 ナド、腰部はミガキ	斜方の工具ナデ付近に棒 ナド	にぶい黄褐色 (10YR7/4) (10YR4/4)	浅黄褐色 (10YR7/4)	1~5mmの赤褐・灰白色粉を含む	
107	壺	口縁部- 腰部	SA3		口縁部-頭部は棒ナド付近に棒 ナド、腰部はミガキ	斜方の工具ナデ付近に棒 ナド	にぶい黄褐色 (10YR7/4) (10YR4/4)	1~5mmの赤褐・灰白色粉を含む		
108	壺	直部	SA3		腰部方向のミガキ	黒化強味だがハケ目	にぶい茶 (7.5YR7/4)	1~3mmの褐・褐色粉を多く含む		
109	小型丸 壺- 直腹付 近	SA3	口径 (8.1)		全体的に棒モカナ ナド、直腹付近にハケ目ナド	口縁部はナド、上半 部・斜方方向の工具ナド ナドは斜方・斜方棒モ カナ	にぶい茶 (7.5YR5/4) (10YR6/3)	5mm以下の黒・灰色粉を含む		
110	小判丸 口縁部- 直腹	SA3	口径 (8.4)		全体的に黒化のため調整不 規則、直腹付近にハケ目ナド	全体的に黒化のため調整不 規則、棒モカナ	にぶい茶 (SYR6/6) (SYR6/6)	さめかわい		
111	壺	口縁部	SA3	口径 (15.2)		口縁部はナド、口縁部は棒ナ ド、直腹は棒モカナ、一部工具 ナド	斜方方向工具ナド	にぶい茶 (10YR7/3) (10YR7/1)	8mm以下の茶・白色粉を多く含む	
112	鉢	口縁部- 直部	SA3	底径 2.3 高さ 11.5	全体的に黒化強味だが丁寧な 仕上げ	口縁部に隙間き、全体に 棒ナド、直腹付近に工具 ナド	にぶい茶 (10YR7/3) (10YR7/3)	1~3mmの灰白・茶・褐色粉を含む	スス付箋	
113	壺	腰部-胸 器	SA3		黒化強味だが一面斜方のミ ガキ	直腹と腰部は棒モカナ、腰 部は斜方の棒モカナ、斜 方工具ナド	にぶい茶 (10YR6/4) (10YR6/4)	1~3mmの茶白・茶・褐色粉を含む	一層スス付箋	
114	壺	直部	SA3	底径 (4.4)	全体的にナデ、直部付近は工 具ナド、直腹は丁寧なナ ド	斜方工具ナドのナド	にぶい茶 (10YR7/4) (10YR7/3)	1~3mmの茶白・茶・褐色粉を多く含 む		
115	壺	直部	SA3	底径 (4.0)	全体的にナデ、直部付近は工 具ナド、直腹は丁寧なナド	黒化強味だが工具斜方のミ ガキ	にぶい茶 (10YR7/4) (10YR7/3)	5mm以下の茶白・茶・褐色粉を多く含 む	直部にスス付箋	
116	高評 坪部	SA3		底径 (2.8)	棒ナド後にミガキ、不平行方 のナド	黒化著しく調査不明	褐色 (SYR6/6) (SYR6/6)	1~3mmの灰白・灰褐色粉を少し含む		
117	壺	宝形	SA4	底径 6.55 高さ 25.5	全体的に黒化強味だが、口 縁部棒ナド後・直腹ミガキ、 直腹は丁寧なナド	全体的に黒化強味だが、 口縁部から腰部上面に一層 棒ナド後・直腹ミガキ、斜 方方向のナド	浅黄褐色 (10YR8/4) (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4) (10YR8/4)	1~3mmの褐色粉を多く含む	スス付箋、外面・内面・ 直腹から底部に一層黒化
121	壺	直部	SA6	底径 (5.4)	直腹付近は工具強化ナド、 直腹は丁寧なナド	斜方工具ナド	にぶい茶 (10YR5/6) (10YR5/6)	4mm以下の褐灰・茶・黑褐色粉を含 む	スス付箋	
122	壺	口縁部- 腰部	SA6	口径 (13.5)	口縁部はナド、口縁から腰部 工具による棒ナド	灰褐色 (2.5YR6/2) (10YR7/4)	にぶい茶 (10YR8/4) (10YR8/4)	1~3mmの赤褐色粉を多く含む		
123	壺	口縁部- 腰部	SA6		口縁部はナド、口縁部は工具 棒モカナ	褐色 (10YR4/1) (10YR2/6)	明黄褐色 (10YR6/6) (10YR6/6)	1~3mmの赤褐色粉、1mm以下の茶 色光沢粉を含む		
124	壺	口縁部	SA6		口縁部はナド、腰部は工具 棒モカナ、斜方工具ナド	工具棒ナド、一部黒化 直腹	明黄褐色 (10YR6/6) (10YR6/6)	1~3mmの灰白・黑色光沢粉を含む	内面・一層黒化	
125	鉢	直部	SA6	底径 (4.3)	直腹付近は斜方方向のナ ド	直腹付近は斜方方向のナ ド、丁寧なナド、直腹は 工具棒ナド	にぶい茶 (10YR6/6) (10YR7/6)	2mm以下の灰白・明褐・灰褐色粉を 含む		
126	小型丸 壺-ほ 直部 形	SA6	底径 6.8 高さ 6.2		口縁部はナド、腰部は棒モ カナ、直腹は工具棒モカナ ナド	口縁部はナド、腰部は 棒モカナ、直腹は工具棒 モカナ、斜方工具棒モカナ ナド、直腹は丁寧なナ ド	にぶい茶 (10YR7/4) (10YR7/3)	4mm以下の茶白・黑色光沢粉を少し含 む	外側・一層黒化	
129	壺	口縁部- 直部	SA9	口径 (23.7) 底径 2.0 高さ 32.25	口縁部はナド、腰部は棒モ カナ、直腹は工具棒モカナ ナド	口縁部は棒ナド、腰部は 棒モカナ、直腹は工具棒 モカナ、直腹は丁寧なナ ド、直腹は棒モカナ	にぶい茶 (10YR7/8) (10YR6/4)	5mm以下の茶・茶褐色粉を多く含む		
130	壺	口縁部- 直腹付 近	SA9	口径 (18.4)	口縁部はナド、腰部から直 腹部直ナド後、ミガキ	口縁部は棒ナド、腰部は 棒モカナ、直腹は工具棒 モカナ、直腹は丁寧なナ ド	明黄褐色 (7.5YR7/6) (10YR7/6)	1~4mmの明赤褐色粉、1~2mmの茶 色光沢粉を含む	直部にスス付箋、外 面・直部に茶斑	
131	壺	ほ 直部 形	SA9	口径 26.4 高さ 32.5	直腹付近は棒モカナ、腰部 は工具棒モカナ、斜方方向 のナド後	直腹付近はナド、腰部上 部は斜方方向のナド、斜 方方向のナド後	にぶい茶 (10YR7/3) (10YR7/4)	1~4mmの茶褐色粉を多く含む	スス付箋、腰部-直部 に変化物付箋	
132	壺	口縁部- 腰部	SA9	口径 (22.6) 底径 (3.8) 高さ 34.35	口縁部は棒モカナ、腰部付 近は斜方方向のナド、腰部付 近は棒モカナ	直腹付近はナド、腰部上 部は斜方方向のナド、斜 方方向のナド後	灰褐色 (10YR8/2) (10YR7/3)	4mm以下の茶・灰褐色粉、微細な光 沢粉を多く含む	口縫-腰部にスス付 箋、腰部-直部に変化 物付箋	
133	壺	口縁部- 腰部	SA9	口径 (21.1)	口縁部は棒モカナ、腰部は 腰部はミガキして調査不 規則	直腹付近はナド、腰部は 腰部は棒モカナ	明黄褐色 (10YR7/6) (10YR7/6)	1~4mmの灰白・褐色粉を含む		

第15表 古墳時代遺構内出土器観察表(2)

No.	基種	部位	出土地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
134	妻	口縁部-頭部	SA9	口縁部は楕ナテ、一部工具ナテ、頭部ナナテ	口縁部は楕ナテ、頭部は直角椎。頭部は直角椎。頭部は楕ナテ後に一部工具ナテ	口縁部は楕ナテ、頭部は直角椎。頭部は直角椎。頭部は楕ナテ後に一部工具ナテ	浅黄褐 (10YR8/3)	深い黒褐色 (10YR7/4)	3mm以下の茶褐色・灰色粘土が多く含む	スズ付量
135	妻	口縁部-頭部	SA9	口径(20.3)	口縁部は工具種ナテ、頭部付近は新方巾のカ目	口縁部から頭部は工具種ナテ	緑 (SYR7/6)	緑 (7.5YR6/4)	1~2mmの灰・褐色粘土を含む	口縫部に一部スズ付量
136	妻	頭部-底部	SA9	頭部-底部付近は工具斜方向ナテ	不定方向のナテ	に深い緑 (7.5YR5/3)	明黄褐 (10YR6/6)	5mm以下の明黄褐色・橙・暗灰・深緑、褐色粘土を含む	頭部から底部にスズ付量、底部付近はスズ付量に変化有無	
137	妻	頭部-底部	SA9	工具による斜方向のナテ	頭部はナテ、一部工具ナテ、底部は一括ハケ目	に深い黒褐色 (10YR7/4)	に深い黒褐色 (10YR7/4)	6mm×3mmの間に深い黒褐色粘土、5mm以下の灰白・褐色粘土を含む	外縁・頭部から底部に変更	
138	妻	口縁部-頭部	SA9	口径(16.15)	口縁部は楕ナテ後に複合口縁。口径は楕ナテ後に複合口縁改文、頭部は斜方向ナテ	口縁部は楕ナテ後に複合口縁。口径は楕ナテ後に複合口縁改文、頭部は斜方向ナテ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR6/6)	2mm以下の灰白・褐色粘土を少し含む	
139	妻	口縁部	SA9	口縁部に頭部、頭部は楕ナテの後に直接波紋状	楕ナテ	浅黄褐 (SYR6/4)	に深い黒褐色 (10YR7/4)	1~3mm以下の灰白・褐・黄色光沢粘土を含む		
140	妻	頭部-脚部	SA9	頭部は楕ナテ、頭部斜方向とギヨ文、頭部は斜方向とギヨ文	頭部は新方巾のハケ口。明赤褐色 (SYR5/6)	明赤褐色 (7.5YR5/6)	10mmの深褐色粘土、6mmの大田白色粘土、5mm以下の大田黄色粘土、明赤褐色・暗褐色粘土を含む	口縫部にスズ付量、底部は大田白色粘土		
141	鉢	口縁部-底部付近	SA9	口径(16.8)	口縁部は楕ナテ・ミガキ、頭部は斜方巾改文ハラハラ波紋とミガキ、底部付近は新ハケ目	楕ナテ・ミガキ、頭部は斜方巾改文ハラハラ波紋とミガキ、頭部は新ハケ目	浅黄 (2.5Y7/4)	明黄褐色 (2.5Y7/6)	1~4mmの灰白色粘土、1mmの褐色粘土を含む	口縫部にスズ付量、頭・底部に変化有無
142	鉢	口縁部-頭部	SA9	口径(12.2)	口縁部は楕ナテ、頭部は楕ナテ後に斜方巾改文	口縁部は楕ナテ、頭部は楕ナテ後に斜方巾改文	に深い黒褐色 (10YR7/3)	に深い黒褐色 (10YR7/4)	1~7mmの灰白色粘土を含む	一部スズ付量、頭部に変化有無
143	妻	口縁部	SA9	口径(9.95)	高化のため調整不明	楕ナテ	緑 (7.5YR7/6)	緑 (SYR7/8)	1~2mmの明赤褐色粘土を含む	
144	妻	口縁部	SA9	口径(10.8)	工具による楕ナテ	楕ナテ	緑 (7.5YR7/6)	緑 (SYR6/6)	1mm以下の浅黃褐色・に深い黒褐色粘土を含む	
145	手斧ねばば 実器	刃	SA9	直径2.7 基盤4.8	口縫部から頭部は浅い灰色、斧部には工具斜方向ナテ、頭部は直角椎	口縫部は直角椎とし、頭部はナナテ。直角椎は各部にさきあき	直角椎 (10YR6/4)	に深い黒褐色 (10YR7/4)	4mm以下の灰白色粘土を含む	外縁・口縫から頭部に一部黒斑
146	高杯	はばば 実器	SA9	口径(16.8)	頭部は楕ナテ、斧部から側面は直角椎またはミガキ、頭部は直角椎基盤14.3 基盤4.8	頭部は要ミガキ。斧部は直角椎。頭部は直角椎基盤14.3 基盤4.8	浅黄褐色 (SYR6/4)	に深い黒褐色 (10YR6/6)	1mm以下の褐色粘土を含む	外・内・底面：脛部に一部黒斑
147	高杯	斧基	SA9	口径(16.6)	斧部はハラ口後で楕ナテ、要文	斧部は要ミガキ後で楕ナテ。要文	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	1~2mmの灰白色粘土を含む	一部スズ付量
148	高杯	斧基	SA9	口径(16.7)	斧部は楕ナテ後に斜方向のミガキ	斧部は楕ナテ後に斜方向のミガキ	緑 (7.5YR7/6)	緑 (7.5YR7/6)	1~2mmの灰・褐・灰白色粘土を含む	
149	高杯	頭部	SA9	幅方向の口径後に横ミガキ	強い楕ナテ	浅黄褐色 (10YR7/6)	明赤褐色 (10YR7/6)	1mm以下の褐・深褐色粘土を少し。1mm以下の透明光沢粘土を含む		
150	妻	口縁部-底部	SA10	口径18.5 直径4.8 基盤25.75	頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ	頭部は工具ナテ。頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ。頭部は直角椎。	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	1~6mmの赤褐色粘土を多く含む	口縫・底面部にスズ付量、頭部・底部に変化有無
151	妻	口縁部-底部	SA10	口径(19.6)	頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ	頭部は直角椎後に斜方向ナテ。頭部は直角椎。頭部は直角椎。	に深い黒褐色 (10YR8/2)	に深い黒褐色 (10YR7/3)	1~4mmの灰白色粘土・褐色粘土を多く含む	頭部から頭部にスズ付量
152	小型妻	口縁部-底部	SA10	口径(18.6) 直径6.6 基盤18.35	頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ	頭部は直角椎後に斜方向ナテ。頭部は直角椎。頭部は直角椎。	浅黄褐色 (SYR6/4)	明赤褐色 (SYR5/6)	4~5mmの灰褐色粘土、3mm以下の山形・黒・乳白色粘土。強度の薄葉土	外縁・直角・底面部に直角付近から頭部にスズ付量、直角付近に底面部に変更
153	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(18.4)	頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。	頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。	に深い黒褐色 (10YR7/4)	に深い黒褐色 (10YR7/4)	1~7mmの褐・灰・灰褐色粘土を多く。1~2mmの紫・乳白色粘土を含む	スズ付量、内面：口縫に黒斑
154	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(21.0)	頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。	頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。	に深い黒褐色 (10YR7/4)	に深い黒褐色 (10YR7/3)	1~5mmの赤褐色粘土を含む	外縁・頭部にスズ付量、頭部・底部に変化有無
155	妻	口縁部-底部	SA10	口径(19.0)	頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。	頭部は直角椎後に斜方向ナテ。頭部は直角椎。頭部は直角椎。	に深い黒褐色 (10YR8/2)	に深い黒褐色 (10YR7/3)	1~4mmの灰白色粘土・褐色粘土を多く含む	頭部から頭部にスズ付量
156	小型妻	口縁部-底部	SA10	口径(19.5)	頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具斜方向ナテ	頭部は直角椎後に斜方向ナテ。頭部は直角椎。頭部は直角椎。	浅黄褐色 (SYR6/4)	明赤褐色 (SYR5/6)	4~5mmの灰褐色粘土、3mm以下の山形・黒・乳白色粘土。強度の薄葉土	外縁・直角付近から頭部にスズ付量、直角付近に底面部に変更
157	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(18.4)	頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。	頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。	に深い黒褐色 (10YR7/4)	に深い黒褐色 (10YR7/4)	1~7mmの褐・灰・灰褐色粘土を多く。1~2mmの紫・乳白色粘土を含む	スズ付量、内面：口縫に黒斑
158	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(21.0)	頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。	頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。	に深い黒褐色 (10YR7/4)	に深い黒褐色 (10YR7/3)	1~5mmの赤褐色粘土・褐色粘土を含む	頭部・頭部にスズ付量
159	小型妻	口縁部-底部	SA10	口径(14.0)	頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ、頭部は直角椎。	頭部は直角椎後に斜方向ナテ。頭部は直角椎。頭部は直角椎。	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/3)	3mm以下の灰白色粘土を含む	外縁・頭部にスズ付量、内面：頭部に変化有無
160	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(18.4)	工具種ナテ	工具種ナテは工具種ナテ。頭部は工具種ナテ。頭部は工具種ナテ。	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR7/3)	6mm以下の灰白・黒褐色粘土を多く含む	スズ付量
161	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(15.2)	工具種ナテ、底化箋妻	頭部は工具斜方向のナテ。頭部は工具斜方向のナテ。頭部は工具斜方向のナテ。	浅黄 (2.5Y8/4)	浅黄 (2.5Y8/3)	4mm以下の茶褐色粘土・褐色粘土を多く含む	
162	小型妻	頭部-底部	SA10	口径(14.5)	頭部は工具種ナテ後に底化箋妻。	頭部は工具斜方向のナテ。頭部は工具斜方向のナテ。頭部は工具斜方向のナテ。	に深い黒褐色 (10YR7/2)	に深い黒褐色 (10YR7/3)	6mm以下の赤褐色粘土・褐色粘土を少し含む	頭部から頭部にスズ付量、底部に被熱
163	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(18.0)	頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ。	頭部は工具種ナテ。頭部は直角椎。頭部は工具種ナテ。	浅黄褐色 (10YR7/4)	浅黄褐色 (2.5Y7/4)	1~10mmの明赤褐色粘土を多く含む	スズ付量、内面・口縫・頭部に変更
164	妻	口縁部-頭部	SA10	口径(23.8)	頭部は楕ナテ、底押さえ、頭部は楕ナテ、ナナテ。	頭部は楕ナテ、底押さえ、頭部は楕ナテ、ナナテ。	に深い黒褐色 (10YR7/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	4mm以下の茶褐色・灰色粘土を多く含む	口縫部にスズ付量
165	妻	口縁部	SA10	口径(16.0)	頭部は工具斜方向のナテ。	頭部は工具斜方向のナテ。頭部は直角椎。	に深い黒褐色 (7.5YR4/2)	に深い黒褐色 (10YR8/4)	5mm以下のに深い赤褐色・褐色・褐色粘土を含む	スズ付量

第16表 古墳時代遺構内出土器観察表(3)

No.	基種	部位	出土地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		施土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
166	妻	口縁部-鋸歯	SA10	口縁部は工具様ナテ、鋸歯部は斜方角に指押え。鋸歯部は斜方角に指押え。	口縁部は工具様ナテ、鋸ナテ 斜方角に指押え。鋸歯部は斜方角に指押え。	に bei 黄褐 (10YR7/3)	に bei 黄褐 (10YR7/3)	4mm以下の黒・茶褐・白色粉を多く含む		
167	妻	割部-底盤	SA10	全面的に風化劣化。割部は斜方角に指押え。底盤付近は斜方角のナテ。底盤は風化。	割部は工具風ナテ。下端 底盤付近は斜方角のナテ。	褐 (SYR6/6)	褐 (SYR6/6)	5mm以下のに bei 黄褐・灰褐・赤・ スズカ葉・内面: 黄白色粉を含む		
168	妻	鋸歯-底盤	SA10 底径(6.3)	鋸歯部は工具風ナテ、底盤は工具ナテ。	鋸歯部は工具風ナテ 底盤は工具ナテ。	に bei 黄褐 (10YR7/4)	明褐色 (10YR7/6)	1~3mmの赤褐・黄褐色粉を多く含む	変化物付箋	
169	妻	口縁部-底盤	SA10 口径15.6 底径(21.45)	口縁部は工具様ナテ、鋸部・鋸歯部は斜方角のナテ。底盤付近-底盤はナテ。	口縁部は工具様ナテ 鋸部・鋸歯部は斜方角のナテ。 底盤付近-底盤はナテ。	に bei 黄褐 (7SYR7/3)	に bei 黄褐 (10YR6/3)	5mm以下のに bei 黄褐・底白・灰褐色粉を多く含む	内面: 底盤付近黒粉	
170	妻	辺縁 実 別	SA10 口径10.8 底径15.9	口縁部は工具様ナテ後に縫合。鋸部の内ガキ。鋸部は斜方角のナテ。底盤は風化。	口縁部は工具様ナテ 鋸部の内ガキ。鋸部は斜方角のナテ。底盤は風化。	浅青褐 (10YR8/3)	浅青褐 (10YR8/3)	1~4mmの褐色粉を多く含む	外・内面: 底盤付近に 黒斑	
171	妻	口縁部-鋸歯	SA10 口径(15.95)	口縁部に風化。口縁部は風化 のため調節不良。鋸歯部は工具 風ナテ。	口縁部は工具風ナテ後に縫合。 風化風化。	黄褐 (SYR7/8)	黄褐 (7SYR7/8)	4mm以下の明褐色粉を含む		
172	妻	口縁部	SA10 口径(10.8)	棒ナテ、一部錐ミガキ	棒ナテ後に錐ミガキ	に bei 黄褐 (10YR7/4)	に bei 黄褐 (10YR7/4)	3mm以下の黒・灰褐色粉を少し含む		
173	妻	口縁部-鋸歬	SA10 口径(9.6)	口縁部は工具様・斜方角のナ テ	口縁部は工具ナテ後に指 押え。底盤	浅青 (2SYR7/3)	浅青 (2SYR7/3)	1~5mmの赤褐・に bei 黄褐色粉を含む み、1mm以下の黒色・光沢・無色透明 粉を少し含む		
174	妻	口縁部	SA10 稲根状突出	棒ナテ	棒ナテ	に bei 黄褐 (10YR7/4)	褐 (7SYR7/6)	微弱灰・灰白色粉を多く含む		
175	妻	口縁部	SA10 棒ナテ後に斜縫道状紋	棒ナテ	棒 (7SYR7/6)	に bei 黄褐 (10YR7/4)	3mm以下の灰・灰褐色粉を少し含む			
176	妻	鋸歯	SA10 刃目付突変突。棒ナテ	ナテ、風化風化が鋸刃方に 向くとナテと方ガキ	に bei 黄褐 (7SYR6/4)	褐 (7SYR6/6)	3mm以下の白・茶褐・灰褐色粉を多く 含む			
177	妻	口縁部	SA10 棒ナテ	風化風化が鋸刃ナテ	褐 (SYR7/6)	褐 (7SYR7/6)	1~4mmの底白・褐色粉を多く含む	スズカ葉・変化物付 箋		
178	針	底盤	SA10 深度の指押え。工具ナテ後 に丁寧なナテ	工具ナテ後に指押え。工具 風ナテ	に bei 白 (2.5YR7/3)	白 (2.5YF7/1)	1mm程度の黒色光沢粉を含む	外・内面: 底盤		
179	針	底盤	SA10 底径(4.9)	工具風ナテ	工具ナテ後に指押 え。工具風	褐 (SYR7/6)	褐 (SYR7/6)	1~2mmの黑色光沢粉、1mm程度の赤 褐色粉を含む		
180	高坪	底盤	SA10 口径(22.2)	底盤は工具棒ナテ	風化風化が鋸刃ナテ	に bei 黄褐 (10YR7/6)	褐 (10YR7/6)	5mm以下の褐色・灰褐色粉を少し含む	内面: 一部黒斑	
181	高坪	底盤	SA10 口径(17.0)	口縁部は工具棒ナテ	口縁部は工具棒ナテ	に bei 黄褐 (10YR7/4)	浅青 (2.5Y7/3)	1mm程度の褐色粉を多く含む	内面: 黑斑	
182	高坪	底盤	SA10 口径(16.6)	底三方孔、 向かうガキ	工具棒ナテ後に斜方 角に指押え	に bei 黄褐 (7SYR7/3)	に bei 黄褐 (10YR7/6)	1~5mmのに bei 褐褐色粉を多く含む	外・内面: 一部黒斑	
183	高坪	底盤	SA10 口径(17.05)	底盤は工具棒・斜方角のナテ	底盤部に鋸刃、工具棒ナテ	褐 (7SYR6/6)	褐 (7SYR7/6)	2mm以下の赤褐色粉を含む	外面: 口縁部に黒斑	
184	高坪	底盤	SA10 稲立ミガキ	底盤部は棒ナテ後に斜 方角のナテと方ガキ	に bei 黄褐 (10YR7/3)	に bei 黄褐 (10YR7/4)	3mm以下の茶褐・灰褐色粉を多く含む			
185	高坪	底盤	SA10 棒立ミガキ	棒立ミガキ	赤褐色 (SYR5/6)	に bei 黄褐 (10YR5/4)	1~2mmの底白褐色粉を多く含む			
186	高坪	底盤	SA10 工具棒ナテ	工具棒ナテ	工具棒ナテ	浅青褐 (10YR8/3)	浅青褐 (10YR8/3)	1mm程度の褐色粉を含む		
187	高坪	底盤	SA10 工具斜方角のナテ後・斜方角 の内ガキ	棒ナテ後・斜方角の内ガキ と方ガキ	棒ナテ後・斜方角の内 ガキと方ガキ	に bei 黄褐 (10YR8/4)	褐 (7SYR7/6)	7mm以下のに bei 黄褐・に bei 褐褐色 粉を含む		
188	高坪	底盤	SA10 斜方角のハイ目。繪文風の 棒立ミガキ	部分的にナテと、直いナ テ	部分的にナテと、直いナ テ	褐 (SYR7/6)	褐 (7SYR7/6)	6mm以下の暗・灰・白・黒・褐色粉を含む 2mm以下の黒色光沢粉を含む		
194	坪量	口縁部	SA5 口径(12.8)	圓板ナテ、自然粒	圓板ナテ	底 (N5/0)	黒皮 (2.5Y6/1)	1~3mmの灰褐色粉、1mmの黒色粉、 消色器		
196	坪量	坪量	SA11 口径(14.4)	工具棒ナテ	棒ナテ、風化風化が鋸刃 ナテ	褐 (7SYR7/6)	褐 (7SYR7/6)	1mm以下の黒・褐色粉を含む	内面: 黑斑	
197	妻	割部	SA11 平行タキ	同心円当て具筋、自然粒	底 (N4/4)	底 (7.5Y6/1)	5mm以下の乳白色粉を含む			
198	妻	割部	SA11 平行タキ後に斜方角のカキ 目	同心円当て具筋、自然粒	底 (SY4/1)	底 (2.5Y6/2)	5mm以下の乳白色粉を含む			
199	妻	割部-底 盤付	SA12 割は圓板ナテ、底盤、透かし、 繪文風状。底盤付近から底 盤はナテ	割は圓板ナテ、底盤、透かし、 繪文風状。底盤付近から底 盤はナテ	底 (2.5Y6/1)	底 (7.5Y6/1)	6mm以下の暗・灰・白・黒・褐色粉を含む 2mm以下の黑色粉を含む	消色器、割部最大径 (推定9.6cm)		
200	高坪	底盤	SA12 割の後端ミガキ	ケズリ、支承部を斜めな 工具で削除	に bei 黄褐 (10YR6/4)	に bei 黄褐 (10YR6/4)	5mm以下の底灰・暗赤褐・灰褐色粉を含む			
202	妻	底盤-底 盤付近	SC21 口径(21.0)	口縁部は工具ナテ-底盤ミガ キ。鋸部は底盤ミガキ	口縁部は工具ナテ底盤ミガ キ。鋸部は工具斜方角のナ テ	に bei 黄褐 (10YR6/4)	褐 (7SYR7/6)	1~2mmの褐色光沢粉、1mmの乳白色、 赤褐色粉を含む	底盤上部にスズカ葉、 内面: 一部黒斑あり	
203	妻	割部-底 盤付近	SC21 稲立ミガキ	工具斜方角のナテ-ミガ キ	工具斜方角のナテ-ミガ キ	明褐色 (10YR6/6)	明褐色 (10YR7/4)	3~5mmの褐色粉を多く含む	一層スズカ葉、内面: 底盤付近に黒斑・變 化物、割部に黒斑	

第17表 古墳時代遺構内出土土器観察表(4)

No.	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)	手法・調整・文様			色調	埴土の特徴	備考
					外面	内面	外面			
204	甕	口縁部 ~底端付近	SC15	口径(20.0) 底径(6.5)	口縁部は風化のため調整不良、鋸部は工具模ナメ	口縁部は風化のため調整不良、鋸部は工具模ナメ	底白 (10YR7/2)	にいし黄褐 (10YR7/4)	1~5mmの赤褐・褐灰色を少し含む	断面にスッペ付、内面底端付近に一箇所
205	甕	鋸部	SC15		工具模ナメ、鋸部さく痕	工具模ナメ	底白 (2.5YR-2)	にいし黄褐 (10YR7/4)	1~5mmの赤褐・白灰色を少し含む	
206	小型甕	口縁部	SC15	口径(4.4)	ナメ	口縁部に風押され、ナメ	にいし黄褐 (10YR7/4)	にいし黄褐 (10YR7/4)	4mm以下の赤褐・灰白色、微細な粒状を含む	外・内面: 黒変
207	小型丸	鋸部~鋸 底部	SC15		工具による鋸ナメ後にミガキ	鋸部は工具ナメ、鋸底は	底青 (2.5Y7/3)	底青 (10YR8/4)	2mm以下の灰・褐色、微細な光沢有り含む	

第18表 古墳時代包含層出土土器観察表(1)

No.	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)	手法・調整・文様			色調	埴土の特徴	備考
					外面	内面	外面			
208	甕	口縁部 底部	C-4	口径22.4 底径6.7 高さ28.05	口縁部は工具模ナメ、鋸部は工具模ナメのミガキ、底部は工具ナメ	口縁部は底模ナメ・鋸方向ナメ 底に指痕有り、鋸部は工具 鋸方向ナメ、底部は工具 鋸方向ナメ	底青 (2.5Y7/4)	底青 (2.5Y7/3)	7mm以下の褐色を多く、4mm以下 の灰白色、微細な黑色光沢、透明 底全体黒変、内面 底に黒変	口縁部にスッペ付、 底に光沢有り含む
209	甕	口縁部~ 鋸部	C-1	口径(22.5)	口縁部はナメ、口縁部は工具 にいし黄褐のナメで、鋸部は工具 にいし黄褐のナメで	口縁部は底模ナメ・鋸方向ナメ 鋸部は工具による削、削 鋸部は工具鋸方向ナメのナメ	青 (2.5YR6/6)	青 (2.5YR6/6)	4mm以下の青・灰・灰白色、1mm 以下の光沢有りを含む	外輪部に黒変、内面: 口縁部に黒變に黒変
210	甕	口縁部~ 鋸部	B-7	口径(17.6)	口縁部は鋸ナメ、鋸部は工具 にいし黄褐のナメで	口縁部は底模ナメ・鋸方向ナメ 鋸部は工具鋸方向ナメのナメ	青 (2.5YR7/6)	青 (10YR7/4)	1~3mmの青・灰・褐色を含む	
211	甕	口縁部~ 鋸部	B-7	口径(19.75)	口縁部は方角のハケナメ、鋸 底部は工具ナメ、ナメナメ	口縁部は底模ナメ・鋸方向ナメ 鋸部は工具ナメ	にいし黄褐 (10YR7/4)	にいし黄褐 (10YR7/4)	4mm以下の灰青色・黒変にいし黄 褐色を含む	スッペ付
212	甕	口縁部~ 鋸部	C-4	口径(21.4)	口縁部はナメ、鋸部上部 横にカギ、鋸部下部は黒化等 工具鋸方向ナメ	口縁部は底模ナメ、鋸部は 底青 (2.5YR2/1)	底青 (2.5YR6/6)	1~4mmの黒變、褐灰色を多く含む 工具鋸方向ナメ	断面に一部スッペ付、 内面: 鋸部に黒變	
213	甕	口縁部~ 鋸部	B-7 C10r	口径(22.0) 底径(7.5)	口縁部は方角のハケナメ、鋸 底部は工具鋸方向ナメ	口縁部・鋸部は底模ナメ 鋸部は工具鋸方向ナメ	にいし黄褐 (10YR7/6)	明黄色 (10YR7/6)	3mm以下のにいし黄・黒變、黒變色 有り含む	スッペ付
214	甕	口縁部~ 鋸部	C11r	口径(24.0)	口縁部は工具模ナメ のナメナメ、鋸部は工具 鋸方向ナメ	口縁部は底模ナメ・鋸方向ナメ 鋸部は工具ナメ	灰青色 (10YR5/2)	にいし黄 (2.5YR7/4)	1mm程度の灰白・褐色を多く含む	スッペ付
215	甕	口縁部~ 鋸部	C11r	口径(21.2)	口縁部は工具模ナメ	口縁部は工具模・鋸方向ナメ 鋸部は工具ナメ	青 (2.5Y7/3)	にいし黄褐 (10YR7/3)	1~2mmの青・灰白色を多く含む	一部スッペ付、内面: 一部黒變
216	甕	口縁部	C-4		工具模ナメ	工具模ナメ	にいし黄褐 (10YR6/4)	浅黄褐 (10YR6/6)	3mm以下の青・褐色を多く含む	スッペ付
217	甕	底部	B-2	底径7.5	底に斜方向のミガキ、底部は 工具ナメ	工具不完全のハケナメ、底 底部は粗ナメ	青 (2.5YR6/6)	青 (2.5YR6/6)	5mm以下の灰白色、1mmの黒變色 外・内面: 一部黒變	
218	甕	底部	B-7	底径2.6	黒化気味だが工具模ナメ	工具模ナメのナメ	底青 (2.5YR7/8)	底青 (2.5YR7/6)	5mm以下の青・褐色を多く 含む	内面: 黑變
219	甕	底部	B	底径5.1	丁寧な工具模ナメ	底附近は風化して黒變 底に粗模、底部は鋸ナメ 底に粗ナメ	にいし黄 (10YR7/3)	底青 (2.5YR7/3)	5mm以下の青系・灰褐・褐色を多く 含む	スッペ付
220	甕	口縁部~ 鋸部	B-7	口径(11.7)	口縁部は下單なナメ、鋸部は 工具模ナメ、鋸部下半は 底に粗ナメ	工具模ナメ、鋸部下半は 底に粗ナメ	青 (2.5YR6/6)	にいし黄 (10YR6/4)	4mm以下の赤褐・褐灰色を少し含む 内面: 一部黒變の付 底: 外面・一部黒變	
221	甕	口縁部~ 鋸部	C-4	口径(10.9)	口縁部はナメ、鋸部は鋸方向 のナメナメ	工具模ナメ	にいし黄褐 (10YR7/4)	にいし黄褐 (10YR7/3)	2~3mmの赤褐・灰白・褐灰色を多く 含む	断面にスッペ付
222	甕	口縁部~ 鋸部	B-7	口径(22.4)	工具模ナメ、刻目突出文	工具模ナメ	にいし黄 (10YR7/4)	にいし黄褐 (10YR7/4)	1~3mmの灰白・褐色を多く含む	スッペ付、内面: 一部 黒變
223	甕	口縁部~ 鋸部	C-1	口径(9.2)	口縁部はナメ、鋸部は底模 ナメ	工具模ナメ	にいし黄 (10YR7/4)	明黄色 (10YR6/4)	1~3mmの乳白色を多く、1mm以下 の黒變を含む	
224	甕	口縁部~ 鋸部	C-1	口径(13.2)	工具模ナメ	工具模ナメ、鋸部は横にミガキ	青 (2.5Y7/4)	にいし黄 (2.5Y6/3)	5mm以下の明赤色、微細な黒色 光沢・透明光沢を含む	
225	甕	口縁部	C-4		口縁部に4条の摩擦跡付 工具による横ナメ、粗ナメ	横ナメ、黒化のため調整 粗ナメ	青 (2.5YR7/6)	青 (2.5Y7/4)	6mm以下の灰色、5mm以下のにいし 褐色を含む	スッペ付
226	甕	口縁部 付近~鋸 底部	C-4	新規向の工具ナメ、竹節刻 突文	工具模ナメ	横 (2.5YR7/6)	明黄色 (10YR7/6)	1mm以下のにいし黄・黒・黑色光 透明光沢を含む	スッペ付	
227	甕	口縁部	C-4		横ナメ後に山形の縫合文	横・斜方向のナメ	にいし黄褐 (10YR6/4)	にいし黄褐 (10YR6/4)	4mm以下の灰白・明赤色、黒變色を 含む	内面: 一部黒變
228	甕	口縁部	C-1		横ナメ後に5条の縫合状付 文と段差、横・斜・伸張	横ナメ	青 (10YR6/3)	にいし黄褐 (10YR7/3)	3mm以下の横・灰白・褐灰色を多く 含む	内面: 一部黒變
229	甕	鋸部~底 部	B-8		斜方向のミガキ	風化気味だが鋸部は丁寧 な横ナメ	青 (2.5YR6/6)	青 (2.5YR6/6)	4mm以下の赤褐・灰色を少し含む 底部: 黑變色	黒變物付着、外面: 底部: 黑變色
230	手すり 柱	口縁部 先端	B	口径4.1 底径2.6 高さ4.65	口縁から鋸部は粗ナメ、底部 は粗いナメ	底青 (SYR7/6)	底青 (SYR7/6)	2mm以下の灰白・明赤色、白灰色を 含む	外・内面: 一部黒變、 底部: 黑變色	
231	鉢	口縁部 底付	C-4	口径(26.5)	口縁部付近に工具模ナメ、鋸 底付に風化気味だが縫合ナメ	有 (SYR7/8)	有 (SYR7/7)	1~2mmの赤褐・赤褐色を多く含む	外・内面: 一部黒變	
232	小型鉢	口縁部~ 底部	C-4	口径(10.75)	口縁部は工具模ナメ、鋸部は 工具模・鋸ナメ	口縁部は工具模ナメ、鋸部 は工具鋸方向のナメ	にいし黄褐 (10YR7/6)	明黄色 (10YR7/6)	4mm以下のにいし黄・黒・黑色光 透明光沢を含む	内面: 一部黒變 底部: から底面にスッペ付 外面: 一部黒變

第19表 古墳時代包含層出土土器観察表(2)

No.	器種	部位	出土 地点	法番 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
233	小型丸 口縁部-底面	B-3	口径(11.2) 後に縦二戈キ、斜面はナデナ子に無二戈キ	口縁部はナデ、口縁部は斜方 向に縦二戈キ、斜面はナデナ子に無二戈キ	口縁部はナデナ子後に變え たり、斜面は風化灰味だ が横ナ子	明赤褐 (2.5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR6/6)	2mm以下の黒・白灰・褐色灰色を含む		
234	小型丸 口縁部-底面	C11y	斜面は横ナ子間に縦一戈キ、直面はナ子	斜面は横ナ子間に縦一戈キ、直面はナ子	風化灰味だが斜面は指ナ子 で、直面は指捺さえ	に少し褐色 (7.5YR6/4)	褐 (SYR7/6)	2mm以下の黒・赤褐色を少し含む	スヌ付裏	
235	小型丸 總部-底面	C-2	縦二戈キ、直面は斜面は工具による不定方向のナ子	斜面は横ナ子、直面は斜面は工具による不定方向のナ子	斜面は横ナ子、直面 單面磨	に少し青味 (10YR6/6)	に少し青味 (10YR6/4)	1-3mmの赤褐・褐色灰色を含む	内面: 茶化物 材質、外面:一部黒斑	
236	高杯 斜面	C11y	口径(19.6) 横二戈キ	横二戈キ・丁寧なナ子	横二戈キ・丁寧なナ子	に少し褐色 (7.5YR6/4)	に少し褐色 (7.5YR6/4)	3mm以下に少く、褐・暗赤褐・赤、黒褐色を含む	外・内面: 茶斑、黒斑	
237	高杯 斜面-縫合部	C-3	底径(12.2) 不定方向のミナ子	縫合は工具横ナ子、縫合は工具横ナ子	縫合は工具横ナ子、縫合は工具横ナ子	に少し青褐色 (2.5YR6/4)	に少し青褐色 (10YR6/6)	1-2mmの黑色光沢・赤褐色を含む	外・内面: 黒斑	
238	高杯 斜面-縫合部	C-4	底径(10.0) 縫合は底と戈キ、縫合は工具横ナ子	縫合は底と戈キ、縫合は工具横ナ子	縫合は底ナ子、縫合は工具横ナ子	浅黄褐 (10YR7/4)	浅黄褐 (10YR6/4)	4mm以下に少く、褐・灰・白灰色、黒褐色を含む	外: 黒斑、内面: 一部黒斑	
239	高杯 斜面	B-7	工具による新方向のナ子・縫合	工具による新方向のナ子・縫合	縫合は工具ナ子、縫合は工具ナ子	浅青褐 (10YR8/4)	浅青褐 (7.5YR6/6)	1.7cm×1.4cmの赤白色斑、5mm以下 の赤褐・灰白色斑、表面的な透明白光沢		
240	高杯 斜面	B-7	縦二戈キ	ナ子	縫合	明赤褐 (SYR7/6)	明赤褐 (10YR7/6)	3-7mmの青褐色斑、2-3mmの褐灰 色斑を含む		
241	耳身 受盤	B	受盤径(13.0) 回転ナ子	回転ナ子	底	灰 (SY5/1)	底 (SY5/1)	底 (10YR6/6)	底 (10YR6/6)	底
242	耳身 天井部	C-3	天井部はへう切り、回転ナ子	回転ナ子	底	灰 (SY6/1)	底 (SY6/1)	底 (10YR6/6)	底 (10YR6/6)	底
243	耳身 受盤-受盤付近	B	受盤径(12.0) 底部付近はへう切り、受盤付近はへう切り	受盤ナ子、受盤付近は受盤ナ子、底部付近はへう切り、受盤付近はへう切り	底 (SY6/1)	底 (SY6/1)	底 (10YR6/6)	底 (10YR6/6)	底 (10YR6/6)	底
244	鉢 口縁部	B4y-C-2	口径(24.4) 回転ナ子、灰被り	回転ナ子、灰被り	底 (10GYS/1)	オーリーブ灰 (2.5GY6/1)	2mm以下の灰白・緑灰色を含む		底 (10GYS/1)	底

第20表 古墳時代構内出土石器観察表

No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
105	敲石	砂岩	SA2	10.80	10.00	5.30	866.5	磨石からの転用か
118	敲石	砂岩	SA4	13.28	9.12	5.00	799.6	
119	石皿	尾鈴山酸性岩類	SA4	16.20	14.30	3.70	1434.7	
120	敲石	砂岩	SA4	18.15	8.15	5.10	1185.2	
127	敲石	砂岩	SA6	15.80	10.80	7.10	1668.2	
128	台石	砂岩	SA8	41.00	16.00	7.90	8100.0	
150	敲石	砂岩	SA9	8.90	5.40	4.90	270.3	
151	台石	ホルンフェルス	SA9	16.20	10.65	5.50	1680.6	
152	石錐	砂岩	SA9	6.80	6.30	2.50	138.5	
153	台石	砂岩	SA9	28.40	24.00	6.80	7000.0	
189	敲石	砂岩	SA10	15.90	6.60	5.50	823.9	磨石からの転用か
190	石錐	砂岩	SA10	6.40	3.60	1.40	51.3	
191	砥石	ホルンフェルス	SA10	14.50	4.40	4.20	501.8	
192	敲石	尾鈴山酸性岩類	SA10	13.10	11.65	6.00	1321.8	磨石からの転用か
193	敲石	砂岩	SA10	7.95	7.35	3.20	263.4	
195	石錐	尾鈴山酸性岩類	SA5	6.20	5.00	1.60	75.3	
201	台石	砂岩	SA12	24.80	13.10	7.65	4797.1	石皿としても使用か

第21表 古墳時代包含層出土石製装飾品観察表

No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
245	勾玉	蛇紋岩	B-5	1.28	0.73	0.31	0.4	
246	勾玉	ホルンフェルス	B-7	2.40	1.60	0.40	1.8	
247	装飾品	赤色頁岩	B-7	4.90	1.30	0.50	2.6	
248	車輪石	緑色凝灰岩	C-3	—	—	—	(16.0)	残存率1/5

第7節 古代～近世の遺構と遺物

古代～近世の調査の概要

表土(第I層)を剥いだ後、遺構検出を行っていくと、表土直下で調査区全体にわたり多数のピットを検出し、掘立柱建物跡を11棟確認した。また、柱穴の埋土中や周囲の包含層から古代の土器や中世の土器・陶磁器・古錢、近世の陶磁器・古錢が出土している。

次に掘立柱建物跡と遺物の詳細を記述する。

1 掘立柱建物跡 (SB 第22表)

表土(第I層)を剥いだ後、遺構検出を行っていくと、表土直下で多数のピットを検出した(第54・55図)。そのピットの大半は円形で、径は約30cmを測る。そのピットの中で、配置や埋土等を検討した結果、C-1区を中心に掘立柱建物跡を11棟を確認した。ただし、検出面が表土直下であり、柱穴から出土する遺物についても古代～近世の遺物が出土しており、時期が不明確である。

SB1 (第56図)

B-2区で検出され、主軸は北から15°西に振れる。他の建物SB2～11から南に離れて位置しており、主軸の方位も異なる。桁行2間(約4.66m)、

梁行2間(約3.92m)で、身舎の面積が約18.27m²を測る。P6が方位軸から東に振れているが、全体的に均整のとれた配置となっている。柱穴P2・P3・P5の上部から根固めの石と考えられる石が出土した。

SB2 (第56図)

C-1区で検出され、主軸は北から23°東に振れる。P3～P7は1次調査のトレンチで検出され、検出面が下がっている。桁行3間(約5.9m)、梁行2間(約3.6m)で、身舎の面積が約21.24m²を測る。桁行のP2～P3間がP1～P2間とP3～P4間に比べて間隔が狭い特徴が見られ、後述するSB7と対照的である。梁行のP5・P10は他の柱穴と比較して浅い。柱穴P3・P6の底面にしまった土が見られた。

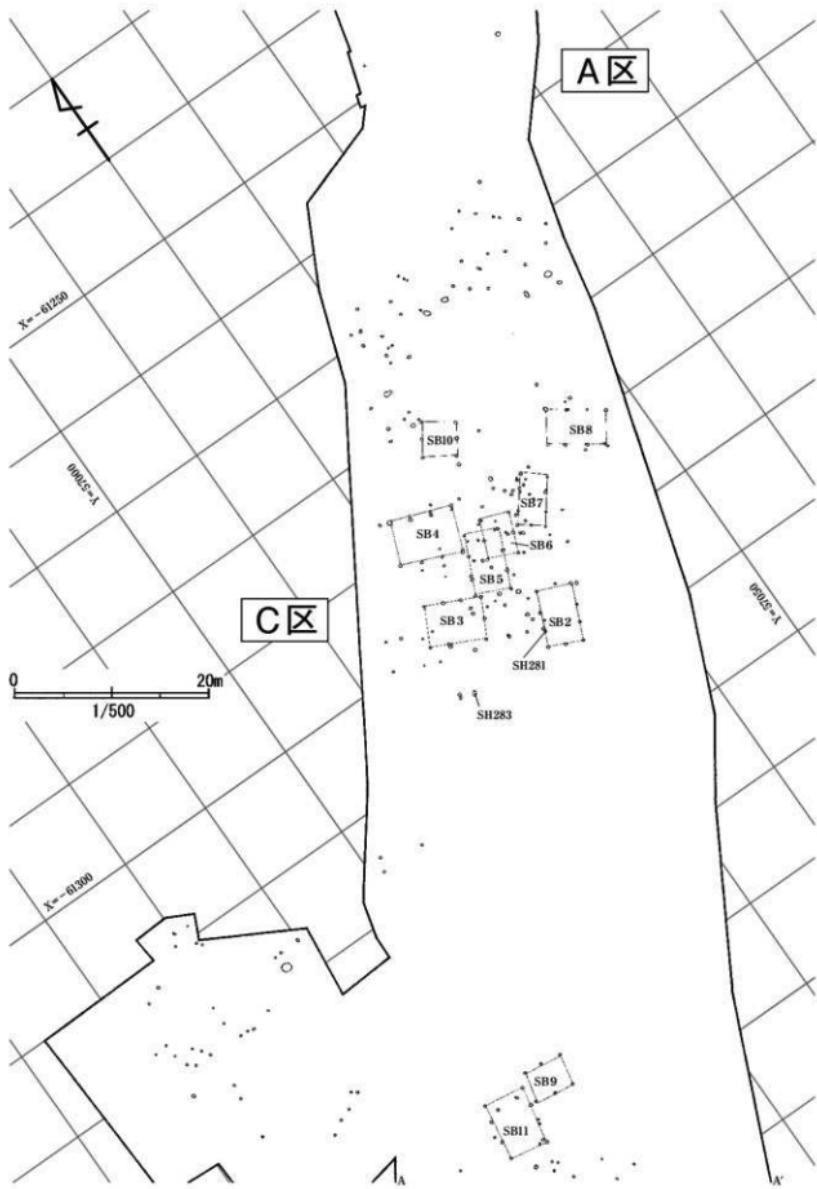
SB3 (第57図)

C-1区で検出され、主軸は北から65°西に振れる。桁行3間(約5.96m)、梁行2間(約4.3m)である。身舎の面積が約25.63m²を測る。柱穴は西側の中央の1本を検出していないものの、均整のとれた柱穴の配置となっている。P6を除く柱穴から根石や根固め石と考えられる礫が出土した。P5の底には30cm大の扁平な礫が敷かれている。

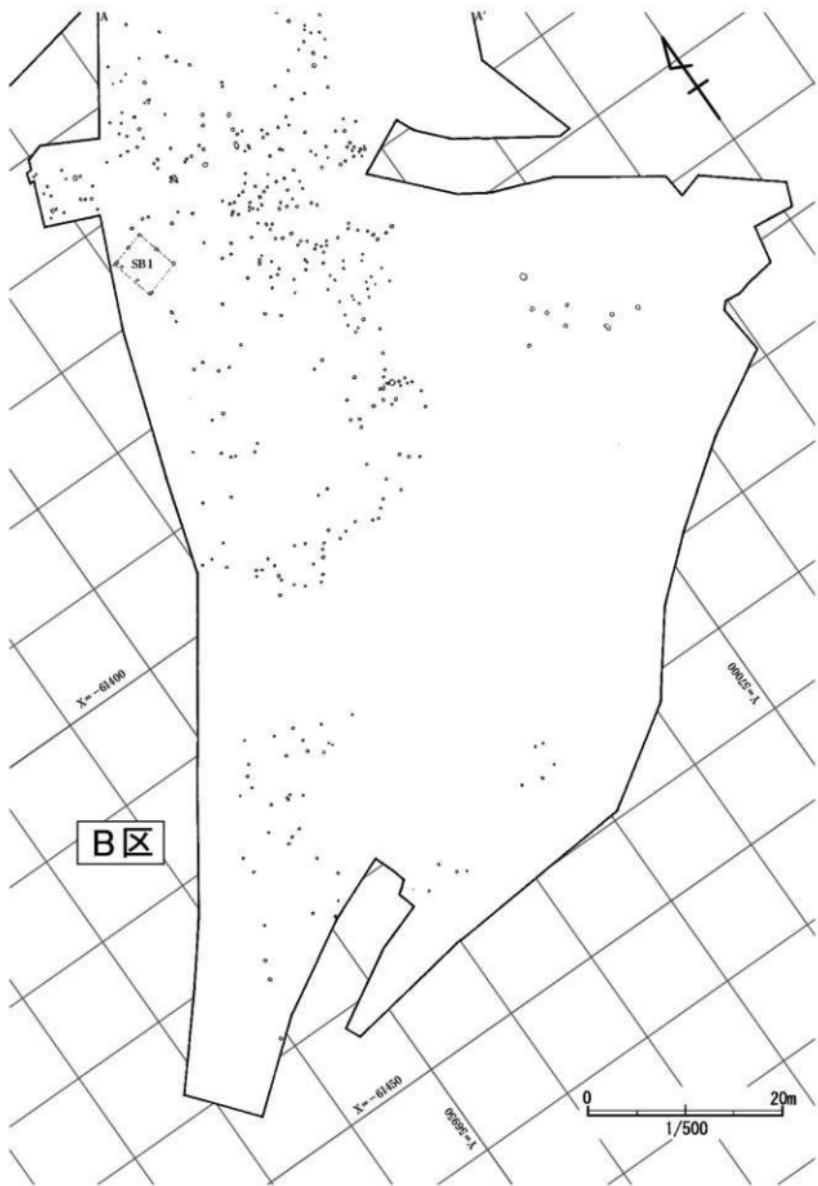
第22表 掘立柱建物跡観察表

出土位置 (区)	主軸	グループ	身舎面積 (m ²)	桁			梁			備考	
				規格	桁行	平均柱間	規格	梁行	平均柱間		
SB1	B-2	N-15°-W	D	18.27	2間	4.66	2.33	×2間	3.92	1.96	P2・P3・P5に根固め石
SB2	C-1	N-23°-E	A	21.24	3間	5.90	1.97	×2間	3.60	1.80	P3・P6の底面に根固め石あり、P6から土師器片
SB3	C-1	N-65°-W	A	25.63	3間	5.96	1.99	×2間	4.30	2.15	P6を除く柱穴に根石や根固め石
SB4	C-1	N-20°-E	A	34.00	3間	6.80	2.27	×1間	5.00	5.00	P4から近世の楕、P3・8から土師器片
SB5	C-1	N-23°-E	A	23.56	3間	6.30	2.10	×1間	3.74	3.74	P2に根固め石、P4の底に硬化面、P5・7から土師器片
SB6	C-1	N-22°-E	A	13.52	2間	4.20	2.10	×1間	3.22	3.22	P3に根固め石、P6から土師器片
SB7	C-1	N-37°-E	B	15.38	3間	5.34	1.78	×2間	2.88	1.44	P2から中世の滑石製石錠、P4・8から土師器片
SB8	C-1	N-55°-W	B	23.44	3間	6.30	2.10	×1間	3.72	3.72	P4・6から土師器片、P7から中世青磁、P8から古代土師器
SB9	C-3	N-80°-W	C	12.80	2間	4.00	2.00	×1間	3.20	3.20	P6柱痕跡あり
SB10	C-1	N-34°-E	B	12.04	2間	3.50	1.75	×1間	3.44	3.44	P2から土師器片
SB11	C-3	N-10°-E	C	13.04	3間	6.12	2.04	×1間	2.13	2.13	

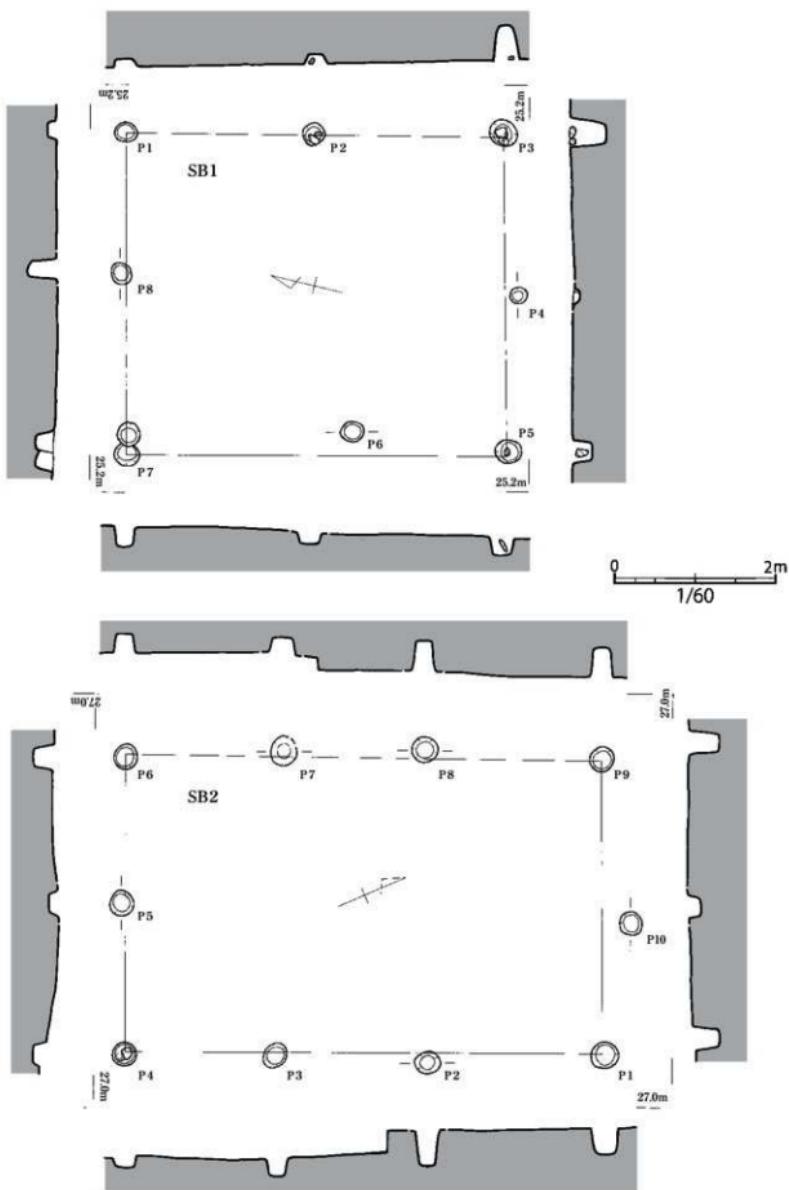
*この節で扱う柱間は、柱穴の上端の中心を結んだものである。



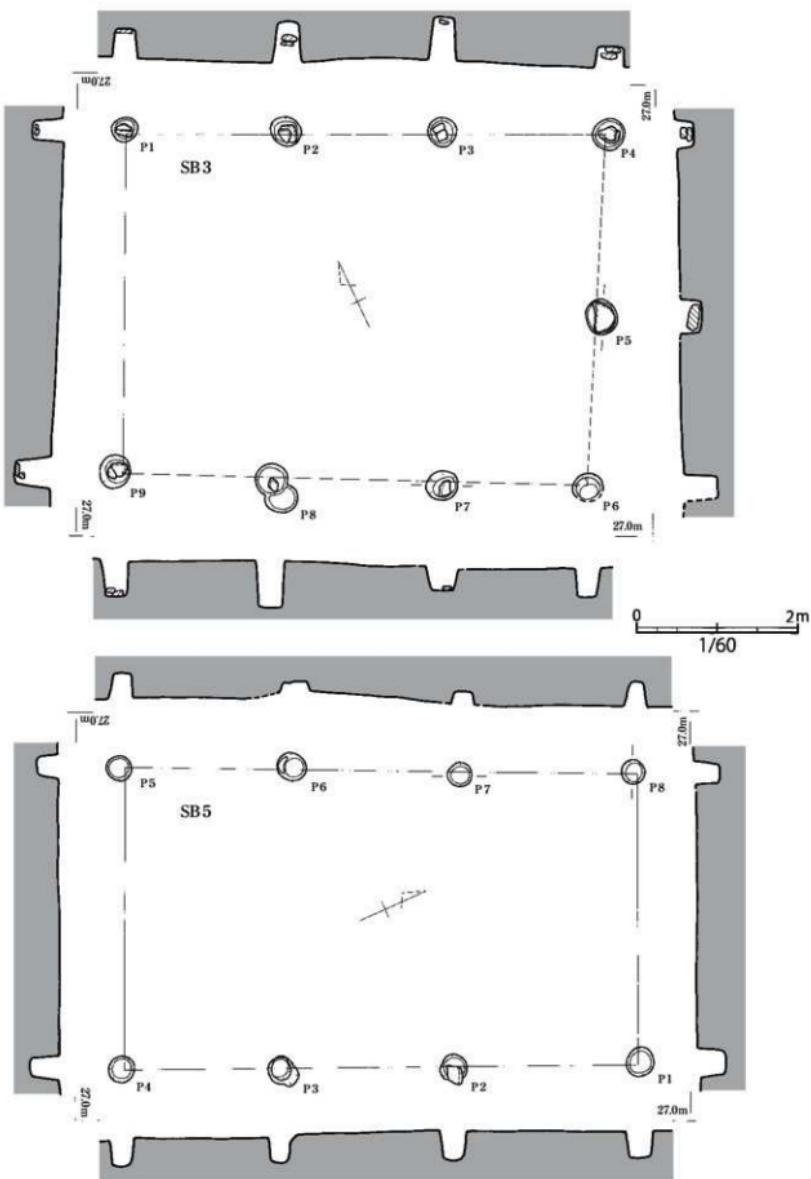
第 54 図 古代・中世・近世遺構配置図（1）



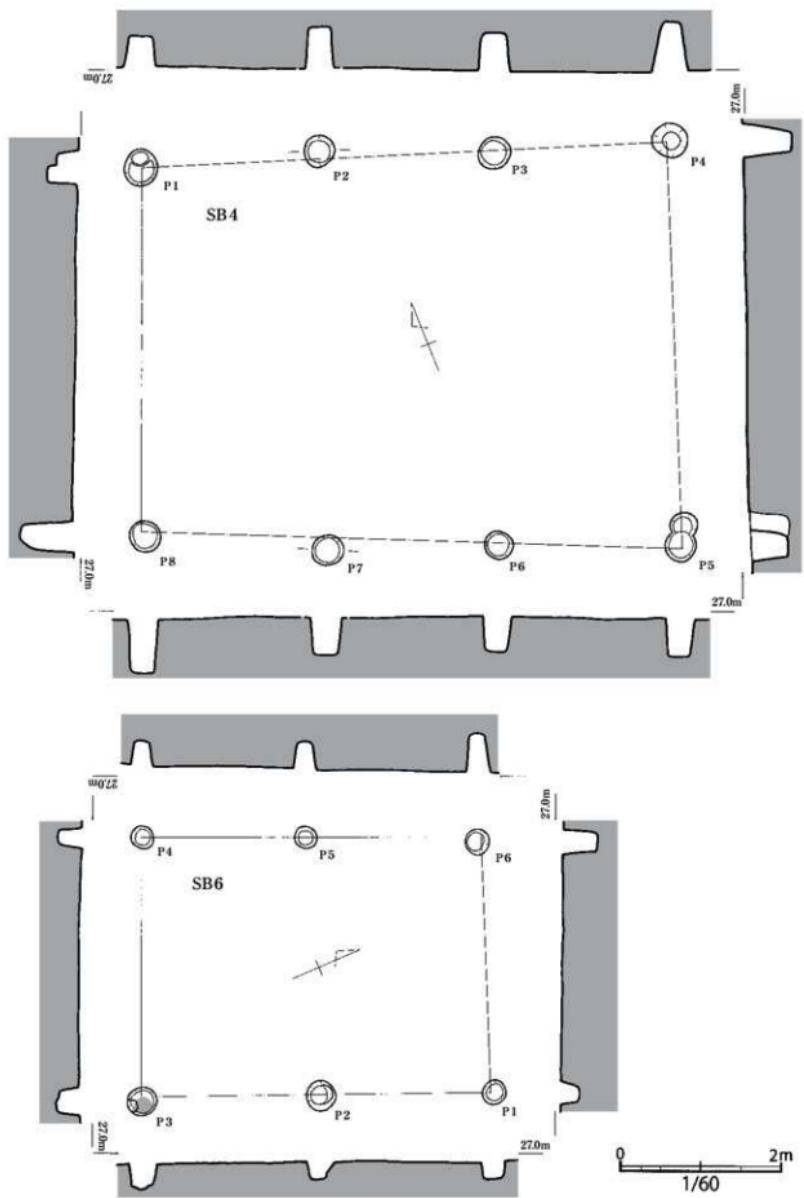
第55図 古代・中世・近世遺構配置図（2）



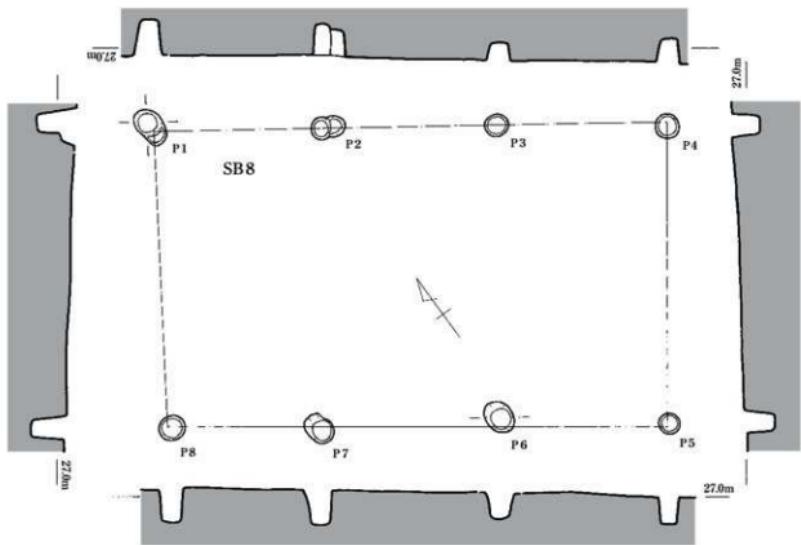
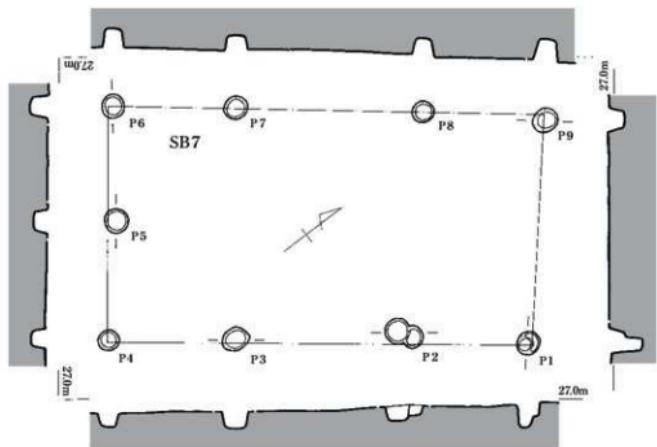
第56図 1号・2号掘立柱建物跡実測図



第 57 図 3号・5号掘立柱建物跡実測図



第58図 4号・6号掘立柱建物跡実測図



0 2m
1/60

第59図 7号・8号掘立柱建物跡実測図

SB 4 (第58図)

C-1区で検出され、身舎の面積が約34.0m²を測り、今回確認された掘立柱建物跡11棟の中で最大である。主軸は北から20°東に振れる。桁行3間(約6.8m)、梁行1間(約5.0m)で、西側の梁行間が東側と比較して約0.5m短いため歪な形を呈する。P1は途中にテラスをもつ2段ピットである。SB4と近接して並ぶピットもあり(第54図)、庇をもつ建物である可能性もある。P2から中世の石鍋の胴部片293(第63図)が出土している。

SB 5 (第57図)

C-1区で検出され、主軸は北から23°東に振れる。SB6とはほぼ平行方向に切り合う。梁行1間(約3.74m)、桁行3間(約6.3m)である。身舎の面積が約23.56m²を測る。柱穴P2から根固めの石と考えられる石が出土し、P3の底に硬化面が見られる。P3の口の部分が東側に開いており、柱を抜き取るとときに生じたものであると考えられる。

SB 6 (第58図)

C-1区で検出され、主軸は北から22°東に振れる。SB5とはほぼ垂直方向に切り合う。桁行2間(約4.2m)、梁行1間(約3.22m)である。身舎の面積が約13.52m²を測る。柱穴P3から根固めの石と考えられる石が出土している。

SB 7 (第59図)

C-1区で検出され、主軸は北から37°東に振れる。桁行3間(約5.34m)、梁行2間(約2.88m)であるが、柱穴は梁行東側の中央の1本を検出していない。P7が方位軸からわずかに振れるものの、桁行8基の柱穴が対辺の柱穴と均整よく対峙して配置されている。桁行のP2～P3間がP1～P2間とP3～P4間に比べて間隔が広い特徴が見られ、SB2と対照的である。身舎の面積が約15.38m²を測る。P7は途中に三日月状のテラスをもつ2段ピットである。P4から近世の碗の高台297(第63図)が出土している。

SB 8 (第59図)

C-1区で検出され、主軸は北から55°西に振れる。桁行3間(約6.3m)、梁行1間(約3.72m)で、身舎の面積が約23.44m²を測る。P6が方位軸からわずかに振れる。P1は2段ピットである。P7から青磁の皿277(第63図)、P8から古代の土師器が出土している。

SB 9 (第60図)

C-3区で検出され、SB11と隣接するが、他の掘立柱建物群からは離れて位置する。主軸は北から80°西に振れ、桁行2間(約4.0m)、梁行1間(約3.2m)である。身舎の面積が約12.80m²を測る。P1の位置が東方向にややずれており、梁行と桁行の軸が直交せず、やや歪である。柱穴P6では柱痕跡を検出している。

SB10 (第61図)

C-1区で検出されたが、SB10は1棟だけやや北に離れて位置する。身舎の面積が約12.0m²を測り、今回確認された掘立柱建物跡11棟の中で最小である。主軸は北から34°東に振れる。桁行1間(約3.50m)、梁行2間(約3.44m)である。P4が方位軸からわずかに振れる。

SB11 (第60図)

SB9と同様にC-3区で検出され、主軸は北から10°東に振れる。桁行3間(約2.04m)、梁行1間(約2.13m)である。身舎の面積が約13.04m²を測る。桁行の柱穴が方位軸からわずかに振れるものの、8基の柱穴が対辺の柱穴と均整よく対峙して配置している。

ここで、掘立柱建物跡の特徴を整理する。

建物の間取りについては、

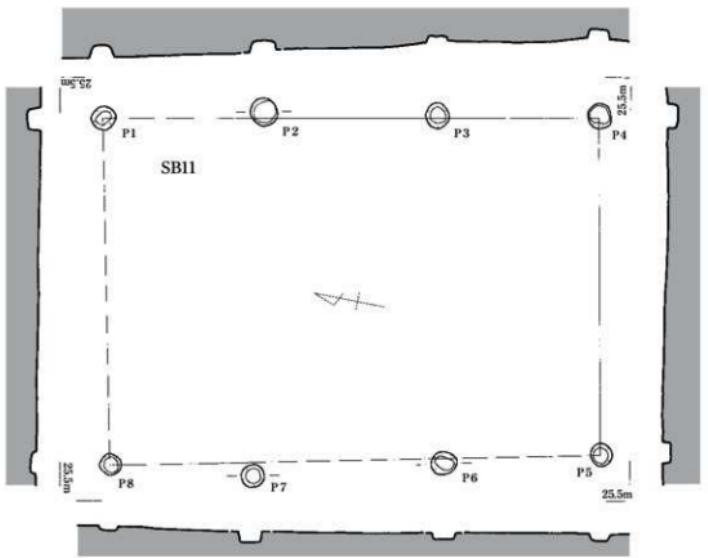
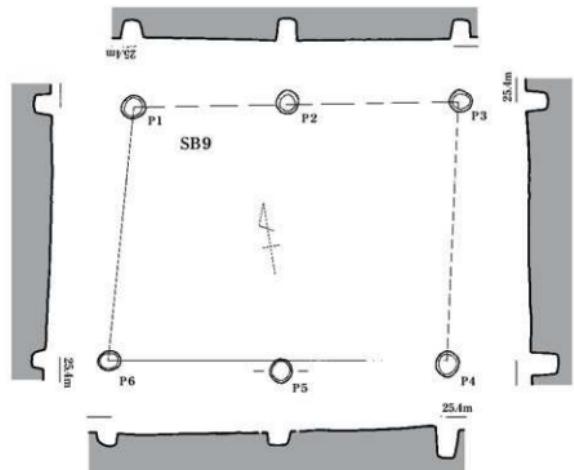
桁行3間×梁行2間が3棟(SB2・3・7)

3間×1間が4棟(SB4・5・8・11)

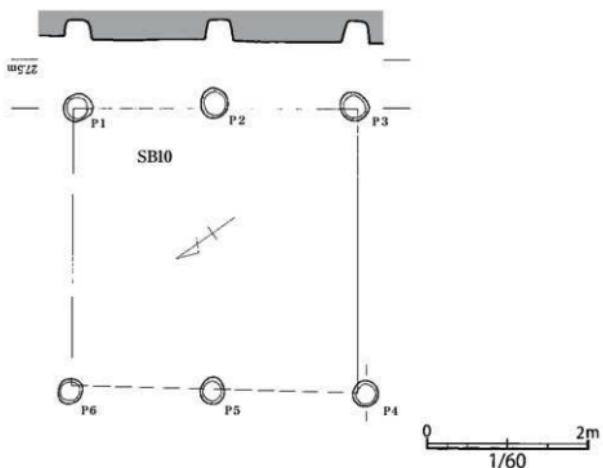
2間×2間が1棟(SB1)

2間×1間が3棟(SB6・9・10)である。

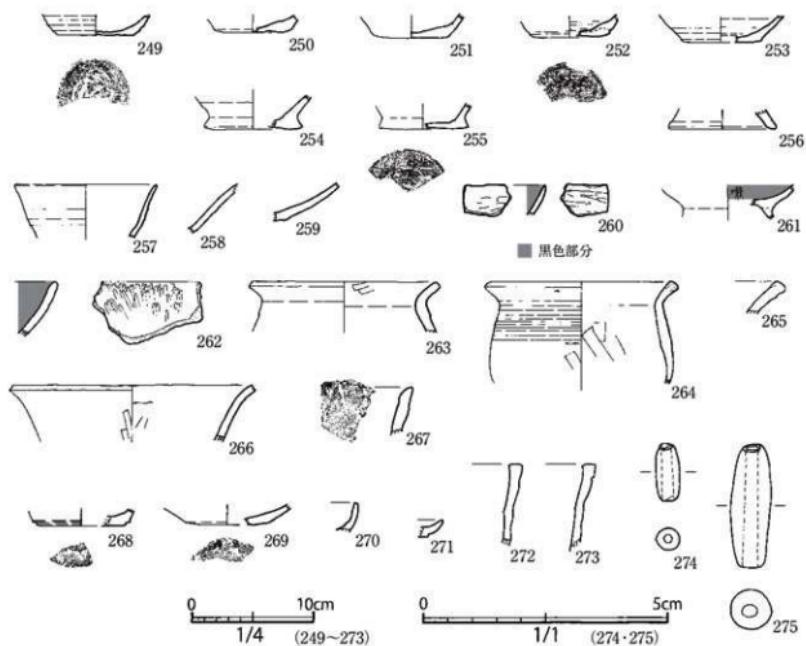
桁行3間の間取りの割合が高い。



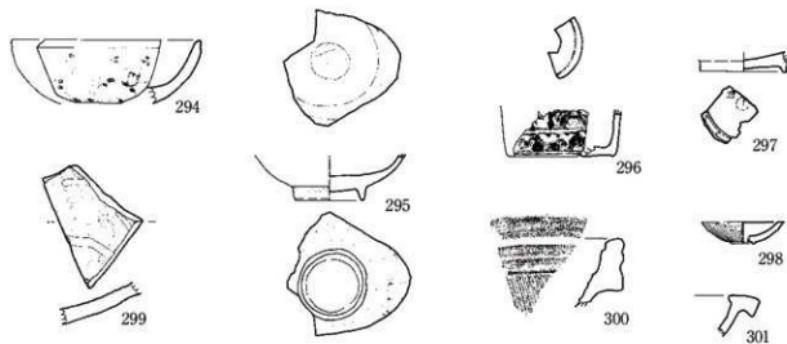
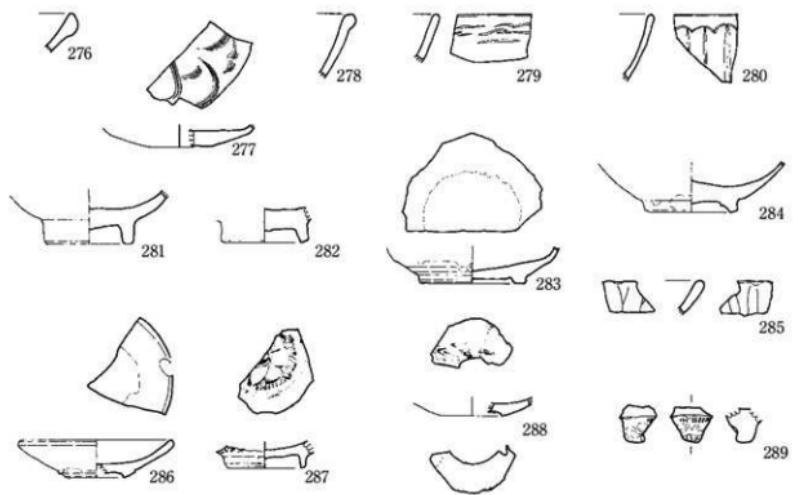
第60図 9号・11号据立柱建物跡実測図



第 61 図 10 号据立柱建物跡実測図



第 62 図 古代および中世出土土器実測図



第63図 中世および近世出土陶磁器および石製品実測図



第64図 中世および近世錢貨拓影

建物の構造については、梁行の長さが桁行柱間より長いにもかかわらず、梁行の間に柱を入れないものが多く存在する。(6棟 SB4・5・6・8・9・10)。また、梁行の一方が2間であるものの、対となる柱を間に入れないものもある(2棟 SB3・7)。

建物の方向については、主軸が概ねN:10°-E(北から東に10°振れる)、N-20°-E、N-35°-E、N-15°-W、N-55°-W、N-65°-W、N-80°-Wの8グループに分類でき、主軸が概ね垂直に交わるものと同一グループとすると。

- グループA N-20°-E、N-65°-W(SB2～6)
B N-35°-E、N-55°-W(SB7・8・10)
C N-10°-E、N-80°-W(SB9・11)
D N-15°-W(SB1)

の4グループに集約できる。

2 遺物

表土中や谷部埋没土、ピットから古代・中世・近世の遺物が出土している。出土量は、古代と中世の土師器が3,420g、中世と近世の陶磁器が3,378g(中世1,232g、近世2,146g)出土している。古代と中世の土師器は多くが細片で時期が不明確なものが多いため一括で重量を測定している。土師器と陶磁器について、時代ごとに詳細を記述する。

<土師器>(第62図)

古代の土師器

249～253は壺である。249～251は底部中央が薄い。252・253は外面体部下端に明瞭な段が見られる円盤状の底部である。254・255は円盤高台付壺で、底部側面が外方に張り出す。256は高台付壺の高台部片で、端部が外反し、その内面が斜め上方に浮き加減となりやや高めである。260～262は黒色土器で、260・262は壺の口縁部、261は高台付壺の高台である。器内面に炭素を吸着させた後ミガキを施している。263・264は甕で口縁部が短く外反しL字状を呈し、口唇部を丸く収める。263は外面がナデで、内面はナデとケズリが認められるが判然としない。264は内面脣部に

ケズリが見られる。265・266は鉢である。266の口唇部は凹線状に窪む。ナデにより窪ませたものである。267は布痕土器である。型作りによる軟焼成の非常に脆い土器である。外器面に指押さえ痕が残り、内器面には布の圧痕を残す。

中世の土師器

268・270・271の底部の切り離しはヘラ切りである。268は壺で、外面体部下端に明瞭な段が見られる円盤状の底部である。269は土師器の皿の底面に板状工具の木口で調整した痕が見られる。270・271は小皿で、270は内湾しながら上方に立ち上がり、271は口縁部が内湾しながら横に開く。272・273は土鍋の口縁部で、外面にスヌの付着が顕著である。274・275は管状土錘で、274は最大長2.35cmと短く、重さ2.1g、275は最大長5.0cm、重さ12.4gで外面を丁寧なナデで調整している。

<陶磁器>(第63図)

中世の陶磁器

276～289は中国産の貿易陶磁器である。276は白磁の碗で、口縁端部を外側に折り返し玉縁状を呈する。277は青磁の皿で高台を持たず、見込みに草花文が施されている。糸切り底の底部のみ無釉である。

278～282は青磁の碗である。278は玉縁状の口縁部を有する丸碗である。279は簡略化された波状の雷文帯を描く。280の外面は簡略化された蓮弁文が施されている。281は見込みに印花文が見られ、高台内面まで釉を施している。282は高台内面にケズリが見られる。見込み部分には釉剥ぎが見られる。

283～288は皿である。283は青磁で、削り出し高台で体部下位から高台内まで無釉である。見込み部分には釉剥ぎが見られる。284は白磁で、高台内面に高台を削り出した際の工具の痕が明瞭に残る。285は白磁の菊皿である。286は白磁で、やや焼成不良である。287・288は青花で、287は高台側面に二重界線、見込みに花文を描く。疊付のみ無釉である。288は碁笥底で、見込みに唐

人図を描く。289は青磁の香炉の脚である。

290は天目茶碗の体部である。291は古瀬戸の瓶子または水注の口縁部である。292は備前系の擂鉢である。293は滑石製石鍋片である。盤状工具による調整痕が見られる。

軸が内面から流れ出ているものの、基本的に無軸である。299は肥前系の皿で、内面は白泥を塗布した後焼き落として波状文を施す。また一部に銅線軸が走る。300は堺の擂鉢、301は薩摩焼の鉢または擂鉢の口縁部である。

近世の陶磁器

294・295は染付の茶碗である。296は斎麦猪口で蛇ノ目高台をもつ。297は肥前系京焼風陶器で、高台内面の中央部に浅い円刻と「清水」の印鉛を施す。298は紅皿で外面は上位に一部

錢貨(第64図)

302は政和通宝(初鋲1,111年)、303は寛永通宝(初鋲1,697年)で、C-1区のピットから出土している。

第23表 古代～中世出土土器観察表

No.	基種	部位	出土 地点	法量 (m)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考
					外側	内面	外側	内面		
249	升 鉢	骨盤・底	SH281 底径(6.1)	体部は直板ナテ、底部はへう 直板ナテ	清黄釉 (7.5YR6/6)	青黄釉 (10YR6/4)	4mm以下の灰・灰白・褐色粒を含む			
250	升 鉢	底盤	C-4 底径(6.5)	体部は直板ナテ、底部はへう 切り縫にナテ	清黄釉 (10YR6/3)	青黄釉 (7.5YR6/4)	1-3mmの褐色粒を多く含む			
251	升 鉢	底盤	C-3 底径6.0	直板ナテ、底部はへう切り 細板ナテ	清黄釉 (7.5YR6/6)	青黄釉 (7.5YR6/4)	3mm以下の灰・灰白・褐色粒。 微細な光沢粒を含む			
252	升 鉢	骨盤・底 鉢	C-3 底径(6.6)	体部は直板ナテ、底盤の正は 工具による横方向のケズリ、底盤はへう切り縫に丁寧なナテ	粗 (SYR7/6)	粗 (SYR7/6)	2mm以下の灰褐・褐灰・黑色光沢粒 を含む			
253	升 鉢	骨盤・底 鉢	C-3 底径(6.7)	斜面部は直板ナテ、底盤はへ う切り縫にナテ	粗 (2.5Y2/4)	粗 (10YR6/4)	1mm以下の茶色粒を含む			
254	升 鉢	底盤	C-3 底径(6.9)	直板ナテ、底盤はへう切り縫 にナテ	灰 (7.5YR6/3)	青黄釉 (7.5YR7/6)	2mm以下の白・褐色粒を多く含む			
255	升 鉢	底盤	C-3 底径(7.4)	直板ナテ、底盤はへう切り縫 にナテ	粗 (7.5YR7/6)	粗 (7.5YR7/6)	3mm以下の白・褐色粒を多く含む			
256	高台 鉢	脚部	C10v 底径(8.3)	直板ナテ、豊富部はナテ	粗 (7.5YR7/6)	粗 (7.5YR6/6)	1mm以下の白・灰白・黑色光沢粒を 含む			
257	升 鉢	口縁部・ 脚部	C-2 口径(11.4)	直板ナテ	清黄釉 (10YR6/4)	清黄釉 (10YR6/4)	1-2mmの黄色粒を含む			
258	升 鉢	骨盤	C-3 ナテ	ナテ	暗黄釉 (10YR7/6)	暗黄釉 (7.5YR7/6)	1mm以下の灰・棕・灰白色粒を含む			
259	升 鉢	骨盤	C-1 蔵ナテ、不定方向のナテ、ナテ、 工具痕	不定方向の丁寧なナテ	灰 (7.5YR7/4)	青黄釉 (7.5YR7/6)	3mm以下の反白・黒褐・灰褐色粒を 含む			
260	升 鉢	口縁部	C-4 口縁部 ナギ	口縁部は楕ナテ、鋼部は楕 ナギ	灰 (10YR5/3)	灰 (2.5Y2/1)	0.5mm以下の乳白色粒を含む			
261	高台 鉢	底盤	C-2 楕ナテ	内裏、藏ニギ	灰 (7.5YR7/4)	灰 (NI 5/1)	1mm以下の褐色粒を含む			
262	升 鉢	口縁部	C-1 口縁部は楕ナテ、口縁部は楕ナテ、 工具による楕ナテ後には内裏、ミガキ ナギ、一部工具痕	内裏、ミガキ ナギ	灰 (10YR7/6)	灰 (10YR7/4)	4mm以下の白・茶褐色粒を多く含む			
263	升 鉢	口縁部・ 脚部	C-4 口径(15.0) 口縁部は楕ナテ、楕ナテ後に工具 ナギ、脚部は楕ナテ	工具ナテ、風化気泡など 工具による楕ナテ	青白 (7.5YR7/6)	青白 (7.5YR7/6)	4mm以下の灰褐・灰褐色粒を多く含む			
264	升 鉢	口縁部	C-3 口径(14.6)	口縁部は楕ナテ、脚部は楕ナテ、 工具による楕ナテ後には内裏、ミガキ ナギ、一部工具痕	青白 (10YR7/4)	青白 (10YR4/4)	2mm以下の茶褐色粒を多く、透明光 沢粒を少し含む			
265	鉢	口縁部	C-4 口縁部は楕ナテ	口縁部は不明瞭な楕ナテ	灰 (SYR6/6)	灰 (7.5YR6/4)	4mm以下の赤褐・赤灰色粒を含む て一部黒斑			
266	鉢	口縁部	C-2 口径(19.7)	口縁部は楕ナテ、工具による 楕ナテ、脚部は斜方 角のナギ	灰 (7.5YR7/4)	灰 (10YR7/4)	4mm以下の白・灰・茶褐色粒を多く、 2mm以下の黑色光沢粒を少し含む			
267	高台 土器	口縁部	C-4 口縁部は直板ナテ、口縁部はナ テ	直板ナテ	灰 (10YR6/4)	灰 (7.5YR6/6)	3mm以下の白・茶色粒を含む			
268	升 鉢	B-7 口径(7.3) x)	体部は直板ナテ、底盤へう切 り	直板ナテ	清黄釉 (10YR8/4)	清黄釉 (10YR8/4)	1mm以下の棕・暗赤褐・灰褐色粒を 含む			
269	升 鉢	B-7 底盤(4.4)	体部は直板ナテ、底盤はへう 切り、板状座盤	直板ナテ、見込みは圓孔、 ナギ後に工具ナギ	灰 (7.5YR7/4)	灰 (10YR7/4)	1-2mmの褐色粒を少し含む			
270	小皿 口縁部・ 脚部	C-1 直板ナテ	直板ナテ	直板ナテ	清黄釉 (10YR8/4)	清黄釉 (10YR8/3)	1mm以下の黒色和を少し含む			
271	小皿 口縁部	B-7	直板ナテ、底盤はへう切り	ナギ	灰 (SYR6/4)	灰 (SYR7/4)	1mm以下の褐色粒を含む			
274	土器 変形	C10v	丁寧なナテ、脚部か、最大長 2.35cm 高さ 0.9cm、重さ 2.18	-	粗 (2.5YR6/6)	-	2mm以下の黑色光沢粒を含む			
275	土器 変形	C-3	丁寧なナテ、最大長5.00cm、高 大軸1.6cm、重さ12.4g	-	灰 (10YR7/4)	-	1mm以下の棕・褐色粒、微細な光沢 粒を含む			

第24表 中世～近世出土陶磁器および石製品観察表

No.	種別	器種	部位	出土 地点	法 量 (cm)	調整		土 焼成	色調		
						外面	内面		外面	内面	
272	土器	土鍋	口縁	B-7		ナデ、指押え	回転ナデ	良 肩錐	にぶい黄 (2.5Y6/3)	淡黄 (2.5Y7/3)	スス付箋
273	土器	土鍋	口縁	B-7		横方向の指ナデ	横ナデ	良 肩錐	黒 (10YR2/1)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	スス付箋
276	白磁	碗	口縁	C-1		施釉、口縁底部玉縁 状	施釉	精良 肩錐	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y7/2)	
277	青磁	皿	底部	SB8 P-7		回転ナデ、施釉、赤 切り底の底部のみ無 施	施釉、見込み 草花文	精良 肩錐	緑灰 (10GY6/1)	緑灰 (10GY6/1)	
278	青磁	碗	口縁	SH283		施釉、青入、口縁端 部玉縁状	施釉、裏面	精良 肩錐	オリーブ灰 (10Y5/2)	オリーブ灰 (10YR6/2)	
279	青磁	碗	口縁	C表探		施釉、簡略化された 草文等	施釉	精良 肩錐	オリーブ灰 (10YR6/2)	オリーブ灰 (10YR6/2)	青文等
280	青磁	碗	口縁	B-7		施釉、青入、運升	施釉、青入	精良 肩錐	灰オリーブ (7.5Y5/3)	オリーブ灰 (10Y5/2)	運升文
281	青磁	碗	底部	C-4	底径(5.0)	施釉、青入、底部は 回転ナデ	施釉、青入、底部は 見込み印花文	精良 肩錐	明オリーブ灰 (5GY7/1)	明オリーブ灰 (5GY7/1)	
282	青磁	碗	底部	B-5	底径(5.2)	施釉、割り出し高台	施釉、見込み 釉剥げ	精良 肩錐	灰オリーブ (5Y5/3)	灰オリーブ (5Y5/3)	
283	青磁	皿	底部	B-7	底径(6.3)	施釉、青入、回転ナデ、 削りだし高台、底部は 無釉	施釉、青入、 見込み釉剥ぎ	精良 肩錐	明緑灰 (5GY7/1)	明緑灰 (5GY7/1)	
284	白磁	皿	底部	B-5	底径(5.0)	施釉、高台内は削り 出の工具痕	施釉	精良 肩錐	明オリーブ灰 (5GY7/1)	明オリーブ灰 (5GY7/1)	
285	白磁	皿	口縁	C-4		施釉	施釉	精良 肩錐	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	菊皿
286	陶器	皿	口縁～底部	B-7	口径(9.2) 底径(4.7) 器高(2.3)	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施 釉	精良 肩錐	灰白 (5Y8/1)	灰白 (5Y8/1)	燒成不良
287	染付	皿	底部	B	底径(4.5)	施釉、高台側面二重 界線	施釉、見込み 花文	精良 肩錐	明緑灰 (7.5GY7/1)	明緑灰 (7.5GY7/1)	青花、高台内面 褐色調：灰白
288	染付	皿	底部	B-7	底径(3.7)	施釉、底部は削り出 し	施釉、青入、 見込み唐人団	精良 肩錐	淡黄 (5Y8/3)	淡黄 (5Y8/3)	青花、菊切底
289	青磁	香炉	脚部	C-2		施釉	施釉	精良 肩錐	明緑灰 (7.5GY7/1)	明緑灰 (7.5GY7/1)	
290	陶器	瓶	脚部	B4y		回転ナデ、施釉	回転ナデ、施 釉	精良 肩錐	灰黄褐 (10YR4/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	天目茶碗
291	陶器	瓶	口縁部	C-1	口径4.2	回転ナデ後に施釉	回転ナデ	精良 肩錐	灰白 (7.5Y7/2)	—	古瀬戸
292	陶器	擂鉢	脚部	B4y		回転ナデ	一単位8条の櫻 目	良 肩錐	灰白 (7.5Y5/2)	灰白 (5Y7/1)	備前系
293	石製品	石鍋	脚部	SB4 P-2		盤状工具痕	盤状工具痕	— —	黒褐 (2.5Y3/1)	灰黄褐 (10YR6/2)	滑石製、スス付 箋
294	染付	碗	口縁～底部	B	口径(11.4)	施釉、文様あり	施釉	精良 肩錐	灰白 (NB/)	灰白 (NB/)	
295	染付	碗	底部	B-7	底径4.1	施釉、文様あり	施釉、文様あり 剥ぎ	精良 肩錐	明緑灰 (5GY7/1)	明緑灰 (5GY7/1)	
296	染付	蓋支度罐	体部～底部	B-7	底径(6.4)	体部は施釉、文様あ り	施釉	精良 肩錐	明緑灰 (10GY8/1)	明緑灰 (10GY8/1)	蛇ノ目高台
297	陶器	碗	底部	SB7 P-4		高台は削り出し、円 刻、「清波」印鉛	施釉	精良 肩錐	淡黄褐 (10YR8/3)	淡黄褐 (2.5Y8/3)	肥前系京焼風
298	陶器	紅皿	口縁～底部	C-1	底径(1.2) 口径(5.0) 器高1.3	無釉、一部施釉	施釉	精良 肩錐	灰白 (NB/)	灰白 (NB/)	
299	陶器	皿	体部	B-8		回転ナデ	施釉	良 肩錐	にぶい黄橙 (5YR5/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	肥前系
300	陶器	擂鉢	口縁部	C-3		施釉、擂目	施釉	精良 肩錐	暗赤褐 (2.5YR3/2)	暗赤褐 (2.5YR3/2)	
301	陶器	抹まろは 擂鉢	口縁	B-8		施釉	施釉	良 肩錐	明赤褐 (2.5YR3/3)	オリーブ灰 (7.5Y2/2)	蘇麻絞

第25表 中世～近世錢貨観察表

No.	銭名	材質	出土地点	計測値				備考
				錢徑 (cm)	孔徑 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
302	政和通宝	銅	C-1ピット	2.45	0.71	0.15	2.3	北宋銭 1111年初鋤
303	寛永通宝	銅	C	2.45	0.54	0.13	1.8	新寛永 1697年初鋤

第8節 その他の遺構と遺物

表土(第Ia層)を重機で剥ぎ、遺構検出を行っていくと、A区の斜面から平坦面にかけて陥し穴状土坑を11基検出した。また、その他の時期不明土坑についても数基検出している。

また、谷部の埋没土を中心には剥片や石核、石錐、石斧、石錘等の石器が多数出土しているが、時期が不明確なものが多いので、第VI層(AT)下位の旧石器時代の石器と遺構から出土した石器以外は、この節にまとめて記述する。

1 陥し穴状土坑(SC 第26表)

A区の陥し穴状土坑については、検出面はすべて第IV層で第V層まで掘り込む。ただし検出面が表土直下であり、埋土に遺物がほとんど絡まないことから時期不明とした。また、立地が谷部の辺の斜面地で、近くにその他の遺構も無いことから狩り場としての陥し穴状の土坑であると考えている(第3図・第65図)。

検出面の平面形態をもとに、

A類・楕円形のもの(9基)

B類・円形のもの(2基)

の2類に分類して、次に詳細を記述する。

<A類>(第66~68図)

SC1

A-3区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸1.5m×短軸0.6mの楕円形で、断面形態は深さ0.9mのやや下彫れの長方形である。底面の両端に径50cm×深さ30cmほどの掘り込みを

もつ。埋土中部に第VI層(AT)を含む。

SC2

A-3区の平坦面で検出し、等高線に平行する。平面形態は長軸1.2m×短軸0.7mの楕円形である。断面形態は深さ0.8mの台形で中ほどが膨らむ。底面の両端に径50cm×深さ30cmほどの掘り込みをもつ。埋土中部に第VI層(AT)を含む。

SC3

A-3区の平坦面で検出し、等高線に平行する。平面形態は長軸2.1m×短軸1.0mの楕円形で、断面形態は深さ1.3mの逆三角形である。中ほどにテラス状の平面を設け、そこから更に深く掘下げている。埋土中部に第VI層(AT)を含む。埋土から貝殻条痕文の土器片304(第66図)を出土した。

SC4

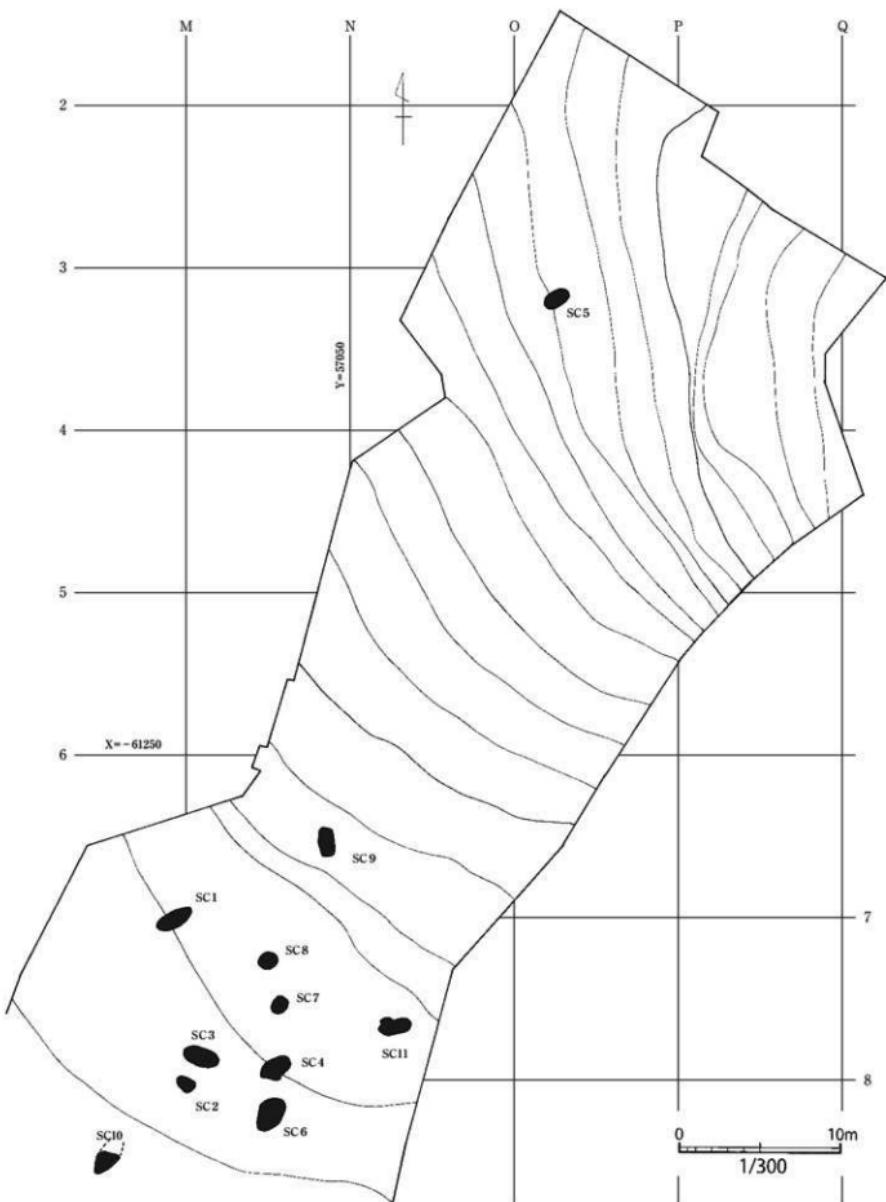
A-3区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸1.7m×短軸1.1mの楕円形である。断面形態は深さ1.2mの台形で中ほどが大きく膨らむ。底面の東側に長径95cm×短径25cm×深さ20cmの掘り込みをもつ。埋土中部から下部に第VI層(AT)を含む。

SC5

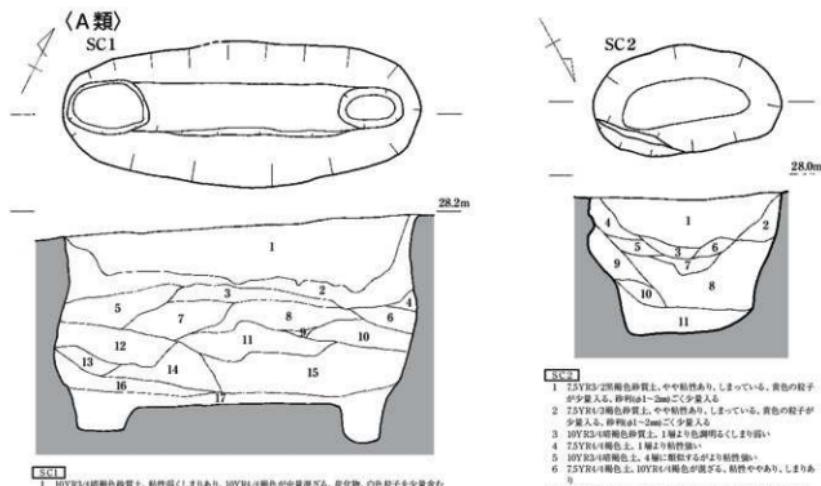
A-1区の斜面で検出し、他の陥し穴とはやや離れて位置する。等高線に直交する。平面形態は長軸1.6m×短軸1.0mの楕円形で、断面形態は深さ0.9mの長方形である。埋土に小礫($\phi 1 \sim 2mm$)を含む。

第26表 陥し穴状土坑観察表

遺構	出土位置 (区)	検出面 (層)	検出面規格 [m]			等高線と の位置	平面形態	断面形態 長軸方向	備考
			長軸	×短軸	×深さ				
SC1	A-3	IV	1.5	×0.6	×0.9	直交	楕円	長方形	底面の両端に掘り込み
SC2	A-3	IV	1.2	×0.7	×0.8	平行	楕円	台形	
SC3	A-3	IV	2.1	×1.0	×1.3	平行	楕円	逆三角形	中央部に深い掘り込み
SC4	A-3	IV	1.7	×1.1	×1.2	直交	楕円	台形	底面の中央から東側に掘り込み
SC5	A-1	IV	1.6	×1.0	×0.9	直交	楕円	長方形	他と離れて位置する
SC6	A-3	IV	2.2	×1.4	×1.0	直交	楕円	台形	底面に20cm大の櫛が4個
SC7	A-3	IV	1.1	×1.1	×0.7	—	円	逆三角形	SC8と隣接
SC8	A-3	IV	1.1	×0.9	×1.0	—	円	台形	SC7と隣接
SC9	A-2	IV	1.8	×0.9	×0.5	直交	楕円	逆三角形	
SC10	A-3	IV	推定2.4	×1.1	×1.4	直交	楕円	逆三角形	
SC11	A-3	IV	1.9	×0.7	×0.5	直交	楕円	長方形	

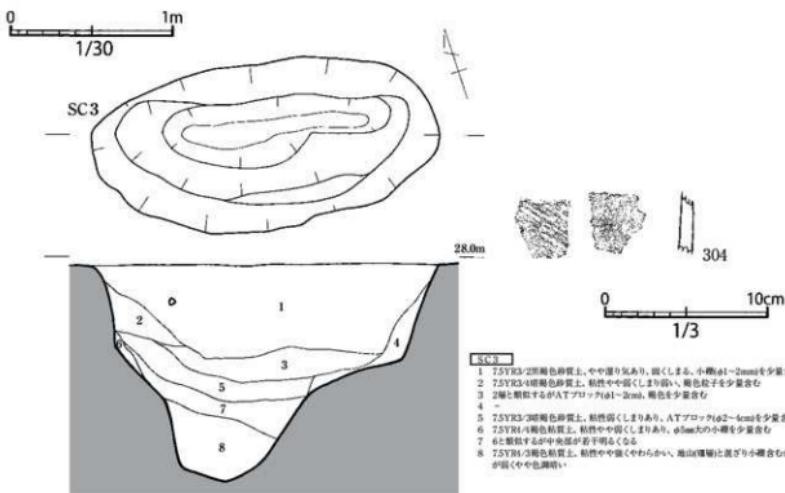


第65図 脂し穴状土坑配置図



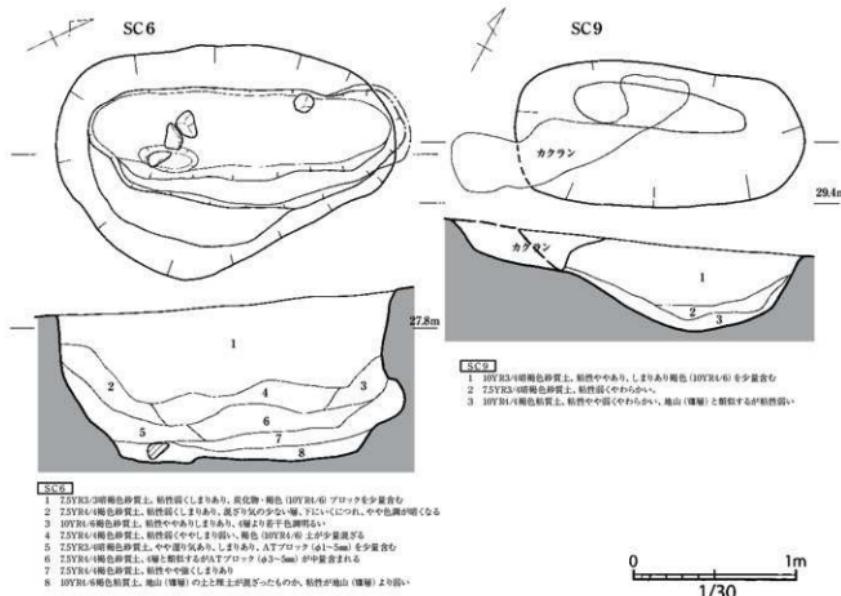
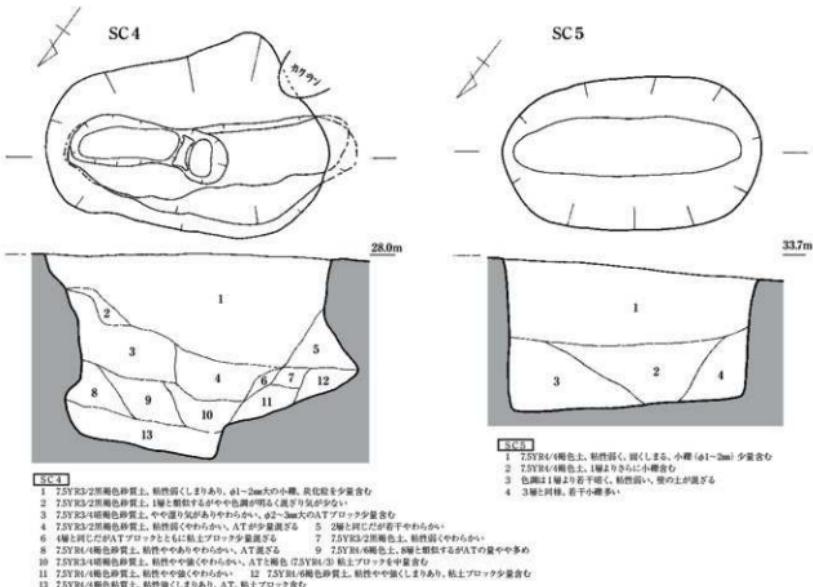
- SC1**
- 10YR2/4褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、10YR4/褐色砂質土が少量混ざる。地化物、白色粒子を少量含む
 - 10YR1/6褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、ATプロックが少量混ざる
 - 7SYR4/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、ATプロックが少量混ざる
 - 10YR1/6褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、混ざり気味ない
 - 7SYR3/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、10YR4/褐色砂質土が少量混ざる
 - 10YR3/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、褐色の土塊が少量混ざる
 - 7SYR3/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、褐色の土塊が少量混ざる
 - 7SYR3/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、褐色の土塊が少量混ざる
 - 7SYR3/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、ATプロックが多量に含まれる
 - 7SYR3/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、ATプロックが少量含む
 - 9輪と類似するがATプロックが混ざらない
 - 7SYR4/4褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、他の場に比べ比較的混ざり気は少ないがφ0.5~1cm大的砂块状 (7SYR4/4褐色砂質土)を含む
 - 12輪と類似するがATプロックが少量含む
 - 10YR1/6褐色砂質土、やや適度な気孔がありやや弱い、廻山の土と混ざり始めている
 - 13輪と類似するがATプロックが少量混ざる
 - 10YR1/6褐色砂質土、ややための気が弱く弱まる、ATプロックを多量に含む
 - 10YR1/6褐色砂質土、粘性弱くしまりやや弱い、廻山の土とよく混ざるが粘性弱い
 - 10YR4/6褐色砂質土、粘性弱く山の土と混ざりやわらかい

- SC2**
- 7SYR2/2暗褐色砂質土、やや粘性あり、しまっている。黄色の粒子が少量入る、粒径約1~2mmで多く入る
 - 7SYR4/4褐色砂質土、やや粘性あり、しまっている。黄色の粒子が少量入る、粒径約1~2mmで少く入る
 - 10YR3/4褐色砂質土、1輪より色調明るくしまり弱い
 - 4~7SYR4/4褐色土、1輪より粘性弱い
 - 5輪と類似するがATプロックが少量混ざる
 - 6~7SYR4/4褐色土、1輪と類似するがATプロックが少量混ざる
 - 10YR1/6褐色土、黒色土ブロック (φ10mm)、AT土が混ざる。粘性弱くやや弱い
 - 8~10YR1/6褐色土、褐色土を多くして10YR3/4褐色色のプロックが混ざる
 - 9~10YR1/4褐色土、4輪と類似、褐色や跡跡が入る、他の土の影響からかやや弱い
 - 10~11YR1/4褐色土、AT~褐色土ブロック (φ10mm) が入る
 - 11~10YR1/6褐色土、粘性弱く、粒径約2~3mm少量含む

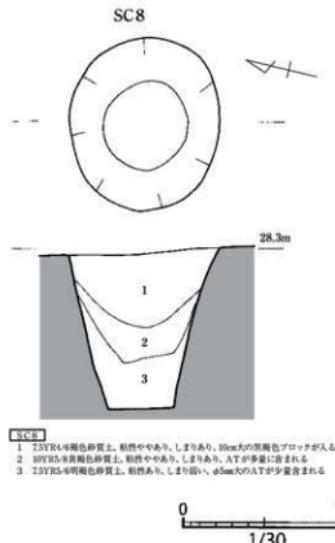
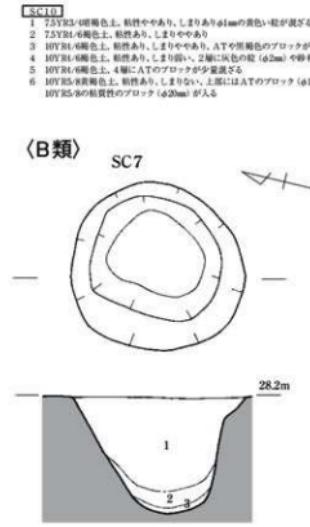
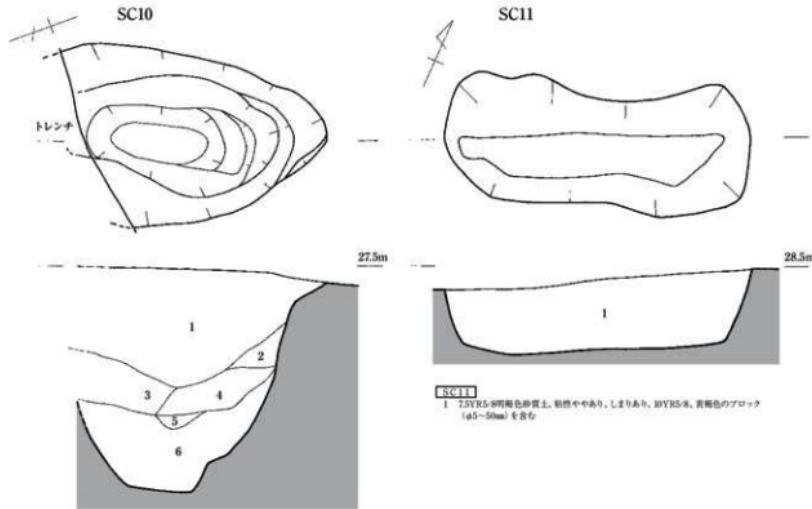


- SC3**
- 1~2SYR3/2暗褐色砂質土、やや粘性あり、固くしまる。小輪: φ1~2mmを少量含む
 - 2SYR3/4褐色砂質土、粘性やや弱くしまり弱い、褐色粒子を少量含む
 - 3輪と類似するがATプロック (φ1~2cm)、褐色の小輪を少量含む
 - ~
 - 5~7SYR3/4褐色砂質土、粘性弱くしまりあり、ATプロック (φ2~4cm)を少量含む、6SYR1/4褐色砂質土、粘性やや弱くしまりあり、6SYR1/4褐色砂質土、粘性やや弱くしまりやや弱い
 - 6と類似するが褐色部が若干厚くなる
 - 7SYR3/4褐色砂質土、粘性弱くややくわらかい、廻山の土と混ざり小輪含むが粘性が弱くやや色調弱い

第66図 隠し穴状土坑および出土遺物実測図（1）



第 67 図 陥し穴状土坑実測図 (2)



第68図 跪し穴状土坑実測図（3）

SC 6

A-3区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸2.2m×短軸1.4mの楕円形で、断面形態は深さ1.0mのやや台形である。底面の西側に深さ10cmほどの窪みがあり、床に20cm大の礫が4個出土した。埋土中部に第VI層(AT)を含む。

SC 9

A-2区の斜面で検出し、等高線と斜めに交わる。上部が擾乱で一部削平されている。平面形態は長軸1.8m×短軸0.9mの楕円形で、断面形態は深さ0.5mのやや逆三角形である。

SC 10

1次調査時にA-3区のB 8 Tの断面で検出し、等高線に直交する。平面形態は短軸1.1mの楕円形で、断面形態は深さ1.4mの逆三角形である。最大規模の1つである。埋土中部から下部に第VI層(AT)を含む。

SC 11

A-3区の平坦面で検出し、等高線に直交する。平面形態は長軸1.9m×短軸0.7mの楕円形で、断面形態は深さ0.5mの長方形である。

<B類> (第68図)

SC 7

A-3区の平坦面で検出し、SC 8と隣接し、その並びは等高線と斜めに交わる。平面形態は径1.1mの円形で、断面形態は深さ0.7mの頂点が丸みをもつ逆三角形である。埋土全体に第VI層(AT)を含む。

SC 8

A-3区の平坦面で検出し、平面形態は径1.1mの円形で、断面形態は深さ1.0mの台形である。埋土中部から下部に第VI層(AT)を含む。

11基中10基が斜面地から緩やかな勾配に変わるもので検出され、東には谷部が存在する。

また、近くに他の遺構もないことより、人の活動の気配を感じない、野生動物にとっては格好の活動場所である。そのような場所に狩猟目的の陥穴が存在することは自然であると思われる。

時期については検出面が表土直下であることより不明確である。しかし、埋土中にATは含まれるもの、アカホヤが含まれないことを考えると、アカホヤ降灰以前、換言すると縄文時代早期以前の可能性が高い。

また、埋土中ではあるものの貝殻条痕文土器が出土していること、谷部の埋没土から縄文時代の石鏃等、狩猟具が多数出土していることを合わせて考えると、縄文時代早期の遺構である可能性が高い。

等高線に対して長軸が直交するもの(7基)、平行に位置するもの(2基)がある。

平面形態、等高線に対する長軸の方向、距離、埋土中のATの有無で分類すると、SC 2とSC 3、SC 4とSC 6、SC 7とSC 8はそれぞれ同類でほぼ同時期に存在したのではないかと考えている。また、等高線に対して長軸が直交し、かつ単独であるものが5基多い。(SC 1・5・9・10・11)

2 その他の土坑 (SC 第69図)

SC 18

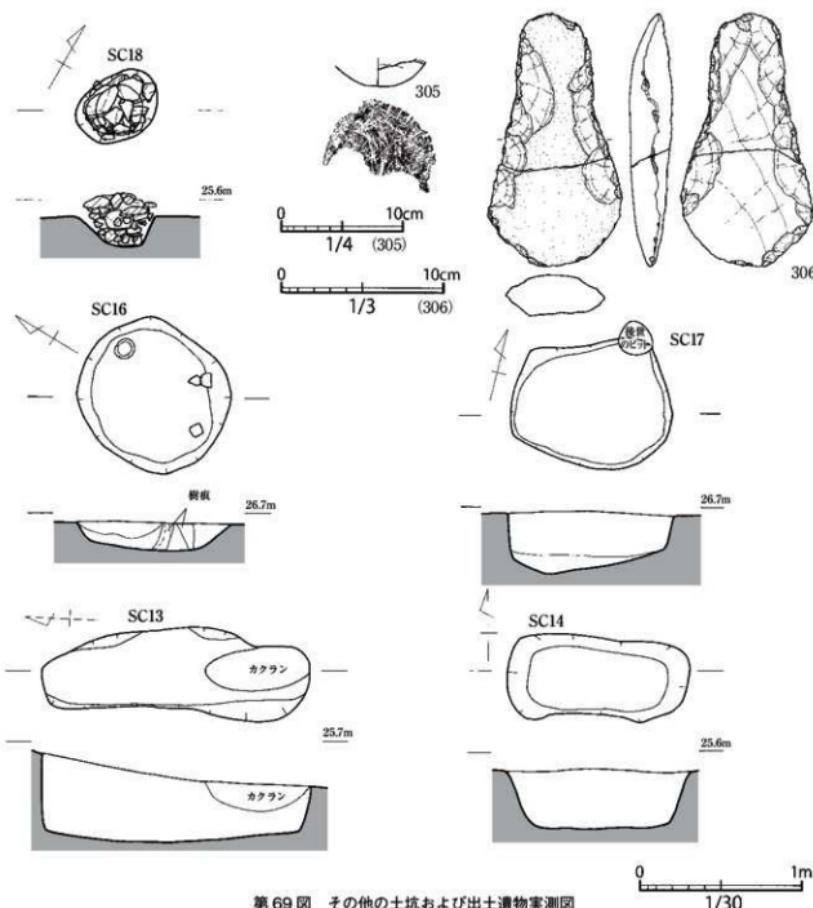
C-3区、第II層で検出。検出当初は縄文時代早期の集石遺構として考えていたが、調査を進めると土坑の中の破碎礫に混じって板状の礫や折損部の磨滅が少ない折れた石斧306、土師器の底部305等が出土した。古墳時代以降に集石遺構や散礫の礫を土坑に入れる際に、石斧や土師器が入り込んだものと考えられる。

・SC 18出土遺物

305は甕の底部で、底面に工具の痕が顕著に残る。306は打製石斧で表面に自然面を残し、両端を剥離し基部にかけて細くなる。

SC 13・14

B-P区の表土直下第IV層で検出。埋土中に炭化種実を多量に含むが、同定はできていない。



第69図 その他の土坑および出土遺物実測図

第27表 遺構内出土土器観察表

No.	器種	部位	出土 地点	法量 (cm)	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考	
					外側	内面	外側	内面			
304	深鉢	底部	SC3		斜方向の条痕文		条痕後に丁寧なナナ	青 (7SYR6:6)	に少し青碧 (10YR6:3)	2.5mm以下の灰色粒、微細な光沢 を含む	内面: 黑斑
305	甕	底面	SC18		タタキ後にナデ		指揮され後にナデ	淡黄 (2.5YB4:1)	灰白 (2.5YB1:1)	1-3mmの赤褐色、黒褐色粒を多く含む	内面: 一部黒斑

第28表 遺構内出土石器観察表

No.	器種	石 材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	
306	打製石斧	砂岩	SC18	15.4	8.2	2.6	317.0	

3 包含層出土石器(第70～75図)

包含層出土石器のほとんどが谷部埋没土からの出土であるので、時期が不明確である。ここでは、器種や石材等を中心に分類し、その詳細を述べる。

打製石鎌

307～331は打製石鎌である。未製品3点を含め、遺跡内で42点が出土している。谷部埋没土からの出土が多い中、307・308・312は第Ⅲ層、縄文時代早期の層から出土している。石材別では、姫島産黒曜石4点、チャート29点、ホルンフェルス11点、緑色片岩1点である。

次の特徴をもとに分類すると、

- A類…平面形態が二等辺三角形のもの
- B類…平面形態が正三角形のもの
- C類…平面形態が砲弾型・五角形のもの
- 1類…基部抉りあり
- 2類…基部抉りなし

A1類…308～321	を含め遺跡内合計21点
A2類…307・322～324	合計 6点
B1類…325～328	合計 9点
C1類…329～331	合計 3点

A1類の307・308は大きさや石材、器面の厚さから他の石鎌とは異なる。313～318は抉りの角度がほぼ直角で、全ていずれかの部位が欠損している。319・320は脚部の先端が平坦面を作る。329・330は砲弾型で抉りが半円形である。331は五角形である。

石錐

334・335はチャート製の石錐である。全面に加工を施し、丁寧なつくりである。

異形石器

336は用途不明の石器である。石材はチャートで、細かい剥離を周囲に巡らす。

石匙

337・338は石匙である。石材は337は流紋岩、338はホルンフェルスである。

スクレイバー(1)・剥片(1)・石核

339～341はスクレイバーである。石材は339がチャート、340・341はホルンフェルスである。340は横長剥片、341は縦長剥片を素材としている。

342・345～347は二次加工剥片である。石材は342がサスカイト、345～347はホルンフェルスである。石材のサスカイトは342と後述の366の2点のみの出土である。343・344はホルンフェルス製の剥片である。

348～354は石核である。石材は、348はホルンフェルス、349・350・352がチャート、351・353は黒曜石、354は流紋岩である。351・352は横向き、350・353は縦方向の剥離が見られる。348・349の剥離は不定方向で規格性が認められない。

礫器

355はホルンフェルス製の礫器である。裏面より粗い剥離を行った後、表面から調整を行い刃部を作り出している。

スクレイバー(2)・石鎌

356～363は円盤を素材とするスクレイバーで自然面を残す。

356・357・359はラウンドスクレイバーである。扁平な円盤の全周を巡るように、両面から加工を行い刃部を作り出している。両面に自然面を残す。石材は356は砂岩、357はホルンフェルス、359は頁岩である。358・360は扁平な剥片を素材としており、360は砂岩で、上縁は裏面から、下縁は表面からのみの加工で刃部を作り出している。

361～363はエンドスクレイバーである。石材は、361は砂岩、362・363はホルンフェルスである。

364・365は緑色片岩製である。この石材で石器として出土したものはこの2点だけである。表と裏の2方向からの調整により側面に刃部を作る。石鎌か。366はサスカイト製で横長剥片を素材とし、

左側面上部と下部に刃部をもつ。

打製石斧

367～372は打製石斧である。遺跡内で19点が出土しており、全て砂岩製である。その特徴から次の観点で分類する。

A類…表裏どちらかに自然面を残すもの

B類…自然面を残さないもの

1類…基部にかけて細くなるもの

2類…抉りをもつもの

3類…草鞋形のもの

4類…刃部を細くするもの

A 1類…306・367 合計4点

A 2類…368・369・372 合計9点

A 3類…371 合計2点

B 1類…370 合計1点

B 3類…圓化なし 合計1点

B 4類…圓化なし 合計2点

表裏どちらかに自然面を残すものの割合が多く、その特徴はスクレイパー（2）や剥片（2）と類似する。

剥片（2）

373～379の石材は砂岩で、礫の自然面を背面とする剥片を素材とし、打点と反対側面に鋭利な刃部を設けているものである。谷部埋没土を中心に比較的多く出土している。

373は継長剥片を素材とし、側面に二次加工が見られる。374は幅広剥片を利用し、下縁に微細な剥離が見られる。375～379は横長剥片を利用し、刃部に使用痕らしき微細な剥離が確認できる。

石錘

380～389は石錘である。ほとんどが谷部の埋没土から出土しており、基本的には扁平な円礫を素材とし、長軸の両端を打ち欠いたものである。遺跡内で合計98点出土している。石材別では、砂岩80点、ホルンフェルス9点、尾鈴山酸性岩類6点、

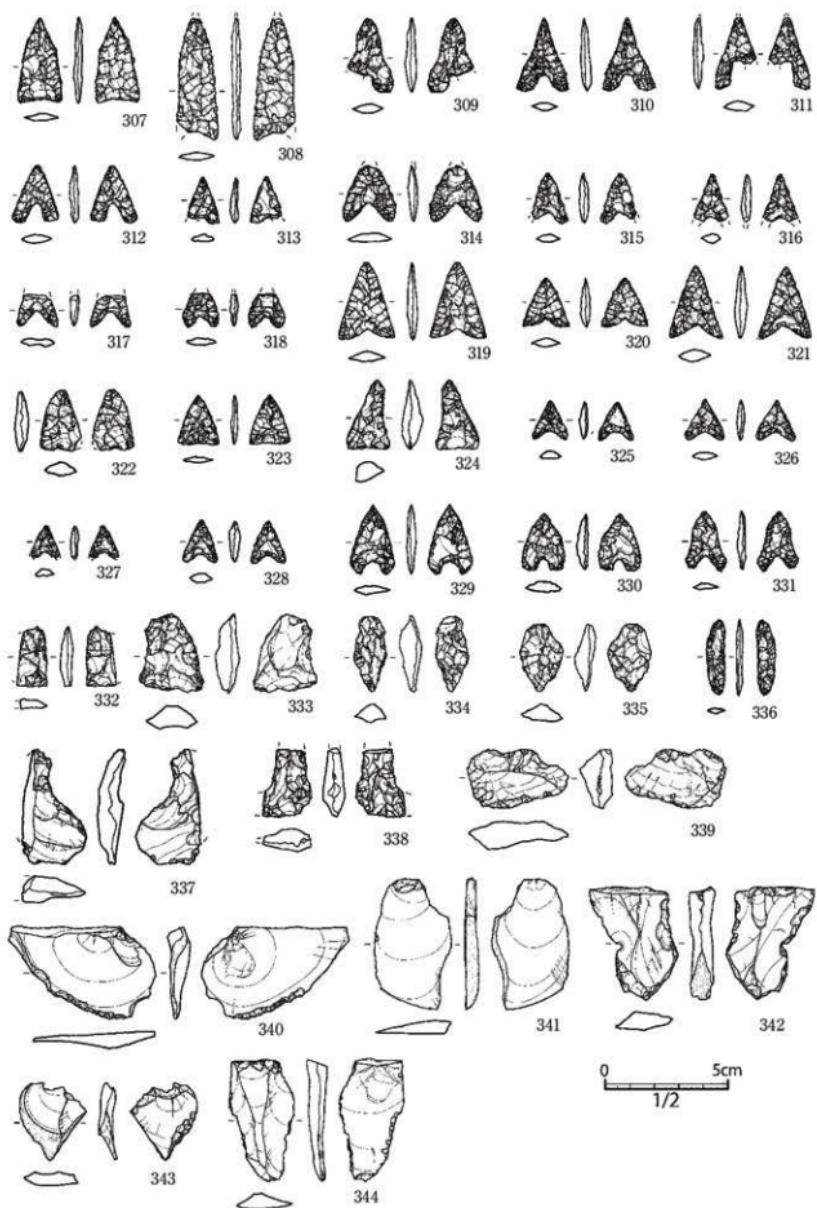
頁岩3点で、砂岩が全体の82%を占める。380・381は裏面を複数回剥離した後、両端を打ち欠いている。382は上端にもやや小さめの打ち欠きをもつ。また、388・389のように自然の窪みを利用してその対称となる場所に打ち欠きを入れるものがある。圓化していないが、円礫の両端が窪んでいるものを石錘として利用していた可能性があるのも10点出土している。

敲石

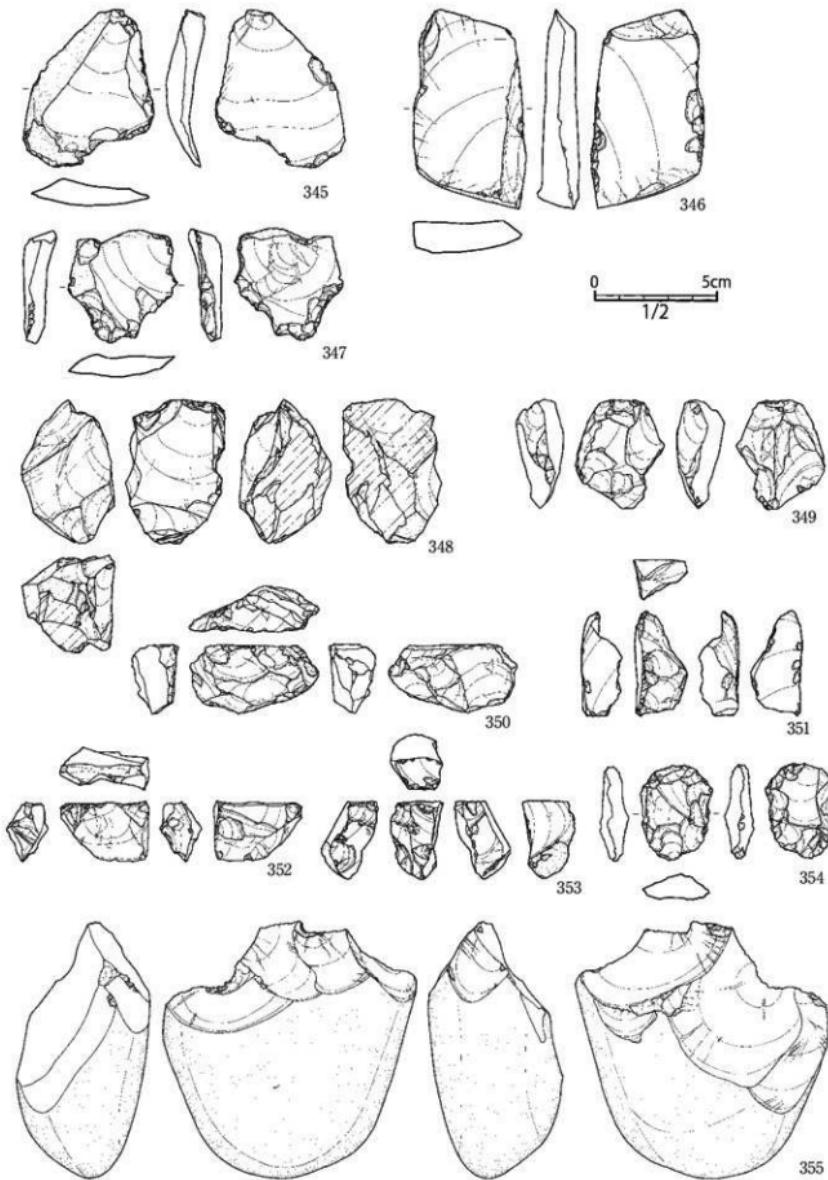
石材はいずれも砂岩である。390は亜円礫で表面・裏面に著しい敲打痕が見られる。391・395・398は磨石からの転用か。396は砥石からの転用か。392は表面と上下部に、393は下部から表面中央にかけて、394は末端と側面に著しい敲打痕が見られる。395は円礫の末端に敲打痕が見られる。397は台石の可能性もある。

その他

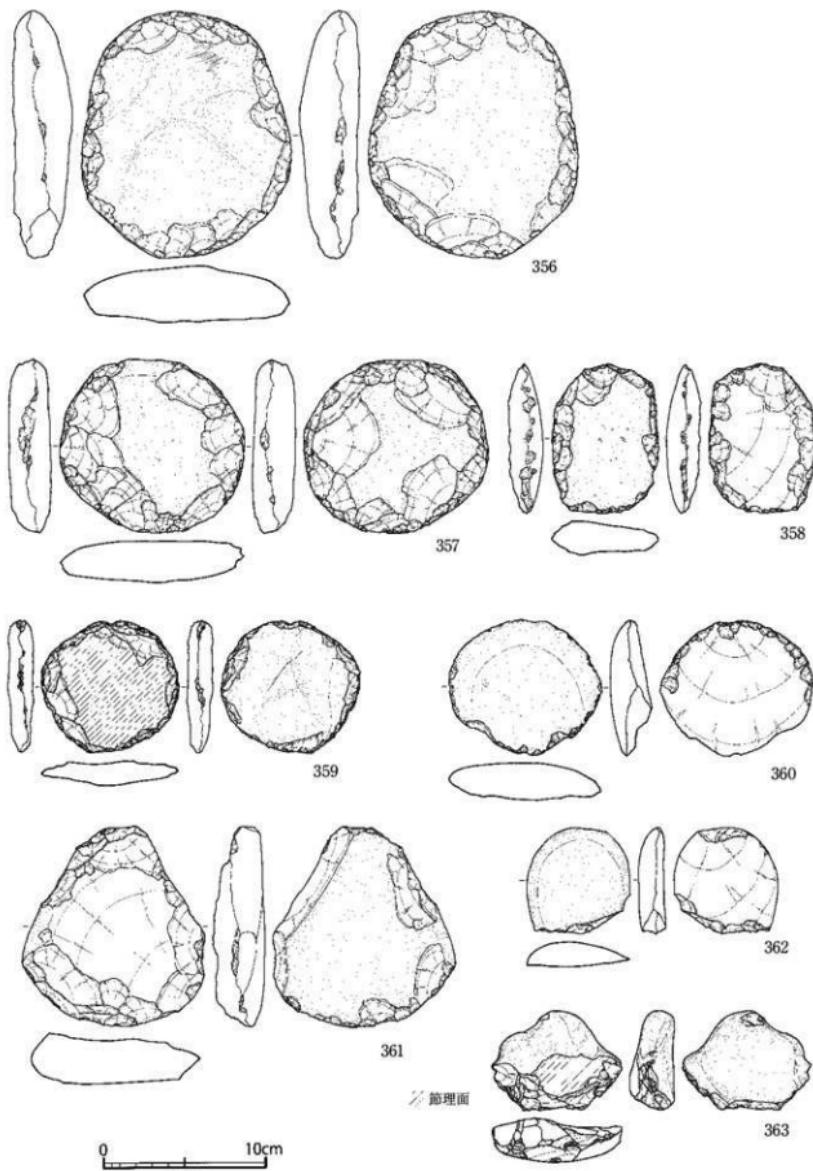
399はホルンフェルス製の石庖丁で、両側面に抉りをもち、下部の両面に研磨を施し刃部を作る。表面に2箇所貫通していない穿孔を有する。400は緑色片岩製の磨製石鎌で、擦痕が顕著に見られる。なお、右脚を欠損している。石庖丁と磨製石鎌はそれぞれ1点のみ出土している。401～403は砥石で、404～406は火打石である。404は石英製、405はチャート製で、表面に鉄錆が付着するが使用時のものであるかは不明。406は大田井産チャート製で使用時のつぶれが明瞭である。



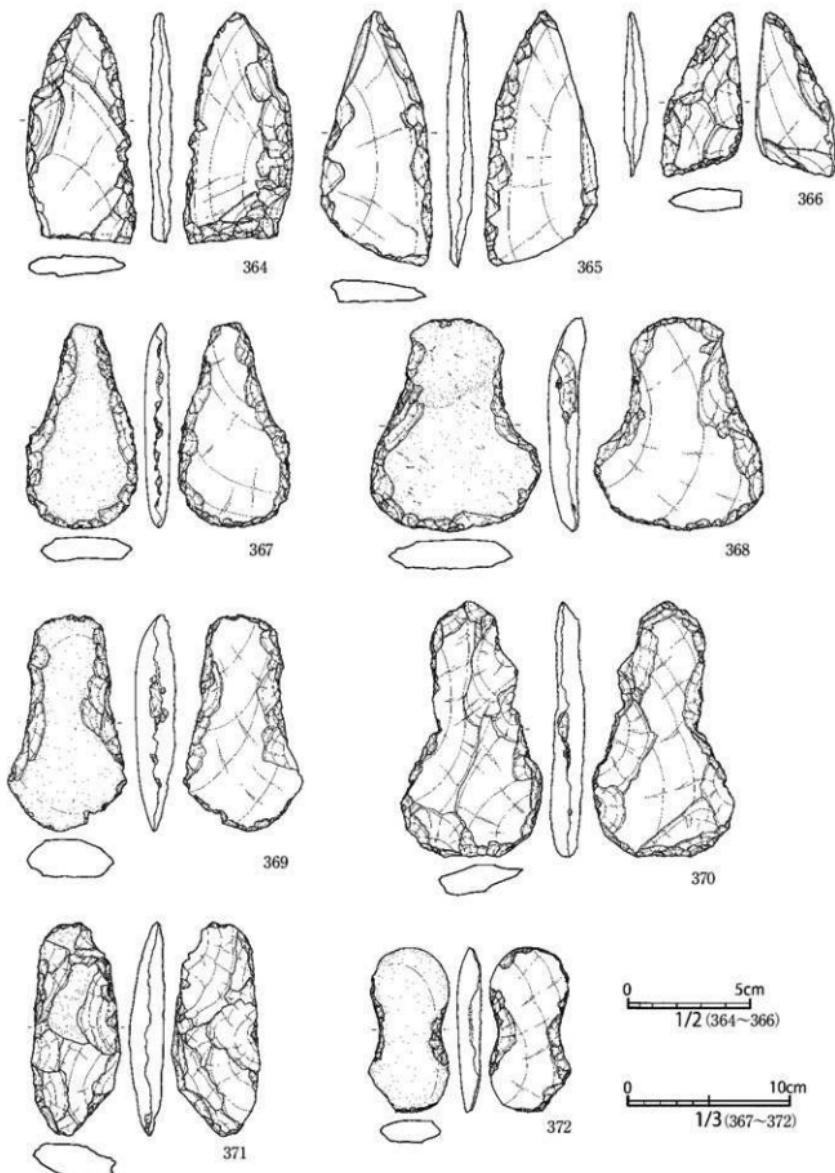
第70図 包含層出土石器実測図(1)



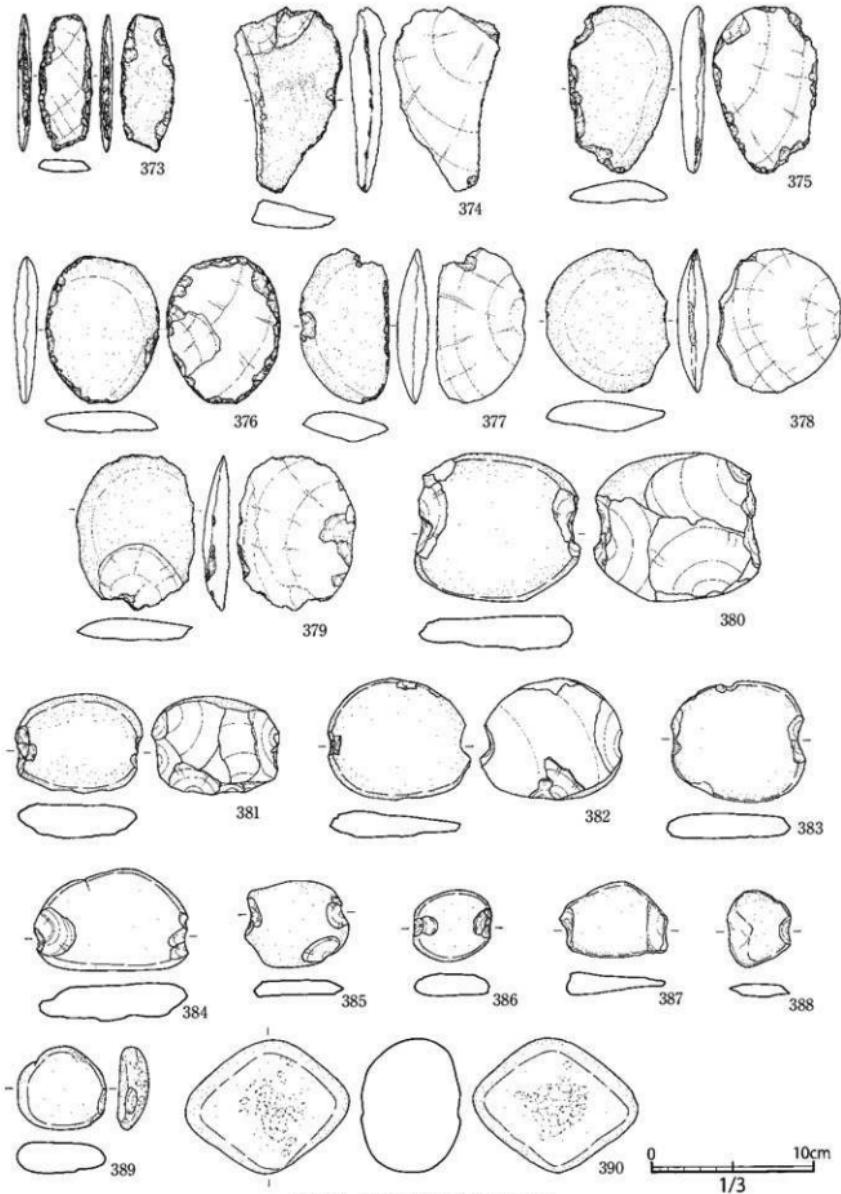
第71図 包含層出土石器実測図(2)



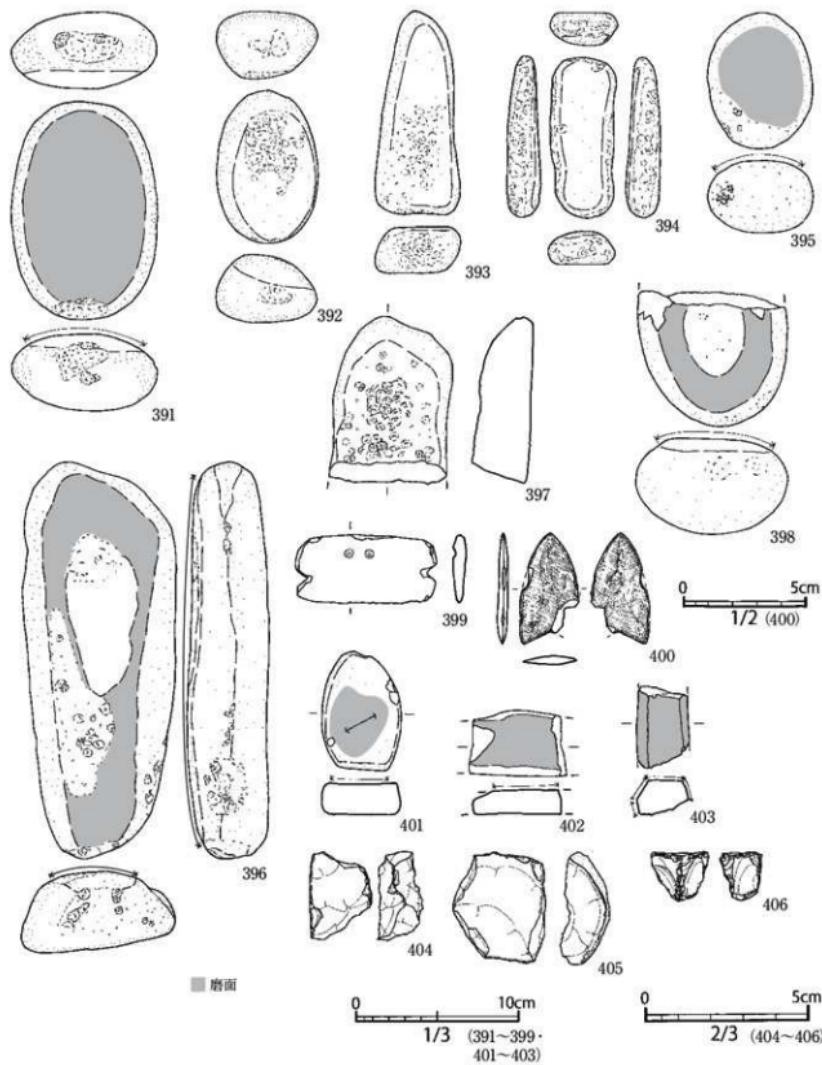
第72図 包含層出土石器実測図(3)



第73図 包含層出土石器実測図(4)



第74図 包含層出土石器実測図(5)



第75図 包含層出土石器実測図（6）

第29表 包含層出土石器観察表(1)

No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
307	打製石頭	ホルンフェルス	B	3.3	2.0	0.4	2.0	
308	打製石頭	ホルンフェルス	C-4	4.9	1.7	0.4	3.3	
309	打製石頭	チャート	C-2	3.0	1.8	0.5	1.7	一部欠損
310	打製石頭	チャート	C-3	2.9	2.1	0.5	1.4	
311	打製石頭	チャート	C-4	2.9	1.6	0.4	1.1	一部欠損
312	打製石頭	チャート	C-2	2.3	1.5	0.3	1.0	
313	打製石頭	黒曜石	B-7	1.9	1.3	0.3	0.4	一部欠損
314	打製石頭	黒曜石	B-7	2.3	2.1	0.4	1.3	一部欠損
315	打製石頭	チャート	C-2	2.0	1.4	0.3	0.6	一部欠損
316	打製石頭	チャート	C-3	1.9	1.4	0.4	0.8	一部欠損
317	打製石頭	チャート	B-7	1.3	1.6	0.4	0.6	一部欠損
318	打製石頭	チャート	C-2	1.3	1.4	0.3	0.5	一部欠損
319	打製石頭	チャート	B	2.2	2.0	0.5	2.4	
320	打製石頭	黒曜石	C-1	1.9	1.8	0.4	0.8	
321	打製石頭	黒曜石	C-1	2.9	2.1	0.5	1.8	
322	打製石頭	チャート	SA3b	2.5	1.6	0.6	1.8	一部欠損
323	打製石頭	チャート	C-4	2.0	1.6	0.3	0.7	
324	打製石頭	チャート	B-7	2.9	1.7	0.8	2.7	
325	打製石頭	チャート	B-7	1.5	1.4	0.3	0.4	
326	打製石頭	チャート	C-3	1.6	1.6	0.3	0.5	
327	打製石頭	ホルンフェルス	B-7	1.3	1.2	0.3	0.3	一部欠損
328	打製石頭	ホルンフェルス	B-7	1.7	1.4	0.4	0.6	
329	打製石頭	チャート	C-1	2.8	1.8	0.4	1.3	
330	打製石頭	ホルンフェルス	B-5	2.3	1.7	0.5	1.3	
331	打製石頭	チャート	C-3	2.4	1.6	0.3	0.7	
332	打製石頭	チャート	SA10	2.4	1.2	0.4	1.7	未製品
333	打製石頭	チャート	B-7	3.1	2.1	1.0	6.7	
	打製石頭	チャート	C-3	1.3	1.5	0.5	1.2	固化なし
	打製石頭	チャート	C-4	1.5	1.7	0.3	1.0	固化なし
	打製石頭	ホルンフェルス	B-7	2.2	1.3	0.4	0.9	固化なし
	打製石頭	チャート	B-7	1.7	1.1	0.3	0.4	固化なし
	打製石頭	ホルンフェルス	B-7	2.2	1.1	0.3	0.4	固化なし、未製品
	打製石頭	ホルンフェルス	B	3.9	2.6	1.1	8.9	固化なし
	打製石頭	チャート	B-7	1.8	1.7	0.3	0.7	固化なし
	打製石頭	チャート	B-7	2.7	1.5	0.7	2.2	固化なし
	打製石頭	チャート	B-7	1.9	1.2	0.3	0.7	固化なし
	打製石頭	チャート	B-7	2.8	1.8	0.6	2.2	固化なし
	打製石頭	チャート	B-7	1.4	1.4	0.2	0.3	固化なし
	打製石頭	チャート	C10r	1.7	1.4	0.4	0.7	固化なし
	打製石頭	チャート	C	2.3	1.6	0.5	1.4	固化なし
	打製石頭	ホルンフェルス	B	1.6	1.4	0.3	0.5	固化なし
	打製石頭	チャート	C-4	2.2	1.5	0.5	1.7	固化なし、未製品
334	石錐	チャート	B-7	3.1	1.3	0.8	2.8	
335	石錐	チャート	B-7	2.8	1.8	0.9	2.8	
336	異形石器	チャート	B-5	3.0	0.8	0.3	0.7	
337	石臼	流紋岩	C-4	4.7	2.6	1.0	8.4	一部欠損
338	石臼	ホルンフェルス	B-7	2.8	2.0	0.9	4.7	一部欠損
339	スクレイパー	チャート	C-4	2.4	4.2	1.4	10.2	
340	スクレイパー	ホルンフェルス	C-1	3.8	6.0	0.9	16.9	
341	スクレイパー	ホルンフェルス	SA1	5.5	3.2	0.6	11.3	
342	二次加工剝片	サヌカイト	SA4	4.6	3.6	0.8	13.7	
343	剝片	ホルンフェルス	SA4	3.1	2.7	0.5	4.7	
344	剝片	ホルンフェルス	C-4	5.0	2.6	0.6	9.0	
345	二次加工剝片	ホルンフェルス	C-2	6.4	5.3	1.1	31.4	
346	二次加工剝片	ホルンフェルス	C-4	8.2	4.6	1.3	80.0	

第30表 包含層出土石器観察表(2)

No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
347	二次加工剝片	ホルンフェルス	B-7	4.6	4.6	1.0	22.0	
348	石核	ホルンフェルス	SA4	5.9	3.7	4.0	81.4	
349	石核	チャート	SA4	3.7	3.6	2.8	28.0	
350	石核	チャート	B-7	5.3	2.8	1.9	22.6	
351	石核	黒曜石	C-1	4.3	2.2	1.6	11.4	
352	石核	チャート	C-4	3.6	2.5	1.7	13.5	
353	石核	黒曜石	C-4	3.2	2.2	2.3	12.7	
354	石核	流紋岩	C-4	3.9	2.9	1.2	12.1	
355	礫器	ホルンフェルス	B	10.6	10.4	5.5	622.0	
356	スクレイバー	砂岩	C-4	15.2	12.9	3.7	884.0	
357	スクレイバー	ホルンフェルス	C-3	10.6	11.3	2.6	401.0	
358	スクレイバー	砂岩	C-2	9.1	6.5	2.1	154.0	
359	スクレイバー	頁岩	C-1	8.4	8.1	1.6	110.0	
360	スクレイバー	尾鈴山酸性岩類	C-2	9.4	8.3	2.6	194.0	
361	スクレイバー	砂岩	B-1	12.2	11.1	3.2	481.0	
362	スクレイバー	ホルンフェルス	C8tr	6.5	6.3	1.7	92.0	
363	スクレイバー	ホルンフェルス	C-3	7.9	6.1	2.7	144.0	
364	石鏃	綠泥片岩	C-2	9.5	4.5	0.9	41.9	
365	石鏃	綠泥片岩	C-1	10.4	4.7	1.1	51.9	
366	スクレイバー	サヌカイト	B-7	6.7	3.4	0.9	19.7	
367	打製石斧	砂岩	C-4	12.5	6.8	1.5	159.0	
368	打製石斧	砂岩	C-2	13.0	10.4	2.3	285.0	
369	打製石斧	砂岩	A-3	13.2	7.3	2.5	252.0	
370	打製石斧	砂岩	C-4	15.6	8.6	2.1	242.0	
371	打製石斧	砂岩	C-2	13.0	5.4	2.1	149.0	
372	打製石斧	砂岩	C-1	10.0	4.9	1.5	90.0	
	打製石斧	砂岩	C-1	10.2	6.5	1.5	133.0	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-1	9.3	6.8	1.2	95.7	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	9.8	7.4	1.7	125.3	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	11.8	7.8	1.7	125.3	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	12.3	8.5	1.8	183.4	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-3	11.5	7.3	1.4	157.3	固化なし
	打製石斧	砂岩	C8tr	11.0	5.7	1.7	125.5	固化なし
	打製石斧	砂岩	B	11.3	7.7	1.5	151.3	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-1	11.4	5.6	1.4	98.3	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-2	9.0	5.0	1.4	65.2	固化なし
	打製石斧	砂岩	B-7	9.4	6.8	1.2	83.6	固化なし
	打製石斧	砂岩	C-1	7.4	6.0	1.3	74.4	固化なし
373	二次加工剝片	砂岩	B	8.4	3.2	0.8	27.1	
374	剝片	砂岩	C-1	11.3	6.5	2.2	111.0	
375	微細剝離ある剝片	砂岩	B-7	10.2	6.3	1.5	114.0	
376	微細剝離ある剝片	砂岩	B-7	9.0	6.9	1.4	107.0	
377	微細剝離ある剝片	砂岩	C-1	9.5	5.4	1.9	102.0	
378	微細剝離ある剝片	砂岩	C-2	8.8	7.6	1.9	133.0	
379	剝片	砂岩	B-7	9.5	7.2	1.7	124.0	
380	石鏃	砂岩	C-3	10.2	9.2	2.7	296.1	
381	石鏃	砂岩	B-7	7.8	6.2	2.2	145.3	
382	石鏃	砂岩	C-3	7.5	8.7	1.6	130.6	
383	石鏃	砂岩	B-7	7.4	8.3	1.6	126.1	
384	石鏃	尾鈴山酸性岩類	C-2	6.3	9.5	2.3	179.3	
385	石鏃	砂岩	B-7	5.3	6.4	1.0	49.8	
386	石鏃	砂岩	B-7	4.4	4.9	1.4	43.3	
387	石鏃	頁岩	C-3	4.7	6.6	1.4	46.1	
388	石鏃	砂岩	B-7	4.8	3.9	0.8	19.8	
389	石鏃	砂岩	B-7	5.1	5.5	1.9	69.7	

第31表 包含層出土石器観察表(3)

No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
石錐	砂岩	SA9	6.3	6.8	2.5	138.5	固化なし	
石錐	尾鈴山酸性岩類	SA5	5.0	6.2	1.6	75.3	固化なし	
石錐	砂岩	C-3	9.2	10.2	2.7	296.1	固化なし	
石錐	頁岩	C-3	4.7	6.63	1.4	46.1	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	5.1	5.45	1.9	69.7	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	7.43	8.3	1.6	126.1	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	6.2	7.8	2.2	145.3	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	4.75	3.9	0.78	19.8	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	4.4	4.85	1.35	43.3	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	5.3	6.4	1.0	49.8	固化なし	
石錐	尾鈴山酸性岩類	SA10d	6.2	4.9	1.7	42.5	固化なし	
石錐	砂岩	SA10a	7.0	6.5	1.8	132.1	固化なし	
石錐	砂岩	C-1	7.4	6.4	1.8	134.0	固化なし	
石錐	砂岩	C-1	5.7	4.1	0.9	37.9	固化なし	
石錐	ホルンフェルス	C-1	5.9	6.0	1.7	95.7	固化なし	
石錐	砂岩	C-1	5.8	5.8	1.7	77.1	固化なし	
石錐	砂岩	C-1	5.8	5.4	0.9	50.9	固化なし	
石錐	砂岩	C-1	5.1	5.4	1.4	62.0	固化なし	
石錐	砂岩	C-2	6.2	5.0	1.4	82.2	固化なし	
石錐	砂岩	C-2	7.8	5.5	1.8	129.3	固化なし	
石錐	砂岩	C-2	8.05	7.4	1.7	142.1	固化なし	
石錐	砂岩	C-3	5.4	5.2	0.9	50.0	固化なし	
石錐	ホルンフェルス	C-2	5.7	5.9	1.2	78.4	固化なし	
石錐	ホルンフェルス	C-3	6.4	5.3	1.5	88.5	固化なし	
石錐	尾鈴山酸性岩類	C-3	6.4	5.8	1.65	106.4	固化なし	
石錐	砂岩	C-3	7.0	7.1	2.7	184.7	固化なし	
石錐	砂岩	C-3	6.4	5.5	1.85	97.0	固化なし	
石錐	砂岩	C-3	5.7	5.3	1.2	50.8	固化なし	
石錐	砂岩	C-3	7.3	6.0	1.6	82.6	固化なし 打爻をせず、自然石利用	
石錐	砂岩	C-3	7.4	7.8	2.05	194.9	固化なし	
石錐	尾鈴山酸性岩類	C-3	7.8	7.1	2.0	182.4	固化なし	
石錐	砂岩	C-3	7.6	5.75	2.4	159.4	固化なし	
石錐	砂岩	C-4	7.05	6.0	1.45	83.0	固化なし	
石錐	砂岩	C-4	7.1	6.0	1.5	111.0	固化なし	
石錐	砂岩	C-4	7.0	6.9	1.25	117.1	固化なし	
石錐	砂岩	C-4	8.4	7.5	2.2	180.2	固化なし	
石錐	頁岩	C10tr	7.55	5.65	2.2	146.6	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	6.0	5.2	1.5	85.9	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	7.1	5.0	1.25	84.4	固化なし	
石錐	ホルンフェルス	B-7	7.3	4.7	1.5	87.7	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	4.55	3.4	0.5	18.5	固化なし 打爻をせず、自然石利用	
石錐	頁岩	B-7	8.5	7.0	1.8	172.9	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	7.3	6.0	1.4	95.7	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	8.05	5.4	1.35	78.6	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	6.1	4.8	1.4	60.4	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	7.5	6.15	2.4	173.0	固化なし	
石錐	ホルンフェルス	B-7	6.6	5.45	1.2	77.5	固化なし	
石錐	ホルンフェルス	B-7	6.7	5.0	1.6	94.0	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	6.45	4.55	0.9	48.0	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	7.25	5.7	1.9	111.1	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	5.8	3.5	1.5	47.3	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	5.7	6.0	1.3	73.2	固化なし	
石錐	砂岩	B-7	8.0	6.35	1.9	142.2	固化なし	

第32表 包含層出土石器観察表(4)

No.	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
390	石錐	砂岩	B-7	6.4	5.2	1.6	71.5	固化なし 打欠をせず、自然石利用
391	石錐	砂岩	B-7	7.5	5.1	1.75	118.8	固化なし
392	石錐	砂岩	B-7	8.55	8.6	1.75	195.7	固化なし
393	石錐	砂岩	B-7	7.3	5.1	1.7	97.2	固化なし 打欠をせず、自然石利用
394	石錐	尾鈴山酸性岩類	B-7	6.95	5.7	1.45	70.5	固化なし
395	石錐	砂岩	B-7	8.55	5.8	1.35	109.5	固化なし
396	石錐	砂岩	B-7	6.1	5.3	1.35	71.8	固化なし
397	石錐	砂岩	B-7	8.0	7.0	2.1	143.4	固化なし
398	石錐	砂岩	B-7	7.2	7.3	2.25	182.1	固化なし
399	石錐	砂岩	B-7	6.7	5.1	0.6	31.2	固化なし 打欠をせず、自然石利用
400	石錐	ホルンフェルス	B-7	4.7	4.1	1.2	37.4	固化なし
401	石錐	砂岩	B	7.2	5.0	1.15	67.1	固化なし
402	石錐	ホルンフェルス	B	4.8	4.0	0.5	18.7	固化なし
403	石錐	砂岩	B	5.2	4.2	0.6	27.6	固化なし 打欠をせず、自然石利用
404	石錐	砂岩	B	5.3	4.5	0.6	33.0	固化なし
405	石錐	砂岩	B4tr	5.2	4.6	0.9	39.2	固化なし 打欠をせず、自然石利用
406	石錐	砂岩	C-1	7.0	6.8	1.6	127.7	固化なし
407	石錐	砂岩	C-1	6.0	6.0	1.9	106.9	固化なし
408	石錐	砂岩	C-1	8.7	7.9	2.0	192.3	固化なし
409	石錐	砂岩	C-1	8.3	6.5	1.45	136.7	固化なし
410	石錐	砂岩	C-2	7.0	6.3	0.8	71.1	固化なし 打欠をせず、自然石利用
411	石錐	砂岩	C-2	6.0	4.2	1.2	45.4	固化なし
412	石錐	砂岩	C-3	6.2	5.8	1.85	94.1	固化なし
413	石錐	砂岩	C-3	7.6	6.3	2.05	142.0	固化なし 打欠をせず、自然石利用
414	石錐	砂岩	C-4	6.2	5.6	1.7	94.3	固化なし
415	石錐	砂岩	C-4	6.9	6.5	1.4	112.9	固化なし
416	石錐	砂岩	C-4	5.7	5.3	1.3	59.7	固化なし 打欠をせず、自然石利用
417	石錐	砂岩	C-4	7.6	7.1	1.9	147.7	固化なし
418	石錐	砂岩	C-4	5.9	5.4	1.9	103.6	固化なし
419	石錐	砂岩	C-4	6.7	5.4	1.5	87.3	固化なし
420	石錐	砂岩	C-3	7.5	6.2	1.8	104.0	固化なし
421	石錐	砂岩	SH2B1	6.5	6.5	1.8	124.1	固化なし
422	敲石	砂岩	C-2	10.1	8.3	6.1	621.8	
423	敲石	尾鈴山酸性岩類	C-2	13.4	9.0	4.7	889.0	磨石からの転用か
424	敲石	砂岩	B-1	9.4	6.2	4.2	316.6	
425	敲石	砂岩	C-3	12.6	5.2	2.9	289.9	
426	敲石	砂岩	C-2	10.0	4.1	2.0	117.4	
427	敲石	砂岩	C-2	8.4	6.5	4.4	353.7	磨石からの転用か
428	敲石	砂岩	C-3	24.4	9.5	5.0	1590.1	
429	敲石	砂岩	B-1	10.3	7.6	4.0	440.3	台石の可能性あり
430	敲石	尾鈴山酸性岩類	SC1B	(6.3)	9.3	5.9	662.4	一部破損、 磨石からの転用か
431	石磨丁	ホルンフェルス	C-1	8.7	4.3	0.8	49.8	
432	磨製石頭	緑色片岩	B-7	4.5	2.4	0.4	4.7	
433	砥石	ホルンフェルス	C-3	7.4	4.9	2.0	132.1	
434	砥石	ホルンフェルス	B-7	6.0	4.1	1.5	68.8	
435	砥石	凝灰岩	B4tr	5.0	3.3	2.5	68.9	
436	火打石	石英	C-2	2.7	1.9	1.4	7.7	
437	火打石	チャート	A-3	3.4	2.9	1.5	14.0	
438	火打石	チャート	A-3	1.5	1.6	1.3	3.2	

第33表 谷部遺物包含層別主な石器出土量

	2層	3層		その他		合計	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量
打製石頭	出土量 点数 組合比	14点 33%	17.0g 26%	18点 42%	18.0g 27%	11点 25%	31.3g 47%
打製石斧	出土量 点数 組合比	9点 47%	1167.3g 40%	6点 32%	899.2g 31%	4点 21%	845.8g 29%
石錐	出土量 点数 組合比	40点 41%	3656.0g 38%	41点 42%	4291.0g 45%	17点 17%	1661.0g 17%
剥片 (砂岩)	出土量 点数 組合比	18点 36%	1297.0g 36%	26点 52%	1887.0g 52%	6点 12%	422.0g 12%
(砂岩以外)	出土量 点数 組合比	147点 36%	891.9g 39%	193点 50%	746.7g 33%	43点 11%	630.4g 28%
						383点	2269.0g

第34表 谷部遺物包含層別土器出土量

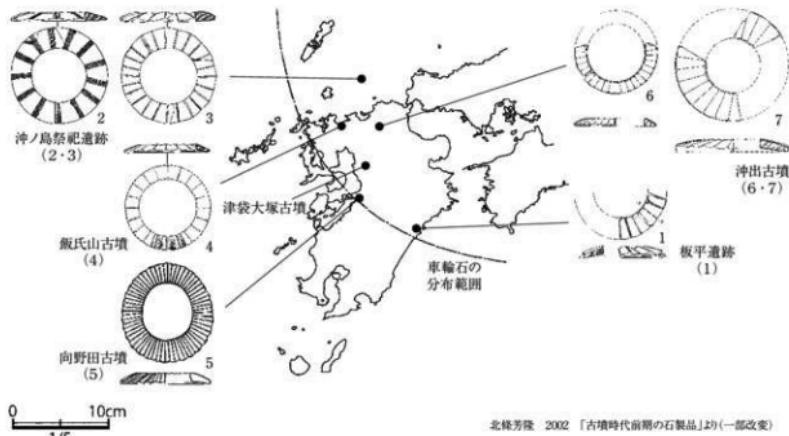
	2層	3層	その他	組重量
縄文時代	出土量(g) 出土比	7249.2 31%	8042.9 35%	7724.1 34%
古墳時代	出土量(g) 出土比	24291.3 46%	14079.3 27%	14405.4 27%
古代以降	出土量(g) 出土比	1195.7 35%	940.0 27%	1285.2 38%

※ ただし、重量には遺構出土器の重量は含めていない。

第35表 古墳時代前期遺構別「在地系」および「外来系」土器分類表

遺構	「在地系」		「外来系」		
	胎土→在地 技術→在地		胎土→在地 技術→外來	胎土→外來 技術→在地	胎土→外來 技術→外來
SA1	99,100,101,102,104			103	
SA3	106,107,108,111,112,113,114,115,116			109,110	
SA4	117				
SA6	121,122,123,124,125				126
SA9	131,132,133,134,145,136,137,141,145,148		129,130,133,139,140	142,143,144	146,147
SA10	155,157,158,159,160,161,162,164,166,167,168,170,171, 172,173,177,178,179,180,181,182,183,184,186,187,188		154,163,165,169,174, 175,176	156	

※胎土の分類は肉眼観察による



第76図 九州の車輪石の分布

第Ⅳ章 自然科学分析の結果

本遺跡は耕作により土層の堆積が悪く、ほとんどの遺構が表土直下で検出されている。また、現況では平坦であるが、調査区東側、南北方向に谷が存在したと考えており、その埋没土からは多くの遺物が出土しているが、その谷部分がどの時代に埋没していったのか判断が困難である。

そこで、炭化物（遺構や谷部）の自然科学分析

を通して、遺跡の当時の植生や遺構・谷部の詳細な年代、遺構がどのような使われ方をしたのか等、さらに有用な情報を得ることで、当時の様相をより詳細に復原できると考えている。

自然科学分析は平成18年度、平成19年度の2回実施した。結果をそれぞれ以下に示す。

第1節 平成18年度の結果

板平遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(¹⁴C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の¹⁴C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により¹⁴C年代から曆年代に較正する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SP1	炭化材(ブナ科)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	S112	炭化材(広葉樹)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	S119	炭化材(コナラ属コナラ節)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	SA4	炭化材(シイ属)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.5	谷部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

(1) 未補正¹⁴C年代

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いて計算している。

(2) δ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

(3) ¹⁴C年代

δ¹³C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料のδ¹³C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

(4) 曆年代(Calendar Age)

¹⁴C年代を実際の年代(曆年代)に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正する必要がある。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

歴年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と較正曲線との交点の歴年代値を意味する。1 σ (68%確率) と 2 σ (95%確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

試料名	測定No (Beta-)	未補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (年BP)	歴年代 (1 σ :68%確率, 2 σ :95%確率)
No.1 (SP1)	224588	9220±40	-25.3	9220±40	交点: cal BC 8450 1 σ : cal BC 8540~8510, 8480~8330 2 σ : cal BC 8560~8300
No.2 (S112)	224589	9270±40	-24.4	9280±40	交点: cal BC 8550 1 σ : cal BC 8600~8590, 8570~8470 2 σ : cal BC 8630~8420, 8400~8350
No.3 (S119)	224590	8200±40	-26.5	8180±40	交点: cal BC 7170 1 σ : cal BC 7250~7230, 7190~7080 2 σ : cal BC 7320~7070
No.4 (SA4)	224591	1850±40	-27.4	1810±40	交点: cal AD 230 1 σ : cal AD 140~250 2 σ : cal AD 120~260, 280~330
No.5 (谷部)	224592	960±40	-25.3	960±40	交点: cal AD 1040 1 σ : cal AD 1020~1060, 1080~1150 2 σ : cal AD 1010~1170

BP : Before Physics (Present), cal: calibrated, BC : 紀元前, AD : 紀元後

4. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では9220±40年BP(1 σ の歴年代でBC8540~8510, 8480~8330年)、No.2の炭化材では9280±40年BP(同BC8600~8590, 8570~8470年)、No.3の炭化材では8180±40年BP(同BC7250~7230, 7190~7080年)、No.4の炭化材では1810±40年BP(同AD140~250年)、No.5の炭化物では960±40年BP(同AD1020~1060, 1080~1150年)の年代値が得られた。

文献

- Paula J Reimer et al. (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26~0 ka BP. Radiocarbon 46:1029~1058.
 尾寄大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ、学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p.14~15.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門。古今書院、p.1~36.

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、SP1、S112、S119、SA4から採取された炭化材4点である。

3. 方法

試料を剖析して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柵目)、接線断面板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科 図版1

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。シイ属にはスダジイとツブライジがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、試料の保存状態が悪いためシイ属の同定にとどめた。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

ブナ科 Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と火炎状に配列する小道管が見られた。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかであるが、試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なため、ブナ科の同定にとどめた。

広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なため、広葉樹の同定にとどめた。

5. 所見

樹種同定の結果、シイ属1点、コナラ属コナラ節1点、ブナ科1点、広葉樹1点が同定された。シイ属にはスダジイとツブライジがあり、どちらも温帯下部の暖温帯に分布する常緑高木で、西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素である。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帶落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帶性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。ブナ科は、クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。

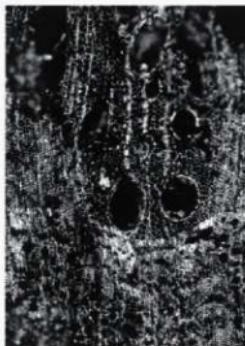
文献

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(1985) 木材の構造、文永堂出版、290p.
島地 謙・伊東隆夫(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.
山田昌久(1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別1号、植生史研究会、242p.

表1 板平遺跡における樹種同定結果

試料	結果(学名/和名)	
試料1(SP1)	Fagaceae	ブナ科
試料2(S112)	broad-leaved tree	広葉樹
試料3(S119)	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
試料4(SA4)	<i>Castanopsis</i>	シイ属

板平遺跡の炭化材



横断面 ━━━━ : 0.4mm
1. 試料4 (SA4) シイ属



放射断面 ━━━━ : 0.2mm



接線断面 ━━━━ : 0.2mm



横断面 ━━━━ : 0.4mm
2. 試料3 (S119) コナラ属コナラ節



放射断面 ━━━━ : 0.2mm



接線断面 ━━━━ : 0.2mm



横断面 ━━━━ : 0.5mm
試料1 (SP1) ブナ科



横断面 ━━━━ : 0.5mm
試料2 (S112) 広葉樹

第2節 平成19年度の結果

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
No.1	SI18、配石上面	炭化材(コナラ属コナラ節)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	SC20、深鉢と同レベル	炭化材(サカキ)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	SA 9、土器の口縁付着	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.4	SA10、床面炭化材	炭化材(ミズキ属?)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.5	谷部、3層最下部	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2. 測定結果

表1に放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を示した。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差(%)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(%)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。統計誤差は 1σ (68.2%確率) である。

(3) 暦年代 (Calendar Age)

^{14}C 年代測定値を実際の年代値(暦年代)に近づけるため、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24,050年までの換算が可能である(樹木年輪データはBC10,450年まで)。

暦年代は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で示し、較正プログラムOxCal3.1の確率法により 1σ (68.2%確率) と 2σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。CalはCalibratedの略、BCは西暦紀元前、ADは紀元後を示す。

3. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では 8215 ± 25 年BP (2σ) の暦年代でBC7330～7130, 7100～7080年)、No.2の炭化材では 3325 ± 20 年BP (BC1670～1520年)、No.3の炭化物では 1760 ± 15 年BP (AD230～340年)、No.4の炭化材では 1785 ± 15 年BP (AD130～330年)、No.5の炭化物では 920 ± 15 年BP (AD1030～1160年) の年代値が得られた。

文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy. The OxCal Program. Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
Paula J Reimer et al. (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, p.1029-1058.
尾喜大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-。p.14-15.
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代。p.3-20.

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1 (S118)	PED-8326	-27.13±0.23	8215±25	7310BC (68.2%) 7170BC	7330BC (92.7%) 7130BC 7100BC (2.7%) 7080BC
2 (SC20)	PED-8327	-28.63±0.25	3325±20	1635BC (30.5%) 1600BC 1580BC (37.7%) 1535BC	1670BC (95.4%) 1520BC
3 (SA9)	PED-8328	-28.40±0.26	1760±15	240AD (26.0%) 260AD 280AD (42.2%) 325AD	230AD (95.4%) 340AD
4 (SA10)	PED-8329	-28.65±0.25	1785±15	220AD (50.1%) 260AD 295AD (18.1%) 320AD	130AD (95.4%) 330AD
5 (谷部)	PED-8330	-29.14±0.26	920±15	1040AD (43.0%) 1100AD 1120AD (25.2%) 1160AD	1030AD (95.4%) 1160AD

II. 樹種同定

1. 試料

試料は、配石遺構や住居跡などから出土した炭化材4点である。試料の詳細を表1に示す。

2. 方法

試料を剖析して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柵目)、接線断面板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Pinus* プナ科 図版1

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版2

横断面：小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ミズキ属? *Cornus?* ミズキ科 図版3

横断面：やや小型の道管が散在する散孔材である。道管は単独のものが多い。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型であり、4細胞幅ぐらいで紡錘形の多列のものが見られる

以上の形質よりミズキ科のミズキ属?に同定される。ミズキ属に類似するが、試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なためミズキ属?とした。ミズキ属には、ミズキ、クマノミズキなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。材は建築、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

不明 unknown 図版4

道管、仮道管、放射組織などの木材の構成要素が存在せず、木材の形質を呈していない。

4. 所見

樹種同定の結果、コナラ属コナラ節、サカキ、ミズキ属?が同定された。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に自生する落葉広葉樹であり、温帯を中心に広く分布する。ミズナラなどの冷温帶落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帶性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。サカキは、暖地の山林等に自生する常緑広葉樹で、深い谷間やこれにつづく斜面などやや湿気のある肥沃な土壤を好む。西南日本に分布する照葉樹林の構成要素である。ミズキ属は、日本各地の山地に自生する落葉広葉樹であり、谷間や暖傾斜地や谷間など湿気のある肥沃な土壤を好む。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(1985) 木材の構造、文永堂出版、290p.

島地 謙・伊東隆夫(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

山田昌久(1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別1号、植生史研究会、242p.

表1 板平遺跡における樹種同定結果

試料	出土地点	結果(学名/和名)	
試料1	SI18、配石上面	<i>Quercus sect. Primus</i>	コナラ属コナラ節
試料2	SC20、深鉢と同レベル	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
試料4	SA10、床面炭化材	<i>Cornus</i> ?	ミズキ属?
試料5	谷部、3層最下部	unknown	不明

III. 種実同定

1.はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにできる。

2. 試料

試料は、竪穴住居跡(古墳時代)、土坑(縄文時代後期)、集石遺構(縄文時代早期)、炉穴(縄文時代早期)から出土した選別済み試料4式(27ケース)である。試料の詳細を表1に示す。

3. 方法

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

分析の結果、樹木5、草本5の計10分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、各分類群の写真を示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schott. 炭化子葉(半形) ブナ科

炭化して黒色で楕円形を呈する。表面はなめらかで縦方向に一条の凹線が入る。

コナラ属 *Quercus* 炭化子葉(半形) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。炭化が著しく発泡し欠落しているため、属レベルの同定にとどめた。

バラ科 Rosaceae 炭化核

側面に縫合線が発達する。表面にはバラ科特有の隆起がある。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 炭化種子片 ミカン科

黒色で楕円形を呈し側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

カラスザンショウ? *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.? 炭化種子片 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、表面には大きい網目模様がある。破片であるため?とした。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 炭化種子片 ミカン科

黒色で楕円形を呈し側面にへそがある。表面には網目模様がある。破片でハソが欠落しており、サンショウ、イヌサンショウの同定が困難なため、属レベルの同定にとどめた。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実 イネ科

炭化して黒色である。長楕円形を呈し胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

イネ科 Gramineae 穂

穂は灰褐色~茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で表面には光沢がある。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みハソがある。断面は両凸レンズ形である。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

黒褐色で楕円形を呈し上端がとがる。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。

不明種実

種実ではあるが、破片で発泡し表面模様が観察できないため不明種実とした。

不明幼果

変形して形が不明であり表面模様が観察できないため、不明幼果とした。

[その他]

虫瘤? 炭化して表面に種実の細胞が認められない。確定的ではないが虫瘤?とした。

炭化物片 種実ではなく、破片で発泡しているものを炭化物とした。

炭化材片 木材が炭化しているものを炭化材片とした。

5. 所見

種実同定の結果、堅穴住居跡（古墳時代）では、タデ属が多く認められ、ヒユ属、イネ科、ツブライイ、バラ科、コナラ属、カラスザンショウ、サンショウ属、イネ（炭化米）、カタバミ属も認められた。また、土坑（縄文時代後期）ではコナラ属、集石造構（縄文時代早期）ではカラスザンショウ、炉穴（縄文時代早期）ではイネ（炭化米）が認められた。

栽培植物では、堅穴住居跡と炉穴でイネ（炭化米）が認められたが、後者については何らかの混入と考えられる。堅穴住居跡で多く認められたタデ属は、集落や畑地およびその縁辺に生育する人里植物ないし耕地雑草であり、ヒユ属、カタバミ属なども同様の環境に生育する。カラスザンショウは、温暖な沿岸部の森林要素で二次林種でもある。その他の分類群も、二次林および人為環境に生育するものが多い。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p.

笠原安夫（1988）作物および田畠雑草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p.131~139.

南木睦彦（1991）栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通I、雄山閣出版株式会社、p.165~174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276~283.

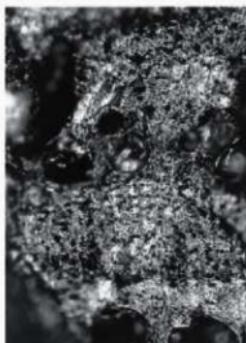
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p.2~14.

表1 板平遺跡における種実同定結果

試料番号	出土遺構	分類群		部位	個数	備考
		学名	和名			
1	SA3-1	Unknown	不明種実		1	
		Unknown	不明		2	
2	SA3-2	Unknown	不明		1	
		Rosaceae	バラ科	核片	2	炭化材片14
3		Zanthoxylum	サンショウ属	種子片	1	砂塊1
		Amaranthus	ヒユ属	種子	1	
		Unknown	不明		11	
4	SA3-3	Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et	カラスサンショウ	種子片	1	
5		SA4炉(二次)				炭化物3(虫齧?)
6	竪穴住居跡	Castanopsis cuspidata Schottky.	ツブラジイ	子葉(半形)	2	
7		Gramineae	イネ科	穎	1	炭化物5(虫齧?)、植物片3
8	SA9中央炉	Quercus	コナラ属	子葉(半形)	1	
		Polygonum	タデ属	果実	48	
		Unknown	不明	幼果	2	
		Unknown	不明		1	
9	SA10焼土付近	Polygonum	タデ属	果実	1	炭化物片1
		Amaranthus	ヒユ属	種子	5	炭化物3(虫齧?)
10	SA10炉2	Oryza sativa L.	イネ	果実	1	炭化物片7
		Gramineae	イネ科	穎	4	炭化物片3
		Oxalis	カタバミ属	種子	1	砂塊1
		Unknown	不明		1	
11	土坑	SC20-①層	Quercus	コナラ属	子葉(半形)	1
12		SC20-②層				炭化材片1
13		SC20-③層				炭化材片1
14	SI11配石	Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et	カラスサンショウ	種子片	1	
15		SI12SI18				炭化材片21、炭化物2(虫齧?)
16	集石遺構	Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et	カラスサンショウ?	種子片	1	
17		SI19	Unknown	不明	2	炭化材片17、炭化物9(虫齧?)、砂塊2、昆虫片2
18	SI19南側					炭化材片18、炭化物1(虫齧?)
19	炉穴	SP8				炭化材片2、炭化物6、炭化物90(虫齧?)
20		SP11				芽6、炭化物1(虫齧?)
21		SP13				炭化物2、炭化物4(虫齧?)
22		SP14				炭化物10(虫齧?)
23		SP23～26-①層	Oryza sativa L.	イネ	果実	1 炭化材片2
24		SP23～26-②層				炭化材片9、炭化物片1
25		SP23～26-③層				炭化材片3
26		SP23～26-④層				炭化材片6、炭化物片7
27	SP19	Unknown	不明種実片		7	炭化材片4、炭化物片7、炭化物4(虫齧?)、砂塊7

※ タデ属、ヒユ属、カタバミ属、不明幼果は未炭化。その他はすべて炭化。

板平遺跡の炭化材 I



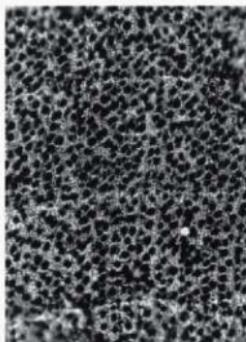
横断面 ━━━━ : 0.4mm
1. 試料 1 コナラ属コナラ節



放射断面 ━━━━ : 0.4mm



接線断面 ━━━━ : 0.2mm



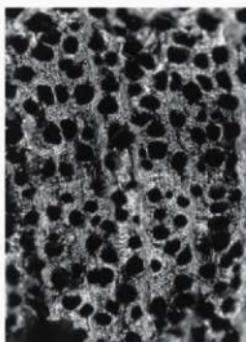
横断面 ━━━━ : 0.4mm
2. 試料 2 サカキ



放射断面 ━━━━ : 0.2mm



接線断面 ━━━━ : 0.2mm



横断面 ━━━━ : 0.4mm
3. 試料 4 ミズキ属?

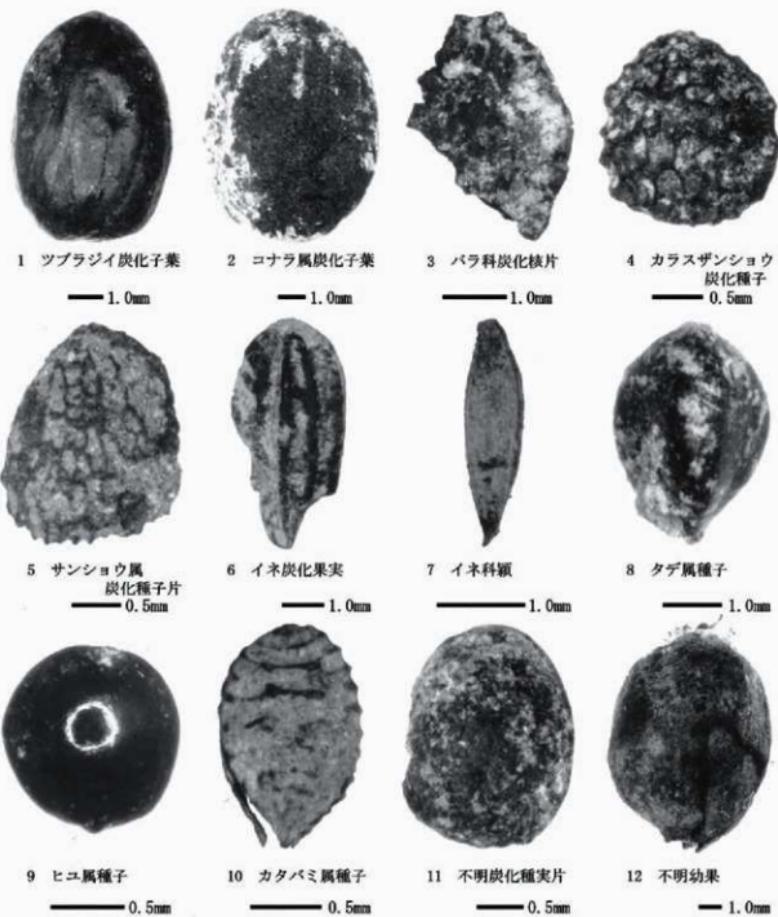


放射断面 ━━━━ : 0.2mm



接線断面 ━━━━ : 0.2mm

板平遺跡の種実



第V章 まとめ

板平遺跡は、旧石器時代から縄文時代早期・後期・晚期、古墳時代前期・後期、古代、中世、近世以降までの遺構や遺物が確認されている。ここでは、まず自然科学分析のデータ等を基に本遺跡周辺の環境を復原する。次に、各時代について簡単にまとめ、最後に本遺跡と車輪石の関連について触れる。

古環境の復原

AT火山灰降灰（約26,000～29,000年前）以前より東側に谷部が存在する。アカホヤ火山灰降灰以前約8,000～9,000年前は、温帯の日当たりの良い山野に落葉広葉樹のブナ科が自生する。降灰後約3,300年前になると、谷間に続く斜面の湿気のある肥沃な土壤に、照葉樹林の構成要素であるサカキや二次林種のミカン科のカラスノザンショウも自生する。その後、約1,800年前になると谷間に落葉広葉樹であるミズキが自生し、栽培植物であるイネや人里植物であるタデ属、ヒユ属、カタバミ属等が生育する。谷部は約900年前に二次堆積アカホヤに続き、黒褐色土により埋没し、現況に近い状態になったものと考えられる。このことは谷部2層および3層における各時期の土器出土量に有意差が認められることからも妥当である（第34表）。

旧石器時代

AT火山灰層下位の褐色粘質土層で、ホルンフェルスと流紋岩製の剥片と石核が出土した。少数でありながら谷部への落ち込み付近に偏在していることを考えると、石器の製作場所は西側の調査区外である可能性がある。また、流紋岩は本遺跡の近辺では見ることができず、五ヶ瀬川流域で見られる祖母・頬山起源の火成岩（延岡市赤木遺跡、延岡市山田遺跡で出土）と類似していることから、五ヶ瀬川流域との交流の可能性が窺える。

縄文時代早期

集石遺構については、A・B・C類は約9,200年BP、A'類は約8,200年BPに使用していたもので

あると推定する。

また、炉穴については、31基中4基においてブリッジの痕跡が見られた。県内では国富町木脇遺跡や西都市別府原遺跡、山田遺跡等において確認されている。第III章第3節の小結にも述べたが、集石遺構と炉穴を併設していた可能性が見出されたことについては特筆すべき点である。

土器については、貝殻での調整を施すものを主体とし、特に口縁部付近に貝殻刺突文を2～3段施し、胴部は無文で丁寧なナデやミガキを施す政所式（中原II式）の占める割合が大きい。また、接合はできなかったものの、出土位置や胎土、焼成等から15・33は政所式の底部である可能性が高い。県北地域では延岡市吉野遺跡において同型式の土器が出土している。政所式土器は約9,200年BP頃の集石遺構や炉穴と共に使用されていたと考えられるが、約8,200年BP頃の使用土器については特定ができていない。

縄文時代後・晚期

後期の土器については、磨消縄文を施していないものの、太郎追式から三万田式の様相をもつものが大半を占め、その前後の市来式や鳥井原式も少量見られる。特に、深鉢36・46に代表される器形や66・67に代表される文様は本遺跡の当時期を特徴付けるものとなっている。

また、晚期の土器では、短頭化した精製浅鉢96・97等黒川式に類似する土器や口縁部に無刻目突帯をもつ浅鉢89～94が見られる。

本遺跡の土器が、門川町赤木遺跡（三万田式）、分蔵遺跡・南町遺跡（黒川式・無刻目突帯文土器）と類似した特徴を示す反面、日向市東郷町仲野原遺跡（綾式・市来式・鐘ヶ崎式・御領式等）と特徴を異にするのは、当時期の人・物・製作技法の交流を考える上で注目すべき点である。

古墳時代前期

堅穴住居跡9軒を検出している。住居間の切り合いは見られず、住居は10m～80m程度の間隔をもつ散漫な配置である。

出土した遺物群、特に弥生時代終末～古墳時代前期の土器群の位置付けについて、寺沢薰氏と松永幸寿氏の論考をもとに、その対応関係を考え

ていきたい。寺沢氏が奈良県矢部遺跡の出土土器をもとに、畿内における古墳出現前後期の土器群を庄内0~3式、布留0~4式と区分した編年案を提示した（寺沢1986）。この編年案は畿内及び各地域の土器編年作業の中で1つの基軸となっている。以下「寺沢編年」と略す。また、松永氏は宮崎平野を中心とした宮崎県域の弥生時代後期から古墳時代中期までを全8期に区分する編年案を示した（松永2004）。以下「松永編年」と略す。

なお、胎土中にφ1~3mm程度の褐色の粒を多く含み、土器の形状や調整等の製作技法が宮崎県的な特徴をもつものを「在地系」、それ以外を「外来系」と考えている（第3表）。

S A 1 の高環104は口縁部と受部との境の内面に段、外間に沈線をもち、松永編年6期併行とみなした。

S A 3 の小型丸底壺109・110は、松永編年6~7期併行とみなした。S A 6 の小型丸底壺126は口径が胴部最大径より大きく、松永編年に該当するものがいないが、寺沢編年布留2~3式併行とみなした。

S A 4 の壺18は平底で頭部の綺まりが弱く、長い口縁が外反し、松永編年5~6期併行とみなした。

S A 9 の壺131・132は口縁が外反し、松永編年6~7期併行とみなした。壺129・130は内面のケズリが明瞭で、器壁が薄く、口縁は内湾しながら外傾することから、松永編年6期、寺沢編年布留2式併行とみなした。129・130の類例として宮崎市猿野遺跡等の出土例がある。高環146はいわゆる有段高環である。庄内式期から認められる形式であるが、有段部が大きく外に張り出すため、寺沢編年布留1式併行とみなした。類似資料として隣県では熊本県方保田東原遺跡、大分県鹿道原遺跡の出土例がある。また、暗文を施した高环147は寺沢編年の布留0~1式併行とみなした。

S A 10 の壺155・157・158・160等は口縁部が外反し、松永編年6~7期併行とみなした。壺154・163はS A 9 の129・130と類似している。163は球形の胴部を有し、布留系壺の様相を呈する。複合口縁壺169は球胴で1次、2次口縁ともに外反し、寺沢編年の布留1式に併行するとみなした。

以上のことより、前期の堅穴住居跡の時期は松永編年5~6期を中心とした時期に相当し、寺沢編年布留0~3式の時期に併行する形態やその製

作技法の模倣といった外來系の要素が認められる。堅穴住居跡の実年代としては4世紀第1四半期~第3四半期に相当するものである。

古墳時代後期

堅穴住居跡3軒を南側で検出している。S A 5 の須恵器の壺蓋194、S A 11の土師器の壺196、S A 12の壺199は後期（MT15併行期）のものであると考えられる。ただし、須恵器の中には遺構外ではあるが、198・241・243のように中期後葉（T K47併行期）に相当するものもあり、時期が上る可能性が残される。

古代~近世

遺構は掘立柱建物跡を11棟確認している。主な特徴には、①柱穴の大部分が径約30cm、②身舎の柱穴は側柱のみで庇をもたない、③規模は3間×2間と3間×1間の割合が大きい、④身舎面積は15~25m²程度、⑤桁行の柱間は2m前後の5点があげられる。また、⑥梁間が桁行の約1.5倍~2倍の梁間一間型が6棟と多いことも特徴の一つである。第Ⅲ章第7節では、時期は未確定しているものの、これらの特徴から中世の平均的農家の建物跡である可能性が高い（①~⑤外山・原田2004、⑥宮本2002）。

なお、散碟の範囲内にピットは数基しか確認されていない。当時の人は、土中にある散碟の範囲内にはピットが掘りにくいことを経験から認識しており、意識的に散碟を避けていることに他ならないことを付加しておく（第3図、第54図）。

出土遺物は、古代~中世の土師器、中世~近世の陶磁器・錢貨が出土している。特に中世の陶磁器については、越州窯・龍泉窯・景德鎮窯・漳州窯産の貿易陶磁や青磁の香炉・水注・古瀬戸の瓶子等、平均的な農家では入手困難な遺物もあり、ある程度有力な農家の存在も窺える。

また、近隣の塙見城跡や中山遺跡においても、中世の同時期の陶磁器が出土しており、本遺跡との関連が注目される。

車輪石について

最後に、本遺跡で出土した車輪石248の位置付けについて、三浦俊明氏の論考をもとに考えてい

きたい。三浦氏は車輪石の型式学的研究により、環体断面の形態変化に基づいて4段階に区分する編年案を示した（三浦2005）。以下「三浦編年」と略す。また、石材については、北條芳隆氏が鐵形石の型式と材質の関係の研究より材質を4種類に分類している（北條2002）。

次の①～⑦の属性から、時期や製作場所等を考えていく。①石材は硬質の緑色凝灰岩、②平面および内孔形態はともに卵形、③外斜面は放射状匙面の頂・凹部の両方に沈線をもつ。④推定最大長は約10cmの小形、⑤内孔の推定最大幅約5.5cmである。また、環体断面の⑥底面高比は約25%、⑦外側面はやや内反りである。

⑥・⑦の環帯断面の2属性は、三浦編年第II段階に相当する。①の石材は北條分類の材質3に相当するが、この石材を生産できる岩石帶や製作遺跡は近隣に存在せず、外部より持ち込まれた可能性が高い。②～④の属性は古い段階の指標とはなるものの、三浦編年第IV段階においても残存している。⑤の内孔最大幅は三浦編年第I段階からの特徴であり、どの段階においてもこの規格の出現割合が最も大きい。三浦編年第II段階は生産地の拡散が始まる前段階と考えられており、初期からの生産地である畿内や北陸地方で同一規格の穿孔具を使用して製作された可能性がある。なお、三浦氏は「第II段階の車輪石は前方後円墳集成の共通編年2期の古墳に副葬され始め、多くは3期で副葬される傾向がある」と論じている。

一般に車輪石は畿内を中心にして多数出土しているが、九州では6遺跡から10点出土しており、本遺跡は分布南限にあたる（第76図）。ほとんどが前期古墳の副葬品であることから、近隣の古墳が崩落して包含層へ流れ込んだ可能性がある。しかし、近隣の富高2号墳（5期）は仿製の四獸鏡が出土しているもの約2km離れており、調査区外の東側の緩斜面に未発見の古墳が存在する可能性もある。

九州の他の車輪石を観察すると、向野田古墳（4期）・伝沖ノ島・板平遺跡…三浦編年I～II段階、飯氏山古墳・沖出古墳（3期）・津袋大塚古墳（5期）・沖ノ島祭祀遺跡…三浦編年III～IV段階に相当する。九州内では本遺跡の車輪石は古い部類に属し、平面形態の卵型は向野田古墳に次ぎ2例目である。しかし、九州の他の車輪石との有効な

関連性を見出すことはできていない。また、九州においては「三浦編年」と「前方後円墳集成の共通編年」との相関はほとんどないように思われる。

以上のことより、本遺跡から出土した車輪石の時期は確定できないまでも、古い段階の要素を多く持つ、初期の製作技法が継承されたものであることは言えそうである。また、車輪石に加えて、同時期の勾玉や外来系土器等の存在はある程度の力を有する者の存在を想起することができる。

本遺跡の車輪石が古い段階のもので、力を有する者が存在したすると、畿内中央政権から威信材として配布されたとも考えられる。しかし、他の出土例のように古墳からの出土ではなく、近隣に古墳が存在するわけでもない。それ以上に、古墳時代前期の出土土器に布留系等外来系土器が多數見られ、人・物・土器や石製品の製作技術等の他の地域との交流が活発であったと推測できることから、車輪石はその交流の一環で、日向の地にもたらされたものであると考えたい。

今後、日向市や県内における古墳時代前期の調査が進み、資料を比較・検討することにより、板平遺跡および車輪石の位置付けが明らかになることを期待して結びとしたい。

【参考・引用文献】

- 大阪府文化財センター2006『古式土師器の年代学』
熊本県教育委員会1986『戸坂遺跡発掘調査報告書』
東京大学出版会2003『新編 火山灰アトラス』
近藤義郎ほか1992『前方後円墳集成』山川出版社
寺沢薰1986『畿内古式土師器の編年と二・三の問題』『矢部跡』櫻原考古学研究所
堂込秀人1997『南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分』『鹿児島考古』第31号
外山隆之・原田亜紀子2004『都城市における中世掘立柱建物跡の類型化』『宮崎考古』第19号
北條芳隆2002『古墳時代前期の石製品』『考古資料大觀』第9巻
松永幸寿2004『日向における古式土師器の成立と展開』『西南四国・九州間の交流に関する考古学的研究』
三浦俊明2005『車輪石生産の展開』『待兼山考古学論集』
水ノ江和同1997『北部九州の縄紋後・晩期土器－三万田式から刻目突宍文土器の直前まで－』『縄文時代』第8号
宮本長二郎2002『古代末から中世の住居建築』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号



表土除去後（A区、北から）



平坦部土層断面



谷部土層縦断面



谷部土層横断面



谷部掘削作業風景（北から）



谷部風景（北から）



旧石器時代遺物出土状況（A区）



土石流による砾溜り（B区）



散礫検出状況（C区）



散礫検出作業風景



S I 10 検出状況



S I 16・20・21 検出状況



S I 19 検出状況



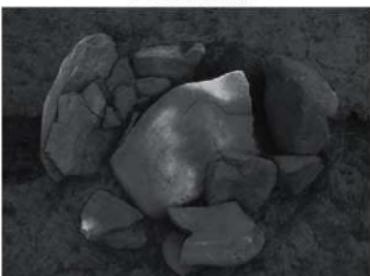
S I 4 · 5 · 6 半截状况



S I 11 半截状况



S I 6 半截状况



S I 3 配石



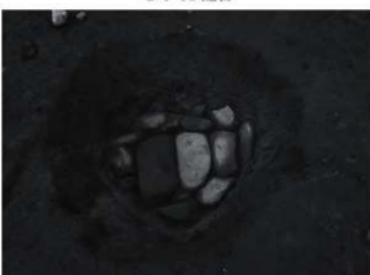
S I 16 · 20 配石



S I 10 配石



S I 18 配石



S I 19 配石

図版4



S P 12 検出状況



S P 27 ~ 29 検出状況



S P 23 ~ 26 検出状況



S P 27 ~ 29 埋土中発出土状況



S P 1 完掘状況



S P 2 · 3 · 4 完掘状況



S P 20 · 21 完掘状況



S P 12 · S P 13 · S P 14 ~ 17 完掘状況



S P 27 ~ 29 完掘状況



S P 5 ~ 10 ・ 18 完掘状況



S P 23 ~ 26 完掘状況



集石遺構と炉穴の位置関係



S C 20 土器出土状況



S C 20 完掘状況



S X 1 検出作業風景



S X 1 検出状況

図版6



S A 1 検出状況 (南から)



S A 3 遺物出土状況



S A 9 遺物出土状況



S A 10 遺物出土状況



S A 9 完掘状況



S A 3 完掘状况



S A 12 完掘状况



S A 4 完掘状况



S A 1 完掘状况



S A 6 完掘状况



S A 10 完掘状况



車輪石出土状况



S C 21 土器出土状况



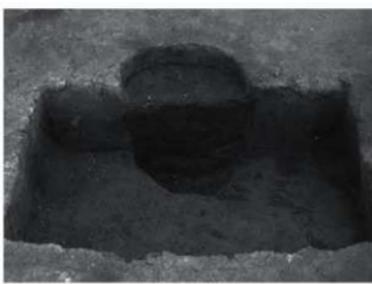
C 区掘立柱建物跡検出状況



B 区ピット検出状況



S B 2 検出状況



柱穴土層断面



柱穴中根石



SC 1 検出状況



SC 4・6 半截後状況



SC 4 土層断面



SC 10 土層断面



SC 4 完掘状況



SC 18 半截状況



散礫取上げ作業風景

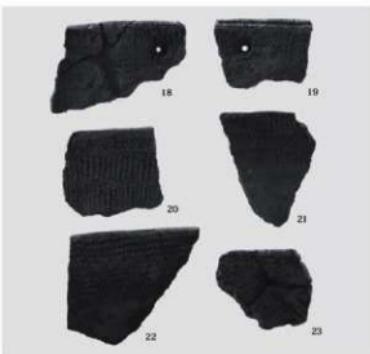


現地説明会風景

図版 10



旧石器時代石器



繩文時代早期土器（1）



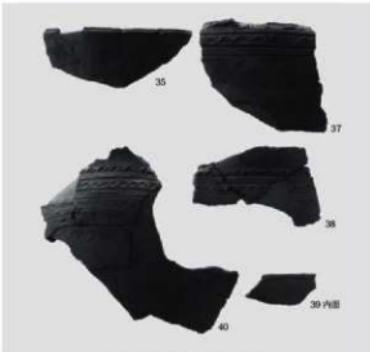
繩文時代早期土器（2）



繩文時代早期土器（3）



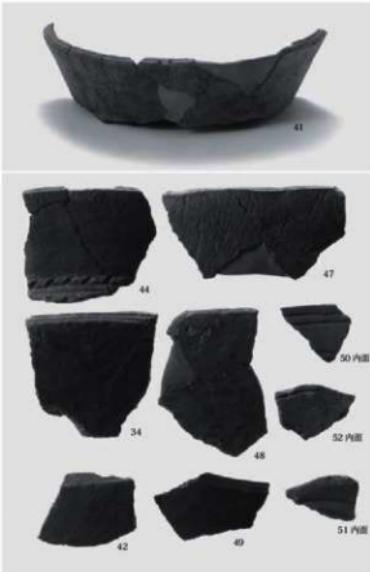
繩文時代後期土器（1）



繩文時代後期土器（2）



縄文時代後期土器（3）



縄文時代後期土器（4）



縄文時代後期土器（5）



縄文時代後期土器（6）



縄文時代後期土器（7）



縄文時代後期土器



S A 1 · S A 2 出土遗物



S A 3 出土土器



S A 4 出土遗物 (1)



S A 4 出土遗物 (2)



S A 6 出土遗物



S A 8 出土石器



S A 9 出土土器 (1)



S A 9 出土土器 (2)



S A 9 出土土器 (3)



S A 9 出土土器 (4)



S A 9 出土土器 (5)



S A 9 出土土器 (6)



S A 9 出土土器 (7)



S A 9 出土土器 (8)



S A 9 出土土器 (9)



S A 9 出土土器 (10)



S A 9 出土土器 (11)



S A 9 出土石器



S A 10 出土土器 (1)



S A 10 出土土器 (2)

S A 10 出土土器 (3)

S A 10 出土土器 (4)



S A 10 出土土器 (5)

S A 10 出土土器 (6)

S A 10 出土石器



S A 5 出土遺物



S A 11 出土土器



S A 12 出土土器



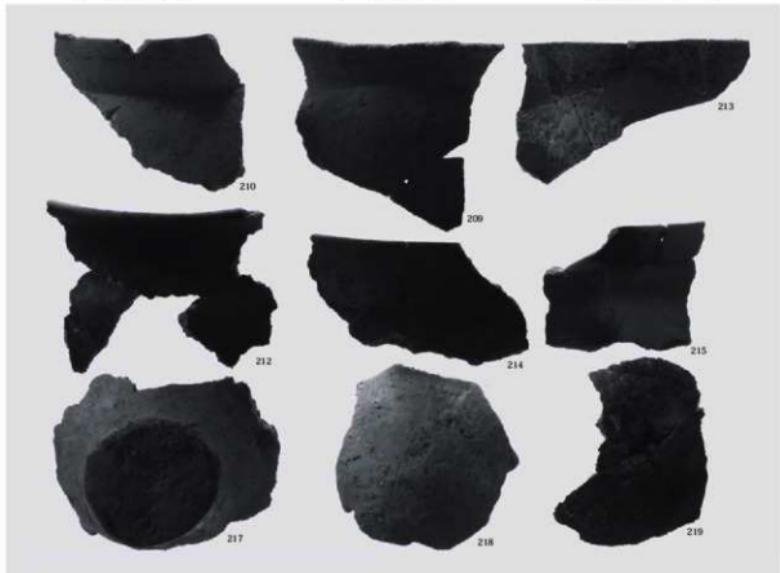
S C 21 出土土器



S C 15 出土土器



包含層出土土器（1）



包含層出土土器（2）



包含层出土土器 (3)



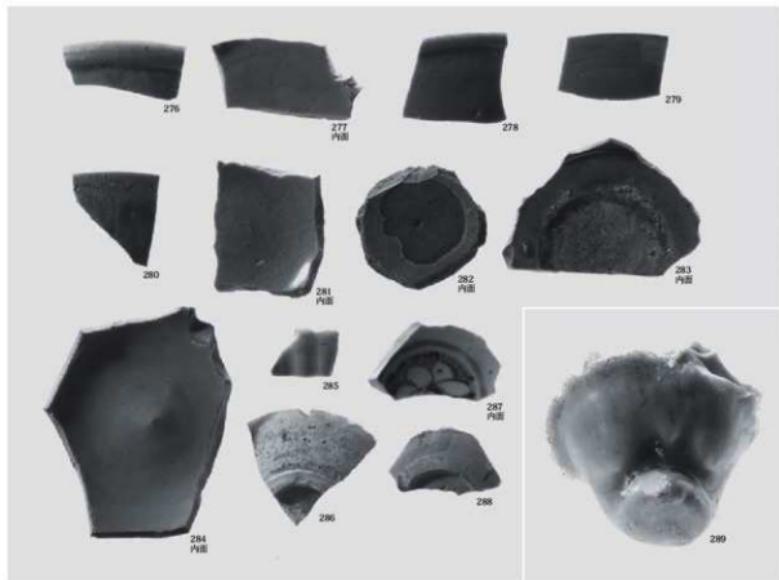
包含层出土土器 (4)

包含层出土土器 (5)

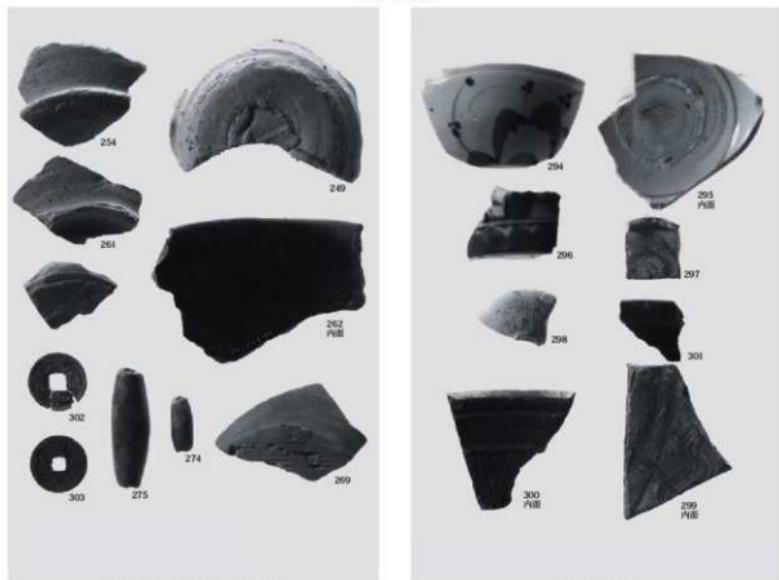


包含层出土石制装饰品

包含层出土车轮石

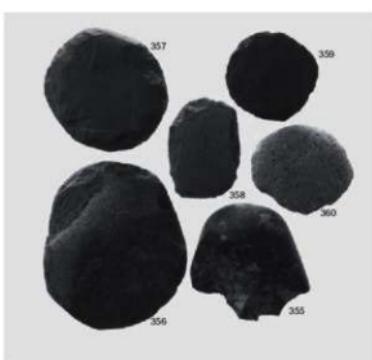
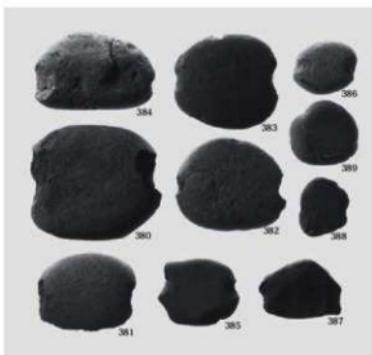


中世陶磁器



古代～中世土器および錢貨

近世陶磁器



報告書抄録

ふりがな	いたびらいせき							
書名	板平遺跡							
副書名	東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第176集							
執筆・編集担当者名	向江 修一							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	2008年3月14日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
板平遺跡	宮崎県日向市 大字富高 字板平他	45206 3009	32度 26分 43秒	131度 36分 22秒	平成17年 8月22日 ～ 平成18年 10月4日	21,960m ²	東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
集落 散布地	旧石器時代				石核・剥片		車輪石の出土	
	縄文時代早期	散礫・集石遺構20基・炉穴31基・土坑4基			土器			
	縄文時代後期	石組遺構1基・土坑1基			土器			
	縄文時代晚期				土器			
	弥生時代終末～古墳時代前期	竪穴住居跡9軒・土坑2基			土師器・石器・車輪石・勾玉			
	古墳時代中期～後期	竪穴住居跡3軒			須恵器・土師器・石器			
	古代・中世・近世	掘立柱建物跡11棟			土師器・布痕土器・須恵器・陶磁器・鐵貨			
	時期不詳	陥し穴状土坑11基・土坑・ピット			石器			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第176集

板 平 遺 跡

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書2

2008年3月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 株式会社 長崎印刷
〒889-4413 宮崎県西諸県郡高原町大字後川内18-2
TEL 0984(42)1069 FAX 0984(42)1330
